

394

187

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



394-187



霖作張傑快

著龜一田園

大正
11.4.18
内交



A large, dark, irregular ink blot or smudge located in the lower-left quadrant of the page.





A large, expressive piece of calligraphy written vertically from top to bottom. The characters are bold and fluid, appearing to be in a cursive or semi-cursive script.

A large, expressive piece of calligraphy written horizontally from left to right. The characters are bold and fluid, appearing to be in a cursive or semi-cursive script.

A large, expressive piece of calligraphy written vertically from top to bottom. The characters are bold and fluid, appearing to be in a cursive or semi-cursive script.



序

支那とは何ぞや。彼は中華民國と稱し、民主政體を標榜すと雖も、督軍專制の政治也。北京政府は、列國の承認する所の中央政府なりと雖も、直隸の一省をも統治する實力なき政府也。名は統一的國家の體面を有すと雖も、其の實は群雄割據四分五裂の邦國也。試に之を春秋戰國時代に比すれば、北京政府の各省に對する位置は、東周の諸侯に對するが如く、南北對峙して交も相闘くは諸侯の互に侵伐するが如し。之を三國時代に比すれば、直隸派が直隸、河南に據りて兼て長江流域の形勝を扼し、自ら優勢を占むるは、吳の孫氏に似て、其の勢力之に過ぐ。奉天派が東三省に據りて其

勢力殆んど黃河流域に及び、北方に雄視するは、魏の曹氏に似たり。南方派が廣東に據りて、湖南、湖北に進出せんとし、頻りに其の聲容を壯にするに努むるは、蜀の劉氏に似たり、更に之を南北朝時代に比すれば、北方兩派が互に其の勢力を把持し、政柄を擅にするは、拓拔魏氏が北方に跋扈するに異ならず。而して南方派が西南半壁を堅守するは、彼の東晉が江左偏安に甘んずるに異ならざる也。

直隸派は、仲珊曹錕を以て首領と爲す、彼は坐ながら畿輔の重鎮を以て自ら任じ、直皖戰捷以來、其の勢力雄厚、加ふるに謀將吳佩孚の智勇絕倫を以てす。彼は馮國璋の策略無く、段祺瑞の精力

無しと雖も、其の聲望、直隸派を統括するに足るものあり。

南方派は、中山孫文を以て其の首領と爲す。彼は北京政府に對して軍政府を組織し、大總統を以て自ら擬する、河北の袁本初に類す。彼は大言多く實行に乏しと雖も、南方派の中心的勢力は彼を推さざるを得ず、若し夫れ東三省に據りて精銳を蓄ひ、其の勢力隱然曹、孫兩氏に凌駕するものを雨亭張作霖氏と爲す。

曹錕は一介の武弁なり。彼は重望を軍人の間に負ふと雖も、固より經綸に富める政治家に非ず、孫文は革命家なり。彼は言論を以て一世を鼓舞するの長技を有すと雖も、實際的政治家の手腕を有するものに非ず。張作霖は、曹錕の如く袁世凱の勢力に藉りて其の

身を起したるものにあらず。孫文の如く革命の風雲に乗じて其の位置を占めたるものにあらず。左れど、彼が丈夫的の本領を具し、市三省の形勝に據りて自家の天地を開拓するに至りては、洵に其の獨歩の擅場たらずんばあらず。彼は専門的戰術家にあらず、左れど機略縱横の策士なり。彼は理想的政治家にあらず。左れど實際的政治家の技量を有す。彼が大東三省主義を持して北方に雄視し、中原の勢を制せんとするは、猶ほ虎の嵎を負ふが如し。彼は勢に乗ずる現代の風雲兒なり。

今日に當り、支那の形勢を知らんと欲するものは、先づ張作霖其の人を知らざる可からず。園田一龜君の此著、張作霖の心胸面目

を描き出して咄々眞に逼るものあり。而かも支那の現勢を知るに於て餘師無くんばあらず。是れ其の序を徵せらるゝに際し、一言を述べて其の責を塞がざるを得ざる所以也。

大正十一年二月上浣

蘇峯 德富猪一郎識

序文

某觀相家、嘗つて東三省巡閱使兼奉天督軍兼省長張作霖の相を觀じて曰く「其の性格は豊臣秀吉、明智光秀を混製したるものにして寧ろ明智光秀に近し。然して其の享けたる天祐を、其の享けたる機智に依りて巧に活用し、危に臨みて一髪の間に之を脱し、其の享けたる運命を粗製、濫造の咄嗟的判断に依りて之を全ふし得る寵運兒なり」と断じ、更に進んで「来るべき七年間は張作霖一代中の最も囁目すべき時代にして此の期間は毀譽褒貶を顧みず、算數、利害を度外に措き専ら自ら自己の欲する所、自己の信ずる所に向て一直線に邁進し、以て其の天に享けたる運命を開拓するに

努力せよ」と勧告せり、予張作霖と交ること數年、傍より此言を聞き、其の頗る肯綮に中のものあるを裏書せざるを得ず、然り、

張作霖は眞に運命の寵兒なり、而して近來、彼が東三省統一の大業を成せる以來、其の運命の寵兒たることを稍や自覺するに及んで、頓みに其の器量を上げ悠揚迫らざる態度を以て、徐ろに支那の政界に隱然雄飛せむとするに至りたるは、觀相家の所謂囁目七年間の第一期に入りたるものにして、予輩は張作霖が此の旭日昇天の勢を以て全支那に臨み、他の志士と共に南北統一の難業を完成し、四百餘洲の民を泰山の安きに導くに至らんことを切望して已まざるものなり、本著の現はれたる蓋し偶然にあらず、則ち請

に應じて一言を序す

大正十一年一月

在奉天總領事 赤塚正助

自序

張作霖は、滿洲の名物男である。然して又、現代支那に於ける屈指の人傑である。身を遼河畔の一寒村より起して宛然、滿蒙王國の主人公たるは亦、一代の風雲兒であらう。

彼は今や滿洲の張作霖にあらずして支那の張作霖である。其の一舉一動は中外の均しく注目する所である。

支那の事、愈々多端ならんとするの秋、苟も眼を東亞の大局に注ぐものは先づ此の北方の強たる張作霖の何者たるかを知るの必要がある。支那の現勢は張作霖を除外しては何事も語る事は出來ない。従つて彼を以て單に奉天軍閥の頭領として看過し去るべきものでない。張作霖を知る事は即ち支那を知るの第一歩である。

謂んや日本と滿洲、滿洲と張作霖との關係に想及するに於て張作霖を日本に紹介するの急務なるを信す、余は多年奉天にありて操觚の業に從ひ、最も支那問題に興味を有し、専ら之れが研究に没頭せる者、本來淺學短才、到底其の任に非らずと雖も張作霖の出處進退に就ては多年の間に聊か得

る所あり、茲に此の小著を公にせる所以である。文辭粗雑なるに加へ、事實の正鵠を期し難く誤謬の點多々あるべし、這是敢へて余が識者の吐正を求むる所である。一言以て序となす。

大正十一年二月中浣

奉天

滿洲通信社編輯室にて

圓田一龜

凡例

一、本書は支那に對する日本の地位に鑑み、日本の特殊勢力範囲である所の滿蒙の天險を根據として支那政界に活躍せる張作霖の何者たるかを叙述する事が目的である。由來張作霖に關して邦人の有せる知識は極めて淺薄である。「其人、往年綠林に豪嘯して以て三國志的の閱歴を有し現に北洋軍閥の巨頭である」と云ふ程度に過ぎない。其の眞面目を知るものは一部の外交官、軍人、其の他の關係者等極めて少數である。多くの人は張作霖の何者たるかを知らない。支那の政局益々多事ならんとする際、深く之れを遺憾とし本書を上梓して張作霖の正體を闡明ならしむるものである。

一、本書は張作霖の出所進退を描く事が主眼なるために叙述の體裁も總て張作霖の事項を事情の許す限り精にした。従つて支那の時局は筋書のみに止め、努めて略述する方針を執つた、張作霖に關係のない問題は之れを省略した。

一、本書の稿を起せるは大正九年八月にして以來日夜脱稿を急げるも何分煩務の餘暇、稿を續くる

の境涯にて意の如く進捗せず、漸く翌十年十月に至りて脱稿するを得た。時恰かも北京の政局は一時的小康を保てる時代にして第一章總論の「支那の現勢」は當時最終の起稿である。其の後北京の政局は新内閣の瓦解に依りて梁士詒の新内閣成立し、局面一變せるも單に内閣の更迭せるに止り、大勢は依然たるを以て「支那の現勢」は之れを其の儘上梓する事とした。

一、現今日本の支那に對する外交政策及び之れに關聯せる對滿蒙政策の眞相に就ては國際關係上之れを自由に論評する事は遠慮しなければならぬ。又本書の目的でもないから單に日本と張作霖との關係を略述するに止めた。

著者しるす

怪傑張作霖目次

第一章 總論	一
第一節 支那の現勢	一
(一)群雄割據——(二)統一の道——(三)勢力の分布——(四)群雄鳥瞰(一)——五)群雄鳥瞰(二)——(六)張作霖と吳佩孚	
第二節 張作霖の輪廓	二〇
(一)一代の風雲兒——(二)機會利用家	
張作霖の家庭	三四
(三)實力宗の信者——(四)負隅の猛虎——(五)親分子分——(六)瘦面黃肉——(七)未知數の前途	
白面の少將閣下	三四

第一章 檻頭前の張作霖

第一節 鄉村と生立

(一) 遼河畔の感鱗兒——(二) 騎兵隊の從卒

第一節 遼西綠林時代

(一) 馬賊の頭目——(二) 張作霖と金壽山——(三) 張量惠と湯玉麟——(四) 張作霖の歸順

第三節 田露役の前後

（一）新民府の重鎮——（二）張錦堂と張作霖

第四章 墓穴官場の變遷

ノルマの変遷——(二) 従世昌の新政失敗

第三章 民國成立の前後

第一節 奉天省と革命黨

卷之三

一、奉省革命黨の派脇——(二)

第二節 趙爾巽與張作霖

霖草集

第三節 滿洲宗社黨軟化

(一)張作霖の南征論——(二)

第四節　長作柔の勢力評定

（一）本省の「大頭目」

弘化家の質疑

第五節 日支交渉と張作霖

(一)日支交渉と奉省——(二)張作霖の主戦論

第四章 擙頭せる張作霖

七九

第一節 奉天將軍の更迭

七九

(一)滿蒙統一の理想——(二)張作霖の將軍運動——(三)段芝貴の新任——(四)寺内伯と
張作霖

第二節 袁世凱の帝制問題

八七

(一)段芝貴の帝制運動——(二)帝制と張作霖——(三)帝制の論功行賞

第三節 張作霖の宿願成就

九一

(一)袁の凋落と張作霖——(二)段と張の暗闘——(三)段芝貴の窮迫——(四)盛武將軍張
作霖

第五章 張作霖と馮德麟

九七

第一節 宗社黨活躍の前後

九七

(一)張作霖の獨舞臺——(二)張作霖の危難——(三)袁の死と張作霖——(四)巴布札布軍

第六章 復辟事變の前後

一二四

の南下——(五)鄭家屯の不祥事件

第二節 張作霖と馮德麟

一〇八

(一)遼西の俠豪馮德麟——(二)張、馮軋轔の由來——(三)馮の排張失敗——(四)蠻勇漢
湯玉麟——(五)崩闕の導火線——(六)湯派軍官の反抗——(七)張の文治派庇護——(八)
馮德麟の軟化(九)湯玉麟の失脚

第三節 張作霖と吳俊陞

一二一

(一)第二十九師の新編——(二)老武將吳俊陞

第一節 歐戰加入問題

一二四

(一)參戰問題の大紛擾——(二)張作霖の段撫理擁護——(三)奉天省の獨立

第二節 復辟と張作霖

一二五

(一)張勳の復辟斷行——(二)張作霖と張勳——(三)張勳腕も沒落

第七章 東二省統一の前提

第一節 馮德麟の失脚

(一) 參戰紛爭と馮德麟——(二) 馮の復辟參畫——(三) 馮德麟の免官——(四) 張作霖救馮運動

第二節 黑省の兵權掌握

(一) 師長許蘭洲の跋扈——(二) 黑省軍界の騒擾——(三) 新督軍鮑貴卿——(四) 許蘭洲の失意——(五) 張作霖の新地盤

第三節 第二十八師長問題

(一) 後任師長人選難——(二) 汲金純と張海鵬——(三) 孫烈臣就任行惱(四) 汲金純の正式就任

第四節 孟恩遠更迭失敗

(一) 孟恩遠免職事情——(二) 吉林獨立の宣言——(三) 張作霖の表裏——(四) 奉軍の討吉作戰——(五) 田中玉の赴任婉辭——(六) 孟恩遠居据成效

第八章 南北の抗争

第一節 天津の主戰會議

(一) 西方討伐の決議——(二) 天津會議の黒幕——(三) 張作霖の主戰高唱

第二節 張作霖と徐樹錚

(一) 張と徐の提携——(二) 秦皇島の武器横奪——(三) 張、徐の密約——(四) 張作霖の四個條——(五) 張作霖南征主張——(六) 奉天軍の南征——(七) 徐樹錚の跋扈——(八) 奉軍南征の目的——(九) 張、徐の關係決裂

第三節 正副總統選出問題

(一) 張の副總統執——(二) 天津の豫備會議——(三) 張作霖の讓歩——(四) 新國會と張作霖——(五) 徐世昌の世馬——(六) 東三省巡閱使

第四節 上海會議の會後

(一) 張作霖和議反對——(二) 北京の督軍會議——(三) 張作霖主戰高唱——(四) 和平政策の勝利——(五) 張作霖に警告——(六) 上海會議の失敗

第五節 山東問題の悪化

一九九

(一)北京の排日運動——(二)張作霖の正論——(三)奉省の排日彈壓——(四)北京政局の推移

第九章 張作霖の三省統一

第一節 吉林督軍の更迭

二〇四

(一)張作霖と孟恩遠——(二)吉、黑兩督軍更迭——(三)吉林省復た獨立——(四)奉、吉兩軍の對峙——(五)高士愬の馬賊糾合——(六)鎧袖一觸の吉林軍——(七)孟恩遠の軟化——(八)孟、高の吉林退去——(九)孫烈臣と幕僚

新師長張作相

第二節 寬城子事件

二〇一

(一)事件勃發の眞相——(二)張作霖の深憂——(三)日支交渉解決

東支鐵道の回收

二〇六

第十章 北洋軍閥の爭覇

二三七

第一節 八省同盟

二三七

(一)安徽、直隸兩派の軋轢——(二)八省同盟の由來——(三)新内閣の暗礁——(四)張作霖と曹錕の提携——(五)吳佩孚の湖南撤退

第二節 直、段兩派、衝突

二三八

(一)張作霖の北京入——(二)保定の時局會議——(三)張作霖の調停——(四)徐樹錦の免職——(五)安徽派の憤起——(六)直隸派の違算——(七)張作霖の北京脱出

第三節 段祺瑞派の没落

二三九

(一)段祺瑞の憤激——(二)兩軍の前哨戰——(三)張作霖の武力調停——(四)奉天軍の出動——(五)安徽軍の大敗北——(六)鼻息荒き直隸派——(七)奉天軍の入京

第十一章 張作霖と曹錕

二四〇

第一節 爭覇後の跡始末

二四一

(一)張作霖の再入關——(二)天津の善後會議——(三)張作霖曹錕の入京——(四)國民大會の提唱——(五)第二次新内閣成立——(六)張、曹の政權協定

第二節 張作霖の政見發表

(一)日本記者との會見——(二)米人記者との會見

第三節 察哈爾都統更迭

(一)北京兵權の獨占——(二)張景惠の都統昇任——(三)馮と湯の復活

第十一章 埠春事件の眞相

第一節 間島の不穩

(一)不逞鮮人の横行——(二)徐嘉霖の無誠意——(三)璦春襲撃事件

第二節 事件の善後處置

(一)張作霖の對策——(二)日本の間島進出——(三)日支共同剿匪——(四)國境警備問題

第十二章 復辟謠言の前後

第一節 吉黑督軍再更迭

(一)鮑貴卿の退却——(二)孫烈臣更任事情——(三)新督軍吳俊陞

第二節 復辟謠言の眞相

(一)復辟の謠言起る——(二)謠言流布の原因——(三)前清室と張作霖——(四)張作霖の辯明——(五)謠言の出處——(六)謠言製造の黒幕——(七)謠言流布の嚴禁

第十四章 天津會議

第一節 南北政局の再混亂

(一)南方政局の推移——(二)外蒙古の變亂——(三)新内閣の動搖

第二節 天津時局會議

(一)張作霖の出馬——(二)四頭會議の經過——(三)北京の對南宣言——(四)内閣問題の解決——(五)未解決の三問題

第十五章 蒙古の實權掌握

三四七

第一節 蒙疆經略使の新設

三四七

第二節 征蒙善後問題

三五六

(一)蒙疆經略使就任——(二)征蒙の作戦——(三)内蒙王公會議——(四)張作霖親征準備

(五)外蒙の形勢變化——(六)征蒙中止の裏面

第三節 热河都統の更迭

三六八

(一)張作霖の狂言——(二)汲金純の特任

第十六章 日本と張作霖

三七三

第一節 張作霖親日の表裏

三七三

(一)滿洲に於ける日本——(二)日本と張作霖の關係——(三)親日論の正體——(四)至難な對日外交、東三省の軍事顧問——(五)親日特使于沖漠——(六)日本の對支使命

第二節 大倉男と張作霖

三八九

(一)爾汝相許す仲——(二)興發公司の成立——(三)大倉男の合辦事業

最近の政局

三九六

◆張作霖と舊交通系 ◆梁内閣の成立 ◆吳佩孚の梁閣反対

附 錄

其の一 張作霖年表

一

其の二 奉天軍の現勢

八

二十七師軍官表

一四

以上

怪傑張作霖

第一章 總論

第一節 支那の現勢

群雄割據

園田一龜著

袁親覺繩の社稷遙に上び、世は中華民國と改つて以來十年の星霜を閲した。此の十年間に於ける支那の進歩、發達は奈何。其の亂脈は説くだけ既に野暮であらう。之れを概観するに内政の紊亂は正に前清時代より以上である。南北の分立、群雄の割據、財政の窮乏、國命の衰運、數へ来れば實に豫想外の紊亂である。

北京の中央政府其物が既に何等の權威も信望もないで國內統一の能カを缺ぎ全く有名無實であ

る。一種の裝飾品と化して床の置物と少しも選ぶ所はない。それに重兵を擁して四方に割據せる群雄の爭霸は四時殆んど終熄する日はない。借款に借款を重ねて僅かに彌縫してゐる財政の窮乏は次から次へと矢繼早に地方の疆吏から巨額の軍費を強要されて浮ぶ瀬のない有様である。借款亡國論の起るもの無理ではない。従つて支那の全局は今や蜂の巣を突き壊したやうに紛糾錯綜を極め、完かも春秋戰國の時代と同一である。我が足利の末葉元龜、天正の亂世と何等の差異はない。其の統一は全然豫測し難いので列強の間には支那の國際管理論が暗黙の裡に一大潛勢力を得つゝあるは事實である。北の軍閥。南の民黨。何れも陽に愛國濟民を口にするも實際に於ては私利、私慾の奴隸である。其の證據には國內の統一は第二義に置いて各自がお互に戰國的の權謀術數を弄し、傳統的の權勢争奪に浮身を棄して居る事だ、彼等の腹の中には權勢と榮達の以外は何物もない。一切は目的のための方便に過ぎない。然も之れを大勢より見るに大體に於て天下三分の形勢を示してゐる。滿蒙の張作霖、中原の曹錕（吳佩孚一派を除く）。南方の孫文。此の三大勢力の鼎立が支那の現勢である。幾多の大小群雄は此の三者を中心として各自の主義、主張、利害關係等に依りて離合集散してゐるに過ぎない。そして所謂朋黨の争は内に激烈を極め各互に油と水の如くに相融和する事なく

反目して居る所以である。

滿蒙の張作霖、中原の曹錕（吳佩孚一派を除く）等を中堅とせる北洋軍閥は袁世凱の怪腕、段祺瑞の武力を以てしても結局不成功に終つた武斷的統一の中央集權の主張を依然固執してゐる。それに又吳佩孚を中心とする長江派は國民大會の開催と聯省自治を理想として地方分權制を唱へ新運動を試みてゐる、これに對し孫文一派の急進派は廣東政府を擁して前に廣西を略取し雲南、貴州、四川、湖南の四省と提携し、六省聯盟を堅めて北伐の議を進め、銳鋒將に江西に及ばんとしてゐる、延いて全支那を赤色共產國たらしめんとの計畫あり、とまで傳へられてゐる。之れが亂世でなくて何であらう。即ち群雄割據である。大小無數の群雄が中央に、地方に、其の勢力を擁して龍蟠虎踞し、各自畢生の智謀機略を運らして活躍せるの状は實に活ける三國志を繙くの想がある。之れを劇として見るも四千年来傳統の遺物である、内亂劇は一種獨特の妙味がある。舞臺に活躍する役者は上は花形役者、立役者より下は馬の脚に至るまで大陣笠、小陣笠、千容萬態、大向ふの喝采を博してゐる。繰り返す歴史の頁に依りて時代と背景、人物と筋書に多少の相違こそあれ、春秋戰國の繪卷物を昔を今に逆しまに巻き返して見る心地がする。二十世紀の今日、支那ならでは容易に見る事の叶はぬ活畫圖である。

處が支那の爲めに此の憂ふべき天下三分、否、群雄割據の勢は何時まで續くであらうか。南北の統一は果して何れの日に成るか。前途猶ほ遠遠の感がある。されど時勢は推移して止まぬ。支那統一の機運が漸次近づきつゝあるは何人も否み難い事實である。

(二) 統一の道

支那の統一は全く至難の大事業である。今日のやうに群雄四方に割據して羈を競ひ、内争之れ事としてゐる間は如何に統一を絶叫しても百年河清を待つと同様で何等の效果はない。假令、不世出の英傑が出で、此の難局に當つても肝腎の要素を缺いては絶対に不可能である。

然らば如何にすればよいか。支那統一の最大急務は全國兵權の統一に若くはない。總て一國の統一と云ふものは支那に限らず、兵權の統一が第一歩である。兵權の統一、即ち一國の統一である。一劍平天下の古語もあるやうに天下を統一するには武力でなくては到底駄目だ。赤手空拳の徒が如何に空理空論を逞ふしても天下は治まらないのだ。従つて群雄の割據は既に統一の前提である以上、一度強大なる武力を有せる英傑が出来り、時局收拾の任に當れば、天下は立所に平定する。武力は武力を以て統一する外に道はない。それで絶大の兵力を有せる者のみ天下統一の資格がある。前に

袁世凱、段祺瑞の行つた武力統一の計畫は實際に此の資格なくして蹉跌したのである。天下の統一は眞に武力ある者のみ成功する。武力以外のもので統一する事は先づ不可能と断言して差支へなからう。萬一出來たとしても、それは一時的の結合で永續は先づ疑問だ。

一切の平和的施設は兵權を統一せる後に行はるべきもので全く問題でない。之れは單に支那史を按する迄もなく古今東西の歴史が何よりも證據である。古來、支那民族は先天的に革命の國民である。「匹夫にして天下を取る」と云ふ傳統的な思想が彼等の血管に流れてゐる。だけに亂世に際して英邁雄略の人傑は三尺の劍を杖き、風雲に乗じて天下を統一したものだ。其の統一が強大なる武力を以てせる兵權の統一なる事は説くまでもない。

支那歷代王朝の興亡盛衰は之れを雄辯に物語つてゐる。支那史が支那民族の發達史であると共に亦長篇の英雄興亡史である所以である。遠くは漢の高祖、東漢の光武、唐の太祖、宋の太宗、下りて元、明、清の創業者の如き、何れも草澤の間より崛起して風雲龍蛇の勢に乗せる猛者達ではないか。

現代の支那も又、其の通りだ。超群の智謀才幹と絶大なる兵力を擁せる英傑が現はれて乾坤一擲の壯舉を試みるに於ては支那の統一は必らずしも不可能事ではない。然し往昔、支那が他國と何等

の利害關係もなく、其の内争は支那一國(或は一局部)に局限された時代と國際的利害關係の複雜となつた今日と同一に取扱ひ難きは勿論である。だから今日の時代は如何に「支那が支那人の支那」であるとしても列國の諒解がなくては支那人獨力にては統一は出來ない。換言すれば第三國の好意的援助がなくては駄目である。如何なる英雄豪傑も外力で制せられては手も足も出ぬのだ。

列國も支那の混亂には大分手を焼いてゐる。何とかして統一させやうと焦慮つてゐる。國際管理論の火元も之れである。列國としては高壓的に内政干渉を行ふ事は先づ考へ物として此の儘、永久に拱手傍観してゐる譯には行くまい。相當の方法を講ずる必要がある。惟ふに最善の方法としては現代支那の人物の中で最も支那統一の可能性を持つてゐる者を物色して列國が歩調を一にし協同一致して之れを援助し以て統一の大業を成さしむる事である。然らば支那の統一は忽ち實現するであらう。假令夫のが一時的にせよ、内政干渉であつても支那統一てふ大局の上から見れば何でもない。先づ大勢は斯く落付くものであらう。

然らば何人が此の大業を遂行し得る有資格者であらうか、最も興味ある問題である。現在及び將來に向つて鞏固にして絶大なる兵權を把握し得る人物こそ、即ち最も多量に統一の可能性を有してゐる。

居る譯である。先づ支那の現勢を精細に觀察すれば自ら解ける謎であるのだ。

(三) 勢 力 の 分 布

今や天下は三分の形勢である。之れを各省區に區別して勢力の分布を示せば大略次の如き表となる。

北 方 派

北京政府

年齢(十一年現在)

大 總 統 (直隸派) 徐 昌 (六五)

國務總理 (奉天派) 斬 雲 鵬 (四六)

奉 天 派 (張作霖直系)

東 三 省 巡 閲 使

蒙 疆 經 略 使 張 作 霖 (四八)

奉 天 督 軍 兼 省 長

吉林督軍兼省長

黑龍江督軍兼省長

察哈爾都統

熱河都統

吉林督軍兼省長

黑龍江督軍兼省長

察哈爾都統

熱河都統

准奉天派(張作霖傍系)

安徽督軍

經遠都統

直隸派(曹錕直系)

直豫魯巡閱使

直隸督軍

兩湖巡閱使

湖北督軍

兩湖巡閱使

直隸督軍

直豫魯巡閱使

直隸督軍

陝西督軍

准直隸派(各省一派ヲナス)

河南督軍

江西督軍

福建督軍

安徽派(段祺瑞直系)

浙江督軍

江蘇督軍

淞滬護軍使

福建督軍

安徽派(段祺瑞傍系)

山東督軍

准安徽派(段祺瑞傍系)

田 何 盧 李 齊 陳 趙

中 豊 永 厚 燊 光

玉 林 祥 基 (五二)

馮

玉

祥

蕭 吳 曹 馬 張

耀 佩 福 文

南 孝 (四八) 翁 生

蔚 吳 曹 魏 (六二)

耀 佩 翁

南 孝 (四八) 翁

汲 張 吳 孫

金 景 俊 烈

臣 (五二) 隆 (六一) 惠 (五〇) 純 (四五)

無 所 屬

山 西 督 軍
新 疆 督 軍
甘 肅 督 軍

陸 楊 閣
洪 增 錫
新 潤

南 方 派
廣 東 政 府
大 總 統

孫 文 (五四)

廣 東 派 (孫文直系)
西 廣 總 司 令
海 軍 總 司 令
廣 西 省 長

陳 煙 明 (五〇)
林 永 謨
馬 君 武 (四一)

准 廣 東 派 (各省自治派)

湖 南 總 司 令 趙 恒 惘 (四一)
四 川 總 司 令 劉 蘆 湘
貴 州 總 司 令 顧 品 珍 (四〇)
雲 南 總 司 令

右の勢力分布を見れば張作霖の奉天派が七省區(直系五省區、傍系二省區)、曹錕の直隸派が六省(直系三省、傍系三省)、孫文の廣東派が六省(直系二省、傍系四省)である。此の外に安徽派の三省あるも九年七月の政變に失勢以來三派の均勢上僅かに餘喘を保つてゐるに過ぎない。他の各省區は問題でない。それで此の形勢を按するに奉天派最も優勢である。又安徽派の三省は萬一の場合直隸、廣東の兩派よりも奉天派との提携に最も可能性がある。従つて現下の形勢は張作霖の勢力が第一位にある事は明白だ。

(四) 群 雄 鳥 瞰 (一)

上述の勢力分布表に基いて更に群雄の鳥瞰圖を造つて彼等の地盤、勢力、人物等を比較月旦する必

要がある。張作霖の勢力が第一位にあつても巨細に検分した上でなくては海内第一人者の稱は許されない。謂んや支那統一の大業をやだ。

先づ順序として奉天の張作霖から觀察しやう。地盤の鞏固にして他省より侵略さるゝ虞なく、所謂地の利を得て居る事が第一の強味である。張作霖は東三省巡閱使及び蒙疆經略使として嵎を負ふ猛虎の勢がある。盛京の故都に蟠踞し、三十萬の甲兵と滿蒙の富源を擁し、吉林に孫烈臣、黒龍江に吳俊陞、熱河に汲金純、察哈爾に張景惠等の直系を配してゐる、綏遠の一區は未だ其の手中に落ちないが早晚自派の許蘭洲のものとなるであらう。現都統馬福祥は准系の關係があるから滿蒙經略の全權は完全に張作霖の有に歸したと云つても差支へはない。それに張作霖は齡未だ天命に達せず、超群の智謀と満々たる羣氣とを腹中に藏し所謂北方の強にして。奉天派の總帥として最も未來ある武將である。

中原の羣者である直隸派の頭首曹錕は直隸、河南、山東の三省巡閱使として最近亦陝西、湖北の兩省に新勢力を伸せる北洋軍閥中の宿將だ、齡已でに耳順を越え、地位と資格は其の唯一の競争者である張作霖の上にある。然し個人としての手腕、識量は反対に張作霖に數等劣つてゐる。それに中原の根

據は支那古來の用兵より見て兵略上案外に薄弱である。北は奉天派に壓迫せられ、南は南方派の脅威があつて殆んど腹背敵を受くるの状態は其の地位の安危張作霖の比でない。三省巡閱使としての威望も表面の名義のみだ。實際に威令の行なるゝは僅かに直隸一省に限られ山東、河南の二省には充分徹底してゐない。河南の趙倜、山東の田中玉、陝西の馮玉祥、湖北の蕭耀南の四督軍の中、眞に曹錕の命に服従するは馮玉祥と蕭耀南の二人のみ。之れとて吳佩孚との關係上其の諒解がなくては自由に操縦は困難である。張作霖が麾下の腹心を満蒙に配備し、堂々の陣容を張れると同日の談でない。然も中原に蟠踞して天下に號令するが如きは羣氣と才略とを缺ぐ曹錕の能くする所ではない。之れは寧ろ曹錕子嗣の部下たる吳佩孚こそ適任であらう。

兩湖巡閱使たる吳佩孚は直皖戰事に際し砲煙彈雨の中に安徽軍を粉砕せる驍將にして親米派の頭目である。性頗る叛骨あり、民黨的色彩を帶び、南方派と多少の默契あるは事實だ。曹錕の命令も今日は容易に服従せず、北洋軍閥中の危險人物である。軍人に似ず民主主義者として一部青年政客の間に相當人氣がある。將來支那を統一するものは吳佩孚であるとの評さへある位だ。三省副巡閱使として前に洛陽の古都にあるや曹錕の後繼者として最も嘱望せられてゐた。其の犬猿の間柄なる張

作霖との對峙上、湖南の趙恒惕と密謀し、暗に奉天派と默契ありと噂された王占元の湖北驅逐に成功

し、一躍兩湖巡閱使の重職を贏ち得たのである。そして「余の使命は支那の統一にあり」と呼號する吳佩孚が長江の新盟主として直隸派を提げ、北方の張作霖と雄を争ひ、最後に支那統一を達成すべしとは猶ほ信じ難い。吳佩孚の地位は張作霖程に鞏固でない。前兩湖巡閱使であつた王占元は久しく武昌にありて三楚の重鎮を以て任じ、李純の死後は其の後繼者として長江の盟主に擬せられてゐた。一方の勢力を爲して張作霖、曹锟等の天津會議に列席し、一時男振りを上げしも元來一介の武弁、李純の威望と識量を缺ぐ。武昌、宜昌に於ける兵變の續發は其の鼎の輕重を問はれ省民の猛烈なる排斥運動を受け湖北一省すら完全に統治し得ざる無能を暴露した。其の結果は久しく虎視耽々として機を窺つてゐた吳佩孚の爲めに謀られ、第二の陸榮廷となつた。吳佩孚は將來曹锟に代つて直隸派を統率し張作霖と對峙するであらう。馮玉祥、蕭耀南の如きは一武辯にして吳佩孚の傀儡のみ。淮直隸系として河南の趙倜、江蘇の齊燮元、江西の陳光遠等があるも是等は共に各省一派の獨立状態を爲してゐる。事毎に曹锟一派と一致の行動を取るものとは断言されぬ。江西の陳光遠は凡庸弱權を弄し利を貪るの外能はない、それに西に湖南、廣東の民黨を控へ、東に福建、浙江の安徽系に囲まれ、一明瞭である。

省の防備に寧日はない。地盤の保持に汲々としてゐるも廣東軍の江西進撃計畫が愈々具體化して居るから或は又、不幸陸榮廷、王占元等の轍を踏むやも料り難い。其の將來も略ぼトするに足る。江蘇の齊燮元に至りては李純の後任として江南の要衝に督軍たるも本來齊其人が李純の衣鉢を襲ぐの器ではない。李純の遺書と奉直兩派の勢力均衡上漸く督軍たるを得たるもの、金陵の天險に據りて天下に號令せんとするの資望はない。河南の趙倜の如きは已に老朽無能、舊來の行懸り上、僅かに直隸派に依りて其の地位を保持し居るだけで有名無實の督軍だ。早晚直隸派のために取つて代らるゝは明瞭である。

(五) 群雄鳥瞰 (二)

一時最も全盛を極めた段祺瑞の安徽派は今や凋落の色が最も深い。九年夏の政變に於て徐樹錚一派の失脚後は僅かに其の餘喘を保ち地位を維持せるは反徐樹錚派と中立を標榜せる一派のみ山東の田中玉、福建の李厚基、浙江の盧永祥、即ち之れである。陝西の陳樹藩は最近まで地位を保持せるも遂に直隸派のために逐はれ、兵を率ゐ漢中の險を扼し西安を窺つてゐる。盧永祥は前に自己の地位擁

護の政略上、聯省自治を首唱し新國會の選舉に反對し大向ふの新人等に大喝采と共に鳴を博せるも後に大策士徐樹錚が糸を繰れるは勿論である。然も省自治は全然失敗に歸してゐるではないか。盧永祥にせよ、田中玉にせよ、李厚基にせよ、共に卓越せる才能はない。其の地位より推すも現狀以上に大發展は覺束なからう。今後局面の展開と徐樹錚の暗中飛躍が効を奏して安徽派の頗勢を挽回せざる限り今日のまゝ推移せば結局、安徽の倪嗣沖、陝西の陳樹藩と同一の運命に陥るは明瞭である。安徽の張文生は倪嗣沖の後任として昇任せるも元之れ復辟の首魁張勳の舊部下、軍務司辦馬聯甲との勢力争に殆んど餘事を顧みるの違はない。

之れを南方に見るに民國二年以來、北方政府に取りて一大敵國の觀があつた雲南の唐繼堯は年來の大雲南主義の破綻を來し九年十一月、貴州の劉顯世の失脚其の前兆となつた。王文華（十年春上海に刺客のため暗殺された）の部下盧蒸が貴州軍總司令となり、四川は亦、劉存厚、熊克武の爭闘に乘じ重慶鎮守使劉湘、漁父の利を占めて總司令となつた。斯くして雲貴川の三省聯盟潰れ、最後に唐繼堯は亦麾下の顧品珍に謀られて失脚するに至つた。陸榮廷の廣西軍閥は從來南方の一大權威であつた。九年秋、岑春煊一派の政學系と結んで北方歸順を聲明せるも東の間、陳炯明の廣東軍に進撃さ

れし結果は内に沈鴻英等の獨立宣言に餘儀なく南寧の居城を明渡すの悲境に陥つた。多年西南に蟠踞し保守的武斷主義の暴威を振へる老雄も秋風落葉の凋落を見るに至つた。省自治の淵義である湖南に總司令たる趙恒惕は八面玲瓏の質譚延闇の後任として從來北歸南順、態度頗る曖昧であつた。前に湖北の王占元を排斥するために暗に吳佩孚と結び一方又、湖北民軍の首腦である蔣作賓と同窓の誼（趙も蔣も日本陸軍士官學校出身）を以て其の湖北侵入を援助し省人省治の氣勢を煽つた男だ。大事を成すの素質に乏しい廣東の孫文と陳炯明とは廣西を略取せる餘威に乘じ北伐を計畫し將に大軍を江西に送らんとしてゐる、叛逆常習犯の折紙附で空想家の孫文は世已に定評がある。

實際主義者の陳炯明と何處まで道伴し得るやが先づ疑問である。所詮は一時的現象＝花火線香式＝に過ぎまい。孫文の支那統一も不成功に終るは明瞭だ。殊に支那史を按するに未だ曾つて南より北を征服して帝王となつた例に乏しい。僅かに明の太祖が金陵の天險に據つて天下を統一したのみである。斯くの如きは殆んど異數の例である。此の外山西の閻錫山、新疆の楊增新、甘肅の陸洪濤等があるも中央の政事に對しては黨派的色彩極めて薄い。中立の立場にあつて問題外である。

北京の政界に見るに大總統の徐世昌は北洋派の大長老であるも舊式官僚の型を脱せず、老猶無比、

陰謀製造の本家本元である。就任既に四年出馬の旗章であつた和平政策は全然失敗に歸した、殊に老齢であれば今日以上の進展は不可能だ。國務總理の斬雲鵬は張作霖の傀儡に過ぎない、段祺瑞、黎元洪、王士珍、王占元、張勳の如きは過去の人物である。斯く觀じ来れば群雄の現在及び將來は一目瞭然たるものがある。

(六) 張作霖と吳佩孚

群雄を鳥瞰し其の將來を卜するに腕を以て天下を贏ち得んとするの實力と羈氣とを有して居る者は僅かに張作霖と吳佩孚の二者あるのみだ。他の群雄は悉く各省各個の局面に離散して地位を保持するに汲々たるは眞に憐れむべき境涯である。意氣の消沈せるは消極的を意味し乾坤一擲の大事を成すの羈氣と膽略とを缺いてゐる。張作霖と吳佩孚とが最も多量に統一の可能性を持つて居る譯だ。従つて今後支那の政局は北方の羈者である張作霖と長江の新盟主たるべき吳佩孚の對峙時代を現出すと見て間違あるまい。

張作霖勝つ乎、吳佩孚敗るゝ乎、二人者の角逐は支那統一問題の分るゝ所である。其の實力、才幹、地位を比較すれば眞に最後の勝利を占むる者は張作霖であらう。吳佩孚に比し張作霖が更に多く統

一の可能性を有してゐる事だ。兩者の立場を見るに吳佩孚の有せる中原の地盤は四面皆敵、張作霖の地盤が東北にあつて鞏固なと同日の談ではない。吳佩孚が新思想家として大向ふの喝采を博してゐても夫れは何等の力にもならない。現に廬山會議の提唱すら結局有耶無耶に葬られんとしてゐるではないか。健忘性の支那國民の然かも一部分の輿論なるものは決して頼み甲斐のあるものではない。假令吳佩孚中原に大勢力を得て張作霖を敗るとも其の東三省の勢力には一指だに染むるゝは出来ない。張作霖が東三省に蟠踞せる間は之を敵としては何人でも天下に號令する事は叶はぬのだ。武力に於ても吳佩孚は張作霖の敵ではない。張作霖が滿蒙の地盤を固め自重勤かざるに於ては吳佩孚も手は出せない。兩者が早晚衝突の日あるは必然である。之れを歴史に徵すれば秦末の亂世に於ける劉邦と項羽の争であらう。急進派の吳佩孚を項羽とせば漸進主義の張作霖は劉邦である。策士策に破るゝは支那群雄の例である。吳佩孚も亦或は徐樹錚の轍を踏むの日なしとは斷言し難い。惟ふ其人が不測の變に依る没落なき限り今日の勢を以て推し進めば今後の十年を出でずして支那の天下を一統するであらう。海内の第一人者たる稱呼に背かぬであらう。即ち張作霖こそ列國が援助して

支那統一を實現せしむる最適任者ではあるまいか。

第二節 張作霖の輪廓

(一) 一代の風雲兒

張作霖とは、そもそも如何なる人ぞ。之れ一代の風雲兒である。現代支那に於ける所謂北方の強である。奉天督軍兼省長として奉天省軍民の兩政を司るの外東三省巡閱使として吉林、黒龍江兩省の督軍を統率せる東三省の主權者である。蒙疆經略使として亦、熱河、察哈爾、綏遠の三特別區都統を指揮、節制するの全權を掌握し、威令滿蒙に遍く、一武人として支那史上前代未聞の廣大なる地域を領有して居る。之れ將に一個の獨立せる滿蒙王國の主人公たる觀がある。二十萬の甲兵と滿蒙の富源を擁して支那政界の大立物である。確かに時代が生める風雲兒である。其の半生の閱歷は如何、之れ實に活ける英雄史である。夙に身を草澤の間に起して以來春秋四十有餘年、波瀾重疊、正に一篇の立志傳である。超群の智謀と縱横の機略とを以て三國志、水滸傳中の人物として活躍し、死生の巻を馳驅せる戰國的豪傑である。今を距る四十七年前、奉天省海城縣の一農家に呱々の聲をあげ

た貧兒こそ。即ち張作霖の前身であつた。弱冠綠林に投じて多年遼西各地に出没し膽略を養ひ、斬然として頭角を現し遂に一方の頭目と爲つた。後部下の匪衆を率ゐて歸順し官軍に編入せられ、漸次累進して巡防隊統領に任じ蒙邊に駐防してゐた。宣統の末年、第一革命の風雲急を告ぐるや命を奉じて省城に移駐し克く奉省治安の維持に努め功績をあげた、民國の成立以來、陸軍第二十七師長として武力を背景に牢乎たる勢力を省城に扶植し、其の勢威、奉天將軍をも凌駕するの概を示した。民國五年春、時の奉天將軍段芝貴を逐ふて自ら、奉省の主權を掌握するや愈々、一省の軍民長官として活躍を開始した。黒龍江省官場の紛糾に乗じて鮑貴卿を督軍に据ゑて先づ黒龍江を自己の勢力下に收め、以て東三省統一の前提とした。一度安徽軍閥の麒麟兒、徐樹錚と結んで南方討伐を高唱し南征の師を送つて東三省巡閱使の榮職を贏ち得るや吉林督軍孟恩遠を驅逐して東三省を完全に自己の掌中に把握した。直隸、安徽兩派の札権に際し、巧みに第三者の地位を利用し、直隸派と結んで安徽派を擊滅後は遂に北方の霸者となつた。北京政局實際上の主權者たるに至り、親信の靳雲鵬を擁護して内閣の首班たらしめ、之を操縦してゐる。外蒙古征討問題の起るや亦、蒙疆經略使の重職を占め、熱河、察哈爾、綏遠の三特別區を新に勢力範囲とした。今や滿蒙經略の實權を確實に把握し、超

然中原の群雄を睥睨せるの状は一世の偉観である。

之れを史上の英傑に物色すれば遼の大祖の佛がある。唐朝の末期漠北に崛起し、百戰善勝、四隣の強を破つて満蒙を統一し、遼帝國を創建した契丹の酋長耶律阿保機にも比すべきである。彼の創業が夢と消えて既に一千年の歳月は流れた。繰り返す歴史の頁は一千年后、英雄兒張作霖をして再び之れを實現せしめたのであらう。張作霖こそ、實に一代の風雲兒である。時代の寵兒であるのだ。

(二) 機 會 利 用 家

張作霖は非凡の智者である。草澤の間より崛起して今日の地位を贏ち得たに就ては其の智謀、才幹以外に種々の原因はある。然し裸一貫で運命を開拓した一事を以て見るも張作霖其人が平凡の人物でない事は明瞭だ。張作霖、資性、聰明慧敏、支那の現代群雄中に特に傑出してゐる。其の右に出づる者はないと謂はれてゐる位だ。勇膽にして霸氣に富み、機略縱横泉の如く、最も權謀術數に長じてゐる。之れ張作霖が今日ある所以であらう。古來支那に於ける立身榮達の唯一捷徑は權謀術數である。機會を捉へて巧みに之れを利用する事が成功の秘訣である。孜々として勉勵する者は刀筆の吏で終るのだ。張作霖も此の呼吸は充分に飲み込んでゐた。天稟の手腕を持つてゐた。大膽小心、

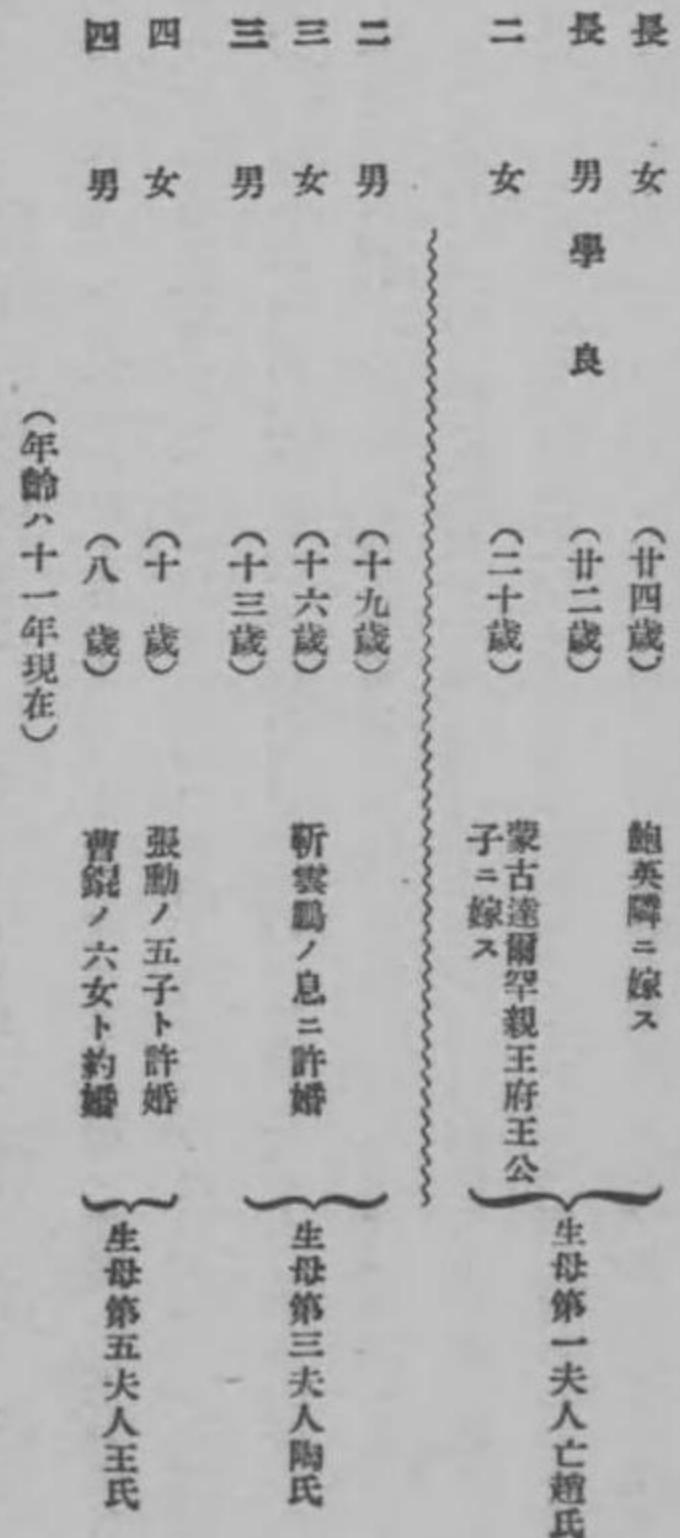
事に臨んで先づ利害を洞察するの明あり、自己に不利と見れば動かず、利なりと知れば疾風迅雷の勢で敢行するの勇氣を持つてゐる。剛毅果斷にして强悍凌刻の性は時に事理の如何に拘はらず、其の自信を貫徹せんとするの氣風がある。多く部下の言を用ひず自己の獨裁にて萬事を處理する此のために士心を失ふの缺點も半面にはある。又、愛憎の念強烈にして腹心の股肱すらも時に猜疑する事がある。然し又、多年凡有辛酸を嘗め來れるだけ一種の苦勞人として群雄を駕御し、人心を收攬するの術に長じ、士を養ふの道を解してゐる。そして他の群雄に比し特異な點は自ら奉するに薄くして部下に厚い事である。深慮遠謀な人物だけに勢力を張るには強兵の必要を痛切に感じてゐる。それで兵を養ふために全力を盡してゐる事である。之れ即ち今日の大を成すに至つた所以だ。

元來、綠林出身の一異材だけに何等徵すべき學識はない。全くの無學である。「書は姓名を記せば足る」と豪語した項羽を學んだのではないが境遇上の結果である。従つて文雅の道にも疎い。之れは止むを得ぬ事である。一般に張作霖と云へば極端な武斷的政治家を想像して何事も一から十まで武力を以て解決する人物のやうに信じてゐるらしいが之れは非常な誤解である。成る程武力は張作霖の旗幟である。然し武力は又張作霖の全生命である。全財産である。で容易に之れを濫用、濫費し

ない。支那人は總て生れながらにして外交家である。戦國策の卒業生である。張作霖も其の一人だ。出来るだけは武力以外の方法を以て解決を謀る。手を代へ品を換へて外交手段を講ずる。其の鋒銳を藏して表面に現はさない。愈々と云ふ最後の手段が武力である。之れを日本の古英雄の中に同型の人物を求むれば彼の元龜、天正の戦国時代、海内統一の先鞭を著けた織田信長に劈髪たるものがある。戦國的英雄の型は古今東西同一のものらしい。張作霖は先づ支那の織田信長と思へばよい。然し張作霖は信長ではない。酷似して居つても信長よりも苦勞人であるだけに常に寸分の油断がない。本能寺の一の舞を演するやうな男ではない。それに又軍人としても政治家としても最も必要な執著力の強い事である。堅忍不拔、人一倍の強さがある。一度思ひ極めた事は是が非でも必ず貫徹せすには止まぬ。如何なる事をしても之れを遂行する事だ。そして結婚政略を用ひて斬雲鶴、曹錕、張勳、鮑貴卿等の子女と相互に婚姻、又は許嫁とし姻戚關係を結んで之れを利用せんとしてゐる。兎に角、張作霖は現代支那の群雄中にて最も巧妙なる機會利用家であると共に又、臨機應變主義の泰斗であらう。

張作霖の家庭

張作霖は子福者である。三人の夫人の腹に出来た子女は廿四歳を頭に四男四女である。然もそれが一姫二太郎の順が四回までも繰り返されてゐるのは不思議な位である。外に向つては卓厲風發、一世を睥睨するの概ある張作霖も家庭に於ては温和な慈愛の深い父親である。それに長女と長男には數人の孫さへあつて一個善良の好々爺である。好いお爺さんでもあれば又、優しい父親である。夫人は支那式で一夫多妻である。第一夫人趙氏死去後は第二夫人、第一夫人に上り現在では第二夫人の外三、四、五の四夫人である。二、四の兩夫人には子供はない。



(三) 實力宗の信者

張作霖は實力宗の信者である。支那の武力統一論者である。従つて張作霖の言行は實力の要素たる大義名分、富、兵力の三者を離れない。常に此の三要素を中心として動いてゐる。張作霖が南北統一に全力を傾注して天下を統一せんとするの大志あるか、或は又宣統帝を推戴し復辟を斷行し帝政の擁護者たらんとするの野望あるや否やは今日遽かに豫断する事は出來ない。然し張作霖が滿蒙に牢乎たる勢力を扶植し北支那の霸者として機會あらば何等かの活躍を試みんとするの野心あるは事實である。来るべき大變亂に際して最後の勝利者たらんとするの希望あるは明瞭である。

處が之れに就て世人は張作霖は其の部下に高材逸足の士乏しいので到底天下に霸たるを得ずと評してゐる。奉天派に人物のないのは確かに事實だ。張作霖獨り卓然として傑出してゐるのみで他は團栗の背較べである。が然し此の世評は楯の兩面を見ない皮相の觀察である、眞に支那の事情に通ぜぬ者の言に過ぎない。古來支那に於て其の首脳者が破れた原因を探究するに皆、其の部下の傑物に壓倒凌駕された結果である。従つて支那に於て天下に霸たらんとせば多士濟々たるを要しない。俊髦を部下に持つ事は宛かも爆裂彈を抱いて眠るやうなものだ。誠に危險千萬である。傑物は大の禁物である。首脳者其人が傑出して部下を自由に操縦し得ればよい。之れに就て最近の好適例は曹錕

である。直隸派の牛耳を執つて張作霖に拮抗せ曹錕も部下の吳佩孚を抑制し得ない状態である。反対に吳佩孚に壓倒されんとしてゐる。其の影が次第に薄れ行きつゝあるは何人も首肯する所である。今や北方の政局が張作霖と吳佩孚の對峙時代に入り曹錕は漸く忘れ去られんとしてゐるのも共の證である。曹錕が吳佩孚のために取つて代はらるゝ時代は遠い事ではあるまい。部下に傑物を持つ事は支那の如き國では決して幸福ではない。張作霖の幕下に人材なきを嘆するの必要はあるまい。それが却つて張作霖の大を成すに好都合ではあるまいか。

(四) 貞 嶋 の 猛 虎

支那に於ける最近の風潮は民主的傾向、著しく高潮し來り、一時聯省自治の聲は一種の國論と化せんとした。官僚、軍閥の勢力が全盛期を過ぎ凋落の色を示した。

袁世凱倒れ、段祺瑞の失脚せるは別として民國十年に入りて雲南の唐繼堯失脚せるに次で廣西の陸榮廷没落し、湖北の王占元復た其の轍を踏み、殘るは直隸、奉天の兩軍閥となつた。之れとても早晚第二の雲南、廣西となり、張作霖、曹錕も亦、唐繼堯、陸榮廷と同一の運命に陥るべしと一般より觀測してゐる有様だ。之れ今日の形勢上必らずしも過當の臆測ではない。一面の眞理である。が然し

他の各軍閥の倒壊した原因を深く探究せずして同一筆法で論ずるのは確に早計である。甲の軍閥が倒れたので乙の軍閥も壊れねばならぬ理由はない。一切は優勝劣敗である。失脚せる者は實力の缺乏せるに基因し、輿論の力で推倒されたのではない。支那に輿論などはない。假りに一步を譲つて輿論の力が各軍閥を推倒したとしても奉天派の破壊などは一寸困難である。奉天派は張作霖を中心とする以上、張作霖を除けば支離滅裂となるも張作霖が統率してゐる間はビクともせぬであらう。

直隸派は亡びても奉天派は容易に壊るゝ事はあるまい。奉天派の地勢と實力は行れの軍閥よりも優つてゐる。同日の論ではない。先づ地勢より見るも關外に虎踞し大兵を擁して自恣し、出でゝ争へば懸河の勢を得、退いて守れば一夫關に當るの概がある。之れを直隸派に比較すれば其の地盤渾然一體をなしてゐるのである。

滿蒙の地は古來、英雄百戦の地にして英邁雄豪の民族、此處に崛起した。北方の強として驍勇の名を中原に馳せ、歷代王朝の一大脅威であつた。唐を攻めて北邊を略し、宋に及んで遂に黃河以北に割據した遼の如く。北滿洲の東部に起り宋を壓迫して都を北京に奠めて勢を振ふた金の如く、或は漠北に起つて支那を統一せる元の如く、近くは長白山麓より蹶起して帝業を創立した清の如き。何れも滿蒙を席捲し之れを根據として長城以南に侵入したのだ。之れ炳乎として史實の證する所である。滿蒙の地勢が東北に偏在せるは中原の各省と異り、四境の脅威を受くること少く、超然、中原を睥睨し得るの利がある。守るに易く、攻むるに難い無雙の天險である。之れ古來、幾多英豪の士をして志を天下に伸ぶるを得せしめた所以である。

張作霖をして此の天險に據らしめたのは正に之れ虜を負ふ猛虎である。地勢上に於ても既に天下を壓してゐるのである。

(五) 親 分 子 分

張作霖の勢力は强大なる兵權を掌握して居る事である。武力即ち張作霖の勢力である。然も其の武力は地盤と共に獨特のものである。奉天軍は支那軍隊中最も節制あり、訓練ありて精銳なる事隨一と傳へられて居る位だ。張作霖が勢力のあるのは當然であらう。

本來、支那に於ける軍隊は名稱の如何に拘はらず、中央政府の直屬ではない。各省督軍又は師團長其他の私兵である。封建時代に諸侯が食祿を給與して家臣を扶養してゐたのと同様である。督軍、師團長等が自己の勢力を維持する爲めに養つてゐる私有物である。自己に不利な場合は政府の命で

も奉ぜぬのは此のためだ。奉天軍も亦張作霖の私黨たるは無論である。表面の名稱は中央政府の陸軍であつても(之れは軍費の關係上斯くせるのみ)實は張作霖が勢力を張るために召募、訓練して飼養せる私兵である。張作霖の家臣も同様で政府の命は肯かなくとも張作霖の命令は奉するのだ。そして張作霖の武力が他の武將に比し遙かに鞏固なる所以は奉天軍閥の中堅が遼西綠林以來、死生を共にし來れる親分子分の密接なる關係を結んでゐる腹心の部下であることだ。前年、張作霖が第二十七師長であつた時代、其の麾下に隸して旅長(旅團長)、團長(聯隊長)、營長(大隊長)、連長(中隊長)として歴任した各武官こそ、即ち中堅である。奉天軍が支那軍隊の中で比較的節制あり、精銳なるは此の主従的關係も影響してゐる。それに増して重大なる主因は張作霖が兵を愛する事である。

各省の督軍等が軍隊の給養を薄くして自己の懷中を暖むるに汲々たるに張作霖は之れをしない。天下を取らんとする男は著眼點が違ふ。僅かな兵隊の給料位に眼をかけぬ。天下を取ると取らぬは兵隊の動き方一つで定る。之れを有效に使ふためには平素の給養が肝要である。流石に張作霖は兵隊を唯一の資本、財産としてゐるだけに軍隊の給養は完全に行つてゐる。其の證據には各省で勃發する給料不渡に因る兵變が張作霖の麾下では全くない一事でも知らる。それに張作霖の命令が麾下の

軍隊に遵奉されて徹底的な事だ。督軍の命令であつても省に依つては充分に行はれない處がある。張作霖は峻厳である。苟も其の命に背く者は立ち所に銃殺して憚らないだけに部下も易々として命を奉する。此の點が又支那軍隊としては稀なる事である。

(六) 瘦面黄肉

張作霖は一見、歸女子にして見まほしき優男である、噂に聞く張作霖は當年馬賊の頭目として自ら銃殺の刑を行ふ程の蟹勇漢と傳へらるゝことから想像して定めし水滸傳式に「容貌魁梧、軀幹長大、鬚髯胸に垂る」と云ふやうな荒武者の風格を備へた男と考へらるゝも事實は全然、正反対である。

五尺を二寸とは越えまいと思はるゝ瘦肉黃面の小男、其の雷名に似もやらず、柔和らしい相貌は何等の特徴もない。英傑らしい點もない。一見素朴なる田舎翁其儘である。斯人が滿蒙王國の主人公として三軍を叱咤し、北方支那に支配的權力を振つてゐる花形役者とは受取れぬ。此の男が昔、馬賊の隊長であつたとは信じられない位である。太史公の所謂「容貌婦女子の如し」と述べてゐる彼の博浪沙にて力士をして秦の始皇に鐵椎を投げしめたる張良も斯様な優男であつたらうと聯想さるゝのだ。

頭髪の薄い毬栗頭、眼は細く口は小さい。鼻梁隆準、鼻下にある垂直の髯は純支那式だ、總てが平凡である。唯だ流石に眼光のみは烟台として人を射るものがある。

他人と對話する際は決して相手の顔を正視しない。稍や斜めに向つて始終右の手を左の脇の下に組んで左の手は恰かも髯をなぶるやうな姿勢で頤を撫でながら俯目勝に語るのが癖である。其の聲は耳を峙てなければ殆んど聞き取り難い位の低聲である。對語中に時々、閃電のやうな鋭い眼光を相手に浴せることと言葉の端々に精悍の氣充分に現はるゝのは特異な點であらう。光澤のある頬に浮ぶ三日月型の笑靄は當年、紅頬の美少年を偲ばしむるに足る。その奸々爺らしい風貌の中に又、何となく人を魅するの魔力を有してゐる。一種人を引きつくる力がある。「張作霖の肉を啖はずんは已まざ」と豪語して強烈な敵愾心を持つた男も何時しか、張作霖に懷柔されてゐるのは其の證である。

(七) 未知數の前途

張作霖の美點とも云ふべきは張自身が極端な愛錢家なるに反し支那官吏の病弊である賄賂を貪らぬ事と親分肌の資質ある事だ。

昔、大奈翁が云つたやうに戰勝の秘訣は「一に金、二に金、三に金」である。志天下にある張作霖が財貨の必要を痛感せるは説くまでもない。従つて東三省の財政整理に就ては最も意を注いでゐる。一文でも增收を期して部下を督勵してゐる。それに就ても收稅の完全に實行されぬのは部下官吏が中間に於て不正なるコンミツシヨンを貪るに基因するを熟知してゐるので嚴重之れを取締つてゐる。部下の不正を取締る爲には先づ親ら實行して範を示すの捷徑なるに如かずとし奉天督軍に就任以來、未た曾つて官金を横領して私腹を肥せる事は全くない。張作霖の部下一同が深く感歎してゐる所である。自己親ら實行する而已ならず地方の道尹、縣知事、稅捐局長等の如き直接間接收稅の任に當る者にして一度、不正の行爲を發見すれば直に之れを馘首して秋毫も假借しない。近年奉天省の財政が漸く豊かとなれるのも原因の一つである。

張作霖が親分としての資質は地位の昂上に伴ひ多年の修養に依りて清濁併呑の雅量を有してゐる。一度、事に依りて張作霖に背き去れる者も前非を悔いて歸り來れば張作霖は前罪を問はず喜んで之れを重用する事だ。例へば前に張作霖に叛旗を翻して相抗争した馮德麟も湯玉麟も兜を脱いで歸參するやそれ相當の位地を與へた。前年黒龍江に於いて鮑督軍に楯突いて逐ひ出された許蘭洲の

如きは現に東三省巡閱使總參謀長の重職に任用してゐる。吉林事件の元兇たる孟恩遠及び高士愬も遂に屈伏し来るや張作霖は高士愬を將軍府參軍として復官せしめた。南征當時徐樹錚と結託して張作霖に煮湯を飲ました參謀長楊宇霆を再び起用し吉里剿匪軍參謀長に任命せる如きは其の重なるものである。一度張作霖に叛旗を翻せる者も張作霖に睨まれては立つ瀬がないので歸参する。如何に離合集散が權勢に阿附迎合する支那人の事大思想より來る心理とは云へ、半面に於て張作霖其人が親分肌で、人を魅する魔力を有せる事は否み難い、矢張り一種の人傑であらう。

今や張作霖は滿蒙の天險を擁し、精銳なる三省の健兒を率ゐ、周密なる思慮を以て自重動かず、漸進的政策を執つて徐ろに、地盤の擴張と勢力の扶植に努めつゝあるは其の眞意が那邊にあるやは推測するに難くない。其の將來は大いに刮目するの價値がある。又從つて大なる未知數である。

白面の少將閣下

張學良は父親に似て性格めて精悍頗る機智に富んでゐる。世故に長け應酬に巧妙にして外交的手腕がある。由來英傑に不肖な子は附物であるが之れは又公平に見て支那大官の子としては珍らしい位の秀才である。親の子として恥づかしからぬ人物である。唯だ不相應なのは現職である東三省巡閱使衛隊旅長(張作霖の親衛隊長)として僅か二十二歳の陸軍少將である事だ。如何に支那式とは云へ餘りに馬鹿氣で居る。親の威光とは云へ東三省講武少帥と稱してゐる。それに六歳を頭に四人の親である。

第一章 檻頭前¹の張作霖

第一節 鄉村と生立

(一) 遼河畔の麒麟兒

之より愈々張作霖の本傳に入る。風雲兒の榮達史を叙述し、以て張作霖の正體を解剖するであらう。張作霖、字は雨亭、前清光緒元年(舊曆二月十二日)を以て名もなき遼西の一寒村に呱々の聲を擧げた。大遼河の水、溶々として南流し、渤海に注ぐ畔り、田莊台を西北に距る二十支里、奉天省海城縣家掌寺村、之れ即ち張作霖が桑梓の地である。其の生家は貧賤にして何等の門閥も地位もない微々

たる小作農に過ぎなかつた。然も其の本籍は直隸省河間府にして張作霖の祖父の時代、道光の初年、直隸の饑饉に依りて海城に移住したのである。換言すれば張作霖は當年、饑饉と戰ひ、一家族と共に山海關を越えて來た災民の子孫である。人間の運命ほど不思議なものはない。此の貧民の子孫が後年、滿蒙の王者の位地に就くとは實に奇しきは運命である。

恒產なき者は恒心なしだ。張作霖の實父もそれであつた。持つて生れた漂浪の血と貧賤のために一定の常業もない放縱不羈の男であつた、日夜賭博に耽り産を收めず、時に或は草賊の群に伍し時に四方に漂浪し夙に鄉黨の指彈を受けてゐた。此の貧家に二男として生れた張作霖は一兄作幅と俱に生母の養育の下に審さに艱苦を嘗めて人となつた。未來の滿洲王も其の垂聟時代は頗る薄倅の境涯にあつた。此の貧家の少年が後年、支那の大立物とならんとは當時、何人も夢想せぬ處であつた。其の生父は作霖等が十歳前後の頃、義縣の舊知の農家で不幸病死した。其の農家は海城より移住した張作相の生家であつたと云ふ。張作霖の家は之を歸葬するの費は無論の事、遺骸を歛むる棺を購ふの資すら支辦するを得ない窮迫であつた。それで張作相の生家にて葬式一切を取計ひ葬つたと云ふ事である。容貌秀麗な美人であつた其の生母は作福、作霖の二兒を擁して生活の道に窮した。幸

ひ世話をする人があつて村内にて馬醫を業とせる相當資産あり人望ある某家に再嫁したのであつた。遺孤二人は無論伴つて行つた。性來、怜憫雋敏、利かぬ氣の美少年であつた張作霖は長するに従ひ、平素養家に入出する伯樂等に愛好された。そして又、一家の寵好を一身に集めて成長したのであつた。張作霖漸く長じて十六歳となり養家を出でゝ近村圖河堡の一客棧に小僧として住み込んだ。之れ張作霖が世の荒波に飛び込んだ始めてある。田舎の支那宿に小僧としての張作霖は敏捷な少年と云ふに過ぎずして特異な點もなく、平凡な月日を送迎したのである。何等の正式教育を受けずして眼に一丁字なく(後年榮達するに従ひ無學を不便とし努めたので稍や文字を解するに至る)幾年かを遼西の邊陲に暮して人となつた。

(二) 騎兵隊の從卒

光緒二十年(明治二十七年)張作霖が二十歳の夏、日清の戰争は起つた。時宛かも遼東の戰に大敗した宋慶の北洋毅軍は總司令部を一時、田莊台に移置して海城方面の日本軍と對峙した。此の秋始めて張作霖が軍界に接近する機會となつた。張作霖は自ら志願して兵に應じ、馬隊管帶官(騎兵大隊長)趙得勝の從卒となつて日清の軍に參加した。之れ張作霖が軍人としての第一歩であつた。性

來

の怜憫萬能な資質は軍中に於ても斬然儕輩の群を抜いた。趙管帶官の殊遇を受け其の勇膽才略は當時より傑出し衆の推重する所となつた。日清の戰局、愈々進展し遼東の野は精銳なる日本軍の席捲する所となり、一十八年春、毅軍は錦州に敗退するや張作霖、亦之れに従ひ西行した。四月兩國の講和條約が下關に於て成立し平和克服したので北洋毅軍は直隸の原駐地に撤退した。之れと同時に張作霖は軍界を辭して鄉里に歸つた。年少氣鋭な張作霖は毅軍の一兵卒として身を立つる事を欲せなかつたのであらう。處が歸郷後は傭兵を取つて高梁烟を耕す氣もせず、兄の作福や村内の不良青年等を相手として軍隊で習得した賭博に耽つた。或は家傳の「牛馬藥」を携へ近隣を行商しつゝ無賴の徒と交り何時の間にか純然たる不良青年と變じてゐた。

張作霖は二十二歳の秋、遂に廣寧に奔つて綠林に投じた。其の郷村を出奔するに就ては一つの挿話がある。其の春頃、賭博に大敗して囊裡無一物となつた張作霖は隣村沙嶺の團練長（土民兵の隊長）楊家の豚二頭を盜んで發見された事だ。楊の部下に現場を押さへられて責苦に遭はんとした。竊盜、強盜は支那の國民性として少しも恥でない。張作霖も支那人並の事をしたに過ぎなかつた。村民等は張作霖を憚み、楊家に向つて釋放方を懇請したので楊家も村民の請を容れ、張作霖を釋し

たのだ。其後、張作霖は謹慎して家に蟄居して出でず。何事か思案し、快々として樂まぬ色があつた。それが遂に深く期す所あるものゝ如く孤影漠然北の方廣寧に向つて奔つたのである。

第二節 遼西綠林時代

(一) 馬賊の頭目

古來、廣寧地方は民氣、兇暴殺伐にして獰猛凶惡なる馬賊の巣窟として聞えてゐた。張作霖は愈々遼西及び蒙古の曠野を舞臺として起つた。遼西馬賊の一頭目董大虎の部下となつて諸馬賊と交友し賭博に慣れ掠奪に熟し彰武縣方面に出没し純然たる馬賊となつた。張景惠も張作相も當時行動を共にした同僚である。張作霖と此の二張との關係は最も密接で義兄弟の盟約を結んだ間柄である。年齢順に景惠、作霖、作相と定め張作霖は景惠を呼ぶに「我大哥」、作相を「我三弟」と稱してゐる。加之に同郷同村の出、所謂竹馬の友とも稱すべく現に景惠は臺安、作相は義縣に籍を置くも各自海城より移籍したのである。

斯くて一方の頭目となつた張作霖は光緒二十年の團匪の亂には根據を廣寧縣の中安堡に構へ部下

三十四名を率ゐてゐた。陽に官憲より中安堡の團練長なる事を默認されて地方治安の維持に當つた。そして陰に新民府方面に出没して隨所に掠奪を肆行し勢力を張つてゐた。此の頃、或る一夜、新民府下の某村に富豪として聞ゆる陳、趙の兩家を襲ひ趙家に於て一美人を奪つて自ら妻した。之れ張作霖の第一夫人である。趙家は附近に於ける有數の名望家であつたので趙家の女を妻とした張作霖の聲譽と信望とは同地方の土民間に高り勢力を加へた。如何にも其の行動が三國志的で支那式である。此の趙夫人の産んだ長子が即ち張學良である、鮑貴卿長子の張英麟に婚嫁した長女も趙夫人の腹であつた。

(二) 張作霖と金壽山

光緒二十六年(明治三十三年)團匪事件の終熄以來、滿洲は露國の勢力圈内に入つた。支那政府の政令行はれず、匪賊四方に勃起して跳梁跋扈を極めてゐた。

當時露國の極東政策は滿洲を併呑すべく著々増兵に努め、排露主義の馬賊を懷柔又は驅逐する目的の下に之れが實行に努めてゐた。親露派の歸順馬賊金壽山を手先に使つて馬賊招降に著手せしめた。金壽山は天津武備學堂の出身にて鄭家屯を根據に滿洲綠林に活躍してゐたのだ。前に排露派馬

賊の頭目である俠豪馮德麟を捕縛し、樺太島に配謫した露國軍の眼は當時漸く擡頭して來た張作霖に向つて注がれた。張作霖を露國側に引入れる使命は金壽山に下つた。金壽山が投降勸説使として張作霖と會見するや張作霖は「自分が露軍に參加すると否とは勝手である。何も貴様の勞を借るの必要はない」と高飛車に拒絕したさうだ。そこで金壽山は大いに憤慨し、張作霖を誅せんと部下の兵約一個中隊と露國兵一個中隊を引率して長驅、廣寧を襲ふた。張作霖が油斷してゐる隙に乗じて突如、中安堡の根據地に殺到した。急を聞いた張作霖は危険の迫れるを豫感した。此の際一應中安堡を退去し遼中縣八角臺の張景惠の許に投するに決した。先づ腹心の部下に旨を銳めて趙夫人を扶け避難せしめた。自己は又、部下七名と共に間道を選んで東に落ち延び鎮安縣姜家屯に辿り着いた。そして同地の馬賊頭目にして馮德麟の排露軍に加擔した洪福臣、陳蔭棠等に會見し事情を說いて援を求めた。洪陳等に贈るに彼等が未見の珍品である拳銃を以てし懇請したのであつた、洪、陳、等は共に排露派として金壽山の所爲を憎み張作霖の窮状に同情し馬八頭及び歩兵銃八挺を贈つた。此處で張作霖の主從八名は金壽山の腹心徐海樓の追撃を避けて八角臺に到着し張景惠の兵と合したのである。

(三) 張量惠と湯玉麟

張作霖の主従は張景惠の部下六十名と合し八角臺(臺安縣)を中心に附近の部落に出没して勢力を扶植するに努めた。其後同地方に於て無雙の勢力を有せる回々教の馬賊頭目項昭子の繩張範圍を侵害した事で項昭子の怒を買ひ衝突した。張作霖の一隊は僅かに七十名足らずの小勢を以て優勢なる項の軍と對峙したのである。衆寡敵し難くして張作霖の軍は不利の立場に陥つた。當時鎮安縣紅螺山に根城を据る一方の勢力を張つてゐた馬賊頭目湯玉麟の許に急使を送つて救援を乞ふた。湯玉麟は一諾直に四五十の援兵を八角臺に急派したので形勢は逆轉し張作霖の軍優勢となり項軍を擊破した。遂に項昭子及び其の腹心八名を斬り其の部下の投降する者三十餘名を收めて部下に加へた。張作霖が馬賊としての初陣に大勝利を占めたのは後年榮達の第一歩であつた。張景惠、湯玉麟の功勳最も高く一面、張作霖に取りて得難き恩人であつた。項昭子を擊破した張作霖の威望は項の勢力の偉大なりしだけ、より以上に忽ちの間に四麟を震撼し麾下に投じ来る者相次いで盛名愈々揚つたのである。

張作霖と湯玉麟の關係は此の時に胚胎し、張作霖は深く湯玉麟の援護を德とし一種の攻守同盟を

結んだ。張作霖は八角臺を根據として張景惠と相扶け、湯玉麟は鎮安縣(後に黑山縣と改む)桑林子(八角臺の西三十五支里)に蟠踞し、張、湯兩者の部下は合して約二百餘、同地方に威力を振ひ群小馬賊を壓倒するに至つた。張作霖と湯玉麟は肝膽相照すの仲となつた。張作霖は一日、湯玉麟と共に旗亭に會飲し、「今日の時局は滿洲、殆んど無政府の状態にあり余等は一地方の馬賊として満足するの秋ではない、各地の群小馬賊を合し打つて一丸となし強大なる勢力を形成して滿洲に霸を唱ふべきである」と力説し、湯玉も亦、之れに和し「余も又此の意見である」と賛同し張、湯、兩者の意氣投合し其の提携は膠漆管ならざる關係となつた。張作霖は機會あらば相當有利の條件を附して官軍に歸順し第二の活動を開始せんとするの意漸く動いてゐた。

(四) 張作霖の歸順

光緒二十九年春(明治三十六年)時の新民府知府であつた增韜(後に浙江巡撫に轉任)は匪賊四方に割據し地方騒然たるを憂ひ馬賊懷柔を企圖し招降の宣撫使を先づ張作霖の許に派遣した。新民府巡警局長の王奉廷(後に北京陸軍部參謀に任ず)と宋玉亭の兩名が其の任に當り部下の巡警若干を率ゐ八角臺に赴き張作霖と會見して增知府の意を傳へ歸順を勧説慇懃したのである。張作霖は既に馬

賊として永久に立つを得ない事を覺つてゐた。天下に覇を唱ふるためにも大勢に逆行しては何事も不可能な事由を明察してゐた。一大抱負を懷いてゐた際とて歸順の意、愈々動いた。剛愎なる張景惠が歸順に反対したにも係はらず張作霖は斷然決意して王、宋等の勸説を容れて歸順する事を承諾した。唯だ其の歸順に就て張作霖は「一部隊の隊長となつて地方の治安に任すべし」との條件を提示出したのだ。王、宋兩勸降使に對し赤裸々に自己の兵力（部下、銃器、馬匹等）の一切を開放して他意なきを明示した。そして王、宋等が張作霖の歸順條件を得て歸つた後に年來、根據地として相當の盤を築ける八角臺の紳商趙墨麟、戴仲融及び學紳張子雲等三名を勤かし、趙等をして增知府に對し「張作霖は充分地方治安の任に勝ふべき」旨を推薦せしめて運動大いに努め増知府の諒解を得たのである。

同年夏張作霖は部下の馬賊を率ゐて新民屯に北上し來り增知府と會見した。其の會見に於て張作霖の主張は增知府の容るゝ所となつた。部下を改編して騎兵一營を編制し新民屯に駐在さするに決定したのであつた。當時張作霖の兵力は僅かに二百名内外であつた。部下の馬賊兵百五十名、歸順の途來投した者三十名、新民屯駐屯の士兵一哨五十名を合し總數二百三十名にして騎兵一營（二百五

十名）にも満たなかつた。それを後更に三十名淘汰して殘部二百名を以て精銳なる騎兵の一營を編成し張作霖、管帶官として之を統率し湯玉麟を第一哨長に任命した。斯くて張作霖は綠林より轉じて清國政府の一武人となつて新民府に移駐し地方治安の任に就いた。之れ張作霖が二十九歳の秋である。前後八年に亘る遼西綠林の生活は愈々終を告げた。

第三節 日露役の前後

（一）新民府の重鎮

新民府に移駐した張作霖は愈々其の鋭い鋒鋩を現はして活躍した。昨日の野武士は一變して官軍の一營長となつた。機に臨み變に應じて泉の如く湧く智謀は勢力擴張の上に遺憾なく發揮された。上長を籠絡して自家薬籠中の者となし自己の競争者を壓迫排擠して自ら第一人者たらんとするの希望に燃えた。支那官界の榮達が權謀術數の成功である以上權謀術數に長じてゐた張作霖が巧みに兵力を背景に之を利用したのは眼が明いてゐたのだ。財寶を得れば之を散じて士心を得るに勉め人心を收攬するに最も努めた。そして張作霖は新民府知府增韜の信賴を得るために努力した。一地方

官に過ぎない增知府の如きを籠絡する事は張作霖の智謀を以てしては實に易々たるものであつた。果して増知府を自家薬籠中のものとした。張作霖は增知府に迫つて王奉廷を新民府より驅逐する事に成功した。王奉廷は新民府巡警局長にして練字軍歩兵一營の營長を兼ね同地有數の勢力家であつた。前に張作霖を八角臺に訪ふて歸順勸告使の役を勤めた人物である。王奉廷を白旗堡の巡警局長に轉任せしめ所部の歩兵一營(其數二百五十名)を收めて自己の配下に編入した。之れで愈々新民府は張作霖の繩張となつた。遂には增知府をも凌駕せんとする勢力となつた。

露國が北清事件以來、多數の兵を南下せしめ滿洲を占領し極東に於ける日本及び英國の利害を無視せる傍若無人の行動は遂に日、露兩國の國交斷絶となつた。光緒三十年二月(明治三十七年)日露戰爭は滿洲の曠野に開かれ、遼東の山野、爲めに砲煙彈雨の巷と化し屍山血河の一大修羅場を現出した。當時日本軍の特別任務隊は別動隊を組織し露軍を牽制するために遼西一帶に義軍を招募し馮德麟、杜立山、金壽山等の馬賊頭目は相次で來投し氣勢を張つた。新民府の營長であつた張作霖は自重勤かず、終始地方治安の維持に任じてゐた。

(二) 張錫鑾と張作霖

日露の干戈。全く終息するや張作霖が第二期の活躍の幕は開かれた。之れ張作霖が三十二歳の秋である。日露兩國が約に從ひ期を定め滿洲より各撤兵を實行するに際し、北京朝廷は滿洲一歲に亘れる戰禍の善後策を講ずるために特に張錫鑾を奉天巡防營務處總辦に任じ軍備整理の重任を倚託した。時は之れ光緒三十二年(明治三十九年)である。張錫鑾は浙江省錢塘の人、字は金波、監生出身にて光緒元年馬賊剿討のため奉天に派遣せられて以來通化、錦州、鳳凰廳等の各縣に地方長官として歴任し令名あり、日清戰役に參加し寃甸縣方面にて勇戦せる人、性清廉果敢、古武士の傳ある好將軍であつた。當時京奉鐵道は新民府まで開通し奉天、新民屯間は未開通であつた、それで張錫鑾が奉天に赴任するに就いて途中新民屯に一泊したのである。張錫鑾が「快馬」銀の綽名を以て支那隨一の愛馬家にして馬術の特技を有せることは誰知らぬ者もなかつた。張錫鑾は此の行何故か乗用の一馬をも携へず新民屯の旅宿に入つた。之れ即ち張作霖が張錫鑾の歓心を買ふために乗すべき絶好の機會であつた。機會利用に巧みな張作霖が何で此の好機會を見遁す道理があらう。張作霖は先づ自己の愛馬の中より最駿なる逸物を擇んで張錫鑾に贈つた。張錫鑾が奉天入城の行を盛大にする爲めには自ら親しく奉天まで護衛の任に當つて見送つたのだ。そして張錫鑾の脳裡に「張作霖の何物なるか」

を充分に印象せしめた。張作霖が人心の機微に乘じ巧みに之れを利用し自己の榮達を圖るの手腕は全く天稟であつた。

果然張錫鑾が奉天に入つて旬日を出でないのに張作霖は巡防五營の統帶官(聯隊長)に任じ、鄭家屯に移駐すべしとの命を接受した。之れ當時に於いては異數の抜擢であつた。非常なる榮轉であつた。命に依つて新民屯より鄭家屯に移駐した張作霖は次第に榮達の道程を辿つてゐたのだ。

當時、張作霖を首領とする五營の營長は次の顔觸であつた。

巡防五營統帶官兼中營營長 張作霖
一營 营長 湯景惠
二營 营長 張作芬
三營 营長 鄭相
四營 营長

(三) 張作霖の登龍門

張錫鑾が奉天省の軍備整頓の使命を帶び營務處總辦として來任した當時、東三省に於ける清國陸

軍は不統一無秩序を極めてゐた。北清事變後地方の自衛兵は漸次解散されてゐた、殊に日露の戰禍に遇ひ地方の治安は唯だ團練と稱する土民兵に依りて僅かに維持されてゐたのみである。舊式軍隊は有名無實の狀態にて之を支ふる經費も亦常に不足を告げてゐた。張錫鑾は奉天を中心前後左右の五路巡防隊を創設するの計畫を立てた。唯だ奉天省財政の窮乏は其の極に達し經費の支出難に當惑してゐた。張作霖が再び乗すべき機運は來た。時は宣統元年である。張作霖得意の暗中飛躍は張錫鑾に向つて全力を盡された。前に駿馬を贈つて一躍統帶官に拔擢された味は伸々忘れられなかつた。道途の噂に依れば張作霖は張錫鑾が經費問題に苦しんで居る際機乗すべしと爲し、密かに銀一萬兩を張錫鑾に賄して巡防隊統領の地位を贏ち得たと云ふのだ。其の眞偽は別として宣統元年、奉天前路巡防隊統領に任じ、更に洮南駐防を命ぜられた。洮南轉任に就て張作霖は從來の五營に二營を増加し七營三千五百名の部下を率ゐるに至つた。二營の中一營は當時洮南に在た孫烈臣の部隊であつた。孫烈臣との關係は此の時より始る。之れで張作霖は洮南に駐防して蒙古馬賊の討伐に従ひ、洮南を中心に勢力を張つた。其の勢力が年を逐ふて擴大し、時の東三省總督徐世昌及び張錫鑾よりも庇護推挽を受けた。因に奉天五路巡防隊は次の如き顔觸にて奉天の治安を分擔維持してゐた。

前路巡防隊統領	張作霖
中路巡防隊統領	張作霖
後路巡防隊統領	吳俊
左路巡防隊統領	馮德麟
右路巡防隊統領	馬麟

第四節 奉天官場の變遷

(一) 盛京將軍の更迭

張作霖が洮南府を中心に巡防隊統領として蒙邊治安の維持に任じ只管、羽翼の充實を企圖してゐた頃、奉天省官場は三度其の主脳者の更迭があつた。趙爾巽去り徐世昌、錫良の二總督を送迎し趙爾巽、一度來任する迄、第一次革命の勃發に至る前後四ヶ年間張作霖が所謂隕伏の時代であつた。順序として奉省官界の更迭に就て其の概略を叙して置く必要があらう。

愛民輔國の老臣として精神的偉人と畏敬された盛京將軍趙爾巽は満洲戰禍の整理、略ぼ一段落を

告ぐると同時に光緒三十三年春(明治四十年)湖廣總督に轉任した。當時袁世凱が外部尙書として清室の長老慶親王と結び飛ぶ鳥すらも落す權勢を以て東三省を自己の權勢下に掌握せんとした。そのために先づ東三省行政制度の組織を改変した。そこで趙爾巽を江南に斥け兄弟分で竹馬の友である徐世昌を東三省總督に据ゑた。奉天巡撫としては又朝鮮公使以來の腹心唐紹儀を任命した。

(二) 徐世昌の新政失敗

同年五月、新總督徐世昌は巡撫唐紹儀と共に蒞任した。就任以來盛んに新政を創始し文明の外形を模倣して無用の制度、官制を定め情實を以て人を用ひ冗員濫吏府に滿ち政費を濫費せる結果は、一年ならざるに財政の紊亂極度に達したのである。趙爾巽が奉天離任の際、度支司(財政廳)に蓄へ居たる七十萬兩の剩餘金は徐世昌の濫費する所となり却つて數十萬兩の缺陷を生ずるに至つた。それに又、奉天官場は廣東派と浙江派とが隱然相對峙して朋黨相排擠してゐた、奉天巡撫として蒞任した唐紹儀は徐世昌に牽制せられ自由手腕を振ふを得ざるのみか、左參贊錢能訓、蒙古事務處督辦朱啓鈴、督練公所參議傅良佐其他秘書官に至るまで徐世昌系の跋扈に懊惱不平の極東省外資輸入問題の打合に藉口し北京に去り復た歸任を肯んじなかつた。財政の窮乏は諸官吏の俸給すら支拂ふを得ず

常に數ヶ月の延滞を來すの慘状を呈した、外は激烈にして完膚なき迄なる御史の彈劾を受けて失政を暴露したのであつた。それが光緒三十四年(明治四十一年)西太后、光緒帝相次で崩御に依る北京政局の變動に依り袁世凱の失脚に伴ひ徐世昌も亦郵電部尙書に轉任を命ぜられ在任二年にして北京に去つた。徐世昌は失政の總督であつた。張作霖は徐世昌の在任中、張錫鑾の推薦に依り特別の恩顧を蒙る所があつた。

(三) 錫良の財政整理

徐世昌の後任として東三省總督に新任されたのは雲貴總督の錫良であつた。錫良は蒙古族人にして武人の出、爲人清廉剛直、公明にして循吏の風格があつた。深く邊境の旗務に通じ四川總督より雲貴總督に轉じ佛國事件及び革命騒擾の勃發に就て樽俎の間に折衝し效をあげ、又、軍旅を進めて頗る膺懲の績を奏し深く攝政王の嘉獎を得た。東三省總督に特任されたのも攝政王の抜擢であつた。一時は錫良も人材の缺乏と財政紊亂に二の足を踏んだが前黑龍江巡撫の程德全を奉天巡撫に任じ奉天に蒞任した。着任以來徐世昌失政の後を承けて銳意改革に努め財政整理に着手し政費の節減を以て當面の急務とした。纏綿せる情實を排して極度に膨脹せる諸機關に緊縮の大鐵槌を下すと共に空

文に等しき諸制度を削除し以て冗員を淘汰し濫費を防止したのである。又自ら勤儉を以て範を百僚に示し各官吏を大淘汰せるに加へ其の手當を削減し強壓手段を用ひて腐敗驕奢の奉天官場を震懾せしめたのであつた。處が錫良も北京政界の變潮に伴ひ充分の活動をなすを得ず奉省の革命派と暗闘しつゝ在職二年、宣統三年四月(明治四十四年)北京に歸つたのである。

之より先奉天巡撫程德全は宣統二年四月江蘇巡撫に轉任したのであつた。

第三章 民國成立の前後

第一節 奉天省と革命黨

(一) 奉天省革命黨の濫觴

愛親覺羅氏發祥の故地として由緒ある奉天に孫文一派の過激なる革命思想が流入した濫觴は光緒の末季、時恰かも日露の干戈が漸く收つた後である。當時日露兩國の講和條約が成立し戰勝國の日本は新に露國に代り滿蒙に於ける特殊利權を繼承し、之れを擁護進展するために南滿洲鐵道を中心

に大活動を開始した、それで清國政府の當事者も亦、戰禍後の滿洲を整理經營し以て日本の新勢力と對抗する政策を取つた。日本及び歐米各國に留學して歸朝せる所謂新知識を拔擢して滿洲官界に特派し権要な位置に配任した。之れ即ち東三省に革命思想の流入した濫觴である。是等海外留學歸りの新人は大部分漢人種に屬し海外留學中孫文一派の唱道せる減滿興漢の革命思想に共鳴し清朝討滅の意を抱懐してゐた。各自相互に革命思想の交流共通せるも中央政府の威信猶ほ相當に强大であつたので迫害の身に及ぶを恐れ沈黙を守つてゐた。彼等は學窓を出でゝ日未だ猶ほ浅い上に何等の地盤も勢力も有せない一寒措大であつた。政府の壓迫が極端な事を慮りて堂々の論陣を張つて革命を主唱する氣概もなく只管に暗黙の間に機運の到來を待つてゐた。其の一面上又同志の結合は漸次鞏固の度を加へ來り奉天官場に牢乎たる潛勢力を扶植するに至つた。

由來、奉天は清朝發祥の故地である關係から如何なる革命黨でも東三省のみは断じて一指をも染め得ないものと北京政府は過信してゐた。處が豈に測らんや。清廷が依つて以て金城湯池と頼んでゐた奉天も亦、何時の間にか革命熱潮蔓し隱然、一大潜勢力をなせる狀態であつた。それが光緒帝、西太后相亞いで崩殂し宣統幼帝の即位以來革命黨の活動は愈々具體化して來た。孫文一派の巧妙な

革命宣傳は血の氣の多い若人達を動かし減滿興漢の氣勢は全支に漲つた。そして中央に於ける資政院と地方の諮詢局との開設は民主的思想を益々濃厚にした。東三省も亦從つて其の影響を受けて風雲甚だ急を告ぐるに至つた。時に東三省總督として在任せし錫良が職を離するの意切なるものあつたので東三省總督の更迭が行はれた。

(二) 東三省總督更迭

北京政府は東三省に潛在せる所の革命黨一派の彈壓根絶と三省治安の維持に任せしむる爲め錫良の後任として前盛京將軍たりし趙爾巽を起して再び東三省總督兼管三省將軍事務の重任を托したのであつた。新總督の趙爾巽は宣統三年五月奉天に著任した。

趙爾巽は漢人の出、眞面目なる忠厚愛國の士、滿洲總督として最も適材であつた。就任以來銳意其の職に當り内政に外交に、軍事に勵精最も努め殊に日清兩國間の外交問題の懸案解決に努力し又地方の啓發に留意した。趙爾巽は又由來清國の地方大官が尊大自ら持し督撫衙門に蟄居し部下を頗使するを能とし、親ら遠く出でゝ民情を視察する者なきを慨し親らレコードを破つて著任早々北滿巡視に赴いた。即ち此の秋である。革命の烽火、武昌に揚り導火線となつて南清の動亂が三方に擴大

するや東三省各地に潜伏して機運の到来を窺つてゐた革命黨も動き出した。奉天に於ける急進派の一昧は先づ省城を革命の渦中に巻き込まんと活躍を開始せんとするの急報に接し趙爾巽は急遽北滿の旅より奉天に還つた。趙爾巽が當時深く憂惧した點は軍隊が革命黨と聯絡して叛亂を助長する事であつた。そのために特に左の意味の訓辭を發表して人心の鎮撫に努めた。

湖北革命黨の宣言には滿洲政府を顛覆する事を目的とするも、支那帝國の歴史を見れば明。

雖も矢張り元を倒して起りしものなり、帝國の現状は區々たる漢滿の争闘を許さず、同族力を合せて世界列強に當らざる可からず、我等は時代の進歩せる今日昔より繰返したる同族の争をなすべきに非らず、余は漢人八族の出なるが滿洲政府と云ふ如き偏狹なる見を捨て危急存亡の秋支那帝國の爲めに盡さんとす。各員此旨を體し本末を誤らざるやう部下に傳へよ云々。

斯くして趙爾巽は一場の訓辭を以て革命派の擡頭を抑壓せんと試みた、が太平無事の日なればイザ知らず革命の動亂愈々擴大し清朝の勢威日に失墜するを見ては流石に忠厚の士たる趙爾巽も如何とも策の施す術なく、大厦の倒壊一木の能く支へ難きを痛感し清廷衰亡の兆顯然たるを悲しんだ。

(三) 國民保安會の成立

總督趙爾巽は形勢の推移に伴ひ奉天革命黨中の急進派領袖であつた張榕一派の猛烈なる要請を拒絶し得ず北京政府とは充分諒解を得たる上、十一月十一日奉天國民保安會を組織した。そして獨立の形式を取つて奉天省の行政權を收むる事を決議せしめた。翌十二日、奉天諮詢局に於て保安會の發會式を舉行し十二ヶ條の會則を決議し會長には總督趙爾巽を選任した。席上趙爾巽は會長として演説して曰く。

余は國民の希望に依り保安會長となつた、安寧、秩序、生命、財產の保全は身命を賭して之れに膺るべし、保全の爲めには各人より遠慮なく陳情を望む云々

と聲明した。越えて十五日保安會役員の選定は副會長以下次の如く決定した。

保安會長	東三省總督	趙爾巽
同副會長	陸軍第二十鎮第卅九協統領	伍祥楨
同外交部長	奉天交涉使	許鼎霖
同內政部長	奉天民政使	張元奇
同軍政部長	陸軍第二混成協統領	聶汝清

同財政部長 奉天度支使 朱鍾琦
同交通部長 奉天旗務處總辦 金梁
同教育部長 奉天法政學堂監督 詹兆昭
同執法部長 奉天審判廳丞 許世英
保安會の内部には穩和、急進の二派の暗流ありて此の中、亦、軍人派、文治系に別れてゐた。奉天諸議局議長吳景濂、同副議長袁金鑑及び張榕等の急進派は軍人を中心とする官僚派の宗社黨と軋轢し共和立憲の思潮其の半數を占め内訌と暗闘に頗る紛擾し奉省の内外多事であつた。

第二節 趙爾巽と張作霖

(一) 張作霖の省城移駐

總督趙爾巽は此の危局に遭遇し最も痛切に感じたのは省城の兵備頗る薄弱な事であつた。此のために地方治安維持として奉省の各道に配備してある巡防隊の一部を省城に移駐せしめ以て萬一の警備に任せしむる方針を取つた。そして新に省城移駐の命令は年來、洮南府に駐防し蒙邊治安の維持に

任じてゐた巡防隊統領の張作霖に下つた時は宣統三年の秋十一月であつた。之れ抑も張作霖が奉天省城に腰を据ゑた最初である。後年奉天督軍として天下の張作霖となつたのは此の秋に肝胎してゐる。

張作霖が僅かに三十六の壯年の身を以て先進武人を排し特に趙爾巽に拔擢されて省城に移駐せるに就ては無論、張作霖得意の暗中飛躍が奏效せる事は云ふまでもない。張作霖は平素趙爾巽を見るに再生の恩人として畏敬してゐた關係上、趙爾巽が東三省の主脳者として再來したのを非常に歓迎した。趙爾巽の勢望を利用して自己の勢力を奉省に扶植せんとする目的を抱いてゐたので多年蓄積した巨萬の財と麾下の精兵とを以て巧みに趙爾巽の意を迎合其の歓心を買ふに努めた。一方又暗中飛躍は遂に効を奏し省城警備の重任を命ぜられたのである。張作霖は命に應じ遼西綠林時代より死生を俱にせる部下を中心に編制統率せる所の巡防隊の精銳三千五百名を引率し省城に移駐した。そして奉天中路及び前路巡防統領として保安會軍政副部長を兼ねた。

(二) 革命黨復州舉兵

東三省に於ける革命の第一聲は遼東の一角、復州に響いた。復州の豪族顧人宣は人邦人、敏の二弟

を率ゐ同志を糾合し十一月二十四日復州に舉兵し、遙に南方革命派と相呼應し勢頗る猖獗を極めた。又、顧人宣は二十七日、武昌の中華民國軍總司令官黎元洪より滿洲第一路司令官任命の辭令を受け革命の宣言書を發表した。蓋平、鳳凰城、安東、海城、熊岳城、營口其他各地に駐屯せる軍隊に對し協力以て事を擧げんとの勸告狀を發した。

復州の舉兵と前後して遼陽巡警學堂の教習生三十二名は革命黨に投する目的にて各自左腕に白布を纏ひ武器携帶のまゝ遼中縣に逃亡し劉一堡遼陽の西南約四十支里を占領して根據地となし地方の壯丁を募集し同志一千餘を糾合し一舉遼陽を占領して奉天に迫らんと計畫した。鐵嶺、開原、營口等も相呼應し均しく革命族の翻るに至つた。彼等の主眼とする所は地方に暴動を起し討伐隊四方に出動して奉天の警備薄弱となるに乘じ、其の虛を衝いて一舉に奉天城を革命軍の手に奪取するの作戰計畫であつた。法庫門、康平附近に横行せる所謂遼西及び蒙古の匪賊も之れに聯絡し事を擧げんとするの形勢を示し來りて奉天の風雲、愈々急を告げた。然も復州、遼陽の舉兵が戰備の微弱と戰士の教練を缺ける結果、奉天巡防隊に擊破され脆くも失敗に終つた。が東三省に於ける革命の機運は磅礴として漲つてゐた。

(三) 藍天蔚の共和主張

奉天省城に於ては急進派の領袖張榕一派の活動猛烈を極め奉天の武官中の新人である第二混成協統領藍天蔚と接近した。當時藍天蔚は第二十鎮統制張紹曾、第三鎮統制盧永祥等と連署して彼の有名な十二ヶ條の政治改革意見を清廷に上奏した關係上、趙爾巽より危險人物視せられてゐた。それで南方の情勢視察と云ふ名義で第二混成協統領の職を部下の第三標統聶汝清に譲らしめられ體よく放逐されて甚しく不平を抱いてゐた頃である。そこで張榕の一派は不平軍人と結んで目的を達せんと期し遂に藍天蔚一派の軍人と握手した。又、憲政急進會なるものを組織した。其の主張する所は飽くまでも平和的手段に依りて東三省の政治的革命を行ふにありて湖北革命黨は減滿興漢を趣旨とするも人道を重んじ滿漢の別なく共和政體を施すを趣意とし皇帝に退位を求むるも財産を附し貴族として存すべし

と云ふにあつた。そして機の熟するや藍天蔚の部下將校等と共に總督趙爾巽に向つて奉天省の獨立宣言を強迫せんとする形勢となつた。日本陸軍士官學校出身の新人である藍天蔚は遂に積極的行動に出で趙爾巽に對して

願くば大勢の趨く所に従ひ共和政治の輿論を容れ皇帝讓位し熱河に榮塵せんことを上奏ありたし云々

と陳情し赤裸々に何の憚る所もなく清帝の退位を迫り民主共和の新政體を樹立せん事を主張し暗に趙爾巽を威脅した。一方舊部下の兵をして張榕一派の急進革命派と策應せしめ奉天獨立を決行せんと割策してゐた。蜚語流言は頻りに飛び省城の人心は爲めに騒然たるの状態であつた。總督趙爾巽は萬一の變を慮り張作霖に命じて嚴重に省城内外の警戒と藍一派の監視を行はしめた。

(四) 張作霖革黨彈壓

張作霖は省城に移駐して以來自己の勢力を扶植するために趙爾巽の歎心を繋ぐ事に最も腐心した。省城に於ける革命黨の跋扈に就ては趙爾巽の意を體し秋霜烈日の如き峻厳な態度を持して極力革命黨の彈壓を勵行し、驍勇慄悍を以て鳴る麾下の馬賊兵を指揮して綠林一流の鬱勇振を發揮した。宗社黨の色彩を濃厚にせる張作霖のブラツク、ハンドは革命派の頭上に下された。一月二十三日夜奉天急進黨の領袖として最も活動しな張榕先づ其の第一の犠牲者として斃れた。同夜張榕は袁金鑑、葆崑等と大西關牛康里の某酒樓に小宴を張り夜半單身歸途にあるを大西關の一角に邀して殺害せられた。

しめたのである。又急進會副會長樞大年、國民報主筆田亞賓其他同黨員の有力家を逮捕監禁し或は殺戮し其の遺産をも横奪して深怨を買ふに至り同派及び藍天蔚一味刺客より常に身邊を附け狙はれてゐた。それに

趙爾巽の絶対信賴を得るために其の擁護に腐心した事も亦非常なもので殆んど人間業以上であつた。張作霖自身が常に刺客に附け狙はれながら趙爾巽のある所必らず影の形に添ふが如くに從ひ護衛し、事に處するに自ら率先し危険を冒して顧みず、殆んど死生を超脱せるかの如き豪膽無比の行動には敵も味方も均しく驚嘆した。「生命知らずの張作霖眞に恐るべし」と感ぜしめたのは此の秋であつた。此の結果張作霖に對する趙爾巽の信賴が益々加はつたのは無論である。奉省の事大小となく之を張作霖に謀りて決するに至り張作霖の威望は趙爾巽に次ぎ其の勢力擴張の迅速なるに奉省官人の嫉視羨望の中心となつた。そして又、其の超群の智謀才幹と膽力とは綠林出身の一異彩として陸離たる光錨を放つてゐた。

當時、奉省に駐屯してゐた陸軍は亂雜を極め全く秩序統一がなかつた。第二十鎮統制潘矩權、第二混成協統領聶汝清、先鋒隊統領吳慶桐、第二十鎮三十九協統領伍祥楨、巡防隊統領張作霖、馮德麟、

馬龍潭、吳俊陞等の各武將が省城を中心に四方に分駐してゐた。然し省城に於ける張作霖の敵手は矢張り藍天蔚であつた。それも單に軍事上の新知識に於て野武士上りの張作霖に優るのみで智謀才幹に至りては到底張作霖の敵でなかつた。文治派の急進論者を葬つた張作霖が更に軍人派の反対者を驅逐せんとせるに際し勢頭藍天蔚其の槍玉にあげられた。藍天蔚が趙爾巽の命令に服従せず兵力を以て張作霖と争はんとした。藍天蔚の舊部下は藍の使嗾に依り省城の各關に掠奪を行ひ張作霖の軍隊之を取締り、兩軍の間、正に兵火相見えんとするに至つた。元來藍天蔚の新思想を喜ばない趙爾巽は極力張作霖を援護し藍天蔚を懇諭して省城を退去せしめた。此の結果、省城の騒擾は平定すると共に省城の兵權が大半張作霖に歸し其の勢威は日に増加する一方であつた。

第三節 滿洲宗社黨軟化

(一) 張作霖の南征論

張作霖は當時、趙爾巽を擁戴して立てるだけに宗社黨的の色彩を濃厚にしつゝ民主共和の新政體を樹立する事に反対を聲明した。趙爾巽は北京政府の嚴命を奉じ奉天五路の巡防隊より半數を選抜

して之を山海關以南に駐屯せしむるの意があつた。

功名榮達を謀るに急なる張作霖は此の機に乘じ自ら滿洲軍總司令となつて部下を率ゐ南征し功を軍旅に立て朝廷の嘉獎に預からんと欲し趙總督に向つて再々南征下命を要請した、處が趙總督の方では張作霖を省城の守備より移して遠く南征せしむる事を好まなかつた、張作霖の離奉は三省馬賊の操縱上甚だ不利であると云ふ理由にて馮德麟に出動の命を下した。張作霖は甚だ不平の色を見せた。そこで趙爾巽は張作霖を慰撫して

「卿は軍界に重きを爲し威望殊に厚し一旦奉天を去らば人心爲めに動搖の虞れあれば南征は中止されたし」

と懇諭し更に重用する事を暗示し以て張作霖に南征の意を断念せしめた。之れとても一種の駆引で張作霖の策略であつた。唯だ革命黨に對する彈壓は依然として猛烈を極め忠を清廷に盡したのであつた。

(二) 滿洲武人の勤王決議

燎原の火、一度發して四百餘州の山河殆んど革命の旗風に靡き滿洲朝廷の命脈旦夕に迫る。之より

前光緒戊申の政變に失脚して河南の草廬に起臥してゐた袁世凱は革命亂の勃發に依り滿廷の懇囁を一身に負ひ革命軍討伐の大命を拜して復活した、が袁世凱の心中にも秋毫も清廷に盡すの誠意はなかつた、却つて革命軍を利用し清廷を推倒し自ら之れに代らむとの野心を抱いてゐた。然も東三省の軍人は袁世凱の野望の那邊に存するやを知らず清朝のために第二の曾國藩たるべしと信じ深く囑望してゐた。張作霖は亦趙爾巽の命を受け馮德麟、聶汝清、馬龍潭、吳俊陞、劉恩鴻、耿玉田等三十三名の武將と共に勤王の決議を致し連署して袁世凱に對して電申し東三省に勤王の氣勢をあげた、文に曰く、

革命軍は民亂を醸成し君主を無視して私利、私憤を敢てす。其の行爲は殆んど賊徒と異なる所なし。朝廷唯だ大局の和平に汲々として講和の議あるも原より斯る誠意なき平和は講するの要なく我が取るべき道は武斷あるのみ。東省は内地各省と異り軍隊の分置既に成り且つ勤王心厚し、勤旅數萬一旦命あらば道を山東に取りて南下し誓つて革命軍を剿滅し以て微忠を朝廷に盡すべし云々盛んに勤王論を高唱し强硬なる意見を表示して民主共和に反対し君主立憲の政體を主張した。東三省の軍隊より十分の六を以て勤王軍を組織すべしとの議も起つた。が之れは實行されずに終つた。

(三) 袁世凱と張作霖

袁世凱、廟堂に上り全權を把握するや奸譎なる彼は清廷と革命軍との間に立ち巧みに兩者を操縦し漁夫の利を占めんとし攝政醇親王を退位せしめ北方の政權を掌握した。南方革命派と和を講ずるの一方清廷に對し大勢の不可抗を説き皇帝の退位を慇懃するや滿廷の宗社黨は君主立憲を固持し極度の硬論を主張して止まなかつた。

當時、滿洲に於ては東三省總督趙爾巽は多年清廷の眷顧を受くる事最も深く有力な勤王派であつた。張作霖も夙に南征論の急先鋒として宗社黨一派に加擔せるために清帝の退位に大反対であつた。袁世凱の奸黠を惡み其の野望のある所を察して憤怒し共和政治の出現を承認せず正に清朝の正朔を奉じて袁世凱を討伐すべく畫策した。處が老猾な袁世凱は張作霖を懷柔するの必要を感じ密書を送つて天下の大勢、遂に抗し難き所以を説いて革命軍の要求を容れ清廷は其の統治權を捨てゝ宣統帝退位し民主共和の政體に變改するの外なきを論破すると共に。

共和政府成立の曉は卿を東三省防務督辦に任命すべしと稱し誘ふに好餌を以て其の賛成を求めた。

大局を見るに明なる張作霖は垂死の清朝人心已に去れる今日到底存續し難いことを看取した。

己榮達のために袁世凱と結ぶことの有利なるに想及し袁の提議に同意を表した。前に熱烈なる帝政主義者として勤王論を主張し革命派を彈壓するに全力を傾注せる態度を捨つる事恰かも掌を覆すが如くであつた。其の約變の速かなる何人も意外とした。然し張作霖としては當然の事であつた。自己の大をなすために臨機應變の主義は支那官場の風習である以上張作霖のみを責むる事は出來ぬ。そして張作霖は民主共和を謳歌し馮德麟、聶汝清等を説服して總督趙爾巽に對しても亦反対に壓迫の態度を執りて孤忠奈何とも爲すを得ざらしめ大勢の推移に任するの外なしと斷念せしめた、そして趙爾巽をして袁世凱に對し「東省の事憂ふるに足らず」との電報を送らしめた。斯くて清朝最後の斷末期に際しても東三省は勤王の義兵をあげず傍観默殺するの態度を執るに至つた。

(四) 清朝と張作霖

宣統の四年二月十二日、宣統幼帝の悲愴なる退位上諭は下つた。太祖努爾哈齊兵を長白山麓に起し滿洲朝廷創業の基を創剏して以來春秋二百六十有餘年、宣統帝に至る十世、愛親覺羅の社稷脆くも衰亡の悲運に遭遇したのである。袁世凱清廷の勢權を繼承し革命軍と和を講じ南北の統一成り推さ

れて臨時大總統に任じ唐紹儀を首相とする南北の聯立内閣を組織し中華民國の創建を中外に宣言した。前山東巡撫の段芝貴は袁世凱の命を銜み來りて張作霖等に上諭の旨を宣布した。張作霖は又他の武官等と共に電を袁世凱に送り革命軍の勝利を祝賀した、次で資政院に電を致して曰く
國體已に定り臨時共和政府樹立さる、大總統は宜しく袁世凱を推選するを以つて至當なりと思惟す。

と陳情し袁世凱に媚び自己の地位擁護と地盤の扶植に之れ努めた。

昨は清朝を奉じ今は共和民主を謳歌する張作霖の態度は一面より見れば約變常なく無主義無節操漢であつた。が又時の權勢家に阿附迎合する事は自己の地位を擁護する上からは誠に已むを得ぬ事である。所謂官界游泳に巧みなる方法にして忠臣、逆臣とか云ふ嚴重に批判すべきでない。張作霖も亦此の手段に依つて自己の地位を保全するに努めたのであると見るが妥當であらう。

第四節 張作霖の勢力扶植

(一) 奉省の二大頭目

世は革命黨の天下となつた、大清帝國は中華民國と改り君主專制の政體は民主共和の政體となつた。宣統四年は民國元年と改り清朝時代の制度文物は悉く廢止改革された。從來地方の軍民長官であつた總督、巡撫は都督、民政長と改稱された。從つて東三省總督の趙爾巽は奉天都督に任せられた。吉林巡撫の陳昭常は吉林都督、黑龍江巡撫の宋少濂は黑龍江都督と改任された。それに實質は別として表面は民主共和となつた喜悅に新進の革命派は中央に地方に朝に立つて建國の新政を施くの意氣を示した。奉天官場も又、革命派全盛の秋となつた。

然し上に都督趙爾巽あり、下には張作霖、馮德麟の武將があつて嚴重監視してゐたので充分の活躍は出來なかつた。それでも黃龍旗の代りに五色の民國旗が翻り五族共和の新政を謳歌するの聲は全城に満ち民國氣分は横溢してゐた。清朝時代の老官僚が漸次斥けられ新進氣鋭の革命派青年が親しく省政の衝に當り革命派としての黃金時代を現出した。

陸軍の舊式軍隊も又、從來の巡防隊組織を廢し範を日本陸軍の制度に則りて師、旅制を採用し武官の官稱も日本武官の制に模し全部改正した。それで張作霖の率ゐてゐた奉天前路及び中路の巡防隊は陸軍第二十七師と改編され、馮德麟麾下の奉天左路巡防隊は陸軍第二十八師と改編されて共に

次の如く任命された。

任陸軍中將
補陸軍第二十七師長
馮。德。麟。
任陸軍中將

補陸軍第二十八師長

張。作。霖。

之れ民國元年九月十九日である。當年綠林の頭目は遂に一躍して陸軍中將に任命されたのである。之れに依り張作霖麾下の湯玉麟、張景惠、張作相等始め遼西の曠野に死生の間に馳驅した諸豪も又夫々任官し旅長、團長、營長の椅子を得た。馮德麟も配下の汲金純、張海鵬等も亦旅長に任命した。張作霖、馮德麟の兩者が俱に綠林出身の二大頭目として奉天省の重鎮となつた。

張 作 霖 の 實 兄

張作霖に取りて唯だ一人の實兄であつた張作福は第一革命の前後鐵安縣（後に黑山縣と改む）二道溝にあつて

團練長の職を執つてゐた。民國元年一月初旬、馬賊に襲撃されて不幸殺害された。張作霖は急報に依り憤激措かず、直に總督趙爾巽に請ひ手兵を提げ討伐に向つて亡兄の仇を報じた。總督趙爾巽は張作霖が年來團練長として職に就れたるに依り一千元を弔慰金として贈つた。

(二) 張錫鑾の再來

奉天都督趙爾巽は齡已に古稀に近く殊に民國となつて以來、辭意を抱いてゐた。元年十一月大勢既に定れるを見て遂に官を退いて青島に隠栖するに至つた。其後任として直隸都督の張錫鑾が東三省西遼宣撫使の名を以て來り奉天都督に就任した。張錫鑾が奉天將軍として再來したのは勢力伸張に汲々たる張作霖としては誠に願ふてもなき幸運であつた。好々爺の張錫鑾は前から張作霖薬籠中のものであつた。その再來は自由に其の羽翼を伸すに便利であつた。本來自己の大を爲すために凡有機會を利用するに最も巧妙である張作霖は支那人の中でも有數である。前には趙爾巽をマンマと籠絡し省城に移駐以來趙爾巽の信望を一身に集め地盤扶植に成功した例がある。張錫鑾の來任は張作霖をして志を得させる第一歩であつた。張作霖が雀躍して喜んだのは無理もない。之れから愈々張作霖活躍の舞臺は展開されて來た。當時奉省に於ける革命黨の一派は漸次勢力を得て頗る全盛を極めて

ゐた、がそれも束の間の夢にして一年と續かなかつた。一年三月、上海に於ける宋教仁の暗殺を導火線に時局は袁世凱の武斷政治に依つて逆轉した。四月正式國會は南北反目の間に北京に開かれたるも面白からず七月李烈鈞一派の第二革命亂の平定と共に袁世凱は愈々武斷政治の蹟を堅めて革命黨壓迫に着手した。

同年十月袁世凱正式大總統に當選するや遂にクーデターを斷行し中央、地方の革命派に對し猛烈なる壓迫を加へた。

奉天官場も亦、從つて其の影響を蒙つた。都督張錫鑾は袁世凱の旨を受け張作霖、馮德麟に命令し武力を用ひて革命派に彈壓を加へた。奉省官場は再び武斷派の天下と化し革命派の運命は槿花一朝の榮に過ぎなかつた。眼まぐるしきまでに變化する時局に處して誤らず常に自己の勢力擴張に汲々たりし張作霖は革命派に代つて省城に一大勢力を占めた。

民國三年六月、官制の再改正となり各省都督は將軍と改つたので奉天の張錫鑾は奉天將軍督理奉天軍務に就いた。又奉省の民政は革命以來奉天都督の兼任する所であつたのを軍民分治の目的より二年一月民政長の官を設け一時張錫鑾兼任し、後許世英就任せるも在任半歳にして去つた、後再び張

錫鑾兼任し三年五月、再び巡按使と改稱され同九月張元奇専任巡按使として就任した。外交部特派の奉天交渉使は張作霖と密接の關係ある于沖漢が元年八月より三年七月まで在任した。

(三) 省城の實權掌握

張作霖の時代は來た。其の平素懷抱してゐた「奉天人の奉天」主義は實際に行はるゝ時期が近づいて來た。革命亂に乘じ省城に移駐以來地盤は漸次に開拓された。自己の勢力を鞏固にする目的上他省出身の武人及び其の軍隊を省城より驅逐する事には最も腐心してゐた。それも省城移駐以來漸々希望通りになつて三年夏に及んで省城の兵權略ぼ張作霖の手中に落ちた。元年六月聶汝清麾下の第二混成協三、四兩標の兵は當時北門外にあつた交通銀行を中心に附近一帶に掠奪放火を行へる兵亂と同年九月吳慶桐所部の先鋒隊の兵亂は張作霖が乗すべき機會であつた。そこで張作霖は二回とも直に叛兵を鎮壓逮捕し元兇を處罰し其他を解散して勢威を張つた。

第二十師長の潘矩榦は省城より新民屯に移駐を命ぜられた。潘師長が經遠都統署理として西に去るや時の陸軍總長段祺瑞の妹婿である吳光新が二十師長となつた。先鋒隊統領の吳慶桐は濟南の南陽鎮守使に轉任し、五祥楨は又、湖南の長岳鎮守使に任命され兵を率ゐて南下した。聶汝清、王汝賢

等又前後して奉省を去り省城の兵權は完全に張作霖のものとなつた。三年夏、東邊、洮遼兩鎮守使官制發表されて左の如く任命された。

奉天右路巡防統領 馬 龍 潭
任 東 邊 鎮 守 使

奉天後路巡防統領 吳 俊

任 洮 遼 鎮 守 使 陞

奉天の兵權は遂に張作霖に歸した。が張作霖には馮德麟、吳俊陞等の將軍連に比し特に優越なるに鑑み二十七師の武力を背景として専ら勢力の充實に腐心した。士官學校を設立して青年將校を養成せるも其の一例である。省城の政治、經濟其他各界に勢力を擴張し省城の實權を掌握せんと欲して財界に手を植に之れ努めてゐた。

張作霖は奉天省に於ける自己の地位が馮德麟、吳俊陞等の將軍連に比し特に優越なるに鑑み二十七師の武力を背景として専ら勢力の充實に腐心した。士官學校を設立して青年將校を養成せるも其の一例である。省城の政治、經濟其他各界に勢力を擴張し省城の實權を掌握せんと欲して財界に手を

染めた。將來の大飛躍は一に財力の有無に依りて決するに想及し省城の經濟的實權を握らんとした。

張作霖は武人としてのみならず財政的にも卓越せる手腕を持つてゐた。八角臺時代より蓄財に意を注ぎ巨萬の富を得た。法庫門、鄭家屯等の市場にて商取引の紛争を調停して不當の利を貪りてゐた。(例へば代金取立の手數料を一圓に十錢とせる如き)又鎮安縣二道溝、老道寧堡、高山子等の數ヶ所に土地を購ひ姜家屯に質屋、油房を開き新民屯に油房三裕公を經營した。然も巨富を得た大部分は遼西馬賊の大頭目として蓄財百萬と稱された杜立山暗殺に依つて得たものであるとも傳へらる。張作霖が省城に於ては先づ軍糧の需給を眼目とし三金糧穀なる穀物問屋を經營し秋種時期に所要の穀物を收納し萬一に備へた。それに三金當なる質店を開き別に三金銀號なる錢莊(銀行)を設けて假令支配的勢力を根させ得ざるまでも省城の財界に一勢力を占めたのは事實である。之れ即ち張作霖が將來の大飛躍に備ふる遠謀深慮であつた。

第五節 日支交渉と張作霖

(一) 日支交渉と奉省

從來、南滿洲及び東蒙古に於ける日本の優先権に關しては單に勢力範圍なる漠然とした語を以て稱せられ、日支兩國間、之れに就て何等國際的條約の成文なく實際上の明文を缺いてゐた。日本政府は逐年滿蒙に於ける邦人の發展に鑑み支那政府と正式協商し勢力範圍の語を明確にするの必要を認め大正四年一月、北京駐劄の公使日置益に訓令し山東、福建等の諸問題を加へた所謂二十一ヶ條の要求を提出して支那政府の承認を求めた。

支那政府は該條件を以て苛酷であると主張し日本の要求に應するに對して敢然拒絶するの勇斷を缺く爲に暗に國論を鼎沸させて名を輿論の反対に藉り交渉を拒絶せんとの策略を取つた。各省に通電して交渉の經過を報じ其の意見を徵求したので各省人民は之れこそ亡國滅種の大禍なりと騒ぎ出し極力反対を表示し排日の氣勢を擧げた、日本に對する對抗手段として日貨排斥の暴舉を敢てし速日政府に電致して日支交渉の拒絶を迫つた。

同交渉と最も密接の關係ある奉天省は中外の視聽を集中した。張錫礡將軍は常に東亞の大局に着目し衷心より日支親善論者である處から滿洲に於ける日本の立場を充分諒解してゐたので敢て過激な反對論を表示する事なく無謀な排日論を制壓するの態度に出で圓滿なる解決を希望してゐた。

中央政府から同交渉に對する奉天省の意見を徵詢して來たので張錫鑾は奉省軍官の重要人物を省城に召集し二月末日より約二十日間に亘り連日軍事會議を開き政府の諮詢に就て協議した。そして張錫鑾始め各重要軍官は日支兩國の關係及び前後の事情を參照し圓滿解決を希望する穩健論者多數を占め此旨復答する事を議決した。

(二) 張作霖の主戰論

二十七師長の張作霖は獨り衆論を排し强硬なる拒絶意見を表示し軍官會議の決議にも亦加盟を避けた。排日主戰論を固執し暗に省城官民を煽動し頻りに反対の氣勢を擧げ大總統袁世凱に宛て日支交渉は毫も譲歩すべからず交渉若し破裂せば願くば全師を率ゐて決戦し日本兵を驅逐せん、然らずんば一死以て國に殉ぜん

と電申し强硬なる主戰論を主張し悲憤慷慨、排日論を轟吹唱導しなのである。之れ又張作霖の策略で内心では非主戰論者であるが自己の地盤の擁護上只管に袁世凱の歎心を得るに努めた。張作霖其人が日本に對する惡感を抱いてゐた結果ではなく自己のために巧みに利用したに過ぎない。

日支交渉は一時、日支國交の重大危機を醸せるも支那側の譲歩に依り圓滿解決し張作霖は大局維

持の功勞特に顯著であつたとの名目の下に七月袁總統より勳四位に叙せられた、張作霖袁世凱の覺え愈々芽出度し。

第四章 檟頭せる張作霖

第一節 奉天將軍の更迭

(一) 滿蒙統一の理想

機略縱横を以て鳴る張作霖は超群の英材である。天性の野心兒である。其の胸裡には夙に遠大の理想を抱懷してゐた。平素「余は一介の武弁、政治を知らず」と空嘯いて、表面政治には全然無關心の態を裝つてゐた。が之れは遠謀深慮な張作霖の假面であつた。自分の勢力が未だ充實しない前に輕々に鋒鏑を現はす事の危険を感じ自分の眞意を他人に見透されまいとする用心であつた。

天性、政治家としての資質に富んだ張作霖は無論、永久に一師長を以て満足する平凡な男ではなかつた。張作霖が懷抱してゐた遠大の理想とは何か。滿蒙の統一即ち此の五字であつた。「奉天人の

奉天」を前提として「滿洲人の滿洲統治」を實現する事にあつた。滿洲蒙古を統一して渾然一丸と爲し之れが統治の全權を自己の掌中に把握する事が當時一師長であつた張作霖の全理想であると共に又全生命であつた。が張作霖は出る釘は打れる譯を飲み込んでゐる、そのやうな大野心を抱いてゐる事は色にも出さず焦らず騒がず、只管將來の活躍に備ふるため密かに勢力の充實に努めてゐた。

當時、奉省は老將軍張錫鑾の下に第二十七師長たる張作霖の外に馮德麟、吳俊陞、馬龍潭の三中將が遼西、遼北、東邊の三方に分駐して全省の治安を分擔維持してゐた、これが即ち當時奉省の四大重鎮である。

馮德麟は第二十八師長として張作霖と五角の勢力を擁し北鎮縣(廣寧)に駐屯して遼西鎮撫の任に當り。吳俊陞は洮遼鎮守使として後路巡防隊統領を兼ね洮南にあつて東蒙古の探題役を司り、馬龍潭は東邊鎮守使兼右路巡防隊統領として鳳凰城に駐防し東邊の重鎮であつた。張作霖獨り省城に駐屯して省城治安の維持に任じてゐた。

義中の鎌は何時か其の鋭鋒を現はさずにはゐない。隱忍多年、自己勢力の充實に努めて愈々自信を得た張作霖は此處に始めて平素の覆面を脱いだ奉天省兵馬の實權を掌握せんと決心し指を奉天將

軍の乗取運動に染むるに至つたのである。之れ抑も張作霖が實際に其の鋒銳を現はし奉省政界の立役者となつた濫觴である。

(二) 張作霖の將軍運動

元來、勢權に恬淡な老將軍張錫鑾は齡已に古稀を越ゆる一、矍鑠壯者を凌ぐの概あるも寄る年波は奉天將軍としての激務を見るに堪へず久しく官を辭して退隱せんとする志があつた、それに又、張作霖の擡頭は益々其の辭意を堅めさせたのである。

武力を背景とする張作霖が省城に於ける潜勢力は實際に於て將軍たる張錫鑾を凌駕してゐた。張錫鑾は奉天將軍の名義あるも有力なる武力の後援を有せざる結果之を制覇する事も出來ず。加之に事毎に張作霖の壓迫と掣肘に手も足も出す殆んど其の傀儡たるの奇觀を呈した。師匠が手を取つて教へた弟子に聽て土俵の砂を呑めさせらるゝ悲哀と同様に百戦の勇將張錫鑾も當年僅かに新民府の一營長に過ぎなかつた張作霖を時の東三省總督徐世昌に推舉し陰に陽に庇護推挽最も努めた關係があつても結局優勝劣敗は天理であつた。何時かは張作霖に壓倒さるゝ時機が来るのを察して張錫鑾も遂に辭職の臍を堅めたのであつた。

そこで張錫鑾は「奉省の政務多事にして老病重任に勝へず」と稱し北京政府に對し再々辭表を提出した。北京政府は「東三省の事、唯だ卿に倚る」と慰諭して容易に辭職聽許の模様もなく、將軍更迭問題は奉省官場の懸案となつた。張錫鑾の辭職が單に時日の問題にして早晚、實現するは必然であつた、之を見た張作霖は密かに機運の到来會心の笑を洩した。頻りに躍動する胸を抑へて表面色にも出さず、平素の理想を實現し自ら奉天將軍たるには絶好の機會と感じた。

「乃公、自ら張錫鑾に代りて奉天將軍たらん」と決意したのは事實である。事に托して前後二回、北京に赴き政府筋の有力者に向つて猛烈なる將軍繼任の運動を試みる處があつた。されど袁世凱の中央政府は奉天省に於ける張作霖の資望才幹が優に將軍として充分なる事を認識してゐたが皇帝熱に浮かされてゐた袁世凱の眼には宗社黨色彩の濃厚な張作霖は危險人物と映じた。張作霖を奉天將軍の重職に据ゆる事は自己政策の破綻と見た、自ら皇帝たらん日猛然叛旗を翻すことを恐れて張作霖の將軍たる事に承知を與へなかつた。そして張錫鑾の後任には自己腹心の股肱である段芝貴を任命するに決し、張作霖に對しては「他日機會ある秋に抜擢する」の意を仄かし極力其の不平を慰諭したのであつた。

(三) 段 芝 貴 の 新 任

越えて八月二十二日、久しい懸案として未解決のまゝであつた。奉天將軍の更迭は愈々大總統袁世凱の豫定通り次の如く發表された。

彰武上將軍督理
任鎮安上將軍督理奉天軍務兼節制吉林、黑龍江軍務
鎮安上將軍督理
奉天軍務 段 芝 貴
任督理湖北軍務

右のやうに張錫鑾、段芝貴を奉天湖北と相互に更任したのである、そして新將軍段芝貴の實權は張錫鑾に越え往年の東三省總督と同様のものであつた。新將軍段芝貴字は香岩安徽省合肥の產、人も知る。如く故趙秉鈞、段祺瑞、王士珍等と共に袁門四天王の一人である。往年袁世凱が外部尙書時代袁の命に依り天津の妓女楊翠喜を前清宗室の筆頭として袁世凱の相棒である權勢家慶親王の長子載振貝

子

に献し黒龍江巡撫の采職を贏ち得たが事新聞紙上に暴露され官紀肅振に問はれ御史の彈劾に遭ひ赴任する事なくして免職された事あり袁世凱とは切つても切れぬ密接な關係がある。

袁世凱が張作霖の希望を婉拒し段芝貴を湖北より轉任させた重因は云ふまでもなく實に帝政復活問題に大關係があつた。

之より前、袁世凱は帝政復活を企畫し、自ら九五の天位を践まんとする野望を起し大皇帝を以て任じてゐた。自己の腹心である處の參政院參政の楊度、孫毓筠、嚴復等に密命を下し帝政復活の前提として籌安會を組織させたのである。そして腹心をして着々帝政復活の準備を進めしめた。

由來、東三省は清朝發祥の故地である關係上宗社黨の策源地と目され宣統帝の復活ならば兎に角袁世凱自ら帝位を践む事には果して賛成するか否や大なる疑問であつた。

此處に鑑み袁世凱は帝政復活に際し東三省に於ける反對派の勃興を憂慮して張錫礪の辭職を機會に無二の腹心段芝貴を任命して反對派の鎮壓の一方帝政賛成を運動せしむるにあつた。それと又奉奉省に勢望隆々たる張作霖の勢力を削ぐために如上の將軍更迭が發表されたのである。

斯様に重大の使命を帯びた段芝貴將軍は九月四日、手兵六百の衛隊を率ゐ意氣揚々、省城に入り張

錫礪將軍と會見して奉天將軍の印綬を授受した。次で奉天巡按使として約一年在任した張元奇も亦内務總長朱啓金の下に次長に復職して北京に去り段芝貴奉天巡按使をも兼攝し久しく縣案であつた奉天將軍の更任も解決した、が解決せぬのは張作霖の胸である、折角の希望時機未だ到來せずして實現するに至らず。不平不滿を抑へて段芝貴の下に依然第二十七師長として再び隱忍自重雌伏するの外なきに至つた。

(四) 寺内伯と張作霖

大正四年十月、朝鮮京城に於ては朝鮮併合の始政五週年紀念の物産共進會が開催された。寺内朝鮮總督は特に隣邦の誼を以て北京政府及び東三省の各大官に招待狀を送つて親しく參觀を求めた。時に鎮安上將軍の段芝貴は蒞任、日猶ほ淺く東省の政務多端なるに加へ親分袁世凱の爲めに帝政勸進の大役を引受けてゐる關係から招待に應じて赴鮮する事が出來なかつた。そこで段芝貴は張作霖に自己の代表として赴鮮し親しく日本側と交驩せん事を倚頼した。

張作霖は智謀の士である。將來奉天省に於て事を爲すには日本の庇護と援助を受けなければ何事も出來ない理由を熟知してゐた。機會さへ到來すれば段芝貴を放逐して自ら奉天將軍たらんと期し

てゐる處の腹に一物も二物もある張作霖の事だ。朝鮮總督の寺内伯は日本軍閥の頭領山縣公の寵兒であるからは之と會見して置く事は將來自己のために大いに利便あるを感じ、段芝貴の依頼に應じ京城行を承諾した。張作霖は鎮安上將軍代理、外交部特派奉天交渉員の馬廷亮(現京城總領事)は奉天巡按使代理の名義にて從者共一行十二名、北京政府代表の農商部次長金邦平、吉林鎮安左將軍代表の張恕(吉林鎮安左將軍參謀長)等の一行と俱に十月十四日奉天を出發し安奉線にて京城に赴いた。之れ張作霖が足を國外に出した始めである。

張作霖は十七日、共進會の褒賞授與式に參列し、又、寺内總督とも會見したのである。寺内總督との會見に於て張作霖は日支親善の大義を説き殊に滿洲と日本の關係に就て論じ自己の親日意見を吐露し寺内總督と肝膽相照らす所があつた。寺内總督の優遇には非常に感謝し二十一日朝歸奉した。

其の京城行は表面共進會の參觀であるも尋常普通の觀光と異り張作霖としては意味深き旅行であつた。歸來寺内總督の厚遇に感謝の辭を洩らしてゐた。日本に對する張作霖の親善意見は愈々濃厚を加へたのである。

第二節 袁世凱の帝制問題

(一) 段芝貴の帝制運動

一代の梟雄袁世凱が飽く事を知らぬ野心は單に大總統として新支那の建設者、統治者たるを以て満足せず自ら大皇帝となつて支那四億の民衆に南面君臨せむとの野心を起したのである。此の不遜の野望を成就するために腹心の股肱等に密旨を受け國體變更問題を論議せしめ極力帝政復活熱を鼓吹唱導せしめたのである。奉天將軍段芝貴も亦其の一人であつた。袁世凱の密旨を衝み東三省探題として奉天に來任したのは隠れない事實であつた。其の背後に勢威赫々たる袁世凱の威光を負ひ旭日昇天の慨があつた。蒞任以來、張作霖、馮德麟、吳俊陞、馬龍潭等の奉省の武將連を籠絡懐柔して帝政復活の具に利用せんとした。機運の熟するや東三省に於ける重なる文武官をして連署せしめ參政院に對して長文の國體變更請願書を提出した。之れ即ち段芝貴努力の結果であつた。次で奉省軍界は又第二十八師長馮德麟を代表に選任して上京せしめ袁世凱に對して皇帝即位の勸進書を捧呈せしめた。斯くて前清發祥の故地奉天も段芝貴の威力に壓せられ其の命のまゝに勢に從ふ外なく袁

世凱の皇帝即位を勧進したのである。之れ當時帝制復活の第一聲であつた。

(二) 帝制と張作霖

帝制問題に對する張作霖の態度は最初一種の謎であつた。元來宗社黨を以て目せられてゐる關係から宣統帝の復辟には一言なく賛成するは必然であるが袁世凱自ら帝位に登る事には絶対に反対するものと信ぜられた。が聰明な張作霖は無比の野心家である。自分の地位擁護と勢力擴張のために是が非でも今の場合清朝の復辟よりも先づ袁世凱の勢望に迎合して置く事の得策なのを知つてゐた、それに帝政が一時實現しても永久に存續し難いのを洞察して御無理御尤もの態度に出でた。勢の趨く所之れに逆行するは折角築き上げて來た自己の地位や地盤を失ふ虞あるので餘儀なく帝政の濁流に棹して袁世凱の歓心を買ふべく決心した、そして帝制賛成を表明して張作霖の腹中を知らぬ者に豫想外の感を抱かせた。奉省武官の帝政勧進運動には率先して加盟すると共に一方電報を袁世凱に送り其の意に迎合する事に努めた。其の電文に曰く、

立國の途は長治久安にあり此の際國體決定の必要を認む。然も宣統皇帝の復辟説を唱ふるが如き

は人心を弱くする所以にして余は之に與せず。我が大總統、人望に從ひ一身天を負ふに非らずんば危亡を救ふ事能はず。若し東三省内之に異議を唱ふる者あらんか死を以て之れに充たらん云々と述べ熱心に帝制論を主張して已まなかつた。そして袁世凱に大皇帝に即位せん事を要請し將軍段芝貴を輔佐して民論を壓迫し實に段芝貴に優るとも劣らぬ忠義振りを發揮したのである。殊に「萬一奉天省より反對者を出す事あらは恐懼に堪へず」と云つて部下の偵探を八方に密派して嚴重反對派の行動を偵査せしめ「帝制成らすんば死すとも再生を欲せず」などと極言し一死以て袁世凱に殉するを否まさるの態度を示した。之れ無論張作霖の眞意ではなかつた。唯だ自己の地位擁護の上から打算した一種の策略であつた。誠心誠意袁世凱のために殉する終始一貫の精神は張作霖には断じてなかつた。勢に従ふは何人でも已むを得ない。權勢に阿附して媚を呈し歓心を買ひ商婦の態をなすは大丈夫の正に唾棄すべき行爲としても一面事情としては誠に同情すべきものである。

(三) 帝制の論功行賞

皇帝病に浮かされた袁世凱が日本始め列國が支那國內の形勢に鑑み好意的に帝政實施を延期せん事を勧告せるにも拘はらず之を無視して飽くまでも帝制を斷行するために盲進した。國體變更と皇

帝産出の手續のため國民代表大會の組織を公布し國民代表の選舉に際し極力反對派を彈壓し其の當選を阻止し御用代表を選出せしめた。十二月十一日參政院に於ける國民代表大會は滿場一致を以て君主立憲を賛成し袁世凱推戴に決し翌十二日帝制復活を中外に聲明し袁世凱自ら洪憲皇帝として豫定の如く出現したのであつた。次で帝制成就の論功行賞は十二月廿三日を以て發表せられた。奉天省の大官連も亦選に漏れず段芝貴を筆頭に次の如く授爵されたのである。

一。 等。 公。 爵。	奉 天 將 軍	段 芝 貴
二。 等。 子。 爵。	第二十七師長	張 作 霖
二。 等。 男。 爵。	第二十八師長	馮 德 麟
三。 等。 男。 爵。	洮 遼 鎮 守 使	吳 俊 陞
三。 等。 男。 爵。	東 邊 鎮 守 使	馬 龍 潭

昨の民國野人は一躍して洪憲朝の貴族に列せられ一同袁世凱皇帝に對し北面臣從を誓つたのである。

第三節 張作霖の宿願成就

(一) 袁の凋落と張作霖

袁世凱が徒らに功名心に奔り無謀にも洪憲皇帝と僭稱し支那四億の民衆に君臨する事を中外に聲明するや案の如く外列強の帝制反対の色鮮明となつた。内は又反袁熱隨處に昂じ來り討袁の大旆は先づ雲南に翻つた。雲南將軍唐繼堯、護國軍を組織し蔡鍔、李烈鈞と共に獨立を宣言し袁世凱の退位、帝制取消と元兇段芝貴外十二名の處罰を要求した。四川、貴州、廣東、廣西亦相次で獨立を宣言し北京政府に叛いたのである。

帝制反対、退位要求の電報は日夜北京に飛來して絶ゆる間もなく、四圍の形勢は刻々に變化し事毎に袁世凱に不利となつた。袁世凱の勢望は日に凋落し流石の袁世凱も意氣沮喪し帝政延期令に次で五年三月廿二日遂に名残惜しくも帝政取消を宣布するの餘儀なきに至り、袁世凱の全盛は槿花一朝のそれの如く退位は時日の問題となつたのである。

袁世凱の勢望凋落に就て奉天官場は形勢亦變化し段芝貴對張作霖の暗鬭は漸く猛烈となつた。過

ぐる二月張作霖は北京に赴き滯京月餘。當時奉省の重鎮帝政勸進の功臣として袁世凱より受けた處の優遇に對し歸來感激の口吻を漏らし「袁公の爲めには一死猶ほ辭せず」と稱し親袁的色彩を濃厚にした。それが形勢の推移に伴ひ袁世凱は四面楚歌の窮地に陥り孤城落日の悲境となれるを見て俄然前の親袁的態度を捨てた。

遠謀深慮、機に臨み變に應じて事に處し以て自己の勢力を擴張するに誤りなき聰明な張作霖は智者である。袁世凱一朝の厚遇に感激して凋落の帝制派と運命を與にし大勢に逆行してまで最後の檀の浦迄没落の道伴をする男ではなかつた。又最初から袁世凱に腹の底から服従してゐたのでなくお互に利用し合つてゐたに過ぎない以上當然である。で袁派の凋落に伴ひ洞ヶ峠の形勢觀望の態度に出で不離不即の間に中立の態度を持續し暗に段芝貴を放逐して自ら取つて代るべく秘密裡に陰謀を企てたのである。

(二) 段と張の暗闘

袁世凱の影が次第に薄くなるに伴れ袁派の一味は最も窮境に陥つて來た。段芝貴も其の一人であつた。東三省探題として赫々の威權東邊に併ぶ者なく帝制勸進の首謀者として一等公爵に封ぜられ

て得意であつたのも夢の間、北京政府の勢威失墜に伴ひ東三省に於ける其の勢望も當然寝へて來た。威望昔日の如く盛ならず凋落し奉省の實權は殆んど段芝貴の手を離れて張作霖の掌中に收められてゐた。唯だ問題は段芝貴に對する張作霖の態度が最も注目され一般より興味を以て迎へられ段芝貴は頗る苦しき立場があつた。

由來「兩雄併び立たず」の諺あるが如く段芝貴は蒼位以來張作霖との間に表面親善關係の持續を裝つて外觀を糊塗してゐた。が實際は正反対であつた。段芝貴と張作霖の間は犬猿畜ならず暗に互ひに相排擠してゐた。段芝貴は蒼位當時既に奉省に於ける張作霖の勢力を根底より覆へさんとの使命がある。張作霖は亦段芝貴を放逐して自ら奉天將軍たらんとするの野心がある。それで兩者は當初から敵同志の寄合で圓滿に融和することは絶對に不可能であつた。それに又省城に於ける兩者の勢力は張作霖遙かに段芝貴を凌駕してゐた。段芝貴は蒼位當時湖北より引率して來た六百餘の衛隊を有せるのみで第二十七師長として精悍無比の馬賊兵を擁し奉天の重鎮である張作霖の敵ではなかつた。

北京政府の威望強大な時代には、それを背景として段芝貴の威力は三省に及び兵馬の全權を總攬

し一言一句大なる反響を生じたのが北京政府の威信地に墜ちた今日段芝貴は有名無實の奉天將軍であつた、張作霖は事實上段芝貴の死命を制し所謂生殺與奪の權を掌握してゐた。

(三) 段芝貴の窮迫

元來、段芝貴が奉天に來たのは一面張作霖の勢力を殺ぎ其の跋扈を制壓する任務を帶びてゐたのである。それが奉省に於ける張作霖の威望隆々として振ひ動もすれば將軍たる自己の勢望を凌駕せむとするを忌んだ。到底張作霖を駕御し難きを感じ、幾度か北京政府に向て張作霖の轉任を要請した。果ては張作霖の晉京と同時に張作霖は熱河都統、或は又綏遠都統に榮轉すべしとの説を専ら省城に流布せしめ張作霖の地盤に動搖を與へんと試みた。が張作霖が多年省城に扶植した勢力は段芝貴が將軍の威力を以てしても一朝一夕に覆滅するやうな薄弱なものではなかつた。

結局段芝貴の排張運動は徒勞に終り自己の面目を損するに過ぎず、張作霖排斥を斷念するの外なかつた。

張作霖は夙に段芝貴の排斥運動を感知せるも知らぬ顔をして隱忍自重其の銳鋒を收め表面平靜の態度を持して機運の到來を窺つてゐた。一方段芝貴は亦張作霖が排斥運動を感知して張作霖一流の

綠林的蠻勇を振ひ自己が勢威失墜の弱點に亂じて一時的の利便から遙かに南方革命黨と相呼應し奉天省獨立の自由行動に出で復讐的に自己を窮地に陥るゝにあらざるやと憂惧した。奉省に於ては到底張作霖を除外しては如何ともなす事の出來ないのを覺り帝政取消の後は張作霖に對する段芝貴の態度は俄然一變し帝制取消前に比し殆んど別人の觀を呈したのである。其の態度懇摯鄭重を極め奉省の事、大小となく張作霖に謀りて決する等極力其の歎心を買ふに努め主客全く顛倒の奇觀を示すに至つた。斯くて張作霖の勢力は段芝貴の失勢に反比例して益々擴大した。曾つては威望天下に遍かりし袁世凱の北京政府を後楯に虎威を藉りて東三省に傲つた香岩將軍段芝貴も時勢の變轉には如何ともなすを得ず、頼み難き張作霖を頼み僅かに其の地位を擁するの外なき窮境に陥つた。

(四) 盛武將軍張作霖

時局の推移と共に全支の風雲急を告げ將に大動亂發生の兆あるに際し北京政府は自ら備ふるに急にして奉天萬一の場合、兵を派して段芝貴を救出するの餘裕なきを暴露した。張作霖亦北京政府の無爲無能なるを看取り從來鮮明を缺きし態度を一變し覆面を脱し來り自ら取つて代るべき絶好の機會とし愈々段芝貴放逐の策を進めた。

張作霖は馮德麟、吳俊陞、馬龍潭の三中將を説破し加盟せしめて段芝貴排斥の秘策を密議し最後の手段までも打合せ張作霖主となつて大手搦手の兩方面より段芝貴に對し極度の壓迫を加ふるに至つた。茲に於て段芝貴は張作霖一派の態度急變を觀、甚だしく自己身邊の危險を感じ警戒を嚴にし陰に密偵を派し張作霖一味の舉動を監視せしめて注意を怠らなかつた、それに省城の空氣は何となく不穏の狀を呈し段芝貴の生命も亦風前の燈の如くに傳へられた。張作霖一派の陰謀愈々熟して危險の切迫せるを覺えた段芝貴は慄ひ戰いた、愚圖々々すれば生命がない、張作霖等の態度事茲に出でた上は自ら張作霖等を制壓するの威望なきを以て奉天を去るの外途なきを感じたのである。

張作霖を始め奉省四武將の連衡には敵するべくもなく殊に北京政府は無力にして袖手傍観するの外なく段芝貴は遂に東三省探題の印綬を張作霖に授け、蒼位當時の威勢に似もやらず孤影蕭々として逃ぐるが如く離奉上京するに至つた。之れ五年四月十九日である。張作霖の陰謀は成功し多年翫望してゐた奉天將軍の地位を得兼ねて奉天巡按使に任じ名實俱に奉天省の主導者となつた。

北京政府も亦段芝貴の報告に據り張作霖を奉天將軍として承認するに至り奉天盛武將軍に特任した。

陸軍第二十七師長　　張　　作　　霖

任奉天盛武將軍督理奉天軍務兼奉天巡按使

之と同時に二十八師長馮德麟は綠林時代は張作霖の先輩株であつたが奉省に於ける地位上奉天軍務帮辦に任命され張作霖と雁行し奉天副將軍格となつた。

越えて七月六日、地方官制の改正に依り將軍は督軍に、巡按使は省長と改稱され張作霖は亦奉天督軍兼奉天省長に改任された。

第五章　張作霖と馮德麟

第一節　宗社黨活躍の前後

(一)　張作霖の獨舞臺

張作霖は奉天將軍となるや愈々年來の理想である奉天人の奉天主義を實行に著手した。奉省官場に歴任せる他省出身の官人を徐々に免黜排斥し、之に代ふるに奉省出身の文武官人を登用した。從

つて張作霖を中心とする所謂奉天閥は創造さるゝに至つた。第二十七師長時代より培養せる勢力と相俟つて漸次鞏固を加へ來り奉天官場は張作霖の獨天下となつた。

副將軍格の軍務帮辦馮德麟の如きは殆んど眼中になく在るも無きが如く張作霖の勢力に掣肘され單に空しく虚位を擁し何事も出來ず負に備るのみであつた。張作霖が奉天將軍としての傍若無人の振舞あるは「何冀！兩亭の若輩奴」と侮蔑せる馮德麟としては又堪へ難き所の侮辱であつた。如何に鈍感な馮德麟でも晏然虚位を擁するに忍びず憤然廣寧の本據に歸り復た出づるを肯んぜざるの態度を執つた。之れで馮德麟は失意の人となり張作霖は益々自己の勢力を扶植伸張するに汲々として寧日なきの状態であつた。

然して張作霖は省城治安の維持に腐心し努力する所あり善政を施ぐに最も努めた。當時奉省の風雲は太平無事の態を示してゐたが袁世凱の北京政府が勢力を失墜せるに乘じ之を推倒せんと畫策しある南方革命派は奉天省に著目し頻りに書を張作霖に寄せて奉天省の獨立と南方聯絡を懇懃して已まなかつた然し張作霖は之等の勸告を一笑に附して顧みず唯だ只管に奉天閥の擁護に腐心した。將軍兼巡按使として數個條の施政要綱を發表し奉天省の政治、財政、軍事其他の整理に努力し就中紊亂

せる財政の整理に最も努めたのである。

(二) 張作霖の危難

袁世凱帝政の反動として當時前清の復辟を目的とする宗社黨の一昧は討袁興清の旗を翻すべく謀策し滿洲を舞臺として一芝居打たんものと暗中飛躍に餘念がなかつた。彼等は非常手段に訴へなくては尋常一樣の方法を以てしては到底目的は達せられぬものと考へた。彼等の非常手段とは即ち要路大官の暗殺であつた。そしてイの一番に睨まれたのが張作霖であつた。奉天省の重鎮である張作霖は袁世凱の諂歌者と云ふので先づ張作霖を倒して軍門の血祭とし其の騒亂に乗じて吉林將軍孟恩遠を獨立せしめ一舉に奉天の牙城を屠り滿洲を宗社黨の天下となすの計畫であつた。孟恩遠と宗社黨との聯絡も完成し愈々張作霖暗殺の陰謀を實行するに決した。

之れを知るか知らぬか。五月廿七日張作霖は旅順より來奉した關東都督中村男爵を奉天驛に迎へ會談後、警備嚴かに歸城の途、宗社黨の一刺客は密かに之を小西關に邀して爆弾を投じて暗殺せむと謀つた、處が其の刺客は張作霖の面貌を知らぬ上に頗る狼狽せるものと見え張作霖の馬車より五六町先頭に進んで馬車を驅り歸城してゐた第二十七師第五十三旅長の湯玉麟を張作霖と誤認せるもの

の如く湯玉麟の馬車に向つて轟然爆弾を投じた。其の瞬間、小西關の街上に肉飛び骨碎くるの悲惨事は演出された。湯玉麟は幸運にも僅かに微傷を負ひたるのみで死を免れ、護衛兵若干死傷せるのみであつた。其の刹那、小西邊門外を車上悠容として歸城中であつた張作霖は前方の爆音に事變の勃發を直感した。流石に多年死生の巷を馳驅せるだけ變に處して惑はず電光の如く車上より馬に乗りかへ騎馬の護衛兵に圍繞されて小西邊門より更に第二の爆弾が飛んだ。之れに就て見るに張作霖が平素將軍行署の奥深く潜んで容易に出でず其の警備亦た嚴重にして刺客の潜入は困難なので宗社黨は張作霖が他出の機會を窺つてゐた。それが久し振りに將軍行署を出でた張作霖を倒すは「此の日ぞ」とばかりに刺客を要所に配置してゐたらしい。第一回に失敗すれば第二回目に射止めんと同處に潜んで待ち構へてゐたのが階下の街上を張作霖の一隊とも目すべきものゝ通過を認めて投弾したのであつた。此處でも幸運兒の張作霖は身に微傷だに負はず危難を免れ無事將軍行署に歸る事を得た。流石に豪膽無比の張作霖も其の心膽を寒からしめ省城の警戒を更に厳にし爾來將軍行署の奥深く潜み亦容易に出でなかつた。其の投弾の下手人は當時一人とも爆弾を踏んで斃れたので極力嚴探した

が結局判明せず曖昧裡に葬られて了つた。

(三) 袁の死と張作霖

越えて六月六日、帝政失敗以來快々として樂しまざりし袁世凱は五十九歳を一期に突如新華宮裏に薨去した。袁世凱の死に依つて副總統の黎元洪は臨時約法の規定に従ひ大總統に就任した。袁世凱の死亡に依り支那の時局は變化した。民國建設の元勳である黎元洪が袁世凱の術策に陥り武昌より來り副總統の虛名の下に南海に幽閉同様の憂目を見てゐたのが世に出た事と帝政問題に依つて激成され紛糾を極めた支那の政局が一時的にせよ小康を呈し南北妥協の曙光を認むる事を得た。黎洪洪就任して間もなく段祺瑞國務總理に特任された。即ち支那の時局は黎元洪の德望と段祺瑞の手腕とに依りて解決さるゝ事となつた。黎總統は先づ申令にて前に袁世凱のために蹂躪され一片の反古となつた舊臨時約法の復活を宣言し次で舊國會復活を宣言した。

袁世凱の死に伴ひ張作霖の進退は亦注目された。元來張作霖は長江巡閱使張勳と密接の親交があつて併に均しく宗社黨の巨頭と目せられてゐる關係上此の際兩者相策應し北京政府に叛旗を翻し宣統帝を擁し清朝復辟の義兵を擧ぐる事なきやと疑はれた。當の張作霖は弊政百出、人心離反の極、社

穢崩壊した清朝の復辟が云ふべくして容易に行ひ難い事を充分感知してゐた、大望を抱く張作霖は復辟説には耳をも藉さず自己の地位を安固ならしむるに腐心した。即ち黎元洪の大總統就任に祝電を寄せて他意なきを中外に聲明したのも其一つである。袁世凱の死亡後一時中央の命を聞かず省政を獨裁し事實に於て全然獨立の状態にあつたが各省將軍に打電し時局拾收のため中央擁護を宣言したのも張作霖が利害より打算した方便であつた。

七月將軍制改正され督軍省長に改任された。

(四) 巴布札布軍の南下

近代蒙古が生める人傑巴布札布は豫て宗社黨の首領である前陝甘總督升允等と聯絡し前清の復辟を高唱し邊境海拉爾の山中に兵を練り虎視耽々として機運の到來を窺つてゐた。それが愈々行動を開始し旅順に閑居せる肅親王第五の王子憲奎王を奉じて討袁扶清の義旗を翻すに至つた。

然も其の期は遅れ袁世凱死後の七月初め先づ張作霖の牙城奉天を屠るべく精悍無比の蒙古兵總勢四千餘騎を從へ破竹の勢を以て南下の途に就いた。沿路の蒙民盡く同軍の風靡する所となり一千餘の馬賊又軍に加り氣勢を添へた。

洮遼鎮守使の吳俊陞は督軍張作霖の命に應じ之が鎮壓のため洮南に急行し自ら陣頭に立ちて兵を指揮し鎮壓最も努めたが七月廿五日突泉の大激戦に重傷を負ひ退却し洮南城を守備した。勝に乗じた蒙古軍は怒濤の如く鄭家屯に殺到するの形勢であつた、處が彼等は途を東南に轉じ突如長春南方の南滿線郭家店に出で來り長驅將に奉天城を衝かんとするの勢を示した。洮南の守備を其の儘、吳俊陞に一杯喰はせて南滿線を目指して進出したのであつた。

張作霖は此の急報に接し驚駭措かず所部軍隊を急派し吉林軍と聯絡して蒙古軍の南下抑制と擊滅を嚴命した。蒙古軍と奉天軍は南滿鐵道を中に挟み郭家店郊外に對陣し雙方睨み合つてゐた。鐵道地帶に侵入し又は線路を越えて接戦する事は日本側の同意を経ざれば絶対に不可能であつた。内政干涉の批難を避くるために鐵道地帶の中立を嚴守せる日本側としては一方に偏する事を許さなかつた。殊に兩軍の陣地が鐵道附屬地に近く兩軍の交戦は我が附屬地に流丸の落下し危険の虞あるために日本側より兩軍に抗議して停戦を要求した。その結果一時休戦状態に入つた。

張作霖は此處で考へた。蒙古軍を擊滅するには南滿鐵道の沿線では到底不可能だからして一應蒙古軍を懷柔して蒙古方面に退却させた上日本との關係の薄い地方にて追撃殲滅するに如かずと決心

した。蒙古軍の彈薬糧食缺乏し士氣亦沮喪せるを聞いた張作霖としては當然の手段であつたらう。軍事顧問の陸軍歩兵中佐菊池武夫を郭家店に出張せしめ、鐵道警備のため出動監視してゐる日本軍憲の諒解の下に蒙古軍に對し極力蒙古引揚を懇請させた。

成吉斯汗の再來と謳はれた蒙軍の首將巴布札布も彈薬糧食已に缺乏し、兵疲れ馬斃れ傷病者多く後續部隊なくして孤立無援の状態にあるのみか大勢の不可なるを觀じ再舉を圖るために歸蒙の意漸く動いた。菊池中佐の調停に對し蒙古軍退却の際奉天軍の追撃せざる事を條件に遂に蒙古引揚を諾したので兩軍の妥協成立した。

首將巴布札布は八月十八日、軍を率ゐる郭家店を撤退し西、蒙古に向つて去つた。越えて數月林西の激戦に於て巴布札布は官兵のために狙撃され回天の雄圖空しく破れ遂に林西城外一片の露と消えた。首將を失つた蒙古軍は意氣沮喪し戰意を欠き四散するに至つた。

(五) 鄭家屯の不祥事件

八月十三日東蒙古の咽喉にあたる鄭家屯に於ては突如、日支兵衝突の不祥事件が勃發した。時恰かも蒙匪軍の南下に依り之れが討伐の騒ぎに眞最中の事とて一世の耳目を聳動したのである。

同事件の經緯は最初在留邦人吉本某が市街通行中當時蒙匪討伐のため駐防してゐた二十八師騎兵二十八團長楊德生部下の騎兵に暴行を加へられたのが事の起りである。訴に依り河瀬巡査は理否を質すべく支那屯營に赴きたるに頑冥な支那兵は衆を恃み河瀬巡査に銃を擬して威迫し交渉に應じなかつた。そこで河瀬巡査は鄭家屯守備隊に通知して護衛を求め松尾中尉は兵卒二十名を率ゐて河瀬巡査を應援して交渉に赴いた。支那兵は依然交渉を峻拒し無法にも突如銃口の火蓋を切つて射擊したのである。そこで松尾中尉も自衛上已むなく應戦し日支兵衝突の不祥事は勃發したのである。日本軍の下士卒十名の戦死者を出し松尾中尉外五名重傷を負ひ河瀬巡査又殉職し全滅の悲境に陥つた、暴虐なる支那兵は更に大舉して鄭家屯守備隊を包囲し激戦四時間、陳遼源縣知事の調停にて支那兵は午後十一時圍を解いて退却した。之れ衝突の概略である。

此の急報に接した日本側は鐵嶺より二個大隊の救援軍を急派した。何分四鄭鐵道未開通前の事とて交通不便急行軍でも一晝夜を要し殊に炎暑の候とて行軍頗る困難、救援軍將士の勞苦は甚だしかつた。一時鄭家屯の守備隊は僅かに一個中隊なるに支那側は大軍なるを以て守備隊始め居留民全部屠殺さるべしと憂慮されたが其の事なく終り日本軍の進出に依つて支那軍は全部鄭家屯外に退去し

たので再び衝突する事なかつた。

一方又張作霖督軍は此不祥事を耳にし倉皇色を失して狼狽した、内は張作霖が奉天督軍としての地位強固でないのに、外は宗社黨の活動、蒙匪の來襲等にて内外多事の秋、日本の好意的援護の下に地位を保持してゐた際とて日本を相手とする不祥事件の勃發を聞いて衷心より遺憾とした。鄭家屯にある二十八師五十五旅長張海鵬に對し日本軍と衝突せし官長及び兵卒の人員調査を電命すると共に軍事顧問菊池武夫中佐を公主嶺の滿洲獨立守備司令部に派し司令官藤井少將に支那兵の誤解なる旨を説明せしめ奉天交渉員馬廷亮を奉天總領事館に派し陳謝せしめたのである。そして顧問町野武馬少佐と交渉署丁鑑修を調査のため鄭家屯に派遣した。外務省よりは酒匂鐵嶺領事出張し共同調査に従つた。北京外交部よりは王鴻年が派遣された。

同問題は北京に於て日支交渉事件となり駐支公使林權助より支那側に再三交渉の結果六年一月一二日日本の提出せる五個條は外交總長伍廷芳との間に調印されて無事解決した、其の條件を列舉すれば次の如し。

(一) 第二十八師團長を申飭する事

- (二) 責任ある支那士官は法律に照して夫々處罰し嚴重にすべき者は當然之を嚴重にする事
- (三) 日本臣民雜居區域内に於ける日本軍民は相當禮遇すべき旨一般軍民に出示告諭する事
- (四) 奉天督軍は相當の方法を以て陳謝の意を表示する事但し關東都督及び奉天日本領事同じく旅順に在るの時之を行ひ其方法は該督軍より任意辦理すべし
- (五) 日本商人吉本に慰藉金五百弗を給與する事

(六) 省議會と私刑問題

奉天は全く張作霖の天下となつた。軍政、民政を總攬し奉省の財權を把握し地位益々鞏固となつた。奉省に於ける施政振りは流石に綠林式の蠻氣を帶びてゐた。省城に於ける自己出資の慶金祥銀號の破綻を暴露したので憤怒措かず經營者楊玉泉以下五名を捕へて投獄した、そして一流の蠻勇を發揮し専擅、越權の誇りを顧みず何等の審理をも經ずして劉鳴岐外三名を銃殺の刑に處した。司法權を蹂躪の聲四方に起り非難攻撃を一身に集めたのである。又、三年振りの奉省々議會の復活にも得意の辣腕を振ふた。

民國二年袁世凱の民意暴壓政策のために舊國會と共に解散された各省議會は共和再造後民意機關

復舊のため舊國會の復舊に伴ひ八月十四日大總統令を以て「十月一日を期し各省行政長官は法に依りて各省議會を召集すべき」旨命令した。それで奉天省議會も三年振りに復活して十月七日開會式を舉げた。張作霖は奉天省長の資格にて親しく臨場し一場の祝詞を朗讀した。其の對省議會策は得意の武斷主義にて、いさと云はゞ武力干涉も致し兼ねまじき權幕で嚴重監視した。奉天省議會をして有名無實、張作霖御用の省議會たらしめ操縱頗る巧妙を極めた。張作霖の前途は愈々未知數と稱せられた。

十月三十一日馮國璋副總統に當選した。

第二節 張作霖と馮德麟

(一) 遼西の俠豪馮德麟

民國六年春、奉天省城に於ける張作霖と馮德麟との政權爭奪の經緯を叙するに先ち順序として先づ俠豪馮德麟の半生を略叙するの必要がある。馮德麟も亦張作霖と均しく遼西綠林の出である。滿鐵線海城の西北にあたる萬里河の一寒村に呱々の聲を擧げ次で父母に從ひ遼陽の小北河に移住し

た家は世々農を業とし赤貧洗ふが如き中に人と爲つた。生來放縱不羈、十七綠林に投じ遼西の一頭目田寶亭の麾下に参じ年少ながらも猛勇を以て四方に名を知られた、後廣寧縣昌陽を根據地として勢力の擴張に努めた。爾來數年斬然として頭角を現はし一方の頭目に推され八百の部下を統率し遼西綠林の雄となつたのである。

北清事變後貪婪飽かざる露國が彼の荒蠻の翼を伸べて滿洲併呑を企畫し大兵を送つて滿洲侵略の大野心を著々實現せしめんとするや馮德麟は憤然起つて露國排斥運動を開始し檄を四方に飛ばして同志を糾合した。馮德麟の壯舉を贊し之れに參加する者、汲金純、張海鵬等を始め遼西綠林の各頭目風を臨んで來り馮德麟の一隊は旭日昇天の勢を示し露國側に取りて宛然一敵國たるの觀を呈するに至つた。在奉天の露國軍政委員等が鳩首對馮策を議せる際、偶々馮德麟の部下は事に依り露國官憲を統殺した事件が起つた、此の問題は露清官憲の間に紛議を惹起し馮德麟は責任者として露國官憲に捕はれ樺太に流謫の厄に遭つたのである。配所の月を眺むる事二年、光緒二十八年秋密かに夜陰に乘じ脱獄し通譯支那人に救はれ途中幾多の艱苦を嘗め再び滿洲に生還するを得た。當時滿洲は殆ど露國の爲に占領された狀態にあるを見て馮德麟は憤慨措かず、露國人を憎惡するの念甚だしく大

復仇の機を窺ひ暗に舊部下との聯絡に努め再起を策してゐた。

光緒三十年、日露の國交遂に斷絶するを見るや馮德麟は我が川崎參謀と密議し殘黨二十餘騎を率ゐて活動を開始し同志を糾合し八百餘騎の大軍となつた。金壽山、杜立山等と共に満洲義軍を組織し我が義勇軍の別働隊に投じ大小二十餘回の會戦に參加し日本軍のために縱横の奇策を運し極力露軍の行動を妨害し往年の譖讐を思ふさまに晴らしたのであつた。

日露の役後、張作霖と前後して時の盛京將軍趙爾巽に歸順し部下の匪衆と共に官軍に編入され西北邊防の任に當つた。後路巡防統領より左路巡防統領に變じ民國元年秋官制の大改正に依つて陸軍中將に補し左路巡防隊は陸軍第二十八師と改編され其の長となつた。師團司令部を遼西廣寧に置き遼西鎮撫の探題として今日に至つたのである。

(二) 張馮軋轢の由來

張作霖と馮德麟とは云ふまでもなく俱に綠林出身の武將として奉天の二大重鎮であつた。然も兩者の關係は犬猿も啻ならず相反目して譲らざるものがあつた。之れ即ち第一革命前後に胚胎せる權勢爭奪の軋轢に基因せる事は説くまでもない。惟ふに兩者が民國成立以來奉天都督の麾下に隸して勢の上に出で馮德麟は到底張作霖の敵でなかつた。

各一師の兵を督し張作霖は省城に、馮德麟は廣寧に駐屯し奉省治安の維持に努めてゐた。時代は兩者の軋轢は相互の自制に依り單に裏面に於ける暗鬭たるに止り表面何等の波瀾を紛起する事なく俱に奉天の柱石として兩將轡を駕べて盛名を馳せてゐた。然し實際の勢力に於ては張作霖遙かに馮德麟の上に出で馮德麟は到底張作霖の敵でなかつた。

當年遼東の俠豪として勇名を馳せた馮德麟も阿片中毒に罹り強弩の末勢甚だ振はなかつた。依然第二十八師長の位置に晏如として省城に何等政治的勢力を扶植する事なかつた。馮德麟が阿片の吸飲に日一日と心身を衰弱させてゐる間に一方張作霖は逐年其の勢力を擴大し馮德麟を超絶する大潛勢力を省城に培養した。それのみか奉天將軍をすらも掣肘するの大勢力となつた。

此處に於て平素張作霖を見るに若輩扱ひして侮蔑してゐた馮德麟は内心甚だ喜ばず遽かに狼狽した。張作霖に對して強烈なる反感の度を加ふると與に張作霖の勢力を根底より覆滅し自ら之に代らんとの野望を起し其の機の到来を窺つてゐた。それに亦張作霖は奉天の實權を確實に掌握しそれを地盤として自己將來の大飛躍を理想とする際とて馮德麟を現在のまゝ存在せしむる事を不利として眼上の瘤とし邪魔物視してゐた。吳俊陞、馬龍潭等は自家藥籠中の物として問題としてゐなかつ

たが馮徳麟だけには先輩として一目置いてゐた關保土一敵國として之れが勢力を失墜せしむる事に腐心してゐた。斯様に競争の位置に立つてゐる兩者は事毎に衝突し暗闘、排擠猛烈を極め其の確執結んで解けざる事久しかつた。

阿片中毒のために半病人となつてゐる馮徳麟は年齢閱歴に於てこそ張作霖に比し一日の長あるも其の智謀才幹に於ては横謀術數に長じ武斷的政治家の資質を具備してゐる張作霖を敵としての太刀打は出來なかつた。意氣また當年の馮徳麟でなかつた。然し馮徳麟は張作霖との対抗を忘れず。日夜張作霖排斥策を凝らしてゐた。

(三) 馮の排張失敗

前に張作霖中心となつて奉天將軍段芝貴を放逐して其の後任に据つたので馮徳麟は張作霖との權衡上奉天軍務幫辦に任せられ奉天の副將軍格となつた。が奉省に於ける軍務、政務其の他萬般のことは悉く張作霖の方寸に出で馮徳麟は之れに與らず單に虛位を擁するに過ぎなかつた。之れ最も馮徳麟の快しとせざる處であつた。殊に張作霖が一身を以つて將軍、巡按使、師長即ち奉省文武の三大權を獨占してゐるのに少からず憤慨した。平素から張作霖の下風に立つを潔しとしない感情を持

つてゐた馮徳麟の張作霖に對する反感を益々昂騰させたのは事實である。

前に馮徳麟は鄭家屯事件の責任者としてその善後處分に藉口し北京に赴くや張作霖の政敵である衆議院議長吳景濂（奉省興城縣出身、國民黨系に屬せる排張派の首領）と結び張作霖が省城に於て公金費消者私刑、公民大會壓迫其他種々の違法を剔抉して政府に彈劾した。政府をして張作霖の奉天督軍を免職させ自ら取つて代らんとする下心あつての事なるは云ふまでもない。然し其の運動は結局徒勞に終つた事がある。本來凡庸暗愚な馮徳麟はそれにも懲りず依然當初の志を改むる事なく張作霖の排斥を企畫してゐた。四圍の形勢と自己の實力を測らず唯だ一筋に張作霖排斥に凝り堅まつて自己の没落を無意識の間に急いでゐた。が然し兩者の軋轢は激烈を極めてゐても相互の自制のために暗闘として終り流石に表面に現はるゝ事はなく僅かに決裂を免れてゐた。それが愈々爆發の時期は到來した。省城に於ける文治派對武斷派の爭權は之れが導火線となつた。奉省軍界に橫紙破麟に加祖し張作霖は王永江を庇護し遂に奉省官界未曾有の大政變を惹起せしめたのである。

(四) 蠻勇漢湯玉麟

本事件の張本人である湯玉麟も亦當年綠林の一頭目であつた。熱河朝陽の產、性傲岸不遜強悍峻刻、綠林的蠻勇漢の雄として知らる、夙に遼西一帯に横行し張作霖とは二十年來の關係で爾汝相許す間柄である。張作霖に取りては又忘れ難い恩人の一人である。過ぐる日露の役には張作霖の死黨として勇戦奮闘し殊勳を現し後張作霖に従ひ歸順し、張作霖の麾下に奉天前路巡防馬隊管帶（聯隊長）となつた。民國元年秋軍制の改正に依り陸軍騎兵上校（大佐）に任官し第二十七師騎兵二十七團長となつた。同三年二月陸軍少將に昇進し次で第五十三旅長依榮廷の死亡に依り其の後任となり省城密偵隊司令を兼ねて今日に及ぶ。

臺將軍の異名を取つた湯玉麟は省城に於て傍若無人の振舞多く眼中法律なく其の軍權を悪用して警察權を壓迫した。又司法權を蹂躪しては各種の不正行為を敢行し督軍張作霖すら眼中になきが如く跋扈跳梁を極め市民の恐怖と反感を買つてゐた。然も張作霖が遼西二十年の舊誼に顧み之を寛大に默認して毫も制壓しない結果は益々增長し自ら二十七師長たらんとの野望を起してゐた。官界の

先輩である處の溫厚の長者孫烈臣（五十四旅長）を度外し密かに機運の到来を窺つてゐたのである。

(五) 朋闊の導火線

張作霖は奉天督軍就任以來省城に於ける警察行政の紊亂を憂ひ之れが改革の意があつた。殊に自己と姻戚の關係ある全省警務所長宋文郁（墨林）が無能凡庸の質にして到底其の器にあらざるに加へ官金濫用の嫌疑あるを機とし安東稅捐局長に左遷し前奉天民政使王永江を任用して全省警務所長兼省會警察廳長の椅子に据ゑ托するに警政改革の事を以てした。之れ五年十一月末であつた。

王永江は奉省金州の產歲貢生出身にして知縣知府に歴任し頗る手腕家として聞えてゐた。

當時省城警察界は腐敗の極點に達し湯玉麟一派の軍界の威力に制壓され何等爲す能はざる窮状にあつた。此の弊實を熟知してゐた王永江は就任に前ち張作霖に對して（一）警政改革は一切自由手腕に任す事（二）軍界の警察行政に干渉する事を絶対に嚴禁する事の二個條を提出して其の快諾を得て始めて就任したのであつた。王永江は新に警務處長に就任すると同時に先づ完全に警察權の獨立を確保する爲めに軍權と警察權の權限を明確にする必要を認めた。警政改革のためには情實責縁を排し敢然として所信を斷行するの決心を示したのである。

其の第一着歩として改革の鐵槌は先づ湯玉麟一派の頭上に落ちた。湯玉麟の部下である宋某が多年城内に賭博局を開設し不正の利を貪つてゐた。之れに對し歴代の警務處長等は湯玉麟の壓迫を恐れ腫物に觸るやうに見て見ぬ振りをしてゐた事實があつた。之れを知つた王永江は疾風迅雷的に部下をして宋某を逮捕投獄せしめ一方該賭博局の閉鎖を嚴命した。之れ抑も軍警兩界衝突の發端であると共に張作霖馮德麟朋團の導火線であつた。

(六) 湯派軍官の反抗

突如、此の報に接した湯玉霖の憤怒は極度に達した。直に張作霖に抗議して宋某の釋放を迫つた。然も反対に張作霖の拒絕に遭つて湯玉麟は益々意外にして憤激した。王永江が警務處長の職權を遠慮なく行使し断乎として湯玉麟の申出に應ぜぬために湯玉麟は王永江に對して益々反感を高め部下の軍隊を使嗾して盛んに警察官を壓迫せしめた。一方張作霖に對して再三要求する所あるも明答を與へぬために蠻勇漢の本性を現はし倔強の部下十餘名を從へ張作霖を襲ひ之を射殺せんとまで威迫した。そして又「之れ軍權の侵害なり」とて王永江排斥の示威運動を開始し二十七、八兩師の各旅長及び高級軍官を説き廻つて之れに加担せしめた。それに張作霖が萬一を慮り調停した條件が王永江

に有利であつたので更に湯玉麟の反感を高め王永江對湯玉麟の軋轢は張作霖對湯玉麟の反目と一變した。此の軋轢を見た馮德麟は平素から張作霖排斥の材料を探して何か事あれかしと祈つてゐた際とて張作霖の勢力を殺ぐは此の一舉にありとばかりに湯玉麟に聲援するに至つた。彼等は督軍張作霖に反抗し無法にも宋某の釋放と王永江の免職を強要し若し聽かれずんば自由行動を執るべしと威胁的氣勢を示した。爲めに張作霖の立場は一時頗ぶる苦境に陥り軍官連の強要に屈從するの外あるまいと信ぜられた。それに問題の中心人物である王永江は湯玉麟一派の危害身に及ばん事を恐れ老母病氣の看護を名とし郷里金州に難を避けた。斯くて湯玉麟對王永江の軋轢は張作霖對湯玉麟、馮德麟との確執に變化したのであつた。

(七) 張の文治派庇護

馮德麟は平素から若輩と侮り多寡を括つてゐた張作霖が順風に帆を張り益々勢力を擴大するを喜ばず督軍、省長の椅子は張作霖獨占すべきものでないから自分も張作霖との對抗上奉天督軍は已むを得ぬとしても奉天省長とならんと考へてゐた。それが政争を機會に愈々公然發表するに至つたのである。張作霖に對して曰く

「余（劉自身）を奉天省長に、湯玉麟を二十七師長に任命せよ、然らずんば我等は自由行動を執り馬賊の本性に復歸すべし」

との無理難題を申出で强硬な態度を取つた。それに北京方面に運動して吳景濂一派の國民黨系の勢力を後援に北京政府に對し猛烈な張作霖排斥運動を試み其の推倒に狂奔したのである。然し張作霖は時の國務總理段祺瑞と意志相通する所あり、段派の信望と一種の默契とは頗る篤いものがあつた。馮德麟一派の排斥運動が如何に白熱しても奉天督軍たる自己の地位は何等の變動を來す虞がない事を充分確信してゐたので馮德麟等の要求に對して毫も屈せざるのみか彼等の無法な要求に憤慨し依然王永江を庇護して一步も引かず强硬な態度を持して相下らなかつた。

然も形勢は愈々悪化し最後の手段として武力を以て解決せんとする危機に迫つた。張作霖、馮德麟が死活の大政争と變じて人心の動搖を來した。

（八）馮 德 麟 の 軟 化

之より前、馮玉麟對王永江の軋轢が張作霖、馮德麟の朋讐となつたので中立の立場にある吳俊陞、馬龍潭の兩將は兩者の間に立ちて調停頗る努めた。雙方の態度が支那一流の虚勢を張つて譲歩する

模様もないために其の斡旋は結局失敗に終つた。然し北京政府が張作霖を擁護する方針であつたので馮德麟一派は自分の掘つた陥牢に向つて進んでゐた。政府から馮德麟を慰諭するために再三其の上京を電命しても事に托して上京を回避した。

黎總統と段總理は特使を馮德麟の許に派し「張作霖督軍は日本との關係融洽し又馮副總統、張勳巡閱使等の同情あり此の際張作霖を動かす事は大局に於て不利なり」と云つて張作霖更迭の不可能な理由を説破し又「政府は深く馮將軍の大材を倚重し居るも今其の要求に應じ難し、適當の時期に拔擢すべし」と懇諭せしめた。張作霖、馮德麟の兩將を往年綠林より歸順せしめた恩人である處の前東三省總督の趙爾巽も又政府の旨を含み來りて兩者の融和を懇諭する處があつた。それに馮德麟一派に加組した二十七師の軍官中には張作霖直系の部下もあつた、彼等は最初文治派對武斷派の爭權と信じ張作霖が軍權を侵犯せる文治派を庇護すると云ふ事を快しとせず一時湯玉麟一派に味方したので眞實張作霖に反抗するためではなかつた。それが一度、馮德麟の眞意を知つて利用せられてゐるのを知るや遂に加盟を脱して張作霖の下に復歸した。流石に馮德麟は周圍の形勢が自己に不利を來し勢ひ張作霖に屈從の外なき破目に陥るを察した。政府側の調停を好機會に一先づ廣寧に退去し時期を待つに如かずと感じたが依然その態度を一變して軟化した。其の上にて上京するを誓

つて恭順の意を表した。湯玉麟は全然孤立の状態に陥つた。

(九) 湯玉麟の失脚

湯玉麟は唯一の後援とした馮徳麟が最初の意氣は何處へやら悄然廣寧に歸任したので今更行懸り上屈伏も出來ず立場に窮した。張作霖は又、湯の如き無法漢を依然省城に駐防せしめては今後如何なる問題を惹起するやも料られぬと云ふ處から湯玉麟に對して五十三旅司令部を立奉線新民屯に移すやうに命令した。移駐命令を受けた湯玉麟は省城に於ては到底張作霖に敵し難い事を覺つてゐた際とて之れを好機に倉皇部下を率ゐ新民屯に移駐した。頑強な湯玉麟は新民屯に去れる後も猶も反抗を中止せず廣寧の馮徳麟と聯絡し二十八師と聯合して張作霖に楯突くの叛逆氣を出した。

五十三旅の一部を中心に遼西の馬賊を糾合し總勢一千餘人、盛んに張作霖反抗の虚勢を張り遙かに奉天を威嚇するの態度を取つた。新民屯よりの警報は頻々として湯玉麟不穩の情報に接し宛かも猛虎を野に放たやうな觀を呈した。張作霖は三月十九日遂に湯玉麟の五十三旅長を免じ第百六團長鄒芬を旅長代理に任命した。そして五十四旅長孫烈臣を湯玉麟討伐軍の總司令に任じ張作相の騎兵二十七團を中堅に孫烈臣の五十四旅と共に湯玉麟の五十三旅と馮徳麟の二十八師に對抗し戰雲低迷

した。時に湯玉麟の五十三旅の一部は未だ戦はざるに叛旗を翻し張作霖軍優勢となり孫烈臣愈々討伐軍を統率して新民屯に向け進撃を開始すると共に二十八師も亦湯玉麟を應援するを中止し形勢を觀望するに至つた。それで流石頑強の湯玉麟も衆寡敵せず旗を卷いて亡命に決した。二十八師五十五旅長張海鵬は新民屯に來り情況を偵察してゐたのを幸に豫て馮徳麟との密約に依り十九日午後當初の威勢に似もやらず手兵を纏め張海鵬の一行と共に新立屯に赴き廣寧に身を寄せ武器を返還して恭順の意を表し全然失脚するに至つた。

斯くて張作霖、馮徳麟の間は疎隔し馮徳麟の奉天軍務辦は免職となり省城にありし二十八師辦公處を撤廃し、省城に於ける馮徳麟、湯玉麟の勢力は全く根絶した。そして王永江警務處長に復職し張作霖の地位は愈々鞏固を加へ奉省未曾有の政變は平定した、

次で王永江は九月王樹翰の辭職に依り奉天財政廳長に轉任し奉省財政の上に一大手腕を振ふ事となり後任として營口警察廳長王家勤襲任した。

第三節 張作霖と吳俊陞

(一) 第二十九の新編

洮遼鎮守使吳俊陞は奉省武官中の老雄である。東蒙古探題として多年驍勇の名を塞外に馳せてゐた。奉省に於ける政治的地位は張作霖、馮德麟の兩師長に及ばず、東邊鎮守使馬龍潭と共に中立の地位にあつた。吳俊陞は純乎たる武人であつて政治的才幹は絶無である。が資性慄悍其の實戰に臨めば作戰用兵の妙、奉省武官中其の右に出づる者がないと云ふ。

張作霖とは東蒙古に於て最大の勢力と領地を持つた達爾罕親王府に對する相互の姻戚關係上親交頗る密接である。殊に吳俊陞が蒙古に於ける王公をも凌ぐ勢力と奉省數次の政變に際し表面中立を標榜しながらも張作霖の後援となつて種々斡旋奔走せる事は張作霖の甚だ徳とせる處であつた。之れに酬ゆると同時に自己の勢力を擴大する目的の下に二十九師改編問題を計畫した。即ち吳俊陞の統率せる奉天後路巡防隊を師團に改編し二十九師と改稱し吳俊陞を師長に任命する事之れである。張作霖より中央政府に向つて該計畫を具申せるに何時もながら財政難に苦める政府は經費の支出困難のため改編は一時行詰つた。以來奉省と政府間に未解決のまゝ久しく懸案となつてゐた。

それが張作霖、愈々馮德麟、湯玉麟等の不平分子を放逐し省城の實權を掌握したので武力充實を急務とし廿九師の新編を急いだ。六年五月遂に北京政府を勤し改編の許可を得、吳俊陞をして編制に着手せしめた。六月末改編完成し廿九師成立し吳俊陞師長に任命された。吳俊陞は部下にして姻戚の關係ある騎兵第二旅第四團長石得山を五十八旅長に、後路巡防隊帮統秋玉田を五十七旅長に任命した。

(二) 老武將吳俊陞

師長吳俊陞の閱歴に就て叙せんに彼は山東省歷城縣の人。五歳親父に從ひ奉天省昌圖府に移住して鄭家屯に住んでゐた。長じて馬販子(伯樂)を業とし傍ら賭博に耽り或はまた馬賊の群に投じて常職なき不良無賴の徒であつた。後遼源捕盜營の馬夫となつたのを振出しに軍界にあつて漸次累進したのである。光緒の末年後路巡防管帶官として遼西の土匪を討伐して功勳があつたので副將(大佐相當官)を受けられ次で巡防隊帮統に昇任した。日露の役後、統領馬瑞祿の下に馬隊百營を率ゐて鄭家屯に駐屯した。宣統の末年馬瑞祿黒龍江省に轉任したので後任として統領に昇進し東蒙古の兵權を自己の掌中に把握したのであつた。民國元年、騎兵旅の編成に依つて騎兵第二旅長を兼ねた。同八月哲里木盟科爾沁右翼前旗の札薩克郡王烏泰は將に八十に垂んとする老齡にも係はらず意氣壯

者を凌ぎ其の傑勳の資を以て遙かに庫倫の活佛と相策應し蒙古獨立軍を組織して輕騎五百を率ゐて起つた。洮南の西北二百支里の王府を出で夜陰に乘じ洮南を衝く。城兵倉皇守を失せんとす。吳俊陞城兵を指揮し善戰蒙軍を擊破した。烏泰は身を以て免れ海拉爾に遁竄した。其の功に依り九月少將に進み次で二年五月中將銜となり三年二月中將に昇任し翌三月、新に洮遼鎮守使の設置に依り之れに任じた。四年十二月、袁世凱の帝政發表後二等男爵に封ぜられ五年夏蒙古巴布札布の軍と突泉に邀撃し重傷を負ふた。之れ吳俊陞が經歷の概略である。

それに吳俊陞は多年鄭家屯、洮南方面を根據として活動してゐたので同方面に於ける勢力は殆んど王公を凌駕するの状態である、それに又、其の女は蒙古王公中の巨頭達爾罕親王の王嗣に嫁し、一女は又前に喇嘛より還俗した杜爾伯特王に嫁してゐて勢吳俊陞の力は實際上の蒙古督軍である。

第六章 復辟事變の前後

第一節 歐戰加入問題

(一) 參戰問題の大紛擾

張作霖が奉天督軍として中央の政界に乗り出した濫觴は民國六年二月北京の政局を混亂紛糾せしめた參戰問題の勃發以後である。張作霖は之れに依つて始めて支那政局に有力なる立役者の一人となつた、參戰問題は張作霖をして奉天の張作霖より支那の張作霖とした第一階梯である。張作霖の態度を叙するに先ち順序として參戰問題の經緯を略述せん。

時の國務總理段祺瑞は世界の變局に鑑み大局より打算して日本及び聯合國の勸説を容れ遂に獨逸と斷交すべく意を決した。米國の對獨潛水艇政策に對する通告と同様外交總長伍廷芳の名義にて駐支獨逸公使ヒンツエに抗議を提出した。次で數度の閣議に依り國交を断絶し聯合國に加入すべく大總統黎元洪に圖る所があつた。處が黎總統は前に國務院對總統府との權限爭で段總理に對し反感を抱いてゐた矢先、民友社一派よりツツかれ對獨斷交案に反対した、總統府對國務院の大衝突となつて黎、段の衝突は段派軍人と段反對の國民黨一派との軋轢であつた。

黎總統の反対に憤然、職を捨てゝ天津に下つた段總理は副總統馮國璋の調停に依り結局之れも亦黎總統讓歩し段總理復任の上國會に圖り大多數を以て斷交案を可決し三月十四日之れを中外に宣言した。次で國會に提出された對獨宣戰案は政界の低氣壓となつた。

國民黨を中心とする民黨の一派は國會に大多數を占めてゐる事とて平素から段祺瑞を中堅とせる北洋系の軍閥内閣に嫌焉たらす推倒の機を窺つてゐた際とて參戰案の提出に對して舉つて反対するに決した。民黨一派が反対の氣勢を擧げ極力、内閣破壊運動を開始するや段總理も之れに對應すべく、四月特別國務會議を開いて北方督軍等を召集し參戰の廟議に參加せしめ對獨宣戰、聯合國加入の賛成を得て政府の大方針は確定した、然して主戰派の督軍團は聯盟して段内閣の擁護を表明し民黨一派とは全然反対の態度を執つた。奉天の張作霖も亦其一人であつた。

五月一日國務會議が對獨宣戰を決議し七日國會に提出し十日衆議院全院委員會に於て審議さるゝに至つた。時に段總理は黎總統が南方派に左袒せるに鑑み、是非共通過せしむるべく徐樹錚一派の獻策に基き主戰派の急先鋒であつた安徽省長の倪嗣冲をして五族公民の主戰請願團と稱する數千名の暴民を衆議院に殺到せしめた。國會を包囲し議員を威嚇し參戰案の可決を強要せしめ政局は愈々紛糾した。

一方吉林督軍孟恩遠を筆頭に八督軍十四督軍代表の二十二名聯名を以て黎總統に對し憲法の修改と國會の解散とを要求せるに黎總統之を拒絶したので督軍團は袂を連ねて天津に下り徐州に赴いて

張勳と會見した。然も政局は急轉直下し黎總統は無謀にも南方派の言を聽き五月二十三日突如段祺瑞の國務總理を免じ、外交總長伍廷芳を國務總理代理に張士鍾を陸軍總長代理、王士珍を京津警備總司令に各任命した。段祺瑞は即夜徐樹錚、傅良佐を從へ天津に下つて各省に黎總統の暴狀を通電した。茲に於て段派の督軍團は憤慨措かず、蹶然起つて黎總統に反抗し各省相策應して兵を京畿に進めるとの形勢を示し人心洶々として大動亂の發生を豫想するに至つた。

(二) 張作霖の段總理擁護

此の政局の紛糾に對して奉天督軍たる張作霖の態度は段祺瑞擁護派の一人であつた。曹錫、孟恩遠等の各督軍と同一意見を持つてゐた。參戰贊成論者にして段派督軍の錚々たる一驍將であつた。

それで張作霖は黎總統の段總理罷免が非法なるに對し極度に憤激し其の代表として、特別國務會議以來入京せしめてゐる參謀長楊宇霆に命じ督軍團と同一の行動を執らしめた。之れと同時に張作霖は又黎總統に對して長文の激電を發して段祺瑞を復任せん事を迫つた。

其の全文は次の如し。

大總統鈞鑒 國務總理段祺瑞免職され人心惶愕し舉國騷然たり、此の危急存亡の秋に當て此の違法の命令あり、萬一事變を激成し國家傾覆の憂を貽さば知らず政府に何の主持する所ありて能く禍患を消除し以て我が四億萬人民附託の重きに副ふや。外交總長伍廷芳の通電は約法を解釋し並に民國一、二、三年辦理の成案を歴引して先例となすも之れは暴民專制の規定及び不良政府の行爲に過ぎずして其の理由の充足すると否とは暫く論ぜず、我が國家共和を再造し政治を刷新せるに際して豈に之を引いて以て法となし其の爲めに效するを得んや。

今や外患内憂與に切迫し禍機四伏險象環生し段總理は秉政數歳、勞多く功高し内外の欽崇する所其の一身は誠に安危の繫る處にして大總統は就職の日倚頼する事長城の如く其の關係は猶ほ魚の水を得るが如くなりしに、今乃ち端なく之を麾きて去らしめ何等輕重するに足る者なきが如し、何ぞ前後矛盾の然く甚しきや。之を陰謀家が其の間を翻弄する事なしと云ふも夫れ誰か之れを信ぜん。各省督軍は國是を以て前提となし段內閣を維持して以に大局を維かん事を電請したるに小人の徒輩は又復た軍人の政治不可干渉説を藉りて以て相錯制せり、知らずや之等言論は憲法已に成立し國家已に安泰にして軍人容喙の地なき國家に係るを。然して我國は憲法猶ほ研究中にあり

軍人亦國民の分属なれば豈に喙を容れざるの理あらんや。之れを要するに群小難を柄へ朋比して奸を爲すの徒は公府に誠に多く兩院に到りては更に一にして足らず大總統は素仁厚の稱ありて彼黨の爲めに欺迷され易し、其の倒行逆施、直に國家を以て兒戯と爲すの甚だしき此に至りて亡びずして何をか待たん。

請ふ大總統は毅然獨斷して國會を解散し群邪を屏斥し猶ほ段總理に任命して內閣を組織せしめて一面速に議員を改選し以て國基を奠めて衆望に副はゞ中國幸甚なり、作霖軍民を辱領し興亡其の責あり戈を執りて命を待つ事急にして言を擇ばず若し垂察を蒙らざれば唯だ關係を斷絶して天下に謝せんのみ、之を鑒亮せよ、張作霖印

(三) 奉天省の獨

此の第一電を以て中央政府を威嚇した張作霖は五月二十八日第二電を發して奉天省獨立の前提とした。

之れ所謂最後の通牒であつた。

電文の劈頭議會及び總統府の失態を痛撃し

清末季年の亂政にも此の如き荒謬絶倫なく、不良なりし袁政府も之れに比すれば猶ほ彼の善きを覺ゆ、作霖は此の危局に際して痛心する事深く願くば同胞に代りて義憤を舒べん、若し中央政府が能く國會を解散し民意眞確の議員を改選し暴民專制の憲法を刪定し一面には黨見を屏除し良好内閣を組織し以て大局を維き人心を安くせば中國の前途は猶ほ或は振興の一日あらんも若し然らずして猶は庇護の意を存じ別に野心を著へば作霖は當に遼東の子弟を率ゐて直に京師を衝きて彼等奸邪を懲らし我が社稷を衛らん云々

其の辭氣激烈を極めた。

然して安徽長倪嗣沖が張勳の指金にて獨立を宣言せる翌日即ち五月三十日張作霖も又奉天省獨立を宣言し中央政府との關係を離脱した。之れが爲めに山東、福建、浙江、河南、山西、直隸、陝西、黒龍江等の各省も相踵いで獨立を宣言し政局の紛糾名狀し難き状態となつた。

黎總統は亦後任總理の人選に苦心せるも徐世昌、王士珍ともに出山を肯んぜず漸く李經義を物色し得た。此の間徐世昌は立つて兩派の間に調停して時局收拾に奔走せるも何等の効を奏せず、大勢

の趨く所遂に張勳の復辟運動を誘致するに至つた。張作霖は依然強硬の態度を持し代理總理伍廷芳が電を寄せて其の反対の意志を緩和せんとて段祺瑞免職問題に就いて懇說し来るも断も顧みなかつた。

第二節 復辟と張作霖

(一) 張勳の復辟斷行

時局の紛糾に困惑して萬策盡きた黎總統は遂に李盛鐸を徐州に派して張勳に出馬調停を依頼した。此の結果は愈々復辟劇の上演となつた長江巡閱使安徽督軍として中部支那の一勢力を爲せる張勳は本來宗社黨の巨頭である。夙に前清の遺臣を以て自ら任じ辯子將軍の名は四百餘州に高く常に機會あらば前清の復辟を實行せんと欲してゐた。前に江蘇より安徽に轉任後も依然徐州の要衝に蟠踞し虎視耽々として機運の熟するを窺つてゐた。

偶然にも參戰問題の爲めに段總理突如免職され段派の武將羣起して黎總統に反抗の態度を執り京畿騒然たるに及んで此の情勢を觀取せる張勳の野望は勃然と擡頭した。六月一日全國に通電して復

辟を主張し十三省區聯合會の名義を以て黎總統に退位を要請し、同七日名を時局調停に藉り徐世昌と同行し兵三萬を率ゐて天津に出馬した。天津官僚派と會見し其の要求條件を経めて七ヶ條と之を時局解決の具體策として黎總統に建白し且つ日を限りて國會を解散せん事を迫つた。

支那に於ける舊思想の代表者と稱せらるゝ張勳は要するに單純なる一武弁である。北京の政局が今や自己の意志のまゝに動くと見て復辟を實行するは此の秋だと考へた。復辟の成否などは熟慮する暇もなく時局混亂のドサクサ紛れに斷行さへすれば各省は烈風枯葉を捲くが如くに風を臨んで清朝の正朔を奉するものと過信した。それで天津に入るや宗社黨一派の巨頭と暗に氣脈を通じ種々秘密裡に復辟實行の畫策を進めた。

徒らに虛位を擁して傲れる黎總統は其の無謀なる政策に禍せられ孤立無援の窮地に陥り遂に國會解散に決し伍廷芳國會解散令の副署を拒否したので步軍統領江朝宗を國務總理代理に任じ江の副署を以て六月十三日國會解散令を發布した。越えて翌十四日張勳は目的を達し李經義、雷震春、張鎮芳等を從へ意氣揚々として北京に入った。北洋派督軍團は獨立の大眼目たる國會解散の實行せられしを以て同十八日張勳より獨立取消を勧説するや前後して之れに應じ北方は全く張勳の天下となつ

た。そこで張勳は復辟を實行すべく密かに同志と往來し凝議した。前清保皇黨の首領たる南海康有爲も亦微服間行して北京に入り復辟の議に參畫した。

七月一日復辟は實現した。前夜王士珍、江朝宗等を派して黎總統に政權奉還を迫りて拒絕さるゝや遂に非常手段に訴へたのである。

議政大臣張勳の副署した宣統帝の復辟上諭—康有爲の起草—發表され北京の舞臺はガラリと一變し五色の旗に代る黃龍旗は翻り、黎總統は僅かに身を以て遁れ悄然日本公使館に保護を求むるに至り當路の百官有司は悉く前清の官制に復した。張作霖も又奉天巡撫に任命された。

(二) 張作霖と張勳

張勳復辟の宣言に依り最も其の向背を注目されたのは張作霖であつた。張作霖は夙に一般より復辟派の錚々たる一人と目せられてゐたので前清の復辟に對する其の態度は殆んど決定的のものと信ぜられ贊否を問ふだけ既に野暮とされた。それに復辟の張本人張勳との關係は比較的密接なるものがあつた、張勳が日露役當時、巡防隊統領として奉天省昌圖府に駐防せる頃よりの舊知にして宗社

黨の驕將を以て目せらるゝ張勳と張作霖との平素の親誼は清室を擁戴する事に於て聲息相通するものありと認められた。それで張作霖は張勳の復辟運動には相當の聯絡と諒解があるものと信ぜられた。復辟の上諭一度發布された以上張作霖も亦必ず之れに相呼應し盛京の陪都に黃龍の大旗を翻し清朝の正朔を奉するものと觀測された。

然るに事實は一般の豫想に反し全然裏切られた。張作霖は六月二十日張勳よりの獨立取消勸告に應じて奉省の獨立を取消せるも復辟運動の機密には全く參與する所なかつた。張勳より特別の通報にも接してゐなかつた。六月三十日夜始めて張勳よりの密電に接して復辟の斷行を知つたらしい。張作霖としては平素交誼淺からざる張勳が自己を除外して復辟の議を進め實行の前日迄何等の通知をもせず突如の斷行には先づ甚しく不快の念を抱いた。機を見るに敏な張作霖である清朝復辟の一事が既に時世に反し大勢に逆行するものなるを洞覗してゐた。それに張勳が入京以來の行動不遜なるに憤慨し復辟加盟を躊躇した。陽に中立を標榜して大局の推移を觀望して動かなかつた。

驚いたのは張勳である、張作霖の加盟は當然のものと信じてゐた。それが意外にも期待に反し更に動く模様もないのに非常に焦り出した。張作霖の贊否は張勳の死活問題となつた。議政大臣の資

格を以て張勳が張作霖に對し

執事を奉天省巡撫に任命せるを以て速かに賀表を朝廷に奉り且つ宣統の正朔を遂用せよ
と電命したるも張作霖は應する色もなかつた。

清廷も亦特使を奉天に派し黃馬弔を贈つて
速に勤王の師を起さん事を

懇囑し以て復辟贊成を勧說せるも張作霖は依然動かなかつた。清朝の再現を祝賀して先づ第一に贊成しさうに觀られた奉天城には五色の民國旗翻り黃龍旗の影すらも見なかつた。實を云ふと張作霖も復辟に絶對的の反対ではなかつた、一説には張勳一味の復辟連判帳に加盟した一人ださうだ。それが張勳に對する感情の疎隔と旗色の振はないのを見て公然の贊成を見合せて密かに各省の意嚮を探究してゐたのが事實らしい。復辟の贊成者少ない事を確めて之れも張作霖と同様復辟派と目せられた山東督軍張懷芝と密電を交換して張勳討伐軍の組織に就て交渉を進めてゐた。

七月十一日張作霖はまた天津國務院宛として段祺瑞に對し張勳復辟に對する清室の立場に同情し左の意味の電報を送つて清室優待の舊の如くならん事を求めた。

今次の復辟計畫は全然失敗に歸するは必然なるも宗社黨は東三省及び各省に充滿しあり再度の機會を覗ふことは明瞭なり、唯だ此の際清皇室に對しては不當の處置あるべからず、且つ清室には天下を私するの態度なく這般の舉は全く張勳に脅迫せられたるものに過ぎざれば優待條件は一切其の舊に依り以て舊臣等の故主を依戀するの情を慰するを可とすべし云々

(三) 張 勳 脆 く も 没 落

中央に於ける復辟の輿論は反対に一致した。黎總統の爲めに國務總理を罷免されて以來天津に蟄居して政界の雲行を眺てゐた段祺瑞は遂に起つた。共和擁護を聲明し復辟反対の急先鋒となつた。各省に通電して張勳討伐軍の組織を懲憲するや各省群起して之に應じ七月八日馬廠の起義となつた。之より前副總統馮國璋は黎總統の退位電に依り約法の規定に基き南京に於て代理大總統となり段祺瑞は國務總理となつた。段祺瑞が討逆軍を統率して起つや張作霖も亦復辟反対を宣言し張勳討伐に賛同した。之に次で張懷芝倪嗣沖等も反対した。討逆聯合軍が大舉北京に迫り、七月十二日未明天壇の總攻擊に張勳の軍は大敗した。張勳は僅に身を以て遁れ和蘭公使館に保護を乞ひ張勳の天下は僅は解決した。

かに十二日であつた。十四日段祺瑞入城し復辟の變全く鎮定した。

張勳の餘黨は或は捕はれ或は遁れ實にも果敢なき一場の悲喜劇として悲惨なる失敗の幕を閉ぢた段祺瑞は電光石火の勢を以て軍人派、交通系、研究系より成る聯立内閣を組織し前閣員李經義以下を免職した。斯くして本事件勃發の原因たる對獨宣戰案は八月十四日正式に宣布されて一切の問題は解決した。

第七章 東三省統一の前提

第一節 馮 德 麟 の 失 脚

(一) 參 戰 紛 爭 と 馮 德 麟

奉天省に於て督軍張作霖の勢力と相拮抗して下らず張作霖のために多年一敵國の觀をなしてゐた第二十八師長馮德麟は前年張作霖との爭權に失敗以來意氣頓に沮喪し甚だ振はなかつた。廣寧の本

據に起臥して復た出でず不平悶々として時運の再來を窺つてゐた。それが六年七月張勳の復辟計畫に參加し張勳の没落に伴ひ遂に失脚するの運命に遭遇したのである。

之より前北京政府は馮德麟に對する前年の他日拔擢云々の聲明に基き張作霖との權衡上且つ又黒龍江軍界の動搖を鎮定さるために馮德麟を黒龍江督軍に昇任さするに内定してゐた、既に張作霖の同意も得て任命の發表も近きにありと報ぜられた。

時に中央政局の紛糾混亂の結果馮德麟の任命は一時中絶して有耶無耶の裡に立消の狀態にあつた。張作霖が決然起つて段總理擁護派の驍將として萬丈の氣を吐いて黎總統に反抗するや馮德麟の去就は最も注目されたのである。然るに馮德麟は張作霖に對する反感上、張作霖と同一行動を執つて段總理擁護を高唱するを欲しなかつた。吳景濂一派の國民黨系との關係からしても黎總統擁護を聲明して堂々張作霖と對戰するのではないかと觀測されたが馮德麟の態度は依然煮へ切らなかつた。快刀亂麻を斷つて決斷に乏しく旗幟頗る明瞭を欠いだ。

それが六月中旬、突如張勳の召電に接し遽かに晉京を思ひ立ち自己の腹心である所の二十八師十五旅長の張海鵬をして兵二百を率ゐ先發隊として入京せしめた。續いて二十日馮德麟は自ら手兵

三十を從へ入京したのであつた。

(二) 馮 の 復 辟 參 畫

北京に入つた馮德麟は直に張勳と會見し其の復辟運動加擔を慇懃ざるゝや遠謀深慮に乏しい馮德麟の事とて前後の成果如何を顧みず輕卒にも之れに賛同した。

「事成るの曉は張作霖を蹴落して奉天督軍たらん」若し奉天督軍たらんまでも相當の地位を贏ち得る事を夢みての賛成なるは勿論であつた。

復辟宣言以來張勳の軍議に參畫し奔走頗る努め麾下の二十八師に至急入京するやう電命した。或はまた宣統帝に謁見して盡忠を誓ひ吉林督軍孟恩遠と均しく得意の境にあつた。張勳の復辟軍が連戦速敗、段祺瑞一派の討逆軍北京に迫り張勳の命運旦夕を測り難きに至るや馮德麟もまた非常なる窮地に陥つた。そして却つて電を張作霖に飛ばして救助を哀願するの醜態を演出したのである。

本來奉省に於ける政敵として終始せる張作霖、馮德麟兩者の關係に鑑み張作霖は馮德麟に對し惡感こそ有して居れ決して好感を抱懷しては居なかつた。それが馮德麟よりの救助を求むる電報に接

し悪感は善感として年來の舊誼に顧み馮徳麟を見殺にするに忍びなかつた。馮徳麟に對して

北京に永居するは甚だ危険なれば速かに陸路を取り長城に沿ふて單騎歸還せよ、適當の場所まで迎を出すべし、汽車にて歸還は危険である。

と好意ある注意を寄せて一刻も速に北京を脱出せん事を警告したのである。

(三) 馮徳麟の免官

危機身邊に迫つてゐるのを明察するを得なかつた馮徳麟は悠々安居し左右の言に誤られ張作霖の勸告した陸路歸還を避け大膽にも汽車歸還の途に就いた。張海鵬旅長以下幕僚と共に私服に變裝し同じく私服に變裝した二百の兵を從へ七月十日京奉線にて北京より天津に着した所を曹錕部下の偵查隊に發見されたのであつた。列車の最後尾に連結された馮徳麟等の客車を發車に先ち密かにチエンを切離した偵査等は發車と同時に馮徳麟二百の兵は何事も知らず東行し馮徳麟の一行は偵査隊のために何んなく取り押へられ天津國務院辦公處に拘禁された。

十四日北京に護送され第十二師司令部に拘禁された翌十五日馮徳麟は復辟關係者であ、張鎮芳、

雷震春等と共に大總統令を以て

共和に背き逆跡明瞭なるを以て官職及び勳位一切を褫奪して法廷に交附し法に據りて嚴罰に處せしむ。

との革職命令正式に發表された。二十八師長の地位は勿論陸軍中將勳四位の官位を失ひ全然失脚し加之に囹圄の人となつた。馮徳麟の迂愚真に笑ふべきである。

(四) 張作霖救馮運動

馮徳麟就縛の飛報奉天に到達するや張作霖は痛く馮徳麟の迂愚を憐み其の叛逆の罪に問はれ重刑に處せられんことを憂慮した。多年の舊誼に顧み段總理に對して寛大の處置を求めた。

吳俊陞、馬龍潭の二鎮守使を始め二十七、八、九三師の各旅長、團長、營長及び高級軍官等百餘名の連署を以て政府に馮徳麟の命乞をした。又馮徳麟と關係深き遼西十六縣の有志等を說いて軍人等と同様連名請願せしめ極力馮徳麟のために奔走したのであつた。審理百餘日政府も張作霖等の請を容れ過重の嚴罰を避け穩便に釋放するの方針を取り十月十五日「復辟加擔は證據不充分なるを以て

阿片吸飲の罪を以て罰金八百元に處す」旨の寛大なる判決を下された。結局復辟加擔の罪は問はず釋放されたのである。

馮德麟は獄を出でゝ後再び二十八師長に就任すべしとの説ありしも實現せなかつた。總統府高等侍從武官なる閑職に任命の恩典に浴し又官位の褫奪を取消された。依然北京に滯留し當年の意氣は何處へやら消磨し去り、張作霖に對しても今は全く一步も一步も譲つて遠慮するの外なきに至つた。

第二節 黒省の兵權掌握

(一) 師長許蘭洲の跋扈

黒龍江省陸軍第一師長の許蘭洲も所謂權勢病に罹つて久しく黒省の主人公たらんとするの野望を抱いて書策してゐた。許蘭洲は直隸省南宮縣の產、夙に湖南の陸軍學堂を出で軍界に累進した。光緒三十三年東三省總督徐世昌に従つて奉天に來た。次で張勳に従ひ黒龍江省に赴き巡撫程德全の下に巡防第二路統領となつた。爾來黒省にある事前後十二年、黒省陸軍第一師長として黒省軍務帮辦を兼ね黒省の兵權を掌握し一方の重鎮となつたのである。

第一革命以來黒省の主腦者は三度變つた。此の間許蘭洲は軍權を背景に直接間接之を排斥することに力を入れたのは事實であつた。初代の都督宋少濂が黒龍江巡撫より改任し二年八月事に依り露國官憲の反感を招き壓迫を受けて放逐され次で露國通の畢桂芳來任し三年六月中央に去り護軍使朱慶瀾昇任し鎮安右將軍督理黒龍江軍務となる、許蘭洲は之を壓迫し五年五月遂に辭職せしめた。再び前都督の畢桂芳が來任したので又排斥の陰謀を運らした。

督軍畢桂芳名は督軍であるが本來が外交官出身とて自ら號令して動かす所の一兵をも有しなかつた。總て一省の兵は督軍のまゝに動くべき規定なるも事實は簡単に行はれなかつた。蒙匪大舉して邊境に迫り形勢急を告ぐるも畢桂芳は之が討伐の師を出さんとしても其の命令に従ふ者なく事毎に許蘭洲に掣肘され如何ともする事が出來なかつた。徒らに虛位を擁するに過ぎて許蘭洲と衝突し兵權を以てする壓迫に劫を煮し遂に任を捨てゝ北京に歸つた。中央政府は直に後任督軍任命の事なく許蘭洲の天下となつたのである。

(二) 黒省軍界の騒擾

畢桂芳を逐ふて自ら黒龍江督軍兼省長を僭稱してゐる許蘭洲は甚だ得意の色があつた。黑省は愈々自己の獨舞臺となるものゝやうに信じてゐた。然し中央政府は許蘭洲の横暴を憎み督軍兼省長として正式任命を認めず之を他に移駐せしむるの意があつた。それに張作霖との權衡上前約に基き二十八師長の馮德麟を任命するに略ぼ内定してゐた。時に中央政局の紛糾と張勳の復辟運動に依り馮德麟の任命中絶し許蘭洲は清朝より黒龍江巡撫に任命され「我事成れり」と納つてゐたのである。復辟の失敗と同時にまた共和擁護を表明し地位の擁護に腐心した。其反覆常なき行動と横暴跋扈に對し反対の火の手は不意に足元から起つた。黑省騎兵第四旅長英順之が發頭人となつて歩兵第二旅長巴英額を始め全省軍官と提携して許蘭洲排斥の火の手を擧げ正に兵力を用ひて相争はんとするの氣勢を示した。其の軋轢の度甚しきを加へたので張作霖は五十四旅長孫烈臣を黑省に派遣し兩者の間に居中調停に任せしめたるも結局無効に終つた。段總理亦黑省軍官の軋轢に鑑み之れが鎮撫のため適當な督軍候補者を物色してゐた。そして自己の股肱の一人であり且つ張作霖と同郷の誼ある北京陸軍講武學堂長の鮑貴卿を任命するに決した。鮑貴卿の任命に就ては張作霖と充分の諒解を得たので七月二十六日付で正式に黒龍江督軍に任命の旨を發表したのであつた。馬鹿を見たのは許蘭洲

であつた。

(三) 新 督 軍 鮑 貴 卿

新任督軍 鮑貴卿は奉天海城の產にして張作霖と同郷の出である。何等微すべき學歴、取るべき門閥なきも夙に北洋軍閥の巨頭段祺瑞の殊遇を受け其の庇護推挽に依つて今日の地位を得た一種の幸運兒であつた。段祺瑞とは親分子分の密接なる關係があつた。多年軍界に累進し第一革命當時は第二鎮統制官王占元の下に第四協統領(旅團長)であつた。民國成立後元年十月陸軍少將に任せられ第一師第四旅長として直隸にあつた。一年六月中將銜に補せられ後安徽蕪湖大通司令官となつた。同年九月安徽都督倪嗣沖の下に蕪湖鎮守使兼第三混成旅長となつた。任にあること満二ヶ年、四年八月蕪湖鎮守使の廢官に依り上京し中將に昇進し陸軍講武學堂長に就任したのであつた。之れ鮑貴卿の閱歷の大略である。

當時張作霖が奉天督軍となり旭日昇天の勢で奉天閥の扶植に努め奉省出身の人材を重用してゐた頃とて北京にあつて一士官學校長の閑職にあつた鮑貴卿も又同郷の緣故を辿り再三奉天に來て張作

霖のへを迎へ獵官運動を試みたのである。張作霖も亦鮑貴卿の資望閱歴に鑑み自己の大傘下に抱擁する事を拒斥しなかつた。偶々黒龍江督軍の後任問題が起つたので段總理よりの推薦に張作霖が好意的の賛同を與へた結果黒龍江督軍の任命となり同時に陸軍上將銜に昇任したのであつた。

越えて八月 鮑貴卿は赴任のため奉天に來り張作霖と會見し黒龍江統治の方針に就て意見を交換し二十日省城齊々哈爾に入城し盛大なる督軍就任式を挙げたのである。

(四) 許蘭洲の失意

鮑貴卿の着任に對し最も不平なのは許蘭洲である事は説くまでもない。新督軍鮑貴卿の命令を聞くことなく前年朱慶瀾、畢桂芳等に對せる奥の手を出して反抗の氣勢さへ示した。然し鮑貴卿は朱慶瀾や畢桂芳のやうに背後に武力後援を有せぬ將軍等と同一には出來なかつた。張作霖と云ふ奉省の大立物が其の後楯であるために許蘭洲も思ふに任せなかつた、が許蘭洲は動もすれば黒省軍界に波瀾を巻き起さんとするの危險分子であつた。黒省の平和統一の見地より見れば其の懷柔至難なる許蘭洲を他省に移駐せしめて其の勢力を根絶するのが良策であつた。鮑貴卿は張作霖と中央政府と

に數次協商した結果黒省軍界攪亂の元兇である許蘭洲及び其の所部の騎兵五營、歩兵三營を奉天に移し張作霖の麾下に隸屬せしむるに決した。

之れに依り許蘭洲は將軍府參軍に祭り上げらるゝと共に奉天移駐を命ぜられた。此のために多年黒省に扶植した勢力は根底より覆へされたのであつた。許蘭洲は九月二十三日、部下の軍隊を率ゐ奉天に移駐し來り張作霖の命を奉じて東路剿匪總司令として西豐縣に駐在したのであつた。

(五) 張作霖の新地盤

許蘭洲奉天に去つた後の黒省には猶ほ英順、巴英額を中心とせる一種の黒龍江軍閥があつた。鮑貴卿は自己直屬の親衛隊一旅を組織するの意があつた。張作霖と諸り奉省より十營の兵を徵し張明九を旅長に、李夢庚其他の軍官を招いて編制に着手せんとした。之れに對し英順、巴英額の二旅長中心となり黒省軍界を煽動し奉軍の入畠に反対を表明した。鮑貴卿を威嚇し形勢甚だ不穏となり鮑貴卿の地位も危殆に瀕したのである。

急報に接した張作霖は蒙匪剿滅を名とし吳俊陞をして二十九師の一部を率ゐ北上赴黒せしめ反対

派に備へしめた。强硬なる武力干涉主義を執り禍根を一舉に絶滅するの方針を取り英順等反対派の歸順を勧説し懇諒大いに努めた。然しそれに應ぜなかつたので十二月二日、英順は陸軍少將の軍官旅長の軍職を褫奪され巴英額と共に免職となつた。之に依り黒省軍界の騒擾は全く鎮定し鮑貴卿の位は安固となつた。斯くて鮑貴卿を傀儡とする背後の張作霖は間接に黒省を我物とし三省統一の前提としたのであつた。それに又、張作霖は自己の羽翼を擴大するために支那一流の結婚政略を取つた。前に自己の第三夫人の生家である東蒙古達爾罕親王府の王嗣に娶るために約婚したのが不幸王嗣の長逝に依り自然破約となつた自己の長女を鮑貴卿の長子英麟に嫁せしめた。斯くて張、鮑兩家は姻戚關係を結て奉天閥の結合を鞏固にした。之れ十月二十日である。張作霖の宿望たる東三省統一は先づ黒龍江に實現した。殘るは吉林のみとなつた。

第三節 第二十八師長問題

(一) 後任師長人選難

七月馮德麟の失脚に伴ひ二十八師長の後任問題が起つて張作霖は其の人選難に陥つた。元來二十

八師は馮德麟が綠林時代より統率して來た所の一隊即ち奉天左路巡防隊を改編したものである。名は政府の陸軍第二十八師であるも實は張作霖の二十七師と同様に馮德麟個人の私兵であつた。政府の二十八師でなくて馮德麟の二十八師であつた、其の麾下に隸せる五十五旅長張海鵬、五十六旅長汲金純の二少將を始め各軍官は悉く當年綠林の舊部下にして俱に死生の巷を馳驅せる親分子分の密接なる間柄であつた。

既に親分である馮德麟が失脚せる以上是等綠林の豪傑を統御する事は非常なる困難事にして後任師長の人選は最も慎重を要した。張作霖も亦頭を痛めたのであつた。

(二) 汲金純と張海鵬

二十八師の内部に於ける一大勢力は云ふまでもなく張海鵬、汲金純の二旅長にして後任師長問題に關聯し最も注目された。

張海鵬は奉省蓋平縣三家子の農家に生れ性來放縱無賴の質、鄉人の指彈を受け壯歲馬賊の群に投じた、後馮德麟の麾下に馳せ参じて外號を大海と稱し専ら良民を慘虐し獰猛漢として知られた。

汲金純は奉省臺安八角臺の產、農家に長じ壯歲綠林に投じ馮德麟の配下に屬し通稱大英と稱し遼西の野に跋扈跳梁を逞くした。清末、馮德麟の歸順に從ひ張海鵬と共に巡防隊管帶となり民國元年十一月共に陸軍少將に任官し二十八師の旅長となつたのである。

張、汲兩旅長の人物は全然正反對にして當時張作霖に對する孫烈臣、湯玉麟二旅長の關係と同様であつた。張海鵬は馮德麟に服從して抗命する事なきも汲金純は馮德麟を眼中に置かず我儘勝手の振舞をした。張海鵬は復辟前兵二百を率ゐ上京し張勳の復辟運動に參加した。復辟軍の旗色更に振はず危險の身に迫るを感じ馮德麟を促し歸任の途馮德麟不幸天津に捕はるゝや不測の危禍を虞れ身を車夫に扮し東行し無事山海關を脱出し營口に赴き新立屯の旅團本部に歸り首腦を失つて動搖の色ある五十五旅を堅め形勢を窺ひ、馮德麟に取りては正に忠臣であつた。一方汲金純は張海鵬に反し旗色の如何に依りて去就を決する人物であつた。馮德麟の子分であつても眞實馮德麟に心服してゐなかつた、それで馮德麟の失脚と同時に早くも歎を張作霖に通じ張作霖得意の手に懷柔されてゐた。汲金純の意嚮としては張作霖の勢力を後楯に其の援助に依り自ら二十八師長たらんとの野心があつた事は云ふまでもない、二十八師軍官の統御困難のために後任師長の任命は行惱んでゐた。

(三) 孫烈臣就任行惱

張作霖は後任師長の任命如何が直に奉省政局及び自己の勢力に重大の影響を及ぼす事を虞れてゐた。

中央政府が有力な人物を任命するに於ては甚だ不利なるを慮り腹心の股肱である、五十四旅長の孫烈臣を昇任せしむるの意があつた。張海鵬、汲金純の二旅長を省城に招致し慎重協議を重ねた。汲、張兩旅長は同師を二混成旅に改編して奉天督軍の直屬を主張したが張作霖は之れに賛同しなかつた。孫烈臣の師長任命を北京政府に電請し七月二十二日、其の認許を得た翌二十三日張作霖は二十八師勸説使として督軍顧問馬瑞祿、于沖漢の兩人を廣寧及び新立屯に派し汲、張兩旅長を始め二十八師軍官を極力慰諭せしめ漸く孫烈臣の師長就任を承諾させたので孫烈臣の師長就任は愈々決定したのであつた。

時に遼西方面に匪賊蜂起せるに關聯し二十八師も亦動搖し師長問題に就ても態度急變したのである。汲、張二旅長は互に師長の野心あつたのに、今同輩に過ぎない孫烈臣を師長に戴くことを反対し「断じて孫氏の節制を受けず」と公言し强硬に孫烈臣の就任を拒絶し形勢不穏の狀を呈した。之

を見た張作霖は温厚なる孫烈臣をしては到底二十八師を鎮壓し難きを知り、孫の赴任を中止せしめた。そして二十八師長は張作霖自ら兼任し孫烈臣を二十七師長に任命し一時の急を縫縫するに決定した。

(四) 汲金純の正式就任

八月孫烈臣の二十八師長就任を撤回し張作霖師長兼攝を發表するや張、汲兩旅長始め各軍官は寧ろ張作霖の節制を受くるを榮とした。高級軍官等は連署を以て張作霖に對し二十八師は張大帥の師長兼攝を歓迎する旨の賀表を送り反抗の態度を撤廢し動搖全く平定した。

之れで表面張作霖師長兼攝の名あつたが實際の軍務は五十六旅長の汲金純が師長代理として處理してゐた。政務多端のため一身數職を兼攝することを得ない張作霖は將來の二十八師長として馮德麟に心服して硬骨屈せない張海鵬を避け自己に服従し比較的駕御し易き汲金純を昇任せしむるに決し其の前提として師長の職を代理せしめたのであつた。

馮德麟の釋放と同時に再び二十八師長復任の説盛んに傳はつたので馮德麟の復任を喜ばない張作

霖は機先を制し突如汲金純を正式師長に任命し百十團長郭瀛洲を五十六旅長に昇任せしめた。

斯くて久しく人選難に陥つて決する所なかつた師長後任問題も圓滿に解決し二十八師も完全に張作霖の勢力圈内に收められた、之れ十一月十九日である。馮德麟の復任は絶望となり汲金純初志を遂げて得意なる一面に張海鵬は汲金純の先輩なるに係はらず其の麾下に依然一旅長として不平に堪へなかつたのである。

第四節 孟恩遠更迭失敗

(一) 孟恩遠免職事情

吉林督軍の孟恩遠は過般張勳の復辟運動に加擔した嫌疑のために段總理に睨まれてゐた。それで早晩革職の運命に遭遇する事は必然であると一般より觀測されてゐた。それが愈々具體化して来て十月十八日大總統令をて革職の命が下つた、

吉林督軍 孟恩遠

免吉林督軍

任 誠 威 將 軍

察 哈 爾 郡 統 田 中 玉

免 察 哈 爾 郡 統

特 任 吉 林 督 軍

孟恩遠は將軍府に祭り上げられ段祺瑞系の驕將である、田中玉後任となり察哈爾都統には又段派の張敬堯が任命された。

孟恩遠は天津の妓樓に人となり夙に身を軍界に投じ辛伍より起りて累進し直隸巡防隊統領となつた。光緒二十四年吉林巡防督辦に轉任以來陸軍第二十三鎮統制官第二十三師長に歴任し民國二年六月吉林護軍使に任じ吉林軍隊全部を節制するに至つた。其の間清朝最後の吉林巡撫として極端な排日を唱導した陳昭常去り、一時奉天都督の張錫鑑が吉林都督を兼任したが三年六月官制の改正に依り張錫鑑兼任を解かれ、孟恩遠鎮安左將軍署理吉林軍務の重職に昇任し吉林督軍となつたのである。東北邊防の重鎮として吉林に駐衛する事、前後十二年其の勢力全省に普及し猛虎岡を負ふの一大勢力を示してゐた。

前に張勳の復辟運動に際し偶々、北京に滯在してゐた孟恩遠は張勳に與し其の計畫に參與する所があつた。清廷より吉林巡撫に任命され大いに氣を擧げ上書恩を謝した。復辟實行の公報を吉林に電報し黃龍旗の掲揚を命じた。そして又、副官長高連甲を吉林に急派し吉林省長郭宗熙を威脅し強制的に民政の全權を督軍參謀長の高士賓に引繼がしめた。吉林の一省は悉く清朝の復辟を謳歌し黃龍の旗に風靡さるゝの觀を呈した。

段祺瑞の討逆軍北京に迫り張勳の復辟軍振はざるを見て意氣沮喪し、倉皇態度を約變し共和擁護省長留任を吉林に電告した。そして自己の罪責を免がれんために一切の責を副官長の過失とし表面を糊塗せんと努めた。北京より天津に潛行し段祺瑞を討逆軍總司令部に訪ひ陳辯せんとしたが面會を拒絶されたので周章狼狽、吉林督軍の地位を確保せんと哀訴懇願、多方運動の結果七月十三日漸く吉林に歸任するを得たのである。爾來吉林に於ける威信全く地に墜ち孟恩遠反對派の擡頭となり排斥運動となつた。全省公民大多數の意見として北京政府に申達した激電は孟恩遠の罪狀を剔抉彈劾し其の更迭を強請したのである。

北京政府としては吉林公民の申請を待つまでもなく復辟事件以來、孟恩遠革職の意があつた、殊

に又、吉林の地たる光緒の末年朱家寶に代り吉林巡撫となつた、陳昭常が盛んに排日論を提唱し吉林をして純然たる排日の淵藪と化せしめたので之が緩和と朝鮮方面との日支接觸其他の關係上親日政策を執れる段總理をして孟恩遠老齡吉林軍務を督するに足らずとし遂に革職命令の發表となつたのである。

(二) 吉林獨立の宣言

突如革職の命令に接した孟恩遠は早晚、此事あるべきを心密かに豫期してゐた。今や政府より高壓的に督軍の職務を省長郭宗熙に引繼ぎ速に來京すべし」との電促を受け孟恩遠は結局、城明け渡す外なきに至つた。然し孟恩遠は別として其の部下が之を承諾しなかつた。孟恩遠が年來全省に分布せる大小幾多の子分等は親分たる孟恩遠の革職が同時に自家の地位に及ぼす處の影響を顧慮し遂に孟恩遠を擁して中央の命令に反抗の態度に出でた。

之れが中心人物は多年吉林軍務の樞機に參與して未來の吉林督軍を以て自任してゐた督軍參謀長の高士儕と吉長鎮守使の裴其勳とであつた。

參謀長高士儕は孟恩遠の女婿である吉林陸軍混成第四旅長たる高峻峰の弟であつた。孟恩遠と同鄉にして陸軍學堂及び陸軍豫備大學堂を卒業した。兄峻峰の緣故から漸次孟恩遠に重用された。始め第一十三鎮參謀官に任じ次で同參謀長、鎮安左將軍高級參謀、吉林軍械局長等に歴任し陸軍少將に進補された。督軍參謀長の張恕が孟恩遠と意見を異にし辭職した後を襲ふて參謀長に進んだのである。高士儕、裴其勳等は吉林の軍官を説いて連署し北京政府に激電を致して曰く

何故に我が督軍孟恩遠を免職せしや、若し正當の理由なきに於ては吉林省の獨立を宣言し中央との關係を離脱すべし云々

と脅迫詰問し兵を吉林、長春間の要衝に集中し盛んに反抗の氣勢を擧げた。然して十月二十二日遂に吉林省の獨立を宣言したのである。

(三) 張作霖の表裏

吉林省の獨立宣言に對し境界相接し加之に東三省統一の野心ある張作霖の態度は頗る興味ある問題であつた。前に黒龍江省の騷擾に乘じ鮑貴卿を督軍に据ゑ許蘭洲を自己の麾下に隸屬せしめ黒龍江省を手中に收めた凄い腕は今度も又漁夫の利を占むる魂膽ではないかと疑はれた。張作霖が東三

省の統一と云ふ大目的より見て吉林の孟恩遠を放逐するに就て種々腐心し機運の熟するを待つてゐたのは事實である。孟恩遠一度復辟事件に關聯し傷けるを奇貨とし張作霖は段總理に對し暗に孟恩遠の免職を懇懃したのである。吉林を自己の勢力圏内に收め完全に東三省を統一せんとして自己の腹心にして命維れ從ふの二十七師長孫烈臣を吉林督軍に就任せしめんと運動した。然しそれは結局效を奏せず失敗に終つた。

機略縱横の張作霖は自分の宿志遂げられざるに却つて段派の驍將として錚々たる田中玉の任命を喜ばなかつた。田中玉の赴任は張作霖に取りて三省統一の大阻礙であつた。第一の孟恩遠を遂ふて更に第二の孟恩遠——より以上の強者であります田中玉を迎ふる事は大反対であつた。段祺瑞一派の勢望を背景にせる田中玉の着任は自家將來の大活躍に及ぼす所の影響を顧慮したのである。此の際田中玉を迎ふるよりも猶ほ比較的好々爺の孟恩遠を暫時留任せしめ徐ろに時期を待つに如かずと決心したのであつた。それで吉林省の獨立に對しても和戰兩様の態度を持して臨み一步でも自己に有利に解決せんとした。吉林と政府との間に立ちて調停の勞を取るを辭せなかつたのである。

(四) 奉軍の討吉作戰

張作霖が調停に任じた眞意は孟恩遠をして益々反抗の氣勢を擧げしめて田中玉の來任を中止せしむる事が當面の主眼とする所であつた。自ら武力的高壓手段を取つて孟恩遠を驅逐し其の功を以て孫烈臣を吉林督軍に任命せしめ漁夫の利を獨占せんとする魂膽も其の一であつた。勢ひ若し不可能な場合は孟恩遠を暫時留任せしむるの策略であつた。何れにしても吉林問題解決の鍵は張作霖の手にあつて政府も孟恩遠も活殺の權を張作霖に握られてゐた。張作霖は政府に向つて嚴勵主義に依り吉林討伐を主張すると共に孟恩遠に對しては又恭順奉命を勸告して已まなかつた。

孟恩遠が頑然として命を聞かざる以上は武力調停を斷行するに決した。黒龍江督軍の鮑貴卿と電商し吉林討伐軍の組織に着手した。第二十七師長の孫烈臣を吉林討伐軍總司令に任命し四個混成旅團より成る約二個師團の討伐軍を編制したのである。

討伐總司令	二十七師長	孫烈臣
第一旅(二十七師)	司令	張作相
第二旅(二十八師)	司令	汲金純
第三旅(二十九師)	司令	陳錫武

第四旅(許蘭洲軍) 司令任國棟

討伐軍の陣容整備し、四路進攻し吉林に向け進撃せんとするの勢を示した。

(五) 田中玉の赴任婉辭

孟恩遠を擁して政府反対の中心人物である高士儕、裴其勳等は麾下の吉林軍を督勵して戰備を怠らず猛烈な示威運動を始めた。田中玉の來任を拒斥するの態度を持続した。又一方吉林各界の反対派を壓迫し自派の御用人物等を糾合し孟恩遠の留任運動を開始させた。各界の請願代表なる人物は陸續北京に赴き總統府、國務院の間に狂奔したのであつた。

新任督軍の田中玉も最初は赴任の意があつた。それが吉林政局の紛亂せると吉林各團の名義を連ねた電報に「吉林治安の爲め暫く來任する事を延期されたし」と云ふ婉曲な就任拒絶の態度に接し我れから好んで紛亂の渦中に飛び込む事を避け吉林赴任を斷念した。

十月三十日田中玉は張家口の任地より北京に入り段總理に面會して吉林政局に就ての意見を陳述した。

「新任の察哈爾都統たる第七師長張敬堯は湖南討伐司令として軍を率ゐ南征し目下直に赴任するを得ず、察哈爾都統の一席は邊關の重鎮にして一日も曠職すべからず殊に吉林方面の反對烈猛烈なれば此の際赴任するは吉林の紛亂を更に擴大するの虞あるを以て吉林軍民の要請を容れ今暫く孟恩遠を留任せしめ時期を見るが大局上より打算して有利なり」と說いて暗に自己の吉林赴任を婉辭するの意を表明したのであつた。

(六) 孟恩遠居据成效

北京政府は其の面目と威信を保つ上に於て一度發表した孟恩遠の更迭命令を撤回するを得ざるも東三省は外交上、特別の位地にあり若し萬一吉林問題の破裂が延いて各方面に及ぼすべき影響を憂慮した結果、一時孟恩遠に對し外剛内柔の政策を執るに軟化した、田中玉の赴任を緩延させた。

前察哈爾都統何宗蓮、講武學堂長陳光遠の兩人を吉林宣慰使として善後協定の爲め吉林に派遣し孟恩遠と會商せしめた。

張作霖も亦此の間に立ちて斡旋した、田中玉赴任を婉辭して第一の目的は達せられても、露骨に

自己の直系を代ふるは断じて不可能なので一應孟恩遠の留任を圖つた。高士懷、裴其勳等の首謀者に對しても抗命の罪を問はない事と其の安全を保證し一意恭順を勸告したのである。北京政府も孟恩遠に二ヶ月の督任延期を許容したので吉林獨立宣言を取消に至つた。

十一月對南問題に就いて飽くまでも武力政策を執らんとする段總理は馮總統一派の主和政策と衝突せるために免職されたので直隸派の長老王士珍出で内閣を組織した結果、本來直隸派の孟恩遠は頗りに王士珍に媚び地位の擁護に努めたのであつた。十一月哈爾賓に於ける過激派が五ヶ條の宣言を發し東清鐵道乗取を畫策し形勢悪化した際、孟恩遠は北京政府の訓令を奉じ兵を哈爾賓に送り東清鐵道長官ホルワット一派の穩健派を援護し過激派の行動を壓迫掣肘し乗取策を畫餅に歸せしめた。

王士珍内閣は其功績を以て復辟加擔の罪と相殺し正式に吉林督軍に留任せしむる事に内定した。そこで孟恩遠は吉林省公民各團體に旨を銜め正式留任命令の發表を請願させた。一方張霖作も亦當分孟恩遠を吉林より動かすの不可を悟り自己の羽翼充實するの日まで留任せしむるに決し政府に對して「舊臘哈爾賓事件の鎮定は一に孟督軍の威望厚きに依る所なれば引續き孟督軍を留任せしめて與

に東省の大事を商量し以し大局の維持に資せん」と電請するに至り孟恩遠の居据り運動は成功したのである。然しそれも張作霖が勢力充實までの事で早晚放逐さるべきは明白であつた。

第八章 南北の抗争

第一節 天津の主戰會議

(一) 南方討伐の決議

袁世凱の死に依り一度結合した新支那の統一が參戰問題に就て意見を異にし再び決裂した、復辟前後の政變に於て時の大總統黎元洪に解散された國會善後策に就て馮總統と段總理の間に意見の衝突を來し段總理主張せる臨時參議院召集說勝利を占め。其の結果南方との關係は一層乖離した。八月末南方派は廣東に非常國會を召集し軍政府の設立するや北方も亦九月二十九日參議院と國會召集令を發表したのである。

十一月十一日北京參議院の開會と前後して湖南の變となり督軍傅良佐、省長周肇祥等長沙を脱出し王汝賢、范國璋敗走して湖南總司令程潛、長沙に入るに於て段總理免職された。王士珍出づるに及び段派に屬する北方主戰派武將等は猛然蹶起した。

安徽督軍倪嗣沖、山東督軍張懷芝を筆頭に直隸、奉天、山西、陝西、浙江、福建、黑龍江、綏遠の十省區長官及び代表等悉く天津に參集して對南政策に就て鳩首討議した。之れ所謂第一次の天津會議である。議する所の内容は南方討伐の強硬論と馮總統に停戰を懲懲せる主和派即ち李純、陳光遠、王占元等の所謂長江三督軍の彈劾決議であつた。時に十二月四日にして張作霖は代表として奉天督軍參謀長楊宇霆を派遣し該會議に參加せしめたのである。

年も明けて七年一月五日主戰派各督軍は再び天津會議を開いた。直隸督軍の曹錦牛耳を執り山東、奉天、吉林、黑龍江、山西、察哈爾、綏遠の各省區長官及び代表之れに參加し舊國會復活の反對、討南軍の兩路南征の可否に就いて討論し「時局は武力を以てする外断じて解決の道なし、宜しく各省聯盟して南方討伐令の宣布を中央に請ひ若し聽かれる時は各省獨立を宣言して最後の對抗手段と爲す事」を決議した。次で倪嗣沖、張懷芝、張作霖、閻錫山、陳樹藩、趙倜、張廣建、鮑貴卿、李厚基、姜桂題、

田中玉、張敬堯等其の他十七省區長官の聯名にて強硬なる主戰論を提唱するに至り主和政策を把持してゐた馮總統及び王士珍内閣の直隸派は非常なる壓迫を蒙つたのである。

(二) 天 津 會 議 の 黑 幕

元來天津會議の發案者は倪嗣沖でもなく張懷芝でもなかつた。或は曹錦、張作霖の徒でもなかつた。段祺瑞の寵兒徐樹鋒が即ち該會議實際の主謀士であつた。張作霖の參謀長である楊宇霆は之れを輔佐して協力奔走したのである。徐樹鋒は日本陸軍士官學校出身の秀才、夙に北洋軍閥の頭領段祺瑞の智囊を以て稱せられ、機略縱横、雋敏の才幹と相俟つて一代の策士として其の名著聞してゐた。

前に馮總統と段總理との間に起れる府院の權限爭に關し總統府秘書丁世暉と衝突し國務院秘書長の重職を辭し後將軍府事務廳長の閑職についた。復辟前後の政變に免職されて再び復任した段祺瑞の新内閣に陸軍次長として實際の陸軍總長となり十一月段祺瑞免職され王士珍出づるに及び辭職したのであつた。

王士珍の主和内閣に嫌焉たらざる徐樹錚は段祺瑞の復活に就て日夜企畫奔走した。王士珍内閣の推倒策を運らすに餘念がなかつた。之れが遂に天津會議となつて出現したのであつた。徐樹錚の相棒を勤めた楊宇霆は奉天法庫縣の產、徐樹錚と均しく日本陸軍士官學校砲兵科の出身である。其の卒業は徐樹錚の方が二年の先輩である。楊宇霆は宣統の末年歸國し奉天軍械局長に任じ民國成立後砲兵大佐に任官した。其の才識は張作霖に知られ重用する所となつた、張作霖盛武將軍に任せられるゝや參謀長代理より更に督軍參謀長の重職に抜擢され陸軍少將に進補し張作霖の倚重する所甚だ篤かつた。

智謀百出の徐樹錚が先づ第一に眼をつけたのは張作霖であつた。剽氣横溢せる張作霖が段祺瑞一派に好感を有してゐるのを幸に先づ之を利用するの策を立てたのである。當時 張作霖の代表として京津間を往復しむる参謀長の楊宇霆に對し同窓の誼を以て說破した。楊宇霆をして張作霖を動かさしむると共に各省區に分布せる段派の武將連に通電して天津會議を開いたのであつた。

(三) 張作霖の主戦高唱

當時段派の一驍將として目せられた張作霖は天津會議以來主戦の急先鋒となつた。最も强硬な對南意見を主張して李純、王占元、陳光遠等の長江三督軍が臨時參議院の解散を以て南北和議の前提とすべく主張せるにも断じて耳を傾けなかつた。湖南の形勢切迫するを見るや七年一月十九日大總統馮國璋に宛て、

時局の紛糾極點に達せり。速かに曹錕、張懷芝の兩路司令に轉令して大軍を南下せしめ以て萬一に備ふべし、況んや南方既に和議の誠意なし、政府は宜しく堂々たる討伐令を下すべし、或は以て千鈞一髮の危局を挽回し得べし云々

との意味を電請し政府當局に最後の決意を促した。强硬なる態度を示して暗に中央政府を威嚇したのである。

主和政策を堅持して動かなかつた流石の馮統も主戦派督軍連の强硬なる態度を制壓し得ず一月三十日遂に湖南討伐令を發布するの餘儀なきに至つた。南北の同胞亦兵火の間に相見え骨肉相搏つての惨劇を演出した。斯くて天津會議は段派の勝利であつた。徐樹錚の陰謀見事成功したのである。

第二節 張作霖と徐樹錚

(一) 張と徐の提携

一代の智者張作霖と當代の策士徐樹錚とが互に一時の政略上密接の關係を結ぶに至つた遠因は實に民國六年春、奉天官場に勃發した大政變當時である。二十八師長の馮德麟が督軍たる張作霖の專横を憤り且つ半ば其の勢力の强大なるに嫉視し、張作霖を推倒し自ら取て代るべく謀り、張作霖的地位亦危殆に瀕した頃であった。時に國務院秘書長の重職を斥いた徐樹錚は依然段總理の帷幕に參畫してゐた。奉省の政變に對し張作霖の肩を持つて段祺瑞を說破し馮德麟を制壓柔させたのである。其の結果馮德麟の張作霖排斥は全然失敗に歸し却つて張作霖の地立益々鞏固となつた。そこで張作霖は深く徐樹錚の援護を感謝し、之を徳とし重金を贈つて其の斡旋の勞に酬ひた。之れ兩者の間に始めて一種の關係を生じた濫觴であつた。

爾來兩者の間に信使の往來頻繁となつた。張作霖は中央に於ける徐樹錚の勢望を認め徐樹錚に提携し其の勢望を利用して自己の勢力を伸張擴大せんと期し、徐樹錚はまた張作霖の武力を利用し自

己の政治的野心を満さんと欲し、兩者は相互に利用せんとする目的の下に其の提携は成立した。此の間に立ちて斡旋奔走最も努め握手せしめた者は説くまでもなく無論楊宇霆であつた。

(二) 秦皇島の武器横奪

年少氣銳の徐樹錚が天津會議に次で第二の秘策は張作霖の武力を利用し秦皇島に於ける兵器の横奪であつた。

當時日本の泰平公司が對支軍器購入契約に基き其の一部を商船武德丸に積み込んで秦皇島に陸揚して支那側に引渡してゐた。之れに着目した徐樹錚は相棒の楊宇霆を說いて張作霖を動かした。そして徐樹錚(背後に參戰督辦となつた段祺瑞のあることは無論であつた)と張作霖の間には暗々裡に楊宇霆を通じて一種の默契が成立したのであつた。徐樹錚の秘電一度奉天に飛ぶが早いか、張作霖は電光石火の勢で二十七師五十四旅長の張景惠に旨を含めて秦皇島に急派した。之れ二月十二日である。即ち張景恵を南征奉天軍司令に任命し歩兵二個大隊、機關銃隊一個中隊を之に統率せしめ南征奉軍先發隊の名を冠し堂々入關せしめたのである。表面の名義は如何にせよ張景恵急遽入關の重

要使命は問ふ迄もなく秦皇島の兵器横奪にあつた。秦皇島に到着した張景恵の一隊は武力を用ひて兵器保管の當事者を威嚇し日本側より引渡を受けた大砲小銃機關銃その他を合し約三萬餘挺の兵器を横奪するに成功した。兵器は張作霖の命令通り大半奉天に輸送し一部は之を天津に送つた。之れ

張作霖と徐樹錚とが暗に共謀して行つた事件である。兩者が提携の第一歩であつた、横勢慾に飢えた野心家同志が互に利用するための握手で所謂狐と狸の誑合の序幕であつた。

奉天軍の兵器横奪に對し中央政府から張作霖に抗議を發して引渡を要求するも更に應じなかつた。段祺瑞を背景とした徐樹錚が當の相棒である上に陸軍總長も亦安徽派の段芝貴である關係上抗議は表面だけの事であつた。故袁世凱の大總統時代奉天省から中央に貸與した多數の兵器を今猶ほ返還されない代償として留保したのであると辯明し返還する模様もなく結局政府の引渡要求は徹底せずに終り、一時奉省に保管さすると云ふ名義で漸く表面を糊塗した。馮國璋と王士珍等の所謂直隸派内閣が張作霖徐樹錚等のために翻弄されたに過ぎない。

秦皇島の兵器横奪に成功した張景恵はドン／＼奉天軍を進めて天津に到達した。張作霖は頻りに太兵増派の準備を行ひ王士珍内閣の軟弱な對南策を鞭撻するの舉に出で當路者をして顏色ながらしめた。

(三) 張 徐 の 密 約

二月二十六日 夜段祺瑞の懷刀として鳴る徐樹錚は突如北京より奉天に來た、表面の名義は露國過激派の東漸に伴ひ邊境の物情騒然たるを以て北方露境の事情視察と云ふ觸込みであつた。が眞の目的は張作霖との會見にあつたのだ。

之より前き數日王士珍の主和内閣は徐樹錚一派の壓迫に堪へず瓦解し、後繼内閣の組織行惱み、内務總長の錢能訓が一時代理總理に任せられた。之れを見た徐樹錚が「時や來れり」と拍案一番張作霖の武力を藉りて段祺瑞内閣を復活せしむるの決心を堅めた。それに南征問題、軍器處分問題にして張作霖と秘密に協議する必要から來奉したのであつた。

張作霖と會見した徐樹錚は蘇秦、張儀の辯を振ひ先づ世界の變局より説き起し全支那統一の急務を纏述し更に支那四千年の歴史を引照し支那は武力統一の外解決の途なしと斷じて南方討伐の必要を論じた。之れが前提として來るべき秋の正副總統改選に於て段祺瑞を大總統に擁立し、張作霖を

副總統に選出し以て支那の天下を北洋派の手中に握るの急務なるを力説した、最近政局の混亂に乗じ段祺瑞をして三度内閣を組織せしめ新國會の總選舉を行はせ自黨議員をして國會の絕對多數を占むる事は總統選舉の前準備として緊要なる理由を論じて張作霖の武力援助を懇請した。縱横の機略を以て張作霖を説破し奉天軍の南征斷行を懲懲し其の交換條件として張作霖を必らず副總統に選出せしむべき旨を誓つた。中央に於ける徐樹錚の勢力と其の智謀と才略とに推服し深く信頼してゐた張作霖は將來覇を中原に唱へんとの大野望を抱いてゐた際とて、徐樹錚を利用する考にて之に賛成した。徐樹錚の提議を以て渡りに船とし段内閣の復活に就て武力後援と奉天軍の南征を快諾した。そして張作霖と徐樹錚の間に一種の密約は結ばれたのである。

(四) 張作霖の四個條

機會利用家の張作霖は策士徐樹錚との密約に基き更に從前に倍する强硬な主戰論を表明し南方の武力討伐を高唱した。入關奉天軍司令の張景惠に電命して奉天軍を廊坊より北京城外の豐臺に進め、政府當路を威嚇し張勳の一の舞を演するのではないかと疑はしめた。そして三月十六日張作霖は陸續奉天軍の後續部隊を入關せしめつゝ政府に向つて突如四ヶ條の要求條件を提出し其の承認を強請した。萬一政府が拒絕すれば武力に訴へても主張を貫徹し兼ねまじき所の素破らしい鼻息であつた。主戰派督軍としての態度を鮮明にして政府に内薄したのである。

(一) 段祺瑞内閣の組織

(二) 長江三督軍の問責

(三) 東三省巡閱使新設

(四) 新師團の増設

此の四ヶ條こそ即ち馮統一派の主和派に對する威嚇であつた。「要求を聞くか聞かぬか返答如何」と刀の柄に手を掛けて居合腰に詰め寄せた物凄い場面であつた。張作霖を操縦する傀儡師が徐樹錚である事は問ふまでまなかつた。

(五) 張作霖南征主張

南征問題に關し豫め徐樹錚を通じ段祺瑞と默契のあつた張作霖が段内閣出現を速むるための出現

は陸續北京の城外に迫つた。馮總統に對して「段内閣成立せば十日以内に北京附近の兵を全部撤退して長沙、岳州方面の攻撃を援助のため南下せしむべし」との條件を提出した。三月中旬岳州、北軍の手に奪還されたので和議説頭を擧げ出した傾向のあるを洞察し十九日また馮總統に對して電告して曰く

南方は常に亂を構へて國政を紊す事久し。然も勝てば則ち進み敗るれば則ち和を祈る。其の誠意なきは萬人の認むる處なり。今幸に岳州を恢復したるを以て此の機に乘じ極力猛進せば妖氣を蕩平し座して西南を制する事敢へて難事に非らず、聞く朝野、今もた、和議を唱へて總統の聰明を掩はんとする者ありと冀くば我が大總統萬、邪說を探納して失岳の故轍を踏む勿れと和議反対の主戰論を主張した。京奉線軍糧城(天津東方)に南征奉天軍總司令部を新設した。張作霖自ら總司令に任じ、徐樹錚を副司令に任命し南征奉天軍指揮の全權を委ねた。之れが參謀長としては天津會議以來、徐樹錚の相棒である楊宇霆が任命され、奉天軍械廠長の丁超も之れに參與し其の參謀副官等の任命となり諸般の設備整ひ陣營全く完備し安徽督軍倪嗣沖と相呼應し盛んに南征の氣勢を張つて政府を威嚇した。

(六) 奉、天、軍、の、南、征、

越えて數日、北京の政局は張作霖の注文通りに展開して來た。前に提出した四ヶ條中の第一項である段祺瑞内閣は出現した。南方最負の馮總統も張作霖の武力的脅迫と徐樹錚の暗中飛躍に敵し得ず遂々段祺瑞の組閣を諾し徐世昌、田文烈等をして段祺瑞の出廩を勧請せしめた。斯くて北方の政權は再び主戰派武人の手に落ちた、之れ三月二十三日である。張作霖は段内閣擁立の第一功勳者として愈々段祺瑞の信賴を深くし頗る得意の色があつた。段内閣が成立したので北京附近の奉天軍漸次撤退して南征の途に就いた。張景惠の先發隊を筆頭に二十七、八、九の三師及び新編招募の各混成旅は漸次南下し三月末、二十九師五十七旅の百十三團は徐州に到着した。

そして南征奉軍は陸續南下し日と共に増加した。孫烈臣、汲金純、吳俊陞の三師長を始め許蘭洲、張作相、張景惠その他各混成旅長等は湖南、湖北、福建、河南、陝西、直隸の各省に進駐し南方に對して一大勢力を加へ其の數約五萬と稱せられた。

(七) 徐樹錚の跋扈

年少氣鋭の徐樹錚は無比の大野心兒であつた。縦横の機略を以て自ら段祺瑞の後繼者を以て任じ、中央政界に最大の権力と名譽とを獲得するを念としてゐた。剃刀のやうな銳さを持つた徐樹錚も手に一兵をも持たないので充分の活躍が出来なかつた。それでも血氣の勇に任せて功名を焦り常に自己の勢力扶植と擴大に汲々としてゐた。

それが一度、南征問題を口實に。北方の強張作霖を説き落して奉天軍の副司令になつたのは徐樹錚の大成功であつた。之れ即ち鬼に金棒であつた。恰かも蛟龍雲霧を得たるの觀を呈した。徐樹錚は忽然として大立物になつた。兵力を背景に主戰派の急先鋒として一方の重鎮となつた。大軍を率ゐて南下後は湖南、湖北の地方に勢威を振ひ、或は京津間を往來して盛んに暗中飛躍を行ふたのである。

南征の師、士氣振はざると王占元、曹錕等との意志疏通のため段總理を漢口に迎へ北方督軍及び代表者を召集して時局會議を開き總統改選、西南討伐等の問題に就て協定するなど奔走最も努めた。

そして其の天馬空を行くやうな行動は時に横暴となり、時に跋扈と化し前敵司令等の感情を害し排斥を受けた。然も六月十四日、前陝西將軍の陸建章が山東、安徽、陝西の軍隊を煽惑し土匪と聯絡し北方に叛旗を翻すの陰謀ありとし、之を奉天の軍司令部に詐り招き銃殺したので四方より猛烈なる非難、攻撃を受けた。餘りに銳い切味は圓満な調和性を缺いて德望がなく、敵味方の差別なく八方に敵を造るの状態であつた。智謀才略に於ては當代比肩する者のない徐樹錚としては之れが一大短所であつた。

(八) 奉軍南征の目的

北方の征南軍、湖南の戦に敗退し形勢急變のため第一路總司令の曹錕、責を負ひ辭意を電請した。そこで徐樹錚は曹錕に代り自ら總司令となつて奉天軍を第一線に立て決戦せんと策したのである。之れ徐樹錚が年來の宿望であつた。奉天軍の精銳を中堅に北洋軍の陣容を新たにして南軍を蹴破し大功を樹てゝ現在、より以上の権力を掌握せんとする野心の發露であつた。

奉天軍の南征に關する一切の指揮權を徐樹錚に委任した張作霖は遽かに狼狽し出した。元來、老

猶な張作霖が徐樹錚と密約を結んで麾下の奉天軍を南征させた理由は直接、實戦に當つるためではなかつた。堂々たる聲明は一種の自己宣傳に過ぎなかつた。南征軍の美名の下に中央より巨額の軍費と武器を得るためにあつた。曹鋐、張懷芝等の北洋軍が戦線に立つてゐるので其の背後にあつて撃援し南方を威壓するに止り戦線に立つてゐるの意志は最初から無かつた。それが張作霖は徐樹錚の意のある處を推して對策を運らした。之れ自己の一兵だにも損傷するを好まない張作霖として當然であつた。張作霖麾下の孫烈臣、汲金純、吳俊陞、張景惠、張作相等の各武將は夙に徐樹錚反対派であつた。之等の武將等は徐樹錚の副司令任命當時から既に不快の念を萌し徐樹錚の指揮に屬するを不平としてゐた。が然し張作霖が徐樹錚を絶對的に信任してゐるので張作霖に對し進んで徐樹錚反対の意志を表明する事を憚り黙從して來たのである。それが徐樹錚の獨擅專行甚しく横暴日に昂するのを見て憤慨した。「最後の獲物は奸詭狡猾な徐樹錚一人に奪はれ結局奉天軍は國民の怨府となり最も馬鹿を見るに至るべき」を看破した。張作霖に向つて「奉天軍は奉省軍官を以て統率せしむべし何ぞ外人を招くを要せん」とて徐樹錚の奸策と無誠意を説いて反省を促した。それに又、張作霖の

懐刀として奉省文治派の大立物である秘書長の袁金鎧も長作霖に對し徐樹錚を攻撃し「公（張作霖

を指す）の力を藉りて以て其の個人の權利の伸張と私を囲るに過ぎざるのみ」と極言し徐樹錚を遠ざけん事を勸告したのである。

此處で變作霖も稍や後悔した。急に南征方針を變更し、徐樹錚の横暴を牽制するために孫烈臣等の勸告を容れて三師長に命じ南征奉軍を分擔統轄せしめた。そして一方南軍との衝突を避くために奉天軍を戰線より撤退するの外はなかつた。然し何等正當の理由もなく撤退する事は當初の聲明に顧みても張作霖の面目上、不可能であつた。之れがために奉軍引揚の口實として露境邊防の急務を力説した。勞農露國の東漸と日支軍事協定の締結に依り北滿出兵の必要あり奉省の兵を永く南方に遠征せしめ居くを得ざる事を綴述したのである。それに六ヶ月分の軍費百五十萬元の支給と武器の供給を迫り、政府が到底應じ得ない種々の難題を提出した。政府が之れに應じ得ない、否應ずるの實力なきを暴露するのを口實に奉軍の撤退を斷行せんとするにあつた。之れが即ち張作霖の策略であつた。張作霖の態度の變化を洞察した徐樹錚は第二路總司令たらんとする運動も各方面の反対を豫想して遂に之を斷念したのであつた。

(九) 張徐の關係決裂

元來徐樹錚が最も熱望してゐたのは兵力であつた。春秋戰國の時代に均しい混亂の支那に於いては霸を天下に唱へんとせば如何なる英雄豪傑にても武力の後援が最大條件である。武力を有しない以上、雲霧を得ざる龍の如く驚天動地の大運動は到底不可能である、戰國策士の風格を持つた徐樹錚は意を此の點に致し久しく私兵の養成に就て腐心してゐた。經費の出所と武器の供給が意に任せぬために流石の徐樹錚も手を染め得ずに空しく焦慮してゐた。それが張作霖の風向が變つたのを機會に大膽にも最後の手段として急速私兵の招募に着手した。張作霖に秘密であつた事は勿論、早晩發覺すれば張作霖の激怒を買ふ事は充分覺悟の上であつたらしい。其の證據には奉天軍の軍費と兵器を無斷に濫用した事である。

奉軍參謀長楊宇霆と奉天軍械廠長丁超とが共に日本士官學校出身の同窓たるを奇貨とし兩名を甘言好讐を以て籠絡した。楊宇霆が管理してゐた奉天軍の軍費の一部を自己軍隊の招募費に濫用した且つ又、丁超をして其の保管してゐた奉軍の武器を密かに徐樹錚の新軍に交付せしめたのである。

越えて數日、此の秘事を嗅ぎ出した張作霖の憤怒は案の條極點に達した。徐樹錚の奉軍副司令の任を解いた（後ち二十七師長の孫烈臣が副司令を任じた）。徐樹錚に加擔し恣に軍費、軍器を供給して徐樹錚の私兵を編制させた楊宇霆、丁超の二少將は背任の罪に問はれ免職の上、永の暇となつた。斯くて北洋主戰派の中堅として膠漆も啻ならざりし張作霖と徐樹錚との間は終に決裂した。流石老猶な張作霖も徐樹錚のために一杯喰はされたのである。徐樹錚を利用せんとして反対に利用され相撲にすれば背負投を喰つた形である。

張作霖の徐樹錚に對する激怒は甚しいものであつた。徐樹錚が其の怒を釋くために來奉して百方陳辯しても耳を傾けず徐樹錚を一室に監禁して正に銃殺せんとした、陸建章の怨が來て徐樹錚も同一運命に陥るのではないかと思はれた。それも張作霖左右の諫言と段祺瑞の調停で銃殺を斷念し無事北京に歸した事もあつた。表面は兎に角、張作霖が徐樹錚に對する深怨は此の秋に胚胎したのであつた。

第三節 正副總統選出問題

(一) 張の副總統熱

北京政界に對する徐樹錚の豫定計畫は著々實現した。先づ段内閣の下に行はれた新國會の選舉終了し段派は政府の威力を以て絕對過半數の御用黨を選出するを得た。之れ俗に安福俱樂部と稱する政黨である。正副總統の選舉期も亦、目睫の間に迫り北京政界は各派の暗中飛躍愈々猛烈となつた。本來、機會利用に巧みな張作霖は南征以來、頗る不平であつた。自己が段内閣擁立の殊勳者であるにも係らず前に東三省巡閱使に任命されん事を再々要請せるに正式任命の發表を見ぬので内心穩かでなかつた。そこで南征問題に關し徒らに勞するのみで酬らるゝ所絶無なのに顧み今度こそ徐樹錚との誓約を楯に是非、武力を用ひても自ら副總統の榮冠を得んと欲した、副總統たる事が暫時不可能とすれば東三省巡閱使として滿洲兵馬の權を掌握せんと決心した。それで七月二十八日、名を時局問題の協議に藉り重兵を率ゐて天津に入つた。

(二) 天津の豫備會議

張作霖は天津に於て馮總統、段總理の代表者を始め曹錕、徐樹錚、濟耀光、田中玉、倪嗣冲、張懷芝等の北洋派武將と會合した。そして總統選舉問題、南方討伐方策、國防策等の時局問題に就て討議をした。然し當面の問題は正副總統選舉の豫備會議が主眼であつた。張作霖としては副總統問題は勿論の事、張勳の特赦運動と劉恩格を下院副議長に選定せしめんとする副目的を抱懷してゐた。

正副總統の人選は各派の暗中飛躍盛んにして口論互駁、容易に決せず暗鬭亂轍猛烈を極めた。張作霖も亦、此の間に於て副總統の榮冠を占めんと運動を試みた。徐樹錚は又張作霖との誓約を此の機會に實行し其の悪感を和げんと期し段祺瑞を大總統、張作霖を副總統に選舉すべしと主張し。奔走最も努めた。それも御用黨安福俱樂部に屬せる舊交通系徐世昌を大總統に擁立せる關係から脱會したので運動失敗に終り。流石の徐樹錚も大勢には抗する事が出來なかつた。

(三) 張作霖の讓歩

時局會議は南北統一を以て刻下の急務とするに意見一致し次期大總統としては平和統一の政見を抱いてゐる北洋文治派の元老である徐世昌を選舉するに決定した。大總統は以前から略ぼ徐世昌に

内定してゐたので別段異議もなかつたが難題なのは副總統の人選であつた。直隸督軍曹錕と奉天督

軍の張作霖とが互に候補者として競争の位置に立つた。曹錕も張作霖も均しく副總統を條件に南征に従つたので調停甚だ困難であつた。それで兩者の競争を中止さるために段祺瑞を副總統に選出すべしとの議もあつた。然し結局最後に曹錕を選舉するに決定した。大總統の馮國璋が次期總統に當選は必然不可能である所から直隸派として馮總統の衣鉢を繼ぐ曹錕を選出するを穩當とされた。

張作霖も四圍の形成上、副總統を曹錕に譲り、東三省巡閱使の任命を以て甘んずるの餘儀なき立場に至つた。正副總統の新選と同時に馮總統野に下り段總理亦挂冠して新内閣は各派聯合の下に組織し段内閣の政策を踏襲し以て一致團結を謀り南方に對抗すると云ふに協議一致したのであつた。

張作霖は深く期する處あるものゝ如く敢へて協調を破る事なく黙々として時局の推移を觀望した。

(四) 新國會と張作霖

れに列席し各國駐劄公使亦參觀し崇嚴に舉行された。新國會の成立に依り臨時參議院は解散された。

之より先き張作霖は天津會議に於て自己の主張を貫徹し得なかつたので頗る不平であつた。それで猶ほ副總統の位置に就て未練があるやうに傳へられた。京奉線廊坊駐在の奉天五個大隊を黃村に進め更に南苑に進駐せしめ政府に對し威嚇の態度を取つた。一方奉天派議員の領袖である劉恩格を衆議院の副議長に選出せしむべく運動した。正副議長は已に安福派の領袖である王樹唐と王印川を選出するに内定してゐた。が張作霖の提議に接した安福派は徐樹錚との關係上張作霖の感情を融和するために王印川を説いて副議長を劉恩格に譲るに決した。八月十日の議長選舉にて議長に王樹唐、副議長に劉恩格當選し張作霖の意志は一項だけは漸く貫徹された。

劉恩格は遼陽の出身、民國二年衆議院議員となり國民黨に屬し憲法起草委員となる、第二次革命後京師軍政執法處に捕はれ所謂八議員の一人であつた。後釋放され家に監視されてゐたが袁世凱の沒後、張作霖の秘書となり六年九月臨時參議院議員に擧げられ。此次の選舉に再び當選したのである。袁金鑑子沖漢等と共に奉省官界に於ける遼陽派の領袖である。議會に於ては奉省の議員を率ゐ

張作霖を代表してゐた。

副總統問題に就ては張作霖は遂に強硬意見を捨て、東三省巡閱使として先づ東三省の地盤を鞏固にし他日の大飛躍に備ふるに決した、張勳の特赦其他二三問題に就て政府に申請して中央の時局一段落を告げしを以て八月二十八日夜奉天に歸つたのである。

(五) 徐世昌の出馬

九月四日新國會は大總統選舉を行ひ豫定の如く大多數を以て徐世昌を選舉した。翌五日更に副總統選舉の豫定であつた、處が曹錕の副總統に反対する者が現はれ非安福派議員三十名の聯署にて副總統選舉は一時延期の動議を提出した。

殊に當日の出席議員は僅かに百二名にて法定數に達せず流會となつた。副總統として曹錕を選出する事には各方面に反対者多く各黨派間にも競争激甚を加へた。然し再三選舉を附議されても實現を見ず曹錕の目的達せられず、副總統は缺員のまゝであつた。次で十七日徐世昌は主和政見を發表し「戰を止め和を講じ統一を速成する事。憲法を定め共和の基礎を樹立する事。南北軍隊を撤退し

民政を維持する事」の三ヶ條を中外に聲明したのである。

越えて十月十日國慶紀念日の當日徐世昌は大總統就任式を舉行し段總理は同日辭職を聽許され徐總統系の内務總長錢能訓一時國務總理代理を命ぜられた。

(六) 東三省巡閱使

天津會議に於て副總統の榮冠を断念して歸奉した張作霖は政府より東三省巡閱使に任命の内意を受けてゐた。政府は副總統を譲つた張作霖の不平を慰する事と北方露境の騒亂に顧み東三省の軍權を統一して之に對抗せしむる必要から愈々東三省巡閱使の任命決定し九月五日國務會議を通過し七日正式に發表された。

奉天督軍
兼署省長　張作霖

特任東三省巡閱使

之れに依り東三省に於ける張作霖の勢力は確實に北京政府より承認された。官制、權限等に就て

は何等の規定も発表を見なかつた。が東三省兵馬の權を總攬するにある事は相違なかつた。往年清朝時代の東三省總督制の復活であつた、實際の勢力に於ては東三省總督の權力以上であつた。

張作霖の大滿蒙主義は實現の第一歩に就き黒龍江既に其の勢力圈内に入り殘るは吉林の孟恩遠のみとなつた。孟恩遠は張作霖が東三省巡閱使となる以上それに反対し其の軍令を奉ぜぬ事は明瞭であつた。名は東三省巡閱使と稱しても張作霖の軍令は孟恩遠ある間は吉林には到底行はれぬのは明白であつた。そこで張作霖が東三省巡閱使として勢力を充實せしめ吉林より孟恩遠を放逐し完全に東三省を自己の掌中に把握するの日は蓋し遠からず實現すべしと觀測された。

越えて十一月十五日、張作霖は徐總統の召集せる北京督軍會議に列席し歸奉後、北京に於て鑄造中であつた巡閱使の職印が出來上り到着したので督軍公署に奉省文武の大員を召集し正式に巡閱使就任の式を舉行したのである。張作霖の勢力之より益々振ふに至つた。

第四節 上海會議の會後

(一) 張作霖和議反對

南北和議問題に對する張作霖は徹頭徹尾主戰論を堅持して妥協論に耳を傾けなかつた。南征第一路總司令曹錕麾下の猛將として勇名を馳せた第三師長の吳佩孚が、岳州、長沙を恢復し衡州に進駐し南軍と聯絡し譚浩明、譚延闇、馮玉祥、程潛等三十餘名と聯名の下に平和通電を發し促和を唱道するや張作霖は甚しく憤慨し頻りに主戰を高唱し極力反對の氣勢をあげた。馮國璋、徐世昌の新舊總統を始め國務院、參衆兩院、各省督軍省長各司令新聞社等に宛て長文の反對電を發した。

譚浩明等の通電は是非を顛倒し黑白を淆亂する之れより甚だしきはなし。彼輩黃口を以て天下の耳人を掩ひ世道人心の憂を釀す。此に於て作霖等默視する能はず、夫れ譚浩明等は所謂護法に藉口するも馮總統一國の元首たるは彼輩亦認めて法律に依り產出せる者となす、譚等抗命の初めに當り作霖曾つて少將劉恩鴻を派し大總統に晋謁せしめ諭を奉じ一師を督して討伐に從事す、經略使曹錕の南征亦大總統の明命を奉じ、大總統よりも復た正氣正義の通電を頒布さる、政府の主戰政策と作霖と各省同志の一致賛成となり大總統の命令に服従せるなり、之れ非法にあらず、參議院を召集し國會組織法、議員選舉法を修正し各省區長官は法に據りて選舉を辦理し、兩院議員は法に據り大總統を選舉す、皆均しく大總統の命を奉じて之を行ふ、豈に目して非法と爲すを得ん

や。

と強硬の態度を以て駁撃し主戦を主張し南征副司令孫烈臣、督軍參謀長秦葉を天津に派し奉軍總司令部を整頓せしめ、顧問劉恩鴻を北京に派し政府當局と商議さするなど八方に員を派して主戦政策の貫徹に努力してゐた。

當時奉天軍南征の陣容は副司令孫烈臣に統率され、第一支隊長張景惠は暫編奉軍第一師の二個旅團を率ゐて長沙に駐防し、第二支隊長許蘭洲は一個混成旅を以て陝西に出援し、蔡平本、郭瀛洲、王錫品、梁朝棟、王良臣等の各混成旅及び其他の部隊は京漢沿線より湖北、湖南に分駐し南軍の進攻に備へ中央政府の優柔不斷の態度を責め新總統徐世昌の主和政策に反対してゐた。

(二) 北京の督軍會議

徐總統は南北妥協問題の協議を理由として北方督軍會議を北京に召集した。各省督軍は召集に應じて陸續晉京し、^{正午}張作霖も亦吉林督軍孟恩遠と同車し、十月二十九日正午奉天發北京に晉京した。張作霖は直に徐總統に面謁し時局解決及び國防策其の他の要政に關し委曲其の意見を陳述したのである。

る。

余は軍人なれば服従の天職を有す。若し大總統計を決するあらば余は必らず大總統の意志に順應し以て國家に報ぜん

と誓つた。元來徐總統は張作霖に取りて恩人の一人であつた。前に徐總統が東三省總督として奉天巡撫唐紹儀を從へ奉天に在任せし當時、張作霖は渺たる新民屯駐防の一隊長に過ぎなかつた。直接間接其の庇護推挽を受けたる關係上悲しい哉人情としても張作霖は面と向つて徐總統の和平政策に反対するを得ない苦しい立場にあつた。そこで表面贊意を表し其の命に服従すべく裝つてゐたが内心は大反対であつた。包まんとして包み得ざる不満は事に觸れて其の鋒銳を現はしてゐた。

(三) 張作霖主戦高唱

十一月三日、東三省選出の參衆兩院議員主催の下に張作霖、孟恩遠の兩督軍を主賓とし幕僚、隨員等一同を植物園に招待し盛大なる歓迎の宴を張つた。張作霖は孟恩遠と共に幕僚等を從へ之れに臨席したのである。衆議院副議長の劉恩格は主人側を代表して歓迎の辭を述べたので張作霖は起つ

て謝辭を述べた。曰く

作霖、草野に家を起して今日の地位に祇る、國家と地方あるを知るも此の外、別に求むる處なく一身亦惜しむに足らず、三省は近年、孟、鮑兩公同心協力、一致國のため地方に對し整頓を力圖し最も工藝實業に注意す、吏治に至りては亦力を盡して整侍す、苟も到らざる所あらば諸君の教見を賜るを得ば作霖の幸なり、時局解決は最も困難にして作霖は決して武力専用の野心家に非らざるも武力にあらざれば能く今日の時局を統一し難きは作霖の熟知する所なり、國家の平和及び隆盛は決して空談の能くする所にあらず、必らず途を血肉相搏つの戰爭に藉りて乃ち克く其の目的を達するものなり、歐米各國の立國を默察するも均しく幾多流血の慘事を経たるに非らずや。現在中央政府と地方長官は平和會議の交渉を開かんとするも作霖は断じて反對なり。若し一國の内、和を云ふ者あるも決して承認する能はず、徐總統の人道主義は作霖の最も感佩する所にして南方、果して悔悟の意ありて中央を援護せば吾人も亦贊許するも若し講和を倡言して條件を爭提せば作霖敢て承認せざる者なり、諸君は三省の俊傑、望むらくは團體を固結して國事に努力せん事を。

作霖亦必ず諸君の後楯とならん云々

とて強硬なる主戰論を高唱力説し三省議員を激励した。説く所の武力萬能主義は前に徐總統に答へし誓言と全然相矛盾してゐた。之れ張作霖が徐總統の妥協政策に不滿の結果鬱勃たる胸中の磊塊を吐露したのであつた。

越えて十一月七日安福俱樂部は又督軍會議に参列のため入京中の各省督軍武將等を太平湖の俱樂部に大歡迎會を開催した。東三省巡閱使張作霖、山東督軍張壩芝、兩廣巡閱使龍濟光、安徽督軍倪嗣沖、吉林督軍孟恩遠、湖北督軍王占元、河南督軍趙倜、江西督軍陳光遠、上海護軍使盧永祥、長江上游總司令吳光新の諸將及び錢國務總理以下各總長各次長等を正賓とした。開會と同時に衆議院議長である安福派の領袖王樹唐は主人側一同を代表して歡迎の辭を陳じ安福俱樂部成立の經過と各督軍との關係等を縷述した。張作霖は亦、來賓側を代表して謝辭を述べ南北問題に論及して曰く

南北對等の講和は作霖等の斷じて承認せざる處の者なり

と冒頭し強硬なる主戦論の理由を縷述し

南方に對して平等的の講和を結ぶの理由なし、余は昨日此の理由を英國公使に對して詳細に語れり

とて三省議員の歓迎會席上に於けると大同小異の説を繰返し滿座の主戦派督軍をしてヤンヤと喝采せしめたのである。其の主戦演説は平和妥協の成立難を唱へ時局の前途を悲觀させ督軍會議未だ開かれざるに張作霖は花形役者の觀を呈した。

(四) 和 平 政 策 の 勝 利

南北和議問題に關する督軍會議は十五日總統府に開かれた。會する所の武將は張作霖、曹錕、張懷芝、龍濟光、倪嗣沖、王占元、陳光遠、趙倜、孟恩遠、閻錫山、蔡成勳、盧永祥等及び段祺瑞、錢能訓等であつた。議する所は時局、軍事、外交に關する最後の解決辦法を決議した。國會及び地盤問題、撤兵方法等は略ば決定せるも善後各問題、軍備縮少、軍民分治、財政統一等には充分の效果なく唯だ各督軍の意見を陳述したに過ぎなかつた。之より前、徐總統は各督軍を引見して時局解決策に就て意見を

徵詢せるに皆均しく元首の主和政策に服從し平和の促成を希望するに意見一致し大勢主和に傾いたので主戦派の急先鋒たる張作霖も其の意見を頑強に固執せず、内心には兎に角、表面徐總統の主和政策に服從するに至つた。十一月十六日徐總統は南北停戰命令を發表し南方また二十二日停戰命令を布告するや、南方七總裁の名を以て上海に和平會議開催の主張を徐總統に打電し來り南北の主張漸次接近し和平會議を開くの機運を誘致した。

斯くして南北の妥協、漸く成らんとするの際、双方主戦派は内部に於いて平和運動を妨碍し前途の形勢樂觀を許さぬため日本は英、米、佛、伊の四國公使と妥協勸告を提議し協議の上、支那の將來及び東洋の平和と人道維持の爲め十二月一日五國公使の名を以て大總統徐世昌に平和促進の妥協勸告書を提出し同時に廣東に於ける五國領事に訓電し南方首腦者に對しても同文の勸告書を交付せしめた。

(五) 張 作 霖 に 警 告

張作霖は晉京以來北方督軍團の花形として安福派と聯絡し段祺瑞を擁立すべく錢能訓内閣を彈

勧した。それに種々の陰謀を劃策し活動したが大勢は主和に傾き武斷派の横暴を許さなかつた。其の行動は往々支那の統一を阻碍し政局を攪亂するが如き點があつた。日本は五國政府の妥協勧告を提議したる關係上張作霖を目して時局破壊の中心人物と認め警告せる爲めに流石の張作霖も如何とも爲すを得ず、北京に滯在して益々列國の誤解を招かんことを虞れ十二月十日倉皇として四十餘日振りに歸奉した。歸奉に際し前に財政部に對し奉軍撤兵費として一百萬元の支給を要請せるに僅かに二十萬元の外、支出を肯じなかつたので張作霖は九日朝、怒鬢冠を衝くの勢で財政部に曹汝霖總長と膝詰談判を始め初期の如く支給せよと脅迫した。財政窺乏の際とて之れに應じ得ず漸く五十萬元を調達して支給したので張作霖も之れ以上は到底不可能な事を覺りて納得し同日午後東三省選出の兩院議員其他多數を那氏花園に招待し盛宴を張つて即夜歸奉の途に就いたのである。這次、張作霖の北京に於ける行動に就ては内外の反感を招きたるのみか、張作霖の根據が日本と密接の關係ある滿洲であるために張作霖の行動に關聯し日本の公明正大なる態度を誤解せらるゝ虞ある結果、日本は赤塚總領事をして張作霖の北京より歸來すると共に平和に對する警告的の勧告をなさしめた。其の勧告の趣旨は五國政府が徐總統に致したる平和勧告とは多少趣を異にしてゐた。其の概略

は

東三省は日本と密接の關係あり然るに此の治安維持の責任にある者が妄りに其の地位を離れ且つ其の軍隊を中央に送るが如きは支那全土の統一を妨害するに止らず、延いて東三省の治安維持に支障を來し、彼の白晝強盜及び邦人殺害事件の如きを續發せるのみならず日本の公明なる態度を誤解せしむるの嫌あれば其の行動を慎まれ度

と云ふにあるが如く、張作霖は此の勧告を諒解して爾後軍事會議の席上に於ても各文武官に對し極力「徐總統の政策を援助して南北統一の一日も速かならん事を圖るべき」旨訓諭した。

(六) 上海會議の失敗

五國公使の平和勧告に依り形勢は急轉し南北妥協の曙光を認むるに至つた。南北の和議意見は大いに接近し十二月十一日、徐總統は腹心の朱啓鈴を總代表とする九名の北方和議分代表を任命した。南方も亦、北方の任命と前後して前國務總理唐紹儀を總代表に十名の分代表を任命し和議の陣容は整ふた。北方分代表の中には下院副議長劉恩格も亦、張作霖の勢力を代表して任命されてゐ

た。

然も和平會議の開會は相變らず支那式にて場所も時日も決定せず遷延日を過して容易に決せざる中に民國七年を送つた。

明けて八年一月南北和平會議は愈々上海に開くに決定した。

十一月二十七日停戰命令の宣布以來久しく難產の裡に成立行惱んでゐた和平會議は二月二十日やつと上海獨逸俱樂部に開會式を舉げた。唐紹儀、朱啓鈴の兩總代表を始め南北代表の顔合と爲り和平問題の討議に移つた。

和平會議に對する張作霖の態度は亦一種の謎として各方面より注目された。元來武斷派の張作霖としては上海會議成立するも軍閥打破を標榜してゐる南方派と永久に提携して行くことは不可能であつた。飽くまでも武力統一を理想としてゐた。前に強硬なる主戰論を抱懷して北京の督軍會議に列し主戰の氣勢を揚げしも南北妥協熱の勃興、世界の大勢、日本其の他列國の勸告等、四圍の事情に強要されて一時其の武斷的鋒銳を收め和議の一切を徐總統に一任して國事に干渉せざるべきを宣言して歸奉せるも形勢の變化に従ひ張作霖は自己將來の地盤に大影響を及ぼすこととて雲烟過眼視し

て傍観するに堪へなかつた。和平會議に於ける軍民分治、督軍制撤廢、軍備裁撤等の事實問題の討議に就ては自己を代表せる分代表劉恩格に命じて極力南方の主張に反対せしめた。

陝西交戰問題に依り和平會議の頓挫したので張作霖は武力解決を欲せるも面目上利局破裂の際武力主張の責任を避けんために三月二十日政府及び南北兩代表に再三和會速開を促した。和議に對する張作霖は徹頭徹尾反対であつた。主戰は其の全主張であつたが露骨に反対の氣勢を擧ぐる事を儘み形成の推移を觀望してゐた。

一方停頓せる上海會議に於て南方派之を破壊する目的を以て五月十日唐紹儀より北方に對する最後の要求として八條件を提出した。該條件は北方として絕對に承認し難き條件のみなりしたため會議は遂に決裂した。北方總代表朱啓鈴は辭職の理由を宣布して即時北京に引揚げ折角の和平會議も書簡に歸した。

第五節 山 東 問 題 の 悪 化

(一) 北京の排日運動

五月山東問題に關聯して有名な排日運動が北京に勃發した。巴里の講和會議に於ける山東問題の論争が正當なる日本の主張貫徹し支那が不利の立場に陥つた結果であつた。前外交總長汪大燮を首領とする外交協會を始め在野の親米派一味は平素、段派の親日派が旺盛を極むるを嫌厭し之れが勢力の推倒を劃策してゐた際とて好機乘すべしとなし遂に血の氣の多い學生團を背後から煽動して盛んに反親日派、反日本熱を鼓舞したのに起因してゐた。

五月四日北京大學生始め高等師範、高等工業其の他各學校生徒三千餘名は山東問題の解決に藉口し北京天安門前に集合し學生大會を開いて露天演説を行ひ該問題解決の眞相と日本の眞意を諒解せず、徒らに悲憤慷慨し交通總長曹汝霖、幣制局總裁陸宗興、駐日公使章宗祥等の親日派を指して國賊と罵倒し排日の氣勢を擧げた。彼等は狂熱の極一種の暴徒と變じ潮の如く曹汝霖邸に殺到し焼打し、章宗祥が時宛も日本より歸國し徐總統の午餐會に列した歸途を邀し重傷を負はせ更に陸宗興の邸

の邸を襲撃せんとし排日の示威運動は全國を震撼した。山東省始め各省之れに相共鳴して動かんとするの形勢と變じ國論鼎沸し曹汝霖先づ辭表を提出し錢内閣は總辭職を表明し北京政界に大動搖を與へた。親日派に取つて大なる脅威となり全滅の状態に陥つたのであつた。

(二) 張 作 霖 の 正 論

北京に於ける學生團の排日運動に對し張作霖は強硬な反対の態度を持し奉省の秩序維持に腐心して省城各學校に向つて嚴重に學生の雷同を豫防すべく嚴命し北京在住の奉天同鄉會に電致して奉省學生は努めて學事を修め國事に關與すべからずと訓令した。且つ又、省城軍隊及び警察官に對しても過激派學生等の煽動を受けて妄動し邦交を傷くる事勿れと訓諭し、南方及び山東方面より學生團に對する不穩文書の通信を差押へ之に妄動せんとなせる形迹ある者は銃殺すべしと嚴重命令して排日を取締つたのであつた。

然してまた徐總統、錢總理に對し日本に對する正論を電告して自己の意見を表明した。文に曰く此次の青島問題は學生等が新聞紙に煽動されたる者にして徒らに友邦の罪を鳴らし不規則の行動を敢てするも唯だ友邦の悪感を増加するのみにして何等時難を補ふ事なし。然も學生、猶ほ且つ

斯くの如くんば愚民の妄動は當然と云ふべし、國家は歲々巨費を投じて宏く教育を施すも結果は適々之れに反し實に寒心に堪えず。查するに日本の對華政策は寺内閣成立以後、既に方針を改變して努めて親善を求めるゝあるは東省の近事に徵して明白なり。這回學生等の京議に於いて白晝容易に暴舉を敢てし得たる者は必らず、一二野心家の政争の具に供されたる者にして、彼等は常に外交に藉口し政府に不可能事を責め一方亂黨と結托して天下を擾亂すること露國過激派と選ぶ所なし。されば憂國者愈々多數なれば亡國亦愈々速なるを恐る。應に請ふ我が大總統は毅然剛斷、國家の青島に對する交渉の經過を中外に宣布し一面肇事の徒を嚴罰し以て亂萌を遏し然して邦交を全ふせん事を、

海内の排日熱極點に達せる風潮裡に於いて張作霖は正々堂々日本の對支政策の正當なるを論じ部親米派の妄動に起因せるを喝破し誤れる國論を反駁したのであつた、

（三）奉省の排日彈壓

日貨排斥の風潮全支那に漲るの秋、奉天省は全然此の圈場に立つた。之れは奉省が政治的、經濟

的に日本と密接の關係ある結果、日貨排斥は直ちに自家の營業に及ぼす影響の甚大なるに顧感し躊躇してゐた。然も其の一半は張作霖制壓の功に歸した。奉天省議會、農務、工務、商務、教育等の各總會が聯署の下に北京政府に對し排日的辭句を連ね反対意見を陳述せるも結局失敗に終つた。親日派の張作霖が武力を以てする彈壓には如何とも方法がなく、奉省の排日運動は終熄した。張作霖の威望、益々厚く東三省に於ける排日運動は日本との特殊關係に依り絶対に不可能なる事を實際に證據立てられたのであつた。

（四）北京政局の推移

北京方面の政局は依然混亂裡にあつた。六月三日學生團の暴動再起し上海、南京始め長江沿岸一帶に排日の同盟罷業は起つた。錢能訓の内閣は六月十日親日派の三兇と稱せらるゝ曹汝霖、陸宗輿、章宗祥を罷免するや段派は忿怒し政府を脅威するに至り六月十一日徐總統の辭職通電となつた。

張作霖は曹錦、李純、王占元等と共に挽留電報を寄せた。七年十二月末正式總理となつた錢能訓は

在任半月ならざるに六月十三日徐總統に代つて辭職し段派の財政總長鄭心湛が國務總理代理となつた。段派は之れで再び勢を得て徐樹錚は西北邊使に任命され越えて八月二十二日朱啓鈴の辭任以来、缺員のまゝであつた南北和議の北方總代表に安福俱樂部の首領にして衆議院議長たる王樹唐を任命した。然し王樹唐は南方の忌避に遇ひ其の暗中飛躍も效を奏せず、上海會議の再開は遂に不可能に終つた。然も中央の政局は九月に入つて五日鄭心湛辭職し、二十四日陸軍總長靳雲鵬が國務總理代理となつた。

第九章 張作霖の三省統一

第一節 吉林督軍の更迭

(一) 張作霖と孟恩遠

張作霖と孟恩遠との關係は表面平和であつた、が裏面に於ては久しく結んで解けざる確執反目のために互に相排擠してゐた。然し孟恩遠の運命は張作霖の擡頭に伴ひ日に悲境に陥つた。

元來孟恩遠は多年吉林に蟠踞し、居然として東北邊境の重鎮を以て任じ、平素張作霖を若輩視してゐた。前に張作霖が奉天督軍となつて以來、逐年其の驥足を三省に伸ばすの傾向あるを見て内心甚だ不満であつた。張作霖が東三省巡閱使に任じ三省兵馬の權を總攬するの重職に就くや孟恩遠は吉林督軍として其の節度に服するを潔しとせず頗る不平の色があつた。然し孟恩遠は前年革職問題の創痍未だ癒えずして氣勢甚だ揚らず恭順の意を表してゐたのと當時居据り運動に就て裏面は兎も角表面に於て多少なりとも張作霖の援護を受けた關係上、表面に立つて之に反対するを得ざる立場にあつた。不平ながらも黙從するの外はなかつた。

張作霖としては又、東三省軍民兩政の統一を主眼とせる見地から異分子である孟恩遠を放逐し、自己直系の股肱を吉林督軍に据ゑん事を熱望してゐた。唯だ張作霖は勢力充實せずして未だ孟恩遠を左右するに足らなかつた結果、驟忍自重羽翼の擴充を圖つた。それで張作霖と孟恩遠の間は表面角突き合はしての明闘ではなくて裏面で種々な暗闘を繰返してゐた。

(二) 吉 黒 兩 督 軍 更迭

六月旭日昇天の勢ある張作霖は吉林乗取に就て愈々覆面を脱した。同月十一日先づ公文を孟恩遠に送り吉林財政の不始末を結責し壓迫を加へた。孟恩遠は吉林省長郭宗熙と共に前に再三省民より彈劾されし行懸と、張作霖の壓迫更に加つた結果、責を負ふて北京政府に辭表を提出した。張作霖は又孟恩遠の辭表提出と同時に北京政府に向つて孟恩遠を免職して二十七師長孫烈臣を後任として任命す^{シテ}要請し孫烈臣を北京に派して極力運動させた。

北京政府は年來、吉林に於ける孟恩遠の失政を認め居るに際し、東三省巡閱使たる張作霖が其の更迭を要請せるに對し、何等之れを峻拒すべき理由がなかつた。張作霖の面目を立つる爲めには孟恩遠を免職するの外なかつた。七月六日俄然吉林督軍更迭の大總統^今分は發表さるゝに至つた。

吉 林 督 軍

孟

恩

遠

免 本 職 特 任 惠 威 將 軍

黑 龍 江 督 軍

鮑

貴

卿

免 本 職 特 任 督 軍

陸 軍 第 二 十 七 師 長

孫

烈

臣

特 任 黑 江 督 軍

北京政府は張作霖系の色彩鮮明である孫烈臣を吉林督軍に任命すれば直に吉林軍民の猛烈な反対を招くを慮り同じ張作霖系であつても比較的奉天派としての色彩の薄い鮑貴卿を吉林に轉任せしめ孫烈臣を黒龍江に据ゑて一種の緩和政策を執つたのである。吉林省長郭宗熙は辭職許可されず留任を命ぜられた。之れに依つて張作霖の目的は達せられた。最も孫烈臣を吉林に据ゑ得ざりし憾はあるが或る時期を過して吉林省民の安定を得たる後、鮑貴卿と相互に更任すべしと傳へられた。唯だ問題は孟恩遠が此の命令を素直に奉じて吉林城を明渡すか否やにあつた。前年の居据り運動の例もある事とて一般より注視された。

(三) 吉 林 省 復 た 獨 立

孟恩遠は迅雷的の革職命令に接して流石に狼狽した。更に最も驚嘆したのは孟恩遠の部下であつ

た。親分の孟恩遠が免職さるれば直に自家の地位に及ぼす影響に想到して對抗策を講じた。孟恩遠は前に辭表を提出した事と近來著しく勢力を擴大した張作霖の東三省統一熱に依つて早晚此の事あるべきは覺悟してゐた。四圍の事情自己に不利なる上は確かに城明渡を實行せんと觀念の臍を堅めてゐても幕僚、參謀等は之を承知せなかつた。軍事會議を開いて善後問題を協議せるに吉林軍第一師長の高士儕は前年と同様、強硬なる主戰論を高唱し抗命舉兵の急先鋒であつた。高峻峰、高鳳城、陶祥貴其他の吉林武官は悉く之れに雷同し獨立宣言を決議した。

孟恩遠としても亦吉林督軍の位地には十分の未練がある。それに前年居据りの味を忘れ得ざるに高士儕一派が獨立を慾するに於て意大いに動いた。兵を奉吉の省境に進め奉天軍と對峙して戰雲を巻き起せば本來今次の免職が張作霖の強要に基き北京政府の發意でないから生靈塗炭の苦を見るに忍びすと云ふ名義で或は再び前年の如く免職取消となるやも測り難しと過信し頼み難きを頼んだ。そして萬一の僥倖を夢想し戰意なき戰備の一切を高士儕に一任した。高士儕一派が眞實孟恩遠の一身を憂慮せば此の際種かに中央の命を奉じ孟恩遠をして其の晚節を全ふせしむるの手段を取ることが正當であつた。表面は兎に角其の實際は自己等の地位を維持するために孟恩遠を擁せる事と

て漸次兵を吉林、長、方而の要地に集中して吉林省獨立の狀態に出でた。中心人物の高士儕は奉天軍との對戰計畫に怠りなく實兄高峻峰を前敵司令として南嶺に進駐せしめ吉林の全軍を奉吉の省境要所に配し奉天軍の進撃に備へた。吉林軍の中央及び奉天に對する武装の大示威運動の幕は開かれ奉吉間の風雲暗憺となつた。

(四) 奉吉兩軍の對峙

張作霖は吉林の反抗的行動の歴然たるを見て武力討伐の準備に着手した。充實せる武力を恃む張作霖は中央政府に討伐命令の宣布を請ひ命令一下大義名分を正すと稱し吉林軍を粉鑿せんとする概があつた。吉林討伐軍を編制し之れが總司令には新任黒龍江督軍の孫烈臣を任じ二十七師及び衛隊旅より一個混成旅を抽編し其の麾下に隸せしめた。奉天軍の各部署は次の如く決定した。

吉林討伐軍總司令 孫烈臣

東路(西豐縣)第五混成旅

司令劉香九

西路(梨樹縣)第四混成旅

司令王良臣

南路二十七師暫編混成旅

司令蔡平本

北路(大賚縣)第二混成旅

司令鄭殿陞

遊軍二十八師五十五旅

司令郭瀛洲

二十九師五十八旅

司令石得山

此の外、黒龍江より三個混成旅を出動せしめ背後より吉林軍を牽制するに決定し兵數に於ても吉林軍に倍し、四路相策應して一舉に吉林軍を殲滅せんとするの戰略を策した。

張作霖は漸次兵を吉林省境に増派すると共に「今回吉林の騒擾は決して孟恩遠の眞意に非らず、高士儕が孟恩遠を強請し抗命せしめたるもの」と断じ高士儕の逆命頑抗の罪狀を天下に宣布した。そしてまた奉・吉・黑三省人民に對し「孟恩遠は高士儕の脅迫に依り兵を構へて地方を擾亂し人民を毒するに依り大に師旅を張り吉林討伐を決行すべし要は高士儕等二三の奸賊を除くにあり」と通電した。また出動の軍隊に對しても戰事行動に就て嚴重諭告する所があつた。そして奉天、吉林の兩軍は漠々たる戰雲の中に相對峙するに至つた。

(五) 高士儕の馬賊糾合

七月十九日突如、寬城子事件勃發して日支外交の重大問題を惹起するや此の凶報に接した北京の龍心湛内閣は大狼狽の状を呈した。之れが責任を明かにするために七月二十三日當面の責任者である孟恩遠の嚴責と高士儕革職の明令は發布された。

(一)高士儕が擅に軍隊を長春附近に集中せしめ大事件を突發せしめたる責任を問ひ、高士儕を免職して其の事務一切を張作霖に委任す。

(二)孟恩遠は軍規を嚴守する能はざりし罪を問ふ督軍事務の一切を鮑貴卿に引繼ぎ速に北京に來るに達して愈々逆上した。

(三)鮑貴卿は直に吉林に赴き實地を審査して善後の處置を取るべし。

高士儕は其の抗命が今次の不祥事を誘發せし重因として斷乎たる革職命令に接したので憤激極點に達して愈々逆上した。

北京政府より吉林慰撫使として特派された前吉林巡按使の孟憲彝と吉林省長の郭宇熙は高士儕に

向つて百方恭順を勧告し暴虎馮河の勇に逸る事を諱めても更に耳を傾けなかつた。何等勝算の見るべきものなきに勝敗は殆んど度外に置けるものゝ如く「身命を賭して奉天軍を惱まし若し敗戦せば綠林に入り馬賊と變じ以て三省を攪亂すべし」と豪語した。そして又四方の馬賊を糾合した。平素張作霖を誤解して不俱戴天の仇敵として狙つてゐる金鼎臣（綠林出身にして前奉天巡防中路帮統たりし金壽山の遺子。金壽山は民國元年開原方面に駐防中馬賊と等しき暴行を行ひ張錫鑾のために銃殺の刑に處せらる）は亡父の仇を報ずるは此の秋とばかり同志劉介臣、宋奎武等、草澤に嘯傲し風雲を睥睨せる豪傑等と共に吉林に潜行し高士策の帷幕に参じて奉天討伐の軍議を凝らした。金鼎臣等に大砲、小銃、軍費等を給與し各一個混成旅を編制せしむるために盛んに馬賊を四方に糾合して窮鼠猫を咬むの勢を示した。

當時吉林時局の平定策として孟恩遠の要請に基き張作霖が政府に申請してゐた高士策の一師及び一個旅の直隸移駐の許可も自然消滅となつた。奉吉兩省の邊界は戰雲濃厚の度を加へ形勢日に切迫して來た。

(六) 鐙袖一觸の吉林軍

張作霖は中央政府が愈々高士策の革職命令を發表したので公然兵を進めて討伐するの名義を得た。奉天、吉林兩省の私闘でなくて天下のために逆賊を剿討するの好題目を得たのである。

六月二十五日朝、總司令の孫烈臣は威風堂々、討吉の大旆を翻し陸路北に向つて進發し總司令部を開原城に設立した。東路司令劉香九の先發隊は長驅范家屯に達し將に長春に迫るの概があつた。張作霖は又前年南征の爲め入關せしめた奉天軍を續々撤退奉せしめ戰備を堅めた。張景惠麾下の暫編奉軍第一師も全部歸奉したので討伐軍後援隊として第一師第二旅を東路に、混成第五旅を北路に出動せしめた。四路の奉軍、各要所を扼守し、總司令の命令一下忽ち前進するまでに作戰計畫成り大局は既に戦ずして奉天軍に有利にして眞に鎧袖一觸の概があつた。

然るに吉林舉兵の元兇である年少氣鋭の高士策は頑固一徹の武人ではない。多少新式教育を受けた軍人である。それに姻戚關係ありとは云へ弱冠にして孟恩遠の參謀長として帷幕に参じてゐた以上、相當の俊髦である。大局を洞観するの明は持つてゐる筈だ。吉林軍如何に勇猛であるとも烏

合の衆を擁しては奉天軍の精銳を撃破どころか所詮は袋の鼠と追ひ詰められ無残の敗北を招くは明瞭である。舉兵抗命既に一匪徒と變じ大義名分の上より見ても高士儕に九分の弱身がある。處が知るか知らぬか、高士儕は依然態度を改めず、勝算歴々たるかの如くに裝つて反抗の氣勢をあげた。

裴其勳、高峻峰、高鳳城、陶祥貴其他吉林武官數人と語ひ連署して張作霖討伐の宣言檄文を配附した。其の内容の概略に曰く先づ北京政府を偽政府、徐總統を非法總統、新國會を非法國會と罵り護法討逆に藉口し宛然たる南方派の口吻を學び

張作霖は盜賊の巨魁を以て私に戎行に列し其の匪黨を恃んで關東に横行し遂に三省巡閱使の偽命に膺り東三省獨立の陰謀を策す、士儕等は遠く西南の諸軍に應じ約法を護り三省義士を合して張匪(張作霖)を討たん。士儕等百戰餘生の身を以て國に許す、大義のある所、成敗存亡は計る所にあらず云々

と高唱し順逆顛倒の暴論を以て滔々張作霖を攻撃した。吉林の督軍顧問齊藤恒太佐、森田吉林總領事等も又熱誠こめて恭順せん事を勸告せる好意にも背き半ば自暴自棄の態にて出陣し自ら兵を督して奉天軍に對峙した。

(七) 孟恩遠の軟化

奉吉問題愈々紛糾し、中央政府の態度強硬なるに加へ奉天軍四境に迫り、吉林軍の運命日に不利に陥つた。殊に吉林軍に取りて最も不利を招いたのは吉長鎮守使裴其勳と第一師第一旅長誠明の軟化であつた。前年黒省軍界を騒擾せしめた首魁として馘首された英順が張作霖の顧問として長春に陣取り盛んに吉林軍の間に暗中飛躍せる結果は裴其勳も誠明も張作霖に靡くに至つたのである。裴其勳は吉林督軍公署に監禁されたとか或は已に銃殺されたりとの風説すら傳つた。誠明は亦密かに戦線より奉天に來り張作霖と會見密議し吉林軍を内部より破壊するの策を運らした。斯くて高士儕の陣容は内部より潰裂し、戦はずして不利の窮境に立つた。斯くの如き軍情を目撃した孟恩遠は大事、既に去れるを直感した。孟恩遠は目に一丁字なく衰耄無能と稱らるゝも身を卒伍より起し累進して督軍上將となり一方に雄視してゐる以上又一種の人傑である。大勢を洞観し得ないほどの凡庸漢ではあるまい。自然の成行と且つは前年居据り運動の奏功に鑑み高士儕一派が建議するまゝに再び萬一を僥倖せんと欲して彼等の擁立に任せたるものゝ一度寛城子に於ける日支兵の衝突の重大事

件發生に意氣頓みに沮喪した。中央政府よりの詰責電に接し到底留任の不可能なるを觀取した。殊に中央より特派された前吉林巡按使孟憲彝が張作霖との間に立ちて居中調停の勞を取るや意遂に動き恭順奉命の態度を表明するに至つた。そして又孟憲彝を通じて張作霖に對し安協退讓の交渉を進めた。戰線に出動せる高士儕に對して極力、大勢の抗し難き所以を懇諭して開戦の中止を嚴命した。一方齊々哈爾より哈爾賓に出動してゐた鮑貴卿に宛て至急吉林に來り接任せん事を電促し、鮑貴卿の着任と同時に印綬を授け直に上京すべく意を決したのであつた。

(八) 孟、高の吉林退去

鮑貴卿は孟恩遠に對し長春に於て會見せん事を提議し會見の下準備として參謀長黃鸞鳴を長春に派遣した。孟恩遠も亦、會見を承諾して二十八日、長春に來り吉長道尹公署に入つた。翌二十九日孟恩遠は黃鸞鳴と會見し退讓の意を述べて今次的一切問題は鮑貴卿と會見の上、協議解決するに協定した。哈爾賓にあつた鮑貴卿は黃鸞鳴より會見頃末を巨細に聽取した。孟恩遠は張作霖と電商し鮑貴卿との間に締結さるゝ妥協條件を支持すべしとの言質を得て愈々、城明渡の準備に着手した。

高士儕も亦孟恩遠の命に服従して長春に歸來し時局は平定の緒に就いた。

張作霖は鮑貴卿に對し孟恩遠との妥協條件に就て電訓する處あり、形勢は急轉直下し、張作霖、孟恩遠、鮑貴卿の三巨頭は三省軍隊に停戦命令を發した。張作霖は前に北京に向け輸送の途にあつた高士儕の荷物九十五個を京奉線皇姑屯驛にて差押へてゐたが之を釋放した。高士儕は又、招募馬賊に相當費を給して解散せしめ、金鼎臣一派を大連に南下させ出動部隊を撤退したのである。

孟恩遠と會見の爲め南下すべき鮑貴卿は時恰も東清鐵道從事員の同盟罷業に依り、列車の運轉中止してゐたので遷延數日、八月四日漸く二個大隊の護衛兵を率ゐ長春に着し吉長道尹公署に入つた。孟、鮑新舊督軍の會見は頗る順調に進捗し孟恩遠の退讓と鮑貴卿の約諾に依り相互の意志は充分疏通した。歸貴卿の約諾が張作霖の訓電に基いてゐる事は無論である。鮑貴卿は孟恩遠一派の生命財産の安全を保証した。吉林軍の直隸移駐問題は寃城子事件の勃發に依り北京政府の拒絕する所となつたので如何とも施すの術もなく他は殆んど無條件にて孟恩遠、高士儕等は吉林を退去するに協定成立した。吉林軍のために氣を吐いた高士儕も大勢に逆行するを得なかつた。

越えて五日朝孟恩遠は鮑貴卿と同車、吉林に歸り事務の引綱を行ひ次で正式に督軍印綬の授受を

終つた。

吉林を以て墳墓の地たるべく期してゐた孟恩遠も流石に昇る旭の勢に似たる張作霖が東三省を壓する威風には敵し難く遂に屈伏するの外なかつた。八月十日多年住み馴れた吉林城を後に隨員僅かに六十餘名を從へ長春に出で十一日朝奉天に着した。直に巡閱使公署に張作霖と會見し今次の吉林事件に就て釋明する所があつた。

得意、失意は時運の常として勢威隆々東三省に振ふ張作霖と失意敗殘の老將である孟恩遠との會見は一種の劇であつた。そして一泊の上十二日朝天津に向つて去つた。

高士餞も亦、孟恩遠の赴津に次で實兄高峻峰と共に家族隨員十餘名と共に滿鐵の好意にて特別列車を買ひ切り十二日未明、長春を發し大連に潜行亡命したのであつた。斯くて吉林事變は結局孟恩遠一派の退讓に依つて圓満に解決した。

一時は將に屍山血河の大修羅場を現出せんとするかの危機に迫り前後五十餘日に亘つて紛糾を極めたのが平穩裡に無事大團圓に入つた。吉林軍の反抗も所詮は自派に有利な條件で解決せんとする手段であつたが張作霖の高壓手段に悉く畫餅に歸し呆氣のない茶番狂言に終つたのである。張作霖

の東三省統一のみは完全に實現した。年來の宿圖漸く成り滿洲王としての實權を確實に掌握したのであつた。

(九) 孫烈臣と幕僚

新に黒龍江の督軍となつた孫烈臣は張作霖腹心の一人として其の信賴最も厚い武將である。奉天省黒山縣の出身にして爲人、穩健平直にして圭角なく溫厚の長者として知らる、徵すべき學歴、門閥は全然ない。夙に身を卒伍に起して逐年軍界に累進せる一武人である。稍や時勢を解し政治的才幹に富み奉天軍閥中、張作霖に次ぐの大材である。第二十九師長吳俊陞と共に往年、盛京巡防營統領馬瑞祿の麾下に隸屬してゐたのが漸次累進した。張作霖との關係は宣統元年張作霖が前路巡防統領として鄭家屯より洮南に移駐した際當時洮南の一營長であつた孫烈臣も其の巡防隊に編入されたのが始めである。そして奉天前路巡防隊帮統に昇任した。

張作霖との關係は張景惠、張作相、湯玉麟等の所謂遼西綠林時代より死生を俱にせる純直系に比し準直系の地位にあるも張作霖の信任は頗る篤かつた。民國元年十二月、陸軍少將に任じ第二十七師

第五十四旅長となつた。

六年八月第二十八師長馮德麟が張勳の復辟問題に参加して矢脚し第二十八師長を免職となつた結果、一時張作霖が二十八師長を兼任せるため二十七師長に昇任した。七年春奉天軍を率ゐて南征し同九月奉軍副司令徐樹錚の退職に依り其の後を襲ふて副司令となつた。吉林督軍孟恩遠を放逐して後任とする意図なりし張作霖も政策上、已むなく黒龍江督軍に任命を申請したのである。

孫烈臣は黒省赴任に先ち、奉天に於て張作霖と協議し各文武大官を選定した。督軍參謀長としては徐樹錚の軍費濫用事件に關聯し免職となつた前奉天軍械廠長の丁超(奉省興京人)を起用した。秘書長としては張作霖の懷刀と稱され遼陽文治派の領袖である督軍署參議の袁金鎧を任用し全省警務處長には前奉省警務處長の宋文郁を起用し財政廳長としては東三省官銀號總辦劉尚清を任命する等其の他奉天系の文武官を網羅し陣容成り八月意氣揚々として齊々哈爾に赴き就任した。之れで東三省は確實に張作霖の手中に落ち東三省巡閱使として名實俱に備つた。幸運兒の張作霖は遂に滿洲王たるの宿望を達したのである。

新師長張作相

孫烈臣の後任として二十七師長には張作相が任命された。張作相は張作霖の信頼最も厚い腹心である。現に陸軍中將として第二十七師の師長である。張作霖の京津方面出勤中は常に巡閱使、督軍代理の重職を委任せらるゝを例とす、未來の奉天督軍としての呼聲ある男である。明敏の頭腦と謙抑の態度、謹慎寡言、外交に巧みに婉轉滑脱の妙がある。家は遼西義縣にありしも其の十一歳の時、馬賊に襲はれ彼も馬賊の間に成長したと云ふ。官歴としては張作霖に従ひ共に歸順後は巡防隊の一營長が振出である。民國成立の後、東三省講武堂に學び、民國二年二月騎兵大佐に任じ二十七師騎兵二十七團長、同砲兵二十七團長に歴任した、同六年三月湯玉麟の失脚後孫烈臣二十七師長となるや少將に進級して二十七師五十四旅長となつた。孫烈臣、二十七師長となつて後七年五月孫烈臣の南征に依り久しく二十七師長代理を勤めた。七年十二月中將に進み、八年一月東三省巡閱使總參謀長となつた。それが孟恩遠去りし後の吉林軍民の兩政が一段落を告ぐると同時に十一月、郭宗熙の希望通り

(十) 吉林省長の更迭

吉林省長郭宗熙は前督軍孟恩遠の吉林退去に因り又辭職の意切なるものがあつた。元來郭宗熙は前清の末季、奉天提學使署檢事として東省に官遊して以來十二年、璽春副都統、延吉道尹、吉林交涉使、吉長道尹等に歴任し吉林巡按使代理に任じ五年七月、官制改正のため省長に就任し、東清鐵道督辦を兼任した。湖南長沙の出身で張作霖の奉天間とは、何等の縁故もなく在官の後半生は孟恩遠の推挙による所多大であつた。爲人穩健にして圭角なき人物なるも飽貴卿の下に省長たるを好まざるのみか、多少壓迫を受けて留任の念を捨て再々辭意を表明して許されなかつた。それが孟恩遠去りし後の吉林軍民の兩政が一段落を告ぐると同時に十一月、郭宗熙の希望通り

依頼免職となり吉林出身の徐鼐霖が後任省長に任命された。

徐鼐霖は、徐總統直系の一人で非常な親米派であつた。徐總統が東三省總督時代、其の幕下にあり奉天にゐた後、哈爾賓鐵路交渉總局幫辦、黒龍江省學務辦理、興東兵備道等に屢任し民國成立後、黑江都督宋少濂の下に軍政署總辦となり四年、參政院參政に六年九月、臨時參議院議員等に選まれた人物である。吉林省に於ける人材の一人にて鄉黨には相當信望を有し省長としては適任であつた。唯だ對外的には日本に對して好感を有せぬ事が其の缺點で大局に通せず、傳統的な遠交近攻の政策を執る因循なる一地方吏に過ぎなかつた。

第二節 寛城子事件

(一) 事件勃發の真相

七月十九日第二の鄭家屯事件は寛城子に勃發した。奉吉問題愈々紛糾し戰雲漠々として低迷せる間に此の不祥事は發生したのである。前年蒙匪討伐事件の真最中に鄭家屯事件の勃發せると同一であつた。

事件の經緯は同日午後一時、吉林軍第四混成旅歩兵團長曹志剛麾下の一隊が寛城子驛附近にありて東支鐵道の守備に任じてゐた際に一支那兵が滿鐵社員船橋某の通行を妨碍し暴行を加へしに起因した。田崎某又殺戮され外にも負傷せる者あり暴行黙視するを得ざるに至り、報に依つて駐屯軍副

官住田中尉は兵を隨へ支那兵營に赴き事實を調査せんとせるに支那兵は無法にも遽かに發砲し、住田中尉戦死し數名の死傷者を生ず。急報に駆付たる應援隊は支那兵と應戦し衆寡敵せず、我軍全滅の悲境に陥つた。我軍は戦死者將校二、下士三、兵卒十三、巡查一の十八名を出し、重傷者三、輕傷者十二の大損害を蒙り支那側の死傷不明なるも現場に屍體十四を遺棄しあり、非常なる激戦であった。然も支那兵は我軍の死傷者數名を陣地に運び行き猶ほ息あるを慘殺し眼を抉り鼻をそぎ頭を割る等正視するに忍びざる慘虐無道鬼畜も及ばざる蟹行を敢行したのであつた。之れ寛城子事件の概略である。近來になき大事件として中外の耳目を聳動した。急報に依つて同夜吉林より森田總領事、齋藤大佐、高士儕等長春に來り現場を視察し公主嶺より高山司令官來着し善後問題の協議に入つた。哈爾賓より轟聯隊長奉天より赤塚總領事、旅順より濱面參謀長急行したのである。

(二) 張作霖の深憂

寛城子事件勃發の飛報を得た張作霖は甚しく憂慮憤慨した。日支國交上に及ぼす大障礙として悲しみだ。そして麾下の各軍隊に對し二十一日次の如き訓令を發して諭告したのであつた。

長春に於て吉林軍隊と日本軍隊と衝突し日本軍三十餘名傷亡せりと、之を聞いて慨嘆に堪へず、本使は治軍二十有餘年、毎に邦交の保全を以て第一要義となし本國にある各國民は悉く保護するの責あり此次出動の各旅團にして滿鐵線路を過ぎるに際し、凡そ隣國の軍警商民に遇はゞ均しく應に平和を以て應待し萬、苟も齟齬あり以て衝突を起すを許さず該各軍隊長官は務めて嚴戒し、各連排長兵士等は紀律を恪守し以て軍聲を保すべし仍敢へて故意に違ふ者あらば各該長官に責任を問ふべし云々

親日派の張作霖として當然の處置であつた。奉天軍の紀綱巖として亂れず張作霖の命令上下に徹底してゐた。

寛城子事件に就て張作霖が孟恩遠を放逐する爲めに英順をして吉林軍を買収教唆せしめて本事件を惹起させ日本の干渉に依つて吉林を乗取らんとする陰謀であるとの風説があつた。然し張作霖とあらう者が自分の庇護を受けてゐる日本の軍隊を犠牲に供して之れに乗せんとする程の卑劣漢ではあるまい。大義名分の堂々たる以上、個々の私闘でない。討伐は思ふまゝに行はるゝのである。智者として聞ゆる張作霖ともあらうものが何に苦しんで其の愚を敢てする事あらう。之れ張作霖の盛名

を誣る一派の捏造と見るの外、何等根據のない説であつた。

(三) 日支交渉解決

寛城子事件に關する日支交渉は九月八日北京に於て小幡公使と外交總長代理陳篤との間に談判開始された。小幡公使より日本側の要求條件として次の六ヶ條を提出して賛成を求めた。

- (一) 死者、負傷者に慰恤金、治療費を與ふる事
- (二) 吉林軍の直接責任者を處罰する事
- (三) 當事者巡警等其の指揮者を處罰する事
- (四) 吉林軍の取締を規定し今後の保障を爲す事
- (五) 張作霖を奉天總領事館に出頭陳謝せしむる事
- (六) 同事件に關し徐總統の發せる命令の寫を公使館に交付する事

斯くて本交渉は北京、奉天、吉林等にて各條に就き數次交渉折衝され十一月に至りて漸く解決した。解決の内容は日支兩國官憲が日支親善上、之を一般に公表するの時期に非らずとし秘密に附さ

れて知るを得ぬ。それで第二の鄭家屯事件は解決したのである。

東支鐵道の回収

往年露國が極東侵略の大野心を遂行するために三國干渉の代償として支那より獲得した東清鐵道も露國の内亂に依り遂に利権回収に熱せる支那のために乗せらるゝ所となつた。之れより先、民國九年（一九二〇年）二月末、莫斯科政府外相カラハンの名を以て支那に與へたる通牒に具體的に東支鐵道に関する露國一切の特權及び利益は之れを抛棄する旨を表示せること其の原因である。茲に於てか國際的地位の向上に腐心しつゝある支那の朝野は此機逸す可からずとして其の持論の體現を切望した。然して東清鐵道問題に直接關係ある所の吉林督軍鮑貴卿は東清鐵道長官たるホルワット將軍に對し、東清鐵道管理権の譲渡、同鐵道地帶露國守備隊の撤退、同鐵道地帶露國警察権の撤廢等を要求した。ホルワットが之れに何等の回答を與へなかつたので再び右の要求を提議し併せて支那側の重役を（督辦共に）五名に増加し、且つ管理局長（露國人）の外に支那人の副局長を置き各處長の外に支那人の副局長を置くべき事等の諸項を附加した。そして他方に於ては鐵道從業員又は沿線勞働者等を使嗾して同盟罷業を行はしめ極力ホルワットの排斥運動を煽動した。之れがためにホルワットは大いに憤慨し稍や逆襲的態度を執りたるも鮑貴卿は最後の手段に訴ふるに至り東三省鐵道地帯に於ける支那主權の回復を宣言し露國側鐵道守備隊の武装解除を斷行した。之れ三月十五日である。東支鐵道は支那の手に歸した。

第十章 北洋軍閥の爭覇

第一節 八省同盟

（一）安徽、直隸兩派の軋轢

支那が南北兩派に分れ嚴然相對峙してゐる如く南北兩派は其の内部に於て數派に分れ内訌があつた。南に陸榮廷、岑春煊等と孫文、唐紹儀派とが對立反目せる如く、北方に於ても直隸、安徽兩軍閥の軋轢があつた。元來直隸派と稱し、安徽閥と唱へて勢力の爭奪に雙方が血眼と爲つてゐるも當年袁世凱に依りて統率された北洋軍閥である。袁世凱の死後、群雄割據の狀態を現出し黨中黨を立つるに至り一系は數系に分離した。其の中でも段祺瑞を首領とする安徽閥と故馮國璋を頭首とする直隸派とが最も勢力があるために遂に二分野となつた。之は民國六年段祺瑞の南北聯立内閣に内務總長であつた孫洪伊が段祺瑞と衝突して辭職後段祺瑞の勢力を推倒せんために自ら直隸人である處から直隸省籍の軍人を北洋派より背叛せしめ、當時段祺瑞の對抗者であつた馮國璋を煽てゝ直隸派と云

ふ一軍閥を造つたのに基因する。其の後幾多の曲折變遷があつたが民國八年十一月馮國璋の死後、曹錫、李純が其の勢力を繼踏し中心となつて段派と對抗して來たのである。そして兩派の對抗は犬猿營ならず直隸派の爲さんとする所は安徽閥極力之を妨害し安徽閥の爲さんとする所は又直隸派極力之に反対してゐた。

それに和平統一問題に就て北方兩派の政潮は表面の抗争より變じて裏面の暗鬭に移り南北横斷の形勢は南北縱斷の傾向と變じた。徐世昌、靳雲鵬及び反安福派が陸榮廷の廣西派及び岑春煊の政學會派と提携を策せる一面に段祺瑞、徐樹錚及び安福派が孫文、唐紹儀、伍廷芳の文治派並に政學會より排斥されし舊國會議員等と聯絡し相互に南北統一を進め縱斷の形勢となつた。直隸、安徽の兩派は各勢力伸張と反対派の驅逐に狂奔してゐたのである。

(二) 八省同盟の由來

民國九年一二月張作霖は突如八省督軍同盟を首唱して起つた。其の由來する所は徐樹錚一派の安徽閥の跋扈に對し新總理擁護を聲明したのである。然し新總理擁護は單に表面の名義のみで實際は安徽

福派叩潰しが目的であつた。

奇策縱橫の徐樹錚は安徽派の首領であつた。少壯早くも己に支那軍閥の巨頭と目され支那に於けるエンペル・バシヤの名あり、満々たる野心は功名榮達に焦り段祺瑞の寵を倚みて活躍した。西北籌邊使として西北邊防軍を統率し、外蒙古の自治取消に成功して剃刀のやうな鋭い切味を見せた。元來徐樹錚は靳雲鵬、吳光新、傅良佐の三人と共に段祺瑞四天王の一人である。剛愎で敏腕家の徐樹錚と溫和な人望家の靳雲鵬とは水と油の如く融和せず、同派でありながら常に、犬猿營ならざる關係にて軋轢してゐた。それで徐樹錚は兄弟分の靳雲鵬が國務總理として陰に直隸派と結び南方實力派との提携を畫策して居るのを喜ばず、其の率ゆる所の安福俱樂部を操縦して國務院會議を掣肘し北方政界に威を振つてゐた。機會あらば靳内閣を突き壊して安福派の領袖である王樹唐に内閣を組織させ自ら實權を持せんと計畫を運らしてゐた。之に因つて南北和議問題の爲めに窮地にある王樹唐を救出すると共に自ら黒幕より王樹唐内閣を操縦せんとする豫定であつた。王内閣の成立不可能の場合には段祺瑞内閣を出現せしめ自ら副總理格となつて活動せんとする陰謀を策し靳雲鵬の内閣を極度に壓迫してゐたのである。

そして徐樹錚を中心とする安福派の跋扈は漸次猛烈となつた、一度河南督軍趙倜の更迭問題に依り新内閣を壓迫し出したので張作霖、曹錕等は劫を煮し遂に蹶起し李純、王占元、趙倜、陳光達、鮑貴卿、孫烈臣等と同盟し新内閣擁護運動を開始となつて安福派に對抗した。之れ抑も八省同盟の由來である。

(三) 新内閣の暗礁

八省同盟成立の直接原因である河南督軍の更迭問題は實に新雲鵬内閣の暗礁であつた。新雲鵬は八年九月財政總長龔心湛が代理總理を辭任後一時總理を代理してゐたが十二月正式内閣を組織するに就て親分段祺瑞の妹婿である當時長江上游警備總司令の吳光新に少からぬ援助を受けた事がある。それで新雲鵬は其の報酬として吳光新を河南督軍に推すの内約があつたとの説がある。そこで安福派は勢に乘じ新總理を強要して支那の中原と稱さるゝ河南を自派の勢力圏に入れんと趙倜を放逐し吳光新を据えんと計畫した。新總理は安徽派の強要否み難く二月二十六日の閣議に於て河南督軍趙倜を免職し吳光新を後任とし王印川(河南人にして安福派領袖)を河南省長に任命するに決定

した。然も徐總統は吳光新的督軍任命に同々與へず王印川の省長のみ調印したので遂に問題となつた。新總理は徐總統と段祺瑞の中間に板挟となり、一方徐樹錚一派の安福派は絶好の機會として安福派の閣員(財政李思浩、司法朱深、交通曾毓雋の三總長)を使嗾し内外より壓迫牽制するに依り新總理は進退兩難の地位に陥つた。安徽派對直隸派の抗争は一轉して段派内部の軋轢と變じ兄弟牆に鬭ぎ骨肉相食むの醜體を暴露したのである。新總理が請暇引籠に次で辭意を表明したのは二月二十七日である。徐總統と段祺瑞は極力懲留に努め且つ又張作霖は曹と共に北方督軍の八省同盟を提唱し新内閣の擁護と南北和議促進を聲明した。そこで三月四日新總理は辭意を翻し閣議に出席したが安福派は新總理の留任を喜ばず、飽まで新内閣を推倒して安福派の李、朱、曾の三總長を使嗾し無断缺席せしむるに至り、新總理と安福派は感情益々乖離し兩立せざる狀態となつた。三總長の辭表提出となつて段祺瑞の調停も農商總長田文烈の奔走も何等の效果もなかつた。

張作霖、曹錕等が起つて八省同盟を結び新内閣擁護運動を開始するに於て安福派は稍や反省し一時鋒を收めて三總長を條件にて留任せしむる事に決定し一段落を告げた。が新總理と安福派は依然睨合の儘、融和する事なく對峙した。安福派の首領徐樹錚は徐總統より庫倫歸任の命をも肯んぜず

李恩浩等の三總長と策應し推倒策に腐心した。五月十日安福派は新總理驅逐を決議も、新總理は亦八省督軍の勢力を背景に断じて安福派の掣肝を受けずと豪語し拮抗して相談らなかつたのである。然し安福派の壓迫に厭氣が差した新雪鵬は十四日、十日間の請暇を許され海軍總長の薩鎮冰が代理總理に任じた。政界の雲行險惡となり安福派の機關紙は盛んに内閣更迭説を報じ段祺瑞の出馬説さへ傳つて政局益々動搖した。二十四日張作霖は曹鋗、李純、王占元等の直隸派督軍と聯名し新總理に對一留任勸告の電を寄せ擁護を聲明したのである。が政局は依然展開せず、新總理の辭表は宙に迷て請暇に次ぐに請暇を以てした。

(四) 張作霖と曹鋗の提携

張作霖が八省同盟を首唱し曹鋗等の反安福派督軍を糾合して立つた目的は云ふまでもなく徐樹錚叩倒しにあつた、前年南方討伐に際し徐樹錚が奉天軍副司令として張作霖の軍資金を濫費し且つ恣に自己の軍隊を招編せるために張作霖が甚しく憤怒し絶交した事は前述の通りである。それに徐樹錚が八年秋、西北籌邊使に任じて外蒙古自主取消に成功し盛んに外蒙古の經營に活動した事は張作

霖は東三省を統一後、威を蒙古に振ひ大滿蒙主義を實現せんとする理想と相衝突したのである。前年の深怨と此の衝突に張作霖は徐樹錚推倒を決心したのであつた。段祺瑞其人に對しては堅く師の禮讓を執りて其の情誼に推服して何等の異心を抱いてゐなかつた。それで同じ段系ながらも徐樹錚と反対の新雪鵬と握手し新を援護し自家の勢力を伸張し併せて徐樹錚の勢力を破壊するために八省同盟を首唱したのである。

曹鋗としては又、馮國璋没後首領を失ひ長老王士珍は禪味を帶びて名利に恬淡なため直隸派の勢力は愈々失墜の兆あるに焦慮してゐる矢先、安福派が嵩にかゝて直隸派剿滅の陰謀計畫を探知したので遽に狼狽し李純、王占元、陳光遠等の長江三督軍と連衡し河南の趙倜と結び、五省督軍の同盟を以て對立策を講じてゐた。それに徐樹錚一派には個人としても前年副總統たらんとせし野心を妨害せられて挫折せしめられた深怨があつた。此の秋に際して張作霖は徐樹錚及び安福派に對する共通の政敵と云ふ意味の下に鮑貴卿、孫烈臣の二督軍を率ゐ八省同盟を首唱して曹鋗一派と提携したのである。

張作霖と曹鋗との握手は最初一寸世人の首を傾けさせた。東三省を根據として中央政界に乗り出

し副總統たらんとする野望抑へ難き張作霖として同じく副總統の競争者である曹錕との提携其物が既に一種の奇觀であつた、が兩者としては互に副總統の競争者であると信じてゐる以外、何等の縛りもない間柄で結ぶにも易く、離れるにも易く相互の利便上からであつた。離合集散は時世の常であつて張作霖も曹錕も偶然同一の船に乗り合はしたのであつた。

(五) 吳佩孚の湖南撤退

直隸、安徽兩派の軋轢、愈々猛烈となつて徐樹錚排斥の聲、歎然として起り安福派叩き潰しの運動は開始された。吳佩孚の湖南撤防は河南督軍問題に次で第二の導火線となつた。

直隸派の猛將である第三師長の吳佩孚は五月末、南軍の譚延闇等と妥協し湖南衡州の防備線を捨て撤兵を實行北上して段派の湖南督軍張敬堯を窮地に陥れたのである。

吳佩孚は本來、一個の武人である、山東角の僻遠蓬萊縣に生れ微賤の出、困苦缺乏の間に身を立てる男である。精敢にして膽力あり、前清時代進士の試験に及第せる秀才、武人としては比較的學問もあれば識見もある他の勢力を利用するに機敏なる性質を持つてゐる。日露の役當時、吳佩孚は時には少からぬ宿怨を抱いてゐた。

の直隸總督袁世凱の顧問たりし坂西少佐(利八郎現中將)の牒報係を勤めて滿洲に活動し、クニバトキン將軍のボーキにまで化けた経歷がある。彼が第三師長として湖南に出征せる迄は何人も多く其名を知らなかつた。民國七年湖南を征討し岳州長沙を奪取し衡州に進駐し戰陣の中より突如、平和解決主張の通電を發するに及んで始めて吳佩孚の名天下に喧傳した、長沙回復に殊勳を樹てしまも安徽派全盛の當時にて遅れて湖南に入つた第七師長の張敬堯に湖南督軍の位置を奪はれたので安徽派には少からぬ宿怨を抱いてゐた。

吳佩孚の撤防とともに譚延闇の軍隊北侵し安仁、祁陽、南軍に占領され安徽派の狼狽となつた。南軍新銃の鋒先に北軍振はず、張敬堯は第二の傅良佐となつて戦はずして長沙を明渡し岳州に退守し次で岳州亦陥り、湖南に於ける段派の地位は根底より全滅したのであつた。

吳佩孚の第三師は湖南の變を餘所に續々北上し五月三十一日全師漢口に到着し、湖南に輸送中の弾薬五十萬發を押收し、京漢線に依りて河南直隸の兩省に亘り直隸軍の三個旅團と共に京漢線の要害に據つた。吳佩孚は六月十三日河南鄭州より一通電を發し議和の現狀及び安福派の黨罪を痛論し國民の公決を以て國事を處理すべき旨を叫び、言々峻烈秋霜の如く、宛然段派に對する宣戰の通告

であつた。そして曹錕と策應し保定に於ても南方に輸送中の糧食二列車を差押へ南方討伐の戈を逆に中央政府を脅威し反安徽閩の氣勢を張つた。

安徽派は愈々狼狽し事態重大となり危機の眼前に迫るを見て對抗策に腐心したのである。邊防軍及び西北邊防軍を動し直隸軍の北上に備へ、徐樹錚は急遽庫倫より歸京した。吳佩孚一派が是非共安福派を叩き潰す覺悟にて徐樹錚を革職するの必要ありとて反対の火の手を擧げ、安徽、直隸兩派の間は日に疎隔し政争は結局武力に訴へ解決せんとするの状態に陥り北京は蠻語流言の巷と化し大恐慌を來した。

第二節 直 段 兩 派 の 衝 突

(一) 張作霖の北京入

東三省を統一して勢力を充實した張作霖は、機會あらば愈々中央の檜舞臺に乗り出して勢力を伸張せんと窺つてゐた。それが遂に出馬の機運は到來した。直隸、安徽兩派の軋轢が日に甚しく嫉視反目の度激烈となるに於て、張作霖は自然中心人物となつた。八省同盟の提唱以來、北洋政局の大立

となつた強作霖としては京畿附近に於ける直隸、安徽兩派の兵力が相伯仲の間にあつて優劣のないために、之が勝敗の奈如は一に張作霖の嚮背に懸つてゐた。兩派に屬する各省督軍は地方の治安維持上、大兵を京畿に輸送するを得ない状態にあつた、それで自然兩派の死命を制し之を左右し得る者は張作霖のみであつた。張作霖は兩派の争闘に對し勝敗を決するキヤスチング、ヴォードであつた。

六月十八日徐總統の召電に應じ時局調停の看板を掲げ中央に乗り出した。二個中隊の護衛兵と四架の機關銃とを以て擁護せる特別列車にて十九日咸風堂々北京に入った。張作霖は「眼中直隸派なく、唯だ徐總統を擁護するあるのみ」と豪語して事實上、北京政局の花形役者となつた。暗に曹錕等と氣脈を通じ八省同盟の牛耳を執りて直隸派に左袒しつゝも表面中立を標榜して直隸安徽兩派の調停に奔走した。二十日徐總統に謁見し時局に就て自己の意見を陳述して時局調停方法に關し密議し、翌二十一日請暇引籠中の靳總理を訪ひ極力慰撫して内閣擁護を誓ひ留任を勧告した。同日また團河に段祺瑞を訪問會見し所見を陳じて懇談する所があつた。張作霖は又一方、保定の曹錕に對して北京入京と同時に均しく入京せん事を電促したが曹錕は一時入京出來ないと返電に接して親ら曹錕を迎ふるためと稱し、二十二日京漢鐵道にて保定に南下したのであつた。

(一) 保定の時局會議

張作霖の保定入は直隸派豫定の段取で曹錕、吳佩孚を始め八省同盟の各省督軍代表等集合し時局大會議を開いて安徽派對策を討議した。曹錕の提出した五ヶ條の要求條件に就て吳佩孚之れが説明の任に當り諤々の論を吐いた。其の條件は餘りに露骨な上に激烈なために改刪修正して緩和し四ヶ條となし、張作霖之に同意を與へ一種の決議として可決した。

(一) 安福俱樂部に警告を爲す事

(二) 職に稱はざる閣員(安福派三總長)を更迭して靳雲鵬を復職する事

(三) 上海會議は先づ南方に請ひ唐紹儀、溫宗堯の代表を更換せしめ北方代表も必要の時機に於ては變更すべし

(四) 平和會議にて解決し能はざる事項あらば國民會議を開き解決する事

張作霖は右の決議を携へ二十三日夜に入つて保定より歸京し、徹頭徹尾、調停者の地位を以て局面を轉換せんとする意図であつた。二十四日、徐總統に謁見して保定會議の狀況及び決議事項を報

告して曰く「保定會議の列席者多數の希望は斯くの如きもので中には是より甚しき激烈の主張者もあつたが徐總統の平和解決を希望せらるゝ趣旨と相符せないために激烈なる點を改刪修正し兎も角元首の裁可を求むるに決し鄙人(張作霖)をして其の報告轉呈の任に當らしめた次第である」と附言した。

徐總統は四ヶ條の要求に就て所見を述べて曰く

(一) 政治機關にあらざる團體に過ぎず之に警告を與ふる如き漠然たる事問題とならず

(二) 靳總理に復任せしめて之に反対する者の自決に俟つの外なし

(三) 先づ上海會議をして談判せしめ已むを得ざるの時に至りて變更を行ふ

(四) 國民會議を召集するは手續浩繁にして容易に行ひ難し暫時保留を爲し和議進行後、南北協議を俟つて之を行ふべし

と答へた。そして張作霖に對し兎に角靳總理の復職が先決問題なれば卿を煩はして靳總理の銷暇勸告し猶ほ保定會議要求の條項に就ては卿より段祺瑞に協議調停せん事を望む」と懇囁したのであつた。

(三) 張作霖の調停

張作霖は徐總統の意見を聞いて直に保定の曹鋗に電報し所見を述べて意見を徵したのである。廿五日曹鋗より張作霖に致せる返電には「保定會議決議の四項は全部裁可と云ふにあらざるも斟酌すと云ふに於ては聊か以て激昂せる軍心を慰むるに足る、希くば先づ其の着手として安福派の三總長を引退せしめ靳總理の復任を實任せしむべし、安福派猶ほ反省せんば別に考ふる所あり云々」と述べて讓歩の模様もなく强硬であつた。張作霖は此の電報を徐總統に轉呈し意見を求めた處、徐總統は「是非卿を煩して段祺瑞と協議されたし」と再び依頼したのである。そこで張作霖は曹鋗の電報と徐總統の依頼を含み二十六日再び團河に赴き段祺瑞と會見して直隸派の主張と徐總統の意見を陳じて時局解決策に就て協議したのである。段祺瑞も亦張作霖の奔走を諒とし徐總統と會見の上協議する事を答へた。

二十七日段祺瑞團河より入京し總統府に赴き徐總統、張作霖と鼎座密議し時局解決の方法を凝らした。そして徐總統は次の調停案を出して段祺瑞、張作霖の意見を問ふた。

(一) 周樹模の内閣組織

(二) 徐樹錚の轉任

(三) 西北邊防軍を邊防軍に編入

此の三條件に就ては段、張二者共に贊同したのであつた。此處で一寸段祺瑞と徐總統との關係を簡単に述べるの必要がある。元來徐世昌は北洋文治派の元老として直隸派の巨頭である。自己の黨派を有せないので段派の後援に依り安福俱樂部の多數に推され馮國璋との競争に勝つて大總統の榮冠を占めたのである。其の關係上段祺瑞とは表面上、頗る平和親密であつた。が其の實裏面に於ては互に相反目して鎬を削つてゐた。徐總統が次期の大總統に重任せんとする意志があるのでに大總統選舉を争ふ第一の敵役は平素最も親密にしてゐる段祺瑞其の人であつた。で安徽派の頭首として安徽俱樂部の黒幕である段祺瑞は徐總統の一大勁敵であつた。そのために徐總統は機會あらば段祺瑞の勢力を失墜せしめ以て自己の地盤を鞏固にして將來の選舉に備へんとする野心を藏してゐたのである。それで直隸派の安徽派推倒運動に就ても徐總統は半ば默認の立場にあつた。張作霖の打電に依り曹鋗が徐總統の調停案に賛成せず盛んに强硬論を主張し安徽派剿滅の意氣込にて徐樹錚の免

職は勿論、三總長を罷免し更に段派に屬する各省督軍を諫首し最後に段祺瑞までも葬らんとの計畫を立てたのに對しても徐總統は亦默諾の姿であつた。

(四) 徐樹錚の免職

徐總統は張作霖の擁護誓約に大いに力を得て此の機會に乘じ、段派を壓迫し政局に一生面を開かんと決心した。七月一日朝徐樹錚は公府に赴き徐總統に面謁して自ら西北籌邊使辭職の意を表明しそれが代償として段祺瑞に内閣を組織させ善後問題を處理せしむべき條件を提出したのである。處が徐總統は徐樹錚の提案には一顧をも與へず、二日靳雲鵬の國務總理辭職を聽許し自己直系の周樹模をして内閣を組織せしめんと該任命案を國會に提出し協賛を求めた。そしてまた、張作霖、曹錕、李純等が聯名を以て徐樹錚の六大罪狀を宣布した翌日(四日)敢然として徐樹錚の西北籌邊使を免職し將軍府に祭上げ遠威將軍に特任し、西北邊防軍の管轄を徐樹錚の手より陸軍部に移し其の兵權を褫奪した。斯くの如く左遷以上に懲罰的の行動は徐總統一世一代の英斷であつた。常に大事を取り機に臨みて踏距逡巡して勇斷に乏しき徐總統として断々乎として段派の頭上に大鐵槌を下し得たの

は背後に張作霖の擁護に因るとは云へ段派に取りては正に青天の霹靂であつた。安徽派の狼狽と激昂は極度に達した。徐總統が内閣問題其の他の先決問題は其の儘に解決せず、外蒙古の自治取消に大功ありて何等罪なき徐樹錚のみを國務會議の協賛を経ず獨斷にて罷免し、吳佩孚が政府の命を奉ぜず、湖南を撤防し南方討伐の方針を裏切つた罪を問はざる不公平の處置に就て憤慨した。徐總統を傀儡として直隸派の安徽派壓迫熾烈となり、徐樹錚の免職に次で安福派の三總長は勿論、安祺系の各省督軍、省長等も亦同一運命に陥らんとするの危機に瀕し、安徽派の示威運動となつて政局は愈々混亂したのである。

(五) 安徽派の憤起

段派の大策士徐樹錚は先づ起つた。徐總統の意外なる革職命令には一時吃驚したが流石に徐樹錚は智者であつた。直に得意の暗中飛躍を開始し段派武官を説いて結合を圖つた。四日夜は暴風雨であつた。段祺瑞麾下の邊防軍第一師長曲同豐、陸軍第三師長陳文運、同第九師長魏宗幹、同第十三師長李進才、同第十五師長劉詢等は某所に會合し、直隸派の底止する所なき横暴なる態度に憤慨し曹

鋤、吳佩孚等が兵權を擁して中央政府を壓迫し政治に干渉するを責め其の免職を實行せざれば我等も亦覺悟ありと決議し、所謂最後の通牒を張作霖に突付けたのである。之れ背後に徐樹錚が黒幕であつた事は云ふまでもない。一方安福派議員黃永熙等をして五十餘名の聯署にて徐樹錚罷免の質問書を國會に提出せしめ最後の對應策を講じたのである。

園河の別墅に悠々、甚を園んで政爭の外に超然として局外中立の地位にあつた段祺瑞も最初は直隸派の行動に就て隱忍して徐樹錚の免職も安福派三總長の罷免も衆の希望とあれば已むを得ぬと諦めてゐたが、形勢益々悪化し安徽派全滅の危機迫るを自覺するに於て遂に拱手傍観するを得なくなつた。徐總統が前日の諒解を反古にして吳佩孚の懲戒を行はず、徐樹錚のみを醜首せるを憤り、政府に於て吳佩孚を懲戒し得なければ自分之れを斷行すべしと敦囲き、五日朝邊防軍第一師、第三師及び第九師に出動準備を命令した。親ら陣頭に乗り出し采配を振つて直隸派を壓迫せんと畫策したのである。無論、段祺瑞一切の計畫は表面上は別として裏面に於て徐樹錚が之に與り悉く徐樹錚の建築に基く事は事實である。然し段派は著しく勢力を失墜し殊に國內の反段熱に安徽派は國民の怨府と化し頗る悲況に陥つてゐた。

(六) 直隸派の違算

張作霖は段派五師團長の決議文を直に徐總統に取次いだ處、總統府は事の意外に周章狼狽の醜態を暴露した。元來徐總統派の策士である總統府秘書長の吳笈孫と秘書帮辦兼陸軍次長の張志潭等は段派の兵力に對して根本から誤算してゐたのである。五師團長の決議文を張作霖から送附されて始めて之を覺つた。吳笈孫、張志潭等の豫算に依れば徐樹錚を免職し西北邊防軍の指揮權さへ政府の手に回収すれば、邊防軍の指揮權は陸軍部に屬し新雲鶴の手にあり、邊防軍參謀長の傅良佐は總統府と密接の關係があつて徐樹錚とは犬猿營ならぬ間柄であるから段派の自由にならぬ。それに段派が北京附近で自由に使用し得る兵力は魏宗幹の第九師のみと見た。それも一部は浦鹽方面に出動してゐるので殘部は僅かに一個旅園内外の少數に過ぎない。第十三師長の李進才、第十五師長の劉詢等は本來、故馮國璋系であるから萬一の場合、直隸派に傾く事はあつても安徽派には断じて與する事はあるまいと獨り極めに信じてゐた。殊に邊防軍は參戰軍と稱せし時代、日支兩國の間に之を内亂に使用せぬと云ふ契約があつたので全然算盤に入れてゐなかつたのだ。

段派の貧弱な兵力に反し直隸派は吳佩孚の第三師と六個旅團を保定及び京漢線上に擁して優勢であると断じた。處が事實は全く反対の現象を呈し、吳寔孫、張志潭等の策士は愕然色を失したのは無理もない。新雲鶴も傅良佐も傅同豐も陳文運も徐樹錚は不和であつた、が徐樹錚は表面免職された以上、安徽派全部の浮沈興亡に關する重大事件に際し、段祺瑞が直接、采配を執つて命令を發すれば背く事は絶対に不可能であつた。此の點が即ち徐總統派の誤算であつた事的確に暴露したのである。智謀才略に於ては矢張り張志潭も吳寔孫も徐樹錚の敵ではなかつた。流石に徐樹錚の腕は冴えてゐた。之れで安徽派の勢力は一時悲況に陥つてゐたが再び盛り返して直隸派に對する方策を進めたのである。

(七) 張作霖の北京脱出

張作霖が六月十九日調停の看板を掲げて北京に入京以來、其の行動は決して公平なる調停者の態度ではなかつた。八省同盟の行懸上、安徽、直隸兩派の調停に就いて言動多く直隸派の主張を援けたのは事實であつた。それに徐樹錚を斃して蒙古に於ける自家勢力上の障礙を除く事が當面の大眼目

であつた。段派の羈束に囚はれず、飽くまで進退の自由を保ち直隸派の利益を圖り偏頗なる措置は安徽派武官等の大反感を買つた。就中徐樹錚は最も張作霖を怨んだ。張作霖を除かねば到底大事は成就せぬと考へて暗殺の陰謀を策した。西北籌邊使免職の翌五日、何氣ない態を裝ひ張作霖を訪問して密談一時間、曹鋐討伐會議に列席を要求し張作霖の誘出策を講じた。之れ前年陸建章を天津にて銃殺したやうに張作霖をも銃殺せんと企圖したのである。處が張作霖は知るか、知らずか七日夜、段祺瑞邸に於ける直隸軍討伐會議に参列した。徐樹錚が段祺瑞を電話口に呼び出し「雨亭(張作霖)が行つた筈だから直に拘禁するやう」に傳へた。然し段祺瑞は徐樹錚のやうに目的のために手段を選ばぬ人物ではなかつた。張作霖には再三、其の援護を受けた關係もあるので今更ら張作霖を拘束するに忍びず躊躇の色があつた。そこは張作霖だ。段祺瑞の顔色の唯ならぬのを讀んで危険の身邊に迫れるを直感した。永居は無用とばかり、便所に赴く風をして抜け出し、段祺瑞、徐總統、曹鋐等に對し「兩派の主張强硬にして互讓融和の希望なきを以て調停の道殆んど絶えたれば一應退京歸京すべし」との通告を發し八日の午前一時、倉皇として臨時列車を仕立て北京より天津に落ち延びたのである。張作霖の生命は實に風前の燈の如く危機一發であつた。張作霖を逸した、徐樹錚は「大事去

れり」と稱し地輔を踏んで口惜しがつたさうである。九日午後七時奉天に歸つて直に麾下の武將を召集し軍事會議を開いて對策を凝議した。兩派の死命を制せる張作霖の事とて其の行動は最も注目されたのであつた。

第三節 段祺瑞派の没落

(一) 段祺瑞の憤激

直隸派の壓迫が猛烈となつて安徽派の運命、旦夕に迫るに於て段祺瑞は蹶然として起つた。直情徑行の嫌はあるが事に當りて果斷敢爲な段祺瑞は袖手傍観し得なくなつたのである。張作霖が退京した翌朝、即ち七月八日午前八時俄かに團河の別墅を出でゝ入京し炒豆胡同の將軍府に到着した。段祺瑞の入府に就ては徐樹錚、曾毓嵩一派の策士が秘密裡に準備してあつたものゝ如く段祺瑞の判着するや否や國務總理代理の薩鎮冰を始め各閣員、參謀總長張懷芝以下の高級武官、陸續將軍府に參集して段祺瑞を中心として大會議を開いたのである。席上段祺瑞は徐總統に呈する文を出して會衆の賛成を求めた。其の呈文の内容を略記すれば劈頭

奸兇を彈劾して懲辦を請ひ綱紀を張り人心を振ふと云ふ書出しで曹錕は功なくして高官に上り復辟戰爭の當時も始めは張勳と通謀し討伐軍起るや寢返りを打ちたるは功の云ふべきなく寧ろ首鼠兩端を耻づべきであつた。夫にも拘らず兩湖宣撫使兼第一路總司令官に任じ湖南恢復戦に向はしめたるも大兵を擁して進ます、却つて吳佩孚が岳州、長沙を陥れたる功を嫉み其の督軍たるを妨げたと罵倒し更に吳佩孚は軍人でありながら妄りに元首を誹謗し通電中に徐總統を指して五朝元老と稱し清朝、民國、洪憲皇帝及び復辟に關係し後、また民國の大總統となりしを諷示し、其の當時南方と同様に徐總統と云はず徐東海先生と云ひて侮蔑せし事を引き軍人の敬禮を盡さゞりしを責め、衡州に駐屯以來、暗に南軍と通じ二十萬元の賄賂を受け軍隊引上を敢行し、命を奉ぜずして兵を湖南、河南に留め軍器、軍糧を途中に横奪して眼中政府なきを責め、曹錕、亦兵を德州に出し兵工廠を監視し天津、保定の軍隊を以て京師を包圍するの勢を示したるは一大罪惡と断じ、それのみならず西北籌邊使徐樹錚を排斥し元首を脅迫して違法の命令を以て之を免職せしめたが一體、曹錕は貪慾にして士卒を恤まず南征の軍費數百萬圓を着服し兵士の月給をも支拂はないコキ下し今や四方に軍隊を煽動し北京に對すること敵國の如く其の糧食を絶ちて民變を激發せしめんと

してゐるのは正しく國家に危害を與ふるものである。是等は其弟曹錫が計畫せる所で似たもの兄弟と謂ふべし。本上將軍（段自らを謂ふ）は民國を創建すること再三、歐戰參加には非常な苦心をして支那の國際地位を高めた。之から紀綱を整飾し國基を鞏固にするには何うしても彼等鼠輩が勝手に法律を破壊し外交に關係を及ぼすを看過する事が出來やう、茲に曹錫、吳佩孚、曹錫三人の官職を褫奪し段祺瑞に命じて捕縛懲罰する事を許されたい、左すれば腹心の患を去り統一を早める事が出来る、戰備は既に整つてゐるから立ろに裁斷されたい

と云ふ趣旨で徐總統の優柔に當り散らし曹錫、吳佩孚を散々に叩き付けたもので風厲卓發宛として討伐強制の形であつた。

參集の文武官は段祺瑞の權幕に驚き誰一人として之を諫止するものもなく唯々として之に賛成し薩鎮冰以下の閣員は段祺瑞の命に依つて其の呈文を總統府に持參する事となつた。段祺瑞は悠々として府學胡同の自邸に休憩したる上再び園河の別墅に歸つた。

そして段祺瑞は直隸軍を擊破するために定國軍を編制し、段芝貴を總司令、徐樹錚を總參謀長、丁士源を交通部長に任命した。京畿一帶に亘り其の夜戒嚴令は宣布された。

（二）兩軍の前哨戦

段祺瑞の行動は晴天の霹靂の、それの如く總統府を震駭させた。徐總統は段祺瑞が之れほど思ひ切つた行動を執らうとは豫期してゐなかつた。それに恃みとした張作霖が前夜北京を脱出し身邊の警衛すら覺束なき有様で此の激發を受け心身共に戦慄したと云ふ。然し事が此所まで運んでは北京は段祺瑞の獨舞臺となつた。徐總統の位地は恰も張勳に睨まれた黎元洪のそれと等しく屈伏か辭職の二途の中「を選ぶの外なき窮状に陥つたのである。然し徐總統は黎元洪ではなかつた。十二分の執着心がある上に段祺瑞も呈文では隨分強い事を云つても徐總統とは從來の友誼もあり直接之に迫ると云ふ程積極的の態度に出でなかつたので比較的樂であつた。代理總理の薩鎮冰其の他の總統府と園河を往來して協議した結果、九日遂に吳佩孚の第三師長を免職し並に官位勳章を褫奪し、軍法會議に附し、第三師は陸軍部に屬せしむと曹錫の四省經略使及び直隸督軍を革職し猶ほ暫時留任せしむる旨の大總統令が發表されたのであつた。

曹錫と吳佩孚も之に服従せぬ事は既定の事實であつた。段祺瑞が曹錫一派を討伐するの利便上奏

請した迄で曹錕等は活動を開始し京漢鐵道列車を抑留して京漢線上にある直隸軍を保定に集中し、段派に對抗して段祺瑞討伐の宣言を發した。鄭州にあつた吳佩孚の第三師を漸次北進せしめ總司令に吳佩孚を任命し直隸軍の前衛は京漢線高牌店に戰線を進め段派と對陣し京奉線の廊坊、楊村方面も亦兩軍對峙し、北京漢口間の直通列車は運轉不可能となり戰機正に熟せんとして五角の勢を以て睨合となつた。

段派も亦北京附近の軍隊に動員を命じ邊防第一、第三、陸軍第九、第十三、第十五の各師團の輸送を開始し十三日兩軍の前線に小衝突を交へた。

(三) 張作霖の武力調停

徐樹錚一派の壓迫に急遽北京より歸奉した張作霖は遂に起つた。居中調停は全く不成功に終るのみか、器量を下げた上に危く徐樹錚、捕虜とならんとして彼等の奸策に憤慨し覆面を脱して起つた徐總統擁護と武力的調停は表面の名義で實際は直隸派に加擔して段派討伐に決定した。十一日徐總統及び段祺瑞に宛て武力調停の激電を發し愈々其の旗幟を鮮明にしたのである。

其の文に曰く

我督辦(段祺瑞を指す)は公明磊落、内外の尊敬せる所なるも左右に小人あり、聰明を蔽ひ天下の恨を招くは惜むべし、徐樹錚の免職は行政上の常なるに彼等は種々の謠言を造り罪を余(張作霖)に歸す、余が北京にあり 調停に從事せるは恩を感じて酬ゆるを計る誠意なり、然るに督辦は千古の英雄なるに拘はらず二三の奸人の爲め誤られ第二の袁世凱たらんとするは遺憾なり、各處天災相踵ぐの秋に遇ひ再び戰端を開くべけんや、余は此機を忍ぶ能はず故に敢て倒行逆施するものあらば認めて公の敵となし自ら兵を率ゐて國に禍する障礙を除き人民の苦痛を解き然る後、罪を大總統督辦並に天下に謝すべし云々

之れ張作霖の第一通電であつた。次で張作霖の厭起の絶好の口實を與へたものは徐樹錚一派より派遣した暗殺圍捕縛であつた。張作霖が奉天より大兵を擁して入關し曹錕を扶くるを妨げんために密かに人を派し巨費を送り土匪を蜂起せしめ奉天省内の攬亂を企畫せんとの牽制策であつた。

張作霖は再び段祺瑞に宛て電報を送りて曰く、

奉天に於て舉動怪しき姚步瀛等十三名を捕縛せしに彼等は十二萬圓の運動費を携へ北京より奉天

に來り馬賊間に運動して事を起さしめんと謀りし旨自白す惟ふに此事は督辦(段祺瑞を指す)の眞意にあらず、必らず左右の小人が使嗾せしものならん、余が現に兵を率ゐて入京せんとしつゝあるは督辦左右の小人を除く爲めにして督辦に至りては余の平素最も尊敬せる人にして敢て相侵する意なし云々

と述べ、段祺瑞其人に對しては何等、敵意を含む者にあらざるも周邊幕下の策士連を斃すの目的なりと聲明し、暗に段祺瑞との個人的情誼に累を及ぼさざらんとし恰も段祺瑞擁護の義憤なるかの如くに粉飾し他日に於ける變通の餘裕となし最も巧妙を極めたのであつた。

(四) 奉天軍の出動

强硬なる激電を發し武力的調停手段を執ることを聲明せる張作霖は愈々旗幟を鮮明にして徐總統の政權擁護を表面の名義に斷然奉天軍の進發入關に決定した。黒龍江督軍孫烈臣が十二日夜來奉したので先着の將星と共に一大軍事會議を開いて出兵の議を凝らした。徐總統より出兵引留のため奉天出張を依頼された靳雲鵬も姿を見せず、張作霖は十三日遂に奉天軍に大勤員令を下し、親く遼東

の健兒を率ゐて入關するに決心した。

汲金純の第二十八師は十六日全部錦州の駐劄地より出動入關し、張作相麾下の第二十七師は鐵嶺、開原、法庫門方面に在る諸部隊も等しく奉天及び新民屯に集中し其の一部は奉天より出動を開始した。また吳俊陞の第二十九師の騎兵旅團は洮南より陸路新民屯に南下集中して同じく京奉線にて入關した。そして張作霖は其の出兵に關し堂々たる宣言書を造り出動の將士に對し親ら趣旨を告諭し大總統擁護、商民保衛、京奉線保護の三大綱領に別ち

と激励鼓舞し一方、親ら三軍を統率して陣頭に立つの概を示して意氣軒昂たるものがあつた。巡閱使總參謀長たる二十七師長の張作相は天津附近に軍を配備すべく入關し、奉天軍は陸續入關して軍糧城を中心に天津北倉一帯に集中し、總數七萬に達するに至つた。奉天にては張作霖は其の長子にして巡閱使衛隊旅長たる張學良を省城戒嚴司令に任命し敵黨の侵入に備へたのである。

榮譽を享けよ云々

大總統は目下危殆に陥り在るを以て之を擁護せざる可からず、我が奉天軍は大義の爲め入關し危を扶け亂を定むるものなれば汝等東三省の健兒は此の男子報國の秋に際し、一身を捨てゝ千秋の大總統擁護、商民保衛、京奉線保護の三大綱領に別ち

(五) 安徽軍の大敗北

直皖兩軍は連日、其の陣容を整へ京漢、固安、京奉の三路に亘り相對峙してゐたのが十四日京漢線前衛の小衝突を導火線として兩軍の戰端は開かれた。

邊防軍第一師長曲同豐の率ゆる定國軍第一路軍は吳佩孚の率ゆる保定軍を猛襲して一舉、涿州、定興を抜き破竹の勢を以て保定軍を壓迫し長驅、高牌店を占領し意氣既に保定を呑むの概があつた。東路方面は第四路司令徐樹錚、西北邊防軍を指揮し十六日正午楊村を占領し勢に乗じて二個旅團の直隸軍を追撃し天津西方の北倉に迫り天津、北京間、直隸軍の隻影なきに至り段軍の勢威冲天の懾を示し必勝を期待された。

十七日に至り京漢線方面の戦況は段軍の敗戦となり形勢逆轉して總崩れとなつた。當日降雨のため第一路の定國軍は警備を懈り戰勝の餘熱冷めやらぬ處に際し、保定軍は白旗を掲げ降伏するかのやうに裝ひ、定國軍の油斷に乘じ逆襲した結果、定國軍の陣容は支離滅裂となつて總崩れとなつた。劉訥の第十五師は遽かに態度を變更し南苑方面に撤退し曲同豐の邊防軍第一師は孤立の窮境に

陥り保定軍は混亂に乗じて北進し涿州、琉璃河に到着し陣營を張り、定國軍は僅かに長辛店に踏みとまつたのである。定國軍の敗報に京師震駭し、段祺瑞は定國軍總司令段芝貴を免じて新に曲同豐を任命せるも時に曲同豐は保定軍のために捕虜となつてゐた。中路の固安方面(北京の西南四十哩)は吳佩孚麾下に對し第十三師長李進才の一族を派し永定河を中心に挟み對陣せるも亦、保定軍の強襲に敗退して南苑に撤退した。唯だ東路の徐樹錚獨り奉天、直隸の大兵と對抗し天津方面に在り段軍の爲めに氣を吐けるも大勢は不利であつた。西路、中路の敗退に徐樹錚如何に西北邊防軍の精銳を以て拮抗するも之が挽回は不可能であつた。固安方面より突出せる保定軍は徐樹錚の後路を絶つの虞あり、段軍の將卒、士氣全く沮喪し全軍潰散状態に陥つた。段軍作戰の齟齬と四圍の形勢は智謀第一の徐樹錚をしても策の施す術もなかつた。斯くして段派没落となり、呆氣ない戦であつた。

(六) 鼻息荒き直隸派

十九日徐總統の第二次停戰命令發布され、段祺瑞は一切の責を負ひ徐總統に對し督辦邊防事務、

管理將軍府事務及び陸軍上將の各本兼職勳位勳章等の辭表を提出し定國軍の名稱を取消すに至り段派の勢力は九天直下、没落の淵に陥つた。之れに依り徐總統は再び調停運動を開始せしめ靳雲鵬、姜桂題の一月十九日夜天津に赴き直隸派の幹部である直隸省長曹鋐（曹鋐の弟）と折衝せるも其の主張は頗る强硬であつた。其の要求條件は

（一）新國會を解散する事

（二）西北邊防軍及邊防軍を解散する事

（三）安徽軍第四路司令徐樹錚、交通總長曾毓嵩、航空局長丁士源を罪魁とし其他十一名を重罪犯とする事

等が主要なもので徐總統が靳雲鵬に内訓せる折衝條件としては

（一）段祺瑞は民國創建の殊勳者なるを以て其の地位を動かさざる事

（二）國會は解散せざる事

（三）邊防軍は依然存續すべき事

の三ヶ條であつた。曹鋐一派は靳雲鵬に對し「直隸派は安徽派に對し條件等なく過般大總統に提出

せる各條件は直隸派督軍間にて決議せるを申請せるにて曹鋐としては條件提出は不可能なるため目下各省に意見を徵詢しあり、張作霖追つて入京の上提出せん」と回答し一切の解決は張作霖の手中にあるを以てした。

（七）奉天軍の入京

形勢の推移は安徽軍に不利と爲り京奉線方面にありし徐樹錚の軍隊も一部は京綏鐵道方面に、一部は通州方面に撤退せしを以て奉天軍は二十三日、六列車に兵士を滿載して進出し先づ廊坊を占領した。湯玉麟に引率されし奉天憲兵三十名は同夜北京に到着し安徽派の要人を一網打盡的に逮捕せんとし徐總統の親翰を以て入城を阻止せしも關せず入京し活動を始めた。

次で奉天軍は京奉線各驛に警戒を置き其の主力を豐臺、南苑に輸送し直隸軍と聯絡を通じ、二十四日朝南苑の第十五師と第九師に向つて兵營明渡を要求し小爭闘ありしも安徽軍は北苑に引揚げた。それに奉天軍は直隸軍と相聯繫して北京附近にある安徽軍の武装解除に着手し南苑に於て第五師、第九師及び邊防第三師の武装を解除し後、北苑に進み邊防第一師をも亦武装を解決した。同

日の閣議は奉天軍が政府の命に依らず勝手に安徽軍の武装解除をなすは越權なりとの議起り一應奉天軍に詰問するに決したが無論何等の效果もなかつた。

北京城外は安徽軍の敗兵、新來の奉天軍、直隸軍充滿し何時衝突を生じ城内に闖入するやも知れぬので歩軍統領の軍隊を以て各城門を鎖し嚴重警戒した。殊に張作霖の入京は如何なる芝居を打つや端倪を許さずとし支那人間には大恐慌を惹起し復辟の謠言又盛んに流布されたのである。

第十一章 張作霖と曹錕

第一節 爭覇後の跡始末

(一) 張作霖の再入關

直皖兩派の政戰は呆氣ない迄に脆かつた安徽派の没落に因り案外速に解決の幕に入つた。北方の天下は愈々張作霖と曹錕の手に歸した。北京政府の政權が表面の名義は如何にせよ實際に於ては張作霖と曹錕とに握られて了つた。榮枯盛衰の烈しい支那の政局として段派の失勢は當然であらう。

之れで愈々張作霖も時局の中心人物として中央の檜舞臺に乗り出す事になつた。安徽軍潰敗し奉直聯合軍優勢となり大勢は已に定り一切の問題は張作霖之れが解決の鍵を握り一代の人氣を背負ふて立つた。隱忍多年漸進的政策家として勢力の擴張を進めて來た張作霖も今回安、直兩派の内争に際し出處宜しきを得て一躍「時の人」となり中央の政局は殆んど張作霖の獨舞臺となつた。大總統擁護を好題目として曹錕と天津に會議し爭覇後の跡仕末をなすために二十三日正午正に奉天發北京に向はんとする朝前國務總理の靳雲鵬は突如天津より奉天に來て張作霖と會見した。

之より先き、徐總統の命を奉じ天津に下つた靳雲鵬は曹錕等と會見し停戰條件を提示し調停せんと試みたが曹錕一派は「交渉は總て張作霖に一任しあり」と空嘯き協議を肯ぜぬ上に其の驕傲な態度に殆んど交渉を開始するの道なく遂に再び調停不可能に陥つた。そこで靳雲鵬は張作霖の上京を待つてゐたが其の入京の聲のみ高くして遷延數日容易に入津の模様ないので斯くては調停再び中絶し時局收拾し難きを虞れ急遽奉天に出張したのであつた。

張作霖は靳雲鵬より委曲の政情を聽取し時局解決の爲め入關せん事を懇請されて自身已でに靳雲鵬の出迎を受くる迄もなく出馬に決定せる矢先とて直に之を諾し翌二十四日夜七時靳雲鵬と相携へ

嚴重なる警戒裡に特別列車にて出發天津に向つた。

其の出馬に前ち時局解決に對する意見として某要人に語つて曰く

時局の收拾は内閣組織問題を先決問題とし第一候補者は靳雲鵬を指いて他になし、既に安福派の勢力衰へし今日曹錕亦之れに異議なかるべければ靳雲鵬の内閣組織は最も多くの可能性を有す若し靳雲鵬にして承諾せすんば錢能訓又は周樹模に交渉すべし、斯して内閣組織を先にし其の他の調停條件は大總統の命に聽く可し云々

と云ふのが張作霖の方針であつた。其の入關に依り奉天の本據には黒龍江督軍の孫烈臣、巡閱使代理として留守を預つたのである。

(二) 天津の善後會議

張作霖は靳雲鵬と共に二十五日午後天津に到着し出征奉軍の各師長及び直隸派大官等の歡迎を受けて直に直隸省長公署に省長曹錕を訪問して時局解決に就て協議を凝らした。そして保定にある曹錕に對し天津に來りて俱に時局解決の條件に關し商議せん事を電促し河北街の恒記徳軍衣莊の一室に陣取つた。曹錕も亦張作霖入津の報に依り之を諾した。二十六日前に吳佩孚と共に褫奪された官職勳位の復活命令發表されたので二十八日保定より天津に出馬して來た。此處で愈々役者の顔が揃つて張作霖、靳雲鵬、曹錕の三雄會見し鼎座凝議して時局解決の方法を講究した。之れより前き二十六日曹錕より徐總統に提出せる次の七ヶ條の要求條件に就ても更に改めて協議した。

- (一) 邊防軍とその官制を廢止する事
- (二) 西北邊防軍を廢止し其の軍隊を解散する事
- (三) 段祺瑞を湯山に住居せしめ置き國民の解決を待つ事
- (四) 徐樹錚、曾鍾萬、朱深、李思浩、丁士源等を引渡す事
- (五) 安福俱樂部を解散し王樹唐の如き重要人物の任官を終身停止する事
- (六) 新國會を停會する事
- (七) 段芝貴、傅良佐、吳炳湘、王郅隆、曹汝霖、陸宗輿、章宗祥等を懲罰する事

直隸派の鼻息は頗る猛烈を極めた。政府も最早、張作霖、曹錕の要求を拒否する威權を失つた。二十

五日安福派閣員である財政の李思浩、司法の朱深、交通の曾毓雋等三總長及び京師衛戍總司令段芝貴、河南省長王印川等免職の命令に次で二十八日、段祺瑞の一切官職を免するの大總統令下つて。翌二十九日は亦徐樹鈞、段芝貴、曾毓雋等十名の安福派巨頭の官位勳章勳位の褫奪令と逮捕令發布され段派の勢力は地を拂ふた。

天津會議の結果は張作霖、曹錕兩人にて北方の政局を維持するの協定をなし、靳雲鵬をして再び内閣を組織せしめ、其の他の一切問題は北京に於て徐總統と面謁後解決するに決定した。八月三日安福派解散命令と徐總統の罪已令相次で發布され、四日安福派首領として衆議院議長たる和議總代表王樹唐免職され懲罰され江蘇督軍李純北方和議總代表に任命された。

然して一方徐樹鈞以下十名の所謂安福派禍首の行衛は杳として黃鶴の如く全く不明であつた。越えて八月九日小幡公使より外交部及び外交團主席公使に致せる政治犯保護の通告に依り始めて徐樹鈞等が難を日本公使館に避けてゐる事が判明した。

(三) 張作霖、曹錕の入京

入京の噂のみ高くして實現しなかつた張作霖、曹錕の兩巨頭は四日午後前後して入京した。之より先、北京停車場には歓迎の華牌樓を設け、驛頭には高く五色の民國旗を交叉し、沿道到る處の通路は清掃され、道路の兩側は步軍統領衙門の軍隊、京師警察廳の巡警林の如く堵列物々しく警戒し、停車場構内の警備は更に嚴重であつた。衛戌總司令王懷慶、警察廳總監殷鴻壽、軍警督察長馬龍標、徐總統代理徐邦傑其の他の名士多數驛頭に出迎へたのである。

張作霖は午後四時四十分到着し物々しき警戒と帝王に等しき歓迎を受け「東三省巡閱使張」と赤地に白の大字を抜ける大旆を先頭に押立て三百の儀仗兵、鎗旗を持つて歩調整々と繰出し、機關銃隊と騎兵の一隊に護衛され細雨蕭々たる中を馬上豊かに威風四邊を拂ひ堂々として入城し衛戌司令部に休憩して後ち舊刑部街の奉天會館に入った。續いて曹錕は同五時十分到着し自動車にて帽子胡同の馮國璋舊宅に入つた。靳雲鵬も亦、五日午後、歸京し政局の中心は再び天津より北京に移つた。張作霖は入京の翌日即ち五日朝、曹錕と前後して總統府に赴き徐總統に謁見し時局解決の辦法

として

兎も角も先づ靳雲鵬に再び内閣を組織成立させたる上、其の他の事を處置する事可なるべく又國會の法定數に足らざる事明白なる以上は國會の同意を求むるが如き形式を取るの要なれば署理として任命さるべきし、若し國會反対せば解散して可なるのみ。

とて斷乎たる武斷政策を建言して徐總統の賛同を得るに至つた。

張作霖と曹錕は入京後、世人が張曹兩人は復辟と共和の主張者として併び立たが必らず衝突するに相違ないと誤解し居るを釋くために兩人連名を以て各省に宛て「斯くの如きは黨人の捏造流布する謠言にして余等は飽まで、元首を擁護し眞の共和を保持する決心なり」と通電して其の態度を聲明した。

(四) 國民大會の提唱

砲煙彈雨の間に安徽軍を粉薙して勇名をあげた殊勳者吳佩孚は二日夜戰線より天津に來り曹錕張作霖等に會見して時局解決の意見を陳述し「宜しく國民大會を開いて南北講和の難決問題を解決す

べし」と主張した。此の國民大會論の提唱は純乎たる一武將の吳佩孚單獨の主張ではなかつた。吳佩孚の背後に隠れてゐる南方系の政客と外國人(重に米國人)の煽動せるとに基因し吳佩孚は彼等の傀儡であつた。吳佩孚の主張する所は純然たる國民大會にて何等の制限なく一般人民より代表を選出して一切の政治問題を討議解決せんとするにあつた、恰も一の國家が大革命の結果一切從來の政治機關、法律案等の破壊された後の新建設に對する如き性質を帶びてゐた。此の主張に従へば國家を擧げて全然無制限なる國民集團の料理奉制に委するに至り露國過激派以上の大破壊に陥るの外なく一種の危険思想である。前に徐總統が李純を介して南方と交渉せる平和條件中に法律問題、南北の國會問題を國民大會を開催して決定せしめんとするの意図ありしを聞知せる吳佩孚が國民大會に對する徐總統の眞意が單に現在の民意代表機關である各省の省議會より若干の代表を選出せしめ之を集合して國民大會の名を冠するにあつたのを誤解せる結果徐總統に媚ぶるために斯くは危険なる無制限の國民大會を提唱せるのであつた。徐總統、靳雲鵬、張作霖等極力之れに反対せるも吳佩孚は容易に主張を枉げず、張、曹の入京に次いで六日晉京し徐總統に面謁し「時局の收拾は國民と共に善後策を講するの必要あるを痛説し此の大方針を阻害する者に對して吾人は執るべき手段あり」と陳じ

て暗に徐總統を威脅するの態度に出で内閣改造の上に一大阻碍となつた。

(五) 第二次靳内閣成立

張作霖、曹錕の入京に依り愈々時局解決の先決問題である雲鵬の内閣組織に入つた。靳雲鵬の總理署理の任命は已に徐總統の署名捺印を終つてゐるが靳雲鵬が猶ほ組閣を承認せぬために發表情惱んでゐた。此の内面の事情は米國人の傀儡である吳佩孚が戰勝の功を恃み「小問題は勿論、憲法制定をも國民大會に於て解決せん」と主張するに反対せる張作霖の駆引であつた。靳雲鵬を操縦して受任を言明させず「國民大會に於て國會組織法、議員選舉法を修正するは不可なきも憲法制定を爲さんと爲めに約法を破壊する者にて一種の革命運動なれば自分は斯る重大の責任を負ふ國務總理たる能はず」と聲明をせた。一方張作霖は親ら吳佩孚と會見し國民大會の利害、實際施行不可能なる事、危險なる事、約法に違背せる事、時機にあらざる事等を詳論縷述して反省を求めた。然も吳佩孚が依然主張を固執するため憤々として歸奉の意を洩せるも漸く曹錕より吳佩孚を抑さへ其の主張を撤退させたので張作霖も歸意を翻し靳雲鵬にも總理就任を承諾させた。之れで一

寸人氣を呼んだ吳佩孚の國民大會も立消に終り吳は張作霖に對して一種の反感を抱くに至つたのは事實である。

七日午後總統府に於て閣員の銓衡會議開かれ、徐總統、張作霖、靳雲鵬、曹錕、田文烈、薩鎮冰等の巨頭參集し協議する所があつた。越えて九日靳雲鵬の國務總理の任命正式發表された、其の日午後亦徐總統、張作霖、曹錕、靳雲鵬等會合し閣員の顔觸に關し再議し奉、直兩派の勢力均衡上人選行惱に陥つた。十一日に至り漸く決定し正式任命の發表となつた。

國務總理	靳	雲	鵬
內務總長	張	志	潭
外交總長	顏	惠	慶
財政總長	周	自	齊
陸軍總長(兼任)	靳	雲	鵬
海軍總長	董	康	鵬
教育總長	范	源	

交 通 總 長 葉 恭 輯
農 商 總 長 王 酒 氏

此の新閣員は靳雲鵬を中心に張作霖の奉天派、曹錕の直隸系、梁士詒の舊交通系の聯立内閣で對外的には親米派優勢にて親日派は悉く失脚したのである。

(六) 張曹の政權協定

政變後の新内閣再造に產婆役として斡旋大いに努めた張作霖、曹錕兩者の地位が新内閣に於て自ら特殊のものたるは勿論、事實上政權の所有者として大總統も國務總理も其の傀儡の觀を呈した。就中張作霖は個人としても其才、其智、其識遙かに曹錕を凌駕し群雄に一步を抜んでゐると共に新内閣に對しても曹錕に比し更に優越の地位を占めてゐた。其の結果段派既に覆滅し中央の政權を獲得したる今日、其の智謀と武力とを以てせば豫ての願望を一氣に成就する爲めに第二の張勳となるのではないかと疑はれ、一時張作霖を中心として復辟の謠言すら流布されたのも必らずしも無理ではなかつた。然し大局を見るに聰明な張作霖は依然として漸進的政策の把持者であつた。矢張り張作霖

は張作霖としての面目を喪はず憤勃たる野心を抑制して冷靜なる理智に因つた。單に政權の獲得に止め將來の地歩を残して去るの持久策に出でた。何處までも機會利用を主眼とした漸進主義で最後の勝利を占めんとするの魂膽が含まれてゐた。それで北京政府の政權に關しては徐總統、靳總理、張作霖、曹錕の四頭目の間に政權保持を目的とした六ヶ條の條件協定され其の勢力範囲と機會均等を定め相互の間に諒解が成立したのであつた。其の協定條項は次の如き内容である。

- (一) 重大案件に關しては政府より張作霖、曹錕兩人の意見を徵すべき事
- (二) 東三省及び直隸、山東、河南等各省の官吏任用は張作霖、曹錕兩人の意見を採用する事
- (三) 其の他の各機關に對する政府の任命には張作霖、曹一の兩人反対せざる事
- (四) 中央政府の命令を遵奉せざる諸省あらば張作霖、曹錦兩人より勸告する事
- (五) 段祺瑞の生命と曹汝霖、陸宗輿の安全を保証する事
- (六) 新内閣動搖の際には前以て張作霖、曹錦の兩人に通知する事

之れで張作霖、曹錦の北京政府に對する地位は確實に裏書された。張作霖も曹錦も安徽派を倒し之れに代り、ヨリ以上の勢力を北京政府に植ゑ新内閣の支持者となつた。之れに伴ひ早くも張作霖

曹錕兩者の勢力争ひを生じ反目軋轔を傳へられた。が兩者は相互の誤解を避くると親密の關係を持続するため且つ奉直兩派の破裂防止の政略上、支那一流の結婚政策を執つた。靳總理の仲介で張作霖の四男と曹錕六女との約婚が結ばれた。北京政局一段落を告げたので九月四日前後して出京天津に下つた。靳總理も亦下津し來り張、曹兩者と鼎座密議、安徽派督軍の排斥問題を討議した。張作霖曹錕、與に滬津週日に達せざるに各任地に歸任した。張作霖の如きは十一日午後奉天各界人士の熱誠なる歡迎裡に凱旋將軍の勢を以て威風堂々と著奉入城した。七月二十五日朝入關して約五十日振りである。

第二節 張作霖の政見發表

(一) 日本記者との會見

張作霖も亦保守的な支那大官の例に漏れず新聞記者嫌ひの一人であつた。絶対に面會拒絶する程ではなかつたが容易に會見を承諾しなかつた。奉天督軍となつて以來、お膝元の奉天にある新聞記者團に正式に會見した事がなかつた。それが今や時の人として東三省の張作霖より支那の張作霖となつて一代の人氣役者となつて見れば張作霖も今更ながら新聞政策の必要を痛切に感じた。奉天の田舎から飛び出して見れば中央の檜舞臺の空氣はまた別であつた。

七月二十六日入津の翌日、張作霖は從來のレコードを破つて在天津の外字紙新聞記者と會見した。直皖戰事と自己の立場に就て縷々辯明する所があつた。之れに次で入京後時局問題一段落を告げ、靳內閣成立するや八月十三日午後在北京の日本新聞通信記者團と會見した。場所は奉天軍總司令部である舊刑部街の奉天會館であつた。北京の政權を獲得し靳內閣の擁護者とせる一大勢力家の張作霖が包み切れぬ得意を藏して約一時間餘に亘りて種々時局問題に關し自己の立場を説明し併せて親日意見を吐露したのである。張作霖は劈頭「時局も略ぼ解決したれば今後の事は大總統と靳内閣に一任して余は一週間の後歸奉し從來と同様と愛嬌を振まき記者團の間に應じて大略次の如く語つた。

* 奉軍出兵理由 今回の出兵に就ては種々揣摩され居るも余は最初より出兵の意思を有してはゐない

かつた。徐總統は素と余の長官、段祺瑞は余を推挽せし人にして俱に恩誼ある先輩、曹錕とは多年の友人にして本來孰れを援くるにも非らず。余は唯だ北洋派の内訌を遺憾とし、國家の爲め之を調停せんと欲し入京して盡力せるも其の目的を達する事能はず、遂に失敗に終り奉天に歸任したのである。余は當時猶ほ戦意を有せざりしも余が時局調停の爲め入京せし時、段祺瑞の周囲に蠢動する小人輩(徐樹錚一派を指す)が余の在京中種々の手段を以て余に危害を加へんとせし事實に兩度に及びしのみならず、奉天に歸還後も更に姚步瀛等十三名の暗殺團を密かに東三省に派遣して亂を地方に起し無辜の東三省人民を苦しめんとした。段派が余を恨むは勝手なるも罪なき人民を騒がさんとするは許すべからず、余は奮然出兵入關せしめたる次第にて若し彼等にして如斯行爲なれば余は派兵入京の意思はなかつた。

◆入關奉軍撤退 現在奉天軍の關内に在るものは總數七萬に達せるも其の中、從來駐屯せる約三萬(歩兵五個旅團と騎兵一個聯隊)は依然京師に駐めて大總統の護衛と京畿一帶の防備に充て爾餘四萬の軍隊は奉天に撤退するに決し兩三日來既に引揚を開始した。

▲南北統一問題 中央の政局に就ては一に徐總統と靳總理の手腕に信頼し、余は一個人としては

何等意見なし。南北の統一は國內を平穩に歸せしむる緊急の問題なれば政府に於ては兩廣の岑春煊、陸榮廷等と交渉するのみならず、雲南の唐繼堯とも局部和議を圖り兩方面より平和を促進する方針にて已に唐繼堯とは電報を往復しつゝあり。統一の方法は李純等の主張する各省代表會議を開き、新舊國會を處分したる上、正式の國會を開き憲法を制定するを可とす。

▲國民大會問題 吳佩孚の主張する國民大會は問題にあらず、吳佩孚の背後には一部政客及びテニー(米國公使館書記官)、アンダーソン(總統府顧問)等の米國人ありて盛んに煽動操縱し居り、吳佩孚は其の傀儡のみ。此の主張は支那の現狀に於ては事實不可能なるのみならず、斯くの如き方法を採用せば支那は遂に過激化する虞あり、余は此事に就き吳佩孚とも會見して議論を交へ、吳佩孚を說破せるを以て吳佩孚も既に諒解し國民大會問題は最早消滅したのである。曹錕は此等の問題を深く知らす要するに國民大會は實行不可能である。

▲督軍更迭問題 各省督軍の更迭說あるも斯かる事實なく刻下の場合不可能である。安徽督軍倪嗣沖のみは辭表を提出し居るを以て早晚更迭さるべき。全國を六大軍區と爲すの計畫なども現状に於ては不可能である。

▲安福派禍首問題

今回日本が政治犯人即ち安福派禍首九名の保護を聲明せるは國際の通義に基き、又は人道の上より見て至當なる處置であらう。唯だ日本公使館が保護を加へ居るとするも故に公文を以て之を聲明せるは賛成し兼ねる所である。何故なれば該聲明の結果は却つて支那人に悪影響を與へ、日本に對する反感を昂むるに過ぎざるべし。從來排日運動の背後には外國人の煽動者潛在し居ること明かなるに日本は再び彼等に排日の口實を與へたるに等しく將來、復た排日運動の勃起せん事を憂慮する者である。何故に日本が斯くの如き愚劣なる聲明をなせしか余の解釋に苦しむ所である。禍首九名の處置に就て引渡を要求するか否かは政府に於て適法あらん余の與り知る所にあらず、余は彼等の多くと親交ありて何時も余の入京する時に出迎へ呉れたるが今や禍首となり世を狹め居るには私情上、一掬同情の涙なきにあらず。

▲口支親善提唱 東三省は日本と密接の關係あり、余は日本と相提携し今後一層、日支の親善を圖るに努力し日支國交を圓滿ならしめん事を欲す、世上には種々の風説あるも日支兩國間に存在する各種の契約等に關しては其の當時、閣議を通過せる者は之を破壊する等の事なし。余は近く日本に赴き多年の希望を達したい考へである。諸君は輿論を指導する地位にある人なれば宜しく

此の點に留意し兩國の親善殊に國民間の誤解を釋かん事に盡力されん事を希望す。

(二) 米人記者との會見

越えて八月三十一日張作霖はまた北京に於ける米國人の新聞通信記者等と會見し、時事を談じた。之より前き張作霖は彼等米國人が吳佩孚を背後より操縦し國民大會を提唱せしめ又は無稽の謠言を流布せしめあるに甚しく反感を抱いてゐた。吳佩孚を憎むが如く米人等を憎んでゐた。其の結果當日の會見は冷々淡々たるものであつた。日本記者團に對して愛嬌を振まけるとは全然反対で支那人特有の婉曲な外交的辭令を用ひず張作霖一流の露骨な皮肉を以て之と應待した。平素京津を中心とする排日論の製造本家である彼等が「日本の満洲侵略」如何に就て質問するや言下に之を否認して曰く、

日本軍の後貝加爾州撤退は已に完了し東支鐵道沿線は支那警備隊駐防し何等の憂患はない。最近頻りに日本が東支鐵道の獲得説を爲す者あるも之れ全く日本を誣妄する無根の謠言に過ぎない。此の兩三年來、日本が満洲侵略の行爲なるものは之を事實に認め難い、

とて明確に否認し日本の満洲に於ける公明正大なる態度を證明した。彼等が話題を轉じて奉天軍の全數を質すや張作霖は言下に「三十萬」と答へ米國と比較し其の數甚だ多しと非難せるに對し「米國の海軍は如何」と反問した。財政狀態が頗る差ありと云ふに「支那は米國と國情が異なる」と答ふるなど無愛想を極めた。殆んど喧嘩腰で此の會見は終つたと云はれる。

第三節 察哈品都統更迭

(一) 北京兵權の獨占

年來銳を東三省に養へる張作霖が愈々手を關内に伸ばすの機會は到來した。北京政府に對する自己の優越な地位を利用して其の勢力を京畿に擴大し鞏固なる地盤を扶植するに努めた。北京の兵權獨占を企圖し、奉天軍を京畿に常駐せしめたのも其の一である。

大總關の威嚴擁護と京師治安の保持を表面の理由とし、前年南征以來駐屯せる張景惠麾下の暫編第一師を依然常駐せしむる外、鄭殿陞の暫編第二混成旅其の他を合し、約參萬の奉天軍を南北兩苑及び廊坊其の他一帶に分駐せしめ、加ふるに軍糧城を中心に山海關以西の京奉鐵道沿線に軍隊を配

備し素破と云はゞ一令の下に數萬の兵を北京に繰り込むの準備を整へたのである。

然も張作霖は北京の兵權を完全に自己の手中に掌握せん事を欲し北京城衛戍の重職なる步軍統領を自己の系統に收めんとした。段芝貴の失脚後、步軍統領王懷慶が京師衛戌總司令を兼任せるので王懷慶の歩軍統領を免じ衛戌總司令専任に轉ぜしめ奉天督軍參謀長の秦華を後任に据ゑんと運動する所があつた。王懷慶は徐總統腹心の一人にして往年、徐總統が東三省總督たりし頃より副官として重用し庇護推挽最も努め信賴せる人物である。之を步軍統領の重職より轉任せしめ北京の兵權を奉天軍に獨占せしむる事は徐總統の反対する所となつた。流石の張作霖も深く要請せず之れが代價の意味にて京津憲兵司令陳興亞を免職し秦華を其の後任とした。之れ新内閣再造の翌々日（八月十四日）にして張作霖大半の目的は成就したのである。

秦華は奉省鳳凰城の產、日本留學生出身にして鋤々たる新知識の一人である。前に奉天督軍の中校參謀たりしが前參謀長楊宇霆が徐樹錚事件に坐し張作霖の勘氣を蒙り没落後、其の後を續いで督軍參謀長に抜擢されし俊髦である。

時機未だ熟せず、張作霖は所期の目的であつた歩軍統領及び衛戌總司令の要職を自己の勢力闇に

收め名實俱に併有し得ざりし憾あるも京畿一帶に配せる其の雄厚なる兵力は事實上、北京の兵權を獨占したのである。

(二) 張景惠の都統昇任

張作霖は多年内外蒙古に垂涎して之を己が勢力範囲となすべく翫望してゐた。滿洲を完全に自己の手に収めた上、更に指を蒙古に染めんとするの計畫であつた。徐樹錚一度、西北籌邊使として外蒙の經營に成功するを見て自己の理想と衝突せるを憤つてゐた。

今回の直皖戦争で徐樹錚を倒し安徽派を覆滅して中央の政權を獲得した結果は愈々、張作霖が蒙古方面に手を伸ばすの機會が到來したのである。

張作霖の食指は先づ手近の熱河都統の地位に向つて動いた。熱河の特別行政區域は直隸省の一部と内蒙古南部の地を包含し奉天省と接壤し最も密接の關係がある。自ら滿蒙統一の王者を以て任ずる張作霖が熱河に着目したのは當然であつた。之を自己の勢力圏に收め麾下の宿將張景惠を都統に据ふんと運動した。然し此の運動は結局失敗に終つた。熱河都統の姜桂題は年齢已に八旬に達し北

洋武將の長者として前清以來、毅軍の精銳を擁し、多年熱河に駐防し牢乎たる潜勢力を有してゐる關係上、前に姜桂題が段祺瑞の後任として管理將軍府事務を兼任せるを好機會に姜桂題を將軍府事務管理の専任に祭上げ、熱河都統に張景惠を任命するの計畫であつた。が四閥の情勢は之を許さず失敗したのである。然し張作霖は張景惠の推舉を斷念せず運動を怠らなかつた。

張作霖が極力、張景惠を推舉するは單に奉天派の勢力を擴充するの意味の外に個人關係からであつた。元來張景惠は張作霖の恩人の一人である。張作霖が第二十七師長時代、張景惠は其の麾下に騎兵二十七團長の職にあつたので部下の如く信ぜらるゝも實際は其の先輩である。督編奉軍第一師長兼奉軍副司令としての張景恵が北京に常駐し張作霖の北京特派大使の役を勤めて奉天派の勢力擴張に努力した功績は渺少でない。此の關係上、又張作霖が推挽大いに努むるは當然であらう。次に張景恵は吉林督軍に昇任するに決定した、が之れも亦、鮑貴卿が關内の某省に轉任不可能となつて居据つた結果實現せず、更に京師衛戍總司令に轉任の説も噂だけで實現せなかつた。然し張作霖は依然、推挽最も努め遂に察哈爾都統王廷楨を轉任せしめて其の後任とするに決定した。察哈爾の特別行政區域は外蒙の南端に位し左右は熱河、綏遠の二特別區に接し首城張家口は外蒙の咽喉として所

謂邊關の重鎮である。此の要樞に都統たる事も亦、一大勢力である。張作霖が東三省以外の關内に手を伸ばさんとする理想上、熱河を得んとして失敗せる代價として察哈爾に着眼したのは蓋し當然の順序であらう。

時に外蒙方面の形勢、危急なるに際し察哈爾都統王廷楨が叨林に出兵するを踏距逡巡し居るを聞知した張作霖は、奸機乘すべしとて政府に對し「外蒙の危急に際し都統出兵せざれば奉天軍を出兵さすべし」との強硬なる激電を送り次で王廷楨の免職を強要した。張作霖と靳總理の間には前以て默契成立してゐたので九月二十一日次の如き大總統令は發表され王廷楨は遂に將軍府に祭り込まれた。

奉天軍副司令
暫編奉軍第一師長　　張　　景　　惠
特任察哈爾都統兼任陸軍第十六師長
察哈爾都統
陸軍第十六師長　　王　　廷　　楨
免本兼職任項威將軍

張作霖の宿望は達した。張景惠は察哈爾都統となつた。久しく滿蒙統一の意圖を抱ける張作霖は

其の第二階梯に足を踏みかけたのである。然も張景惠が張家口赴任のため奉天より北京に向ふに際し察哈爾都統の權限を擴張し外蒙古軍事統率權を附與すべく政府に要求せしめた。庫倫、恰克圖に駐屯する軍隊は勿論、別に一個師團の兵力を蒙古各地に分駐せしめ其の全部を察哈爾都統の統率に歸せしめんとするにあつた。

第十六師長には張景惠が一身數職を兼ねる關係上麾下の鄒芬を任命した。

(三) 馮と湯の復活

民國六年俱に相前後して失脚した馮德麟と湯玉麟の兩人は張作霖に起用せられ再び復活した。馮德麟は張勳の復辟事變に連坐し下獄せるも釋されて後ち種々復官運動の結果、奏功し陸軍中將の原官に復職し特に大總統府高等侍從武官の閑職に任命の恩典に浴して北京に居住してゐた。湯玉麟も亦、張勳の復辟當時其の麾下に參加し畫策する所があつた。復辟失敗後一度徐州に奔り後、廣寧北方の白土廠門に閑居して只管恭順の意を表してゐた。越えて民國七年春、張作霖の第四十四回誕生祝を機會とし第二十八師長の汲金純や同師五十五旅長の張海鵬等が張作霖に對して馮、湯の勘氣赦免

を運動した結果成功した。

當時、張作霖の内を啖はずんば已まさるまでに憎惡仇敵視した剛情な馮、

湯等も四圍の形勢に遂に張作霖の軍門に兜を抜ぐの餘儀なきに至つた。張作霖と馮、湯間の交情は復舊した。張作霖が東三省巡閱使に昇任したので馮と湯とは最高軍事顧問に祭上げられ馮は月俸大洋八百元、湯は同五百元の手當を受くる身となつた。謂はゞ態のよい食客であつた。

馮德麟は年齢五十四、未だ老境と云ふ年ではないが阿片中毒にて身體氣力、全く消磨衰弱し當年遼東の俠豪として雄名を馳せた傍は失せて活動は不可能であつた。之に反し湯玉麟は馮に弟たる事五年なるも、從來奉省武官中唯一無二の蠻勇將軍として一種の人材である。張作霖も一時叛逆的行爲はあつたとしても遼西以來二十年の舊誼に顧み空しく老い朽ちしむるを惜んでゐた。機會あれば相當の地位に復活させて舊誼に酬ゆるの意があつた。今次の直皖戰事に際し益々人材抜擢の必要に迫られた結果特に奉軍偵察隊長に任じ北京に派遣し湯一流の野武士振を發揮せしめた、其の殊勳に對する恩賞として湯玉麟は遂に第三代の東邊鎮守使の重職に復官した。之れ九月末である。

東邊鎮守使は右路巡防隊の統領を兼ね奉天省に於ける馬賊の巢窟である東邊鎮撫の重職で併せて満鮮國境警備の擔任者である。初代鎮守使の馬龍潭は其の部下が馬賊と聯絡し良民の財を掠奪せる

を制壓し得なかつた無能と監督不行届及び公金十餘萬元を費消した事等に因りて張作霖の憤怒を買ふた。此の結果は兵權統一に腐心してゐる張作霖に累系である馬龍潭を左遷するに奸個の口實を與へ去る三月中旬、洮昌道尹の一閑職に轉任せしめ其の後任には第二十七師第五十四旅長の蔡平木が任命された。張榮の在任期間は僅かに半歳で新編混成第四旅長に轉任し湯玉麟、入つて第三代鎮守使となつたのである。之れ實に適所適材であつた。元來馬賊の討伐や招降に適任の人物であつた。一方馮德麟も亦、新に盛京副都統に任官した。盛京副都統の一職が前清の宗廟監理の長官として政治的には何等直接勢力にならぬ、名譽職に過ぎないが老人の隣居役として適任であらう。之れも前都統の三多が國務院直屬の僑工事務處長に轉任したので馮德麟が其の後任として任命されたのである。往年奉省の軍界に五角の勢で相拮抗して下らなかつた馮德麟も結局は張作霖に敗れた。「何の張の若輩奴」と高を括つてゐたのが何時の間にか主客顛倒して了つた。若輩の張に名を爲さしめて先輩を以て任じてゐた馮も湯も張作霖の麾下に降つたのである。

第十二章 琿春事件の眞相

第一節 間島の不穏

(一) 不逞鮮人の横行

日本の朝鮮併合以來頑冥にして時勢を解せざる處の排日派鮮人の徒は日本の新政に反対を唱へ依然李家の天下を主張せるも大勢は動かすを得ざるために彼等は官憲の壓迫を免るべく避難の地を間島方面に選んだ。

間島の地は支那の領土に屬し日本官憲の政令及ばず、支那官憲の取締又、頗る緩慢なるために彼等の避難地としては絶好の場所であつた。逐年其の數を増加し來り殊に大正八年三月、朝鮮獨立の示威運動勃發後、彼等不逞の徒は上海に於ける自稱朝鮮獨立假政府と聯絡し同地方を以て不逞運動の策源地と爲し種々の陰謀を畫策した。

一方多數の不逞鮮人等は密かに露領浦鹽方面より武器、彈薬の供給を受け、八年六月間島帝國總領

事館を襲ふて其の一部を燒きたるを事始めに排日運動の火の手を擧げ朝鮮内地に襲撃し、多數の日鮮良民を殺害し公衙を爆破し、或は朝鮮銀行護送の現金を強奪し、又は商埠地内に於て白晝日本の警察官吏を殺害する等殘忍兇暴のあらん限りを盡した。

最近に至りては間島の各地に兵舎を設け、武官學校を經營し朝鮮人壯丁の徵募教練を行ひ多量の糧食を蓄ふるなど漸次に其の基礎を固め一舉にして朝鮮に武力進撃を敢行せんとする情勢を示し間島を純然たる不逞鮮人團の巢窟と變じたのである。間島の不逞鮮人か、不逞鮮人の間島かと呼ばるゝに至り總督政治に對する隱然一敵國を形成せりとは斷じ得ざる迄も兎も角一個の脅威であつた。此處に於て日本官憲は此の不穏の兆、間島一帶に漲れる憂慮し支那側に對して深甚の注意を喚起し其の嚴重なる取締を要求すると同時に必要な警察官を間島各地に増派して領事館並に居留民の保護に任じてゐた。

(二) 徐鼐霖の無誠意

間島方面の不穏に對して最も奇怪なるは之が監督長官たる吉林省長徐鼐霖の態度であつた。徐

省長が平素懷抱せる所の極端なる排日親米の思想は蒼任以來、事に觸れて片鱗を現す事ありしも未だ猶ほ鋒銳を藏めたるの氣味ありしに同問題に於て最も露骨に之を現はしたのである。

之より前、東三省巡閱使としての張作霖が同方面不穩の報告に接し之れが取締に關して土地遠隔にして交通不便、兵を出すに莫大の経費を要し且つ幾多の困難あるため國境接近し殊に利害關係の密接なる日本側より臨機に軍隊を派遣し同方面の重要な都市を占領し以て一時、治安の維持に任せん事を希望し好意的に日本軍の入境を承諾した。處が徐彌霖、獨り極力之れに反対し同方面の切迫せる事態を否認し毫も危険に非らざる旨を反駁し、且つ治安の維持は吉林官憲に於て保證し嚴重取締るべきに依り敢へて日本軍の入境を煩す必要ないと頑張つた。之れ舊式官僚の思想に囚はれたる徐彌霖が國際的關係を解せず自己の體面を保たんとする一念から徒らに誤れる愛國心と排日惡感とのため主權の侵害を云爲せるのである。交通機關の不備は一延吉道尹の赴任すら朝鮮を経て間島に向ふの状態なるに想及せば如何に軍事的知識の缺乏せる者にても日本軍の入境に反対する理由なきに徐省長は眞實取締の誠意なかりしに因る。

單に文書を以て嚴重なる取締を聲明するに止り、取締に必要な處の具體的措置を執らず、却つ

て暗に不逞鮮人を庇護し排日熱を鼓舞するかの如き態度があつた。日本側が我が警察官をして共同の動作を執り不逞團を糾弾せしめんと欲し此旨提議せるも之れ亦頑強に拒絶し鮑貴卿が單獨に取締の實を擧ぐべき旨を繰り返すに過ぎなかつた。危害の目前に急迫せるものあるにも拘はらず一時を糊塗し日本側の提議に對し一顧の考慮さへも加ふる事なく其の無誠意の態度には甚しく日本側の憤慨を招くに至つたのである。

元來徐彌霖は吉林省長として就任以來兎角問題の男であつた。其の地方政務は毫も治績舉らず、其の行動は非難攻撃の中心と爲り惡聲常に絶えなかつた。前に一度吉林省公民の彈劾に遭ひ將に革職されんとせるも徐總統の幕下たる關係から猛烈なる留任運動效を奏し其のことなくして已みしも徐彌霖に對する省民の反感と不平の甚しきものあるは事實であつた。其の幾多の失政と省民の不人望、且つまた督軍鮑貴卿の注意を顧みず米國人と結び著々排日の計畫を企圖し鮑貴卿と衝突するに至り鮑貴卿辭意を萌すの現象を見るにおよび隠忍せる張作霖も遂に猪癪玉を破裂させた。北京政府に向つて徐彌霖の免職を迫りたる結果、九月一日附の大總統令は徐彌霖の吉林省長を免じ督軍鮑貴卿に省長を兼任せしむる旨正式に發表された。されど珲春方面は此の省長更迭は何等の影響なく危

機は暗々の裡に日一日と迫りつゝあつたのである。

(三) 瑾春襲撃事件

十月二日拂曉、俄然琿春に於て一大不祥事は勃發した。之れ不逞鮮人團の日本領事館襲撃である。

多數の不逞鮮人等を中心とし露國過激派、馬賊及び支那官兵の服装を爲せる支那人馬賊約四百餘名の一隊は我が琿春領事分館を襲撃放火し又琿春市街に放火し發砲或は爆弾を投じ午前十時退却せらるが、領事分館は郵便室を除き本館官舍悉く烏有に歸し秋洲副領事は御真影を奉じて僅かに避難し、馬賊團襲撃と戰へる警察署長警部佐谷武朝始め十數名の警察官、難に殉じ老幼婦女子にして見るに忍びざる虐殺を受けたる者あり、二十餘名の重輕傷者を出し第一のニコライフェスク事件は東滿の一角に發生したのである。

事變の勃發に先ち、徐彌霖去れる後の吉林官憲は日本側の强硬なる注意に依り間島方面の事態漸く重大なるを認め九月初旬特に吉林より兵を間島に増派し不逞鮮人討伐隊組織の實行に著手した。

支那側の施設は既に時機を失せるの傾向があつたが、猶ほ爲さざるに優るを以て多少剿討の實效を奏するものと信ぜられた。孟司令兩度の出動は何等不逞團剿討の效を收めず却つて麾下の支那官兵をして往々馬賊と通じ相團結するの機會を與へ且つ不逞團に武器を擁して各地に遁走せしめ、恰も蜂の巣を敲き壊せし如く所在各地に慘事を續生し、各地に馬賊の跳梁を招き剿討の事をして愈々困難に陥らしめたのである。然して支那官兵の無力なるを表明せる結果は九月初旬不逞團琿春市街に襲撃し来るに至り、邦人の被害渺少ならざりしに支那軍警は徒らに彼等の跳梁に委し、居留民保護の責任を盡す能はざるの無能を暴露した。一度此の襲撃があつた以上、彼等が再舉を謀るは明瞭であつた。然も遂に之れに備ふるの道を講ぜず茲に至らしめたるは一に前省長徐彌霖の誤れる政策に禍せられたのである。極端に評せば徐彌霖、琿春事件を勃發せしめたのである。

琿春の形勢は愈々危機に瀕し一時退却せる不逞團は何時、再び襲撃し来るやも測り難い爲めに、日本側は急報に接し自衛の必要手段として會寧にある第十九師團の歩兵第三十八旅團に命じ若干の軍隊を琿春に急派し、居留民保護に任せしめた。局子街、龍井村其の他附近の領事館分館及び出張所の所在各方面も亦馬賊の集團出没して市街を襲はんとするの急迫の事態に鑑み、事件の續發を未前に

防止する目的にて領事館並に居留民保護の爲め必要な地點に軍隊を急派し警備に任せしめた。

第二節 事件の善後處置

(一) 張作霖の対策

琿春事件勃發の飛電に接して誰れよりも先づ最も驚愕し最も憤激し最も當惑したのは餘人でもない。張作霖其の人であつた。茲に特に記憶せねばならぬ事は日本と張作霖との關係である。滿洲に於ける張作霖の勢力が獨得の性格と材幹とにより之を築き上げたるは勿論なるも、其の背後に日本の擁護に負ふ所亦尠少でない。張作霖としては日本との關係が大なる強味であると共に弱點である。内心必らずしも親日派でもないのに常に中外より親日派と睨まれ、日本の傀儡と目せられ始終、色眼鏡を以て見らるゝ事は面白く感ぜぬ點であらう。其の立場上頗る苦しいものあるには相違なかつた。それが直皖戰爭に乘じ中央の政權を獲得するや親米派を中堅とする直隸派と相對峙するに至れる結果は聰慧なる張作霖として自己の立場を有利に導くためには政略上是が非でも好むにせよ好まぬにせよ、日本との關係を更に密接にするの必要を感じた。で日本の好意をヨリ以上に得、充分の諒解を得るために腹心の于沖漢を特使として將に旬日の中に日本に派遣せんとするの首途に此の不祥事は勃發するに至つたのである。足元から鳥が立つやうに驚いたのは當然で吉林官憲の取締緩慢なるに激怒したのである。

然も張作霖は日本側に對して表明せる態度は頗る懲歎なるものあり。

東三省に於て此の不祥事の勃發せるは日支の國交上誠に遺憾に堪へざる所なるも事は地方行政上の問題にして全責任は吉林省長たる鮑貴卿にあり、余は東三省巡閱使として軍政の權を統率するに過ぎずして直接に責任なきも間接にも亦全然責任なしとは否認せず、本事件は日支國交上、頗る重大問題なるを以て余は支那の張作霖として東三省に於ける立場に鑑み出來得る限り日本側の申出に應じあらゆる手段方法を執り兇暴殘虐なる馬賊團を根本的に剿滅し後患を絶つべしとの方針を聲明した。

一方吉林の鮑貴卿に對しては琿春事件勃發の責任は吉林官憲にあり、同事件は國交上の重大問題なる所以を説き先づ遭難者の救恤、慰安の方法を講すると共に馬賊剿滅の方法に就て嚴重電命した。そして重要軍事會議を開催して善後辦法を協議し先づ不取敢吉林剿匪のために出動に決せる張學良

の率ふる衛隊旅五營三千二百名を東支線一面坡方面に急派し間島方面の匪賊を北方より壓迫するの舉に出でた。

(二) 日本の間島進兵

間島方面に於ける依然不穏なる形勢に鑑み、日本は自衛上、必要な警備を全ふし兼ねて不逞鮮人及び過激派の襲撃を防止し我が接壤地帶に對する脅威を洗滌せんと欲し必要な手段として領事館及び居留民の保護に任するため更に軍隊を派遣するに決定した。

十月九日日本政府は小幡公使に電命して北京政府に對し軍隊派遣の已むを得ざる理由を説明せしめ其の諒解を求めた。顏外交總長も我が出兵の已むを得ざる事情を諒とする旨答へたので日本側は著々増兵の準備を進捗せしめた。處が支那側は遽かに前言を翻し十一日付公文を以て増兵拒絶を通告して來た。之れ支那政府が體面保持の見地から割出した姑息な手段であつた。それに此の拒絶の裏に奉天、吉林兩督軍の意見が有力な原因であつた。

小幡公使の交渉と同時に北京政府が張作霖と鮑貴卿に意見を徵求したので困つたのは張作霖であ

る。張作霖としては日本兵の増派は何等の異存がなかつた。異存どころか大賛成であつた。事件の未發前に於ても日本兵の入境剿匪に就て暗に懲諒するの色があつたやうに日本軍たると支那兵たるとを問はず要是剿匪の目的を達すれば足ると云ふ極めて無差別的の意見であつた。日本側の希望を容れて日本軍は剿匪せしむれば自分の一兵をも動かさず、一文の軍資をも費す事なく座ながらにして支那兵の出動に數倍する剿匪の成績を擧ぐる事を得、勞せずして得する考へであつた。流石に老練な張作霖である。日本軍は所期の目的を達せば一定の時期に撤退を聲明する以上、日本側の歎心を得つゝ利用せんとした、主權の侵犯云々等の書生論は吐かなかつた。赤塚奉天總領事の交渉に對しても出兵を承認の旨言明してゐた。それが愈々北京に於ける正式交渉と爲り政府より意見を徵詢し來たので北京政府と日本側の間に板挾の態度に陥つた。ヘマな事をすれば吳佩孚一派の反対派より排張のダシに使はれ不利を招くの虞があつた。

張作霖も支那人である、日本の傀儡ではない、心中に日本の要求を是認してゐても露骨に日本の肩を持つ譯には行かぬ、其の事が自己に利益と信じても同様だ。ここが張作霖の辛らい點であつた。

東三省巡閱使としての大義名分上、弱音は吹けない。吉林の鮑貴卿にしても同様である、自己の管下に生じた事件に「左様御最も」では役目は勤まらぬ。張作霖は北京政府に對して「琿春匪賊剿滅の爲め奉天より一個混成旅を派遣中なれば日本公使の要求せる日本軍隊の出動を拒絶あれ」と强硬意見を打電するに至つた。鮑貴卿も無論反対電報を致した結果、支那側の増兵拒絶となつたのである。

日本側は隣邦の友誼に顧み力めて其の諒解の下に協調の精神を以て事を遂行せんとするに不可能となつたので自衛上、遂に自由行動を取るに決定し、支那政府に其の旨を通告すると共に保護警備に必要なる兵數を同方面に増派した。同十四日、内田外務大臣は本出兵が間島方面に於ける一時的措置なるを以て同方面にして不逞鮮人並に匪徒に關する危惧はく事態平靜に歸するに於いて直に撤兵する旨、琿春事件に關する對支交渉の經過を叙述せる公明正大なる日本の立場を聲明したのである。

(三) 日 支 共 同 勤 匪

間島方面に於ける匪賊剿討に對して張作霖は最初より日支兩國軍隊の共同討伐に賛成であつた。日本側の宣言せる自由行動は張作霖としては好都合であつた。

北京に於ける增兵の交渉は拒絶しても之れは體面上の問題にして實際に於ては日本軍と支那兵との共同動作を以て禍根を根本的に剪除するの方針であつた。それで日本側の共同討伐の提議に對しても進んで之れを快諾するの態度に出でた。日支兩軍の共同討伐を實行するに當り兩軍相互間の聯絡と誤解を避くる爲めに會剿辦法を協商するの必要があつた。軍事顧問町野中佐は此の實務を帶び吉林に赴き鮑貴卿との間に八ヶ條より成る會剿辦法を議定したのである。

琿 春 會 剷 條 件

- (一) 日本帝國と敦重睦誼のため左記の事に對し雙方會剿をなす
- (二) 東寧東支鐵道以南二十里以外の地域及び琿春、汪清、東寧、和龍、延吉五縣の匪賊、不逞鮮人討伐の事は日本軍隊にて討伐す、但し支那縣城には支那軍隊一二連並に巡警を留め秩序を維持

せしめ其の餘の軍隊は出動す

(三) 日本軍隊の行動區域は雙方各長官より彼此に訓飭し厚意を以て對し誤解を生ぜしめず

(四) 吉林督軍は時に聯絡及び情報蒐集の必要のため員を日本軍司令部に派すべく支那方面は鮑督軍が認めて必要と爲す時は日本軍より人を派し委商するを得

(五) 日本軍隊は務めて短少時日に其の軍事行動の完結を期す

(六) 日本軍隊は所定區域外に涉るを得ず即ち匪徒追撃の關係に因るも亦越ゆるを得ず、以て誤解を免れ紛糾を避くべし

(七) 日本軍隊の行動區域内にては支那人民の生命財産を尊重し損害あらしむるを得ず又之に依りて兩國人の感情を傷け支那各機關に對しても毫も侵す所なく決して強制の行爲あるを得ず

(八) 日本軍隊は海林附近より延吉に向つて前進すべし其の實安通過を許すべし

鮑貴卿はまた之れに附隨せる支那軍隊としての剿匪方法八ヶ條を規定し所屬の各軍旅司令に通飭したのである。

そしてまた善後問題の處理は奉天を中心として行はれた。前滿鐵奉天公所長たりし參謀本部附の佐藤安之助少將は特に外務省の依頼を受け來りて張作霖と會商しました關東軍司令部の奉天特務機關長貴志少將、町野顧問及び赤塚總領事等は隨時協議し張作霖と交渉處理した。一方外務省より西澤書記官理春方面に出張を命ぜられて事件調査に任じ、當時間島に出張中であつた吉林督軍顧問齊藤（恒）大佐及び支那側の延吉道尹陶彬も共同調査に從ひ約に依り、日支兩軍隊の共同剿匪は實行に着手した。

越えて數旬日支會剿辦法が北京方面に於て發表さるゝや排日運動は勃然として起り例に依り吉林各團體の排日通電と爲り奉天高等師範學校の生徒を中心とする省城五校の生徒八百餘名は思慮淺薄、年少血氣の勢に乗じて妄動し張作霖の膝下に於で從來未曾有の排日示威運動は起つた。これ十二月七日である。奉天省議會に參集して請願する一方二百餘名は市街を練り歩き數種の檄文を撒布せらるが張作霖の嚴命に依り首謀者を檢舉し該運動は龍頭蛇尾の裡に終熄した。

(四) 國境警備問題

間島剿匪の事、略ぼ一段落を告げたるを以て日本軍は續々朝鮮内地に撤退を開始し、外務當局はまた支那に對する善後交渉に就て方策を講じありしも種々の關係上遷延しありしに十年度に入つて一月十四日北京公使館の徳川書記官より支那政府に對し文書を以て次の四ヶ條を提出して同意を求めた。

- (一) 支那政府の陳謝
- (二) 關係責任者の處罰
- (三) 損害賠償
- (四) 死傷者に對する弔慰金

之れに對し支那側は頻りに第三次の撤兵を迫ると共に琿春に調査員を派し、日本の出兵に依り蒙れる支那人民の損害を要求せんとするの逆襲的意氣を示すに至つた。

そして顏外交總長は日本軍全部の未撤退と支那側の調査未完了を二理由として交渉開始の拒絶を

なした。其の結果該交渉は依然行惱み未解決のまゝである。日本側が又不逞鮮人及び過激派、馬賊等の國境侵入を防止する爲めに國境警備の必要を認め佛領印度支那と支那との間に協定され居る會巡辦法に則り日支兩國間に國境會巡辦法を協定實施するに決した。十五ヶ條より成る草案を支那政府に提示して同意を求めしも之れ亦奉天、吉林の兩省に對し之れに關する意見を徵求するに留り何等の決定を見ざる所である。

此の原案は次の十五ヶ條である。

日支會巡國境辦法

第一款 兩國共同國境巡察規定

第一條 日支兩國は協同して相互に接壤地方の土匪の取締を爲す。

第二條 上記の接壤地方を二區に分つ、第一區は奉天省と朝鮮との接壤地とし、第二區は吉林省と朝鮮との接壤地とす。

第三條 日支兩國は各々監督官吏を任命し前條記載の二區地方に於て本辦法實施の指揮監督を爲さしむ。

第四條 前條記載の監督官吏は朝鮮方面に於ては第一區の平安北道管内、同咸鏡北道管内、同咸鏡南道管内並に第二區の咸鏡北道管内には夫々當該知事を以て之に充て、支那方面は第一區は東邊道尹、第二區は延吉道尹を以て之に充つ。

第五條 本辦法の實行官吏は朝鮮方面に於ては第一區の平安北道管内は新義州、昌城、高山鎮、中江鎮、咸鏡南道惠山鎮等に駐在せしめ、第二區管内は會寧、穩城、慶源等各地に駐在せしむ、支那方面は第一區管内は安東、寛甸、輯安、臨江、長白、安圖の各縣に、第二區管内は和龍、延吉、汪清、琿春の各縣に駐在せしむ、前項實行官吏は朝鮮方面に於ては各該道警察部長或は警察署長（分署長を含む）と爲し、支那方面に於ては各縣知事及び各該縣警察署長（分署長を含む）と爲す。

第六條 日支兩國の實行官吏、駐在地點には相互に電話或は電信を架設し相互の聯絡を期すべし。

第二款 巡察方法

第七條 巡察は兩國の警察協力して之を行ふ。

第八條 將に設置すべき巡察官署又は分署の地點及び人員は兩國の監督官吏により商議の上、之れを定む。

第九條 兩國の巡察官署（分署を含む）と各本國の巡察官署との間には速に電信又は電話を架設し相互の通信を便ならしめ以て聯絡を期すべし。

第十條 兩國の當局は取扱事務聯絡に便する爲め相互の聯絡員を派遣すべし

第三款 武裝匪徒に対する巡察規定

第十一條 兩國は匪徒の行動に對し得たる所の情報を交換し以て捜索逮捕の機宜に關する處置に便すべし。

第四款 監督官吏及實行官吏の責任

第十二條 日支兩國の實行官吏にして本辦法に規定せる職分に對し違奉せざる者あるときは日本方面は該道知事より、支那方面は該道尹より之を調査し各本國の法律に依りて之を處罰し其の結果を相互に通知すべし。

第十三條 實行官吏を指揮監督せる道知事又は道尹にして本辦法に規定せる職分に對し違奉せざる

者ある時は朝鮮方面は朝鮮總督により、支那方面は奉天省長により各本國の法律に依り之を處罰し其の結果を相互に通知すべし。

第五款 國境船舶及渡船取締規定

第十四條 國境河川を航行する船舶は各其の船籍ある國の官憲の規定せる證明書を携帶し日支兩國巡察官の検査を受くべし。

第六款 附 則

第十五條 本辦法は調印の日より其の效力を發生す。

第十三章 復辟謠言の前後

第一節 吉黑督軍再更迭

(一) 鮑貴卿の進退

吉林督軍鮑貴卿の進退は年來の懸案であつた。民國八年夏張作霖は孟恩遠を放逐して鮑貴卿を黒

龍江より轉任せしめたるも其の眞意は孫烈臣を吉林、張景惠を黑龍江に据ゑ自己直系を以つて三省を固め自由に操縱統馭するにあつた。鮑貴卿を吉林に轉任せしめしは政略上、一時の中繼督軍たらしめしに過ぎなかつた。機會あれば鮑貴卿を中央若くは内省督軍に轉任せしめ自己平素の理想を實現するにあつた。鮑貴卿は轉任以來、東支鐵道督辦及び東支鐵道護路總司令を兼任し紊亂せる省政の整理を行ふと共に一面、東支鐵道の回收に就て最も盡力し第一の殊勳者であつた。然も鮑貴卿が東支鐵道回収後の鼻息荒く軍事、交通、外交其の他一切の各問題に關し東三省巡閱使たる張作霖に謀らず直接中央政府と折衝處理せるの一事は越權に非らざるまでも自己の存在を無視せし者として眇からず張作霖の自尊心を傷けた。一省の軍政長官たる督軍が中央政府と折衝するは當然の事にして怪しむに足らざるも東三省の王者を以て任せる張作霖としては吉林、黑龍江兩省督軍を自由に操縱するを希望せる以上、鮑貴卿の斯舉は張作霖の鮑貴卿に對する感情を自然面白からぬ方面に導いた。元來が系統を異にし便宜上、戸位素餐の一督軍に擢れるに過ぎずして奉天閥の外様大名扱を受くる事は免れなかつた。内に於ては徐總統系の驍將たる親米排日主義の省長徐兼霖と合はず施政上、常に兩者の意見衝突し事毎に相反目するに至り督軍としての意見をも充分徹底せしめ得ざるの憾あ

り兎角圓滿を缺いてゐた。

直皖戰事に際してはまた八省同盟の行懸上安徽派と政敵の立場に立ち段祺瑞に對する恩誼と張作霖との關係に依り兩者の間に板挾の苦境に陥り其の進退に苦悶した。張作霖に與して多年恩顧の段祺瑞に弓彎く叛逆氣もなく、反對に張作霖に叛き、安徽派に内應するには武力を有せず殊に張作霖に對する情誼上、自由行動は取り難く其の進退に窮し少からず神經を痛めたのは事實である。

然も吉林省長徐兼霖が排日政策に基因せる琿春事件の突發は兼任省長としての責任を問はれ排日派省民の排斥運動を受けた。それに吉林財政問題に於て愛錢家たる鮑貴卿が其の整理方法を誤り私腹を肥すに汲々として夫人の弟某に密命し盛んに不正の金を利得せしめて財政を攪亂した。此の結果、張作霖の信用を失ひ、省民の反感を高め神經衰弱症を病み靜養を兼ねて天津に起き辭表を提出したのである。之れまで鮑貴卿の辭職説或は更迭説は一再ならず傳へられた。一度は辭職に決定せるを再び留任せる事すらあつた。

三月十二日大總統令は次の如く發表された。

吉林督軍兼省長 鮑 貴 卿

免本兼職

特任霆威將軍

黑龍江督軍兼省長 孫 烈 臣

免本兼職

特任吉林督軍兼省長

陸軍第二十九師長 吳 俊 陞

特任黑龍江督軍兼省長

斯くて年來の懸案であつた鮑貴卿の進退は解決した。逆境の督軍として終始したのである。

(二) 孫烈臣更任事情

由來吉林は東三省に於ける排日思想の淵源として有名である。之れは清朝最後の吉林巡撫として民國成立の前後に在任した舊官僚派の陳昭常が宣統元年日清兩國間に締結されし間島協約に反対し盛んに排日を高唱せしに濫觴してゐた。爾來孟恩遠、鮑貴卿の二督軍は極力之れが抑壓に腐心せ

るも排日の謬想は依然として終熄せず、時勢を解せざる一部頑冥者流の間に一種無形の潜勢力を有し事に觸れて其の鋒銳を現はしてゐた。琿春問題の如き鮑貴卿が排日派に禍せられたのである。滿洲に於ける日本の特殊地位を諒解せる張作霖は夙に此の點に留意し深く過去の失政に鑑みる處あり吉林督軍の椅子を重視し孫烈臣を黒龍江より移して吉林に据ゑたのである。始め北京政府は鮑貴卿の失政と疾病に依り更迭の已み難きを知るや督軍候補として張作霖より推薦せる第二十九師長吳俊陞を鮑貴卿の後任とするの意図であった。孫烈臣を吉林に移し吳俊陞を黒龍江に昇任せば其の更勤の煩難なるため之を避けんとするにあつた。然し張作霖は間島不逞鮮人問題、吉林財政の整理、東支鐵道問題、排日思想取締等の諸重大懸案を有せる難治の吉林は民政の才能絶無なる一木強の武弁たる吳俊陞を以てしては統治困難なる事を洞察し、之れに反対し特に于沖漢を北京に派し孫烈臣を吉林に轉任せしむる必要なる理由を政府當局に詳述諒解を求めしめたのである。張作霖が孫烈臣を吉林に据ゑんと欲するの希望は孟恩遠放逐當時に胚胎し難治の吉林を治むるには奉省武人中稍や時勢を解し政治的才幹に富めるに依り最も適任と思惟せるに基因した。一方張作霖は從來、歷代督軍が打破せんとして打破し得ざりし誤れる排日思想を根本より剿滅一掃せしむる目的であつた。北京

政府も張作霖の申請を拒絶し得ず前記の任命となつたのである。

(三) 新督軍 吳俊陞

新に黒龍江督軍となつた吳俊陞は張作霖の奉天軍閥に於て外様大名扱を受け、久しく失意の人であつた。前に東北邊防總司令として麾下の廿九師を露支國境警備の爲め滿洲里方面に出し過激派の侵入に備へて功績あり、孟恩遠放逐騒の當時、鮑貴卿の後任として黒龍江督軍たるべく期せるに孫烈臣の昇任に依り爾來憤懣の情抑へ難く快々として樂しまなかつた。吳俊陞は奉天派の武將としては春秋最も高く、任官の閱歴に徴するも張作霖、馮德麟に亞ぎ鮑貴卿、許蘭洲、孫烈臣、張海鵬、汲金純馬龍潭、湯玉麟、張景惠、張作相の順にして本來吳俊陞は夙に孫烈臣に先ち督軍たるべき人物であつた。唯だ吳俊陞の張作霖に對する關係が孫烈臣の如く密接なる能はざりしに因る。

張作霖を中心とする奉天軍閥に於ける孫烈臣、吳俊陞の地位が張景惠、張作相等の純直系に比し純直系とも稱すべき立場にあつた。それに孫烈臣の穩健にして圭角なき命維れ從ふの性格は專政君主式なる張作霖の寵を得たるに反し吳俊陞は粗野にして單純、年來張作霖の爲めに貢献的に忠實に

盡し來れるも時に張作霖の命に服従せざる硬骨の點があつた。孫烈臣が張作霖に隨身し親分子分の關係を固くせるに反し吳俊陞は往年、張作霖と對等の位置にあつた關係上、遽かに其の下に屈従するを得ざる結果、比較的張作霖に外様的待遇を受け、東蒙古を改省し之れが督軍に昇任すべく傳へられしも實現せず今日に至つたのである。

最初張作霖は自己直系の第二十七師長張作相を黒龍江督軍に昇任の意があつた。謙遜な張作相は不肖未だ督軍としての資格ないと極力辭退せるため閥歷上且つは多年の功勞に酬ゆるために吳俊陞の昇任を決定した。多年、東蒙古の探題として同地方に絶大の威力を有し王公を凌駕するの勢望ある吳俊陞の事とて外内蒙古に對する一種の牽制策として適所適材であつた。唯だ吳俊陞は政治的才幹に缺くると民政の經驗に乏しきに依り省長としての手腕を疑はれ適當の補佐役を必要とせられたので吳俊陞は政務廳長として前奉天政務廳長たりし遼瀋道尹史紀常を充任したのである。

第二節 復辟謠言の眞相

(一) 復辟の謠言起る

三月張作霖復辟の謠言、忽然として起り、響の聲に應する如く、京津方面を中心に四方に喧傳せらる説に曰く、

張作霖が東三省の雄鎮として近く、關東の大兵を率ゐて北京に入り、クーデターを行ひ、宣統帝を擁立し、北支那及び滿洲、内外蒙古を一括せる北支那帝國を建設し、以て張作霖親ら其の實權を握らんとする企圖熟し來り、背後に日本軍閥の援助あり云々

茲に於て張作霖を目して復辟派の巨頭とせる一般の識者は、張作霖が愈々、年來の覆面を脱して乾坤一擲の大運動を開始し、民國六年に於ける張勳復辟の役廻りを再演すべしと觀察した。

元來是まで再々流布された復辟の謠言は北京政局の行詰りを意味し全く動きの取れぬ爲めに局面展開の必要ありと云ふ点に限つて何處からともなく起るのが例であつた。

今回も其の例に漏れず、新内閣が財政問題に窮し征蒙問題、對南問題等にて總辭職するか、内閣を

改造するかの窮途に陥つたので忽然として復辟の謠言は起つたのである。それにまた、此の謠言を裏書する有力な材料があつた。天津英租界に閑居せる前大總統黎元洪とノース、チャイナ、デイリーニュース(漢譯字林報)の北京特派員ロドニ、ギルバートとの會見談之れである。前總統たる黎元洪の人格と閱歴上、餘程の根據を此間に存せざる限り斯る言明は爲さざるべしとの信念は今次の謠言を事實化した。

- 一方支那の政情は安定せず、一大勢力家が起つて風雲を吐咤するに於ては充分復辟の可能性を有し居るに際し、張作霖其の人の立場は復辟と結び付くるに最も都合よく出來てゐた。
 - 一、張作霖が本來宗社黨に非らざるも同黨及び清皇室に對して悪感を有せざる事。
 - 二、復辟の巨魁張勳とは姻戚の間柄にて關係深く、之れが起用に最も力を盡せる事。
 - 三、其の勢威は遙かに當年の張勳を凌駕し實力に於てまた復辟當時の張勳の兵力に數倍せる事。
 - 四、地盤の鞏固にして地の利を得たる點は復辟に失敗するも張勳の如く脆く没落するの虞なき事。
- 五、萬一復辟に失敗するも日本の援助に依りて依然、滿蒙に割據し得べき有利の立場にある事。

是等の事情を綜合すれば何人も張作霖の復辟説を否定し得なかつた。張作霖一度黃龍旗を押立つるに於ては南は廣西の陸榮廷、中部支那は張勳が長江巡閱使として、北方は張作霖が支配的勢力を把持する計畫が現實化するものと信ぜられたのは當然であらう。

(二) 謠言流布の原因

謠言の導火線をなせる黎元洪とギルバートとの會見談が字林報に發表さるゝや有名な排日紙にして毒世報と呼ばれる米國系の天津益世報は「待つてました」とばかりに「西報中の驚人消息」と題して紙上に譯載した、之れ三月十七日である。

黎元洪氏は曰く現時全局の情勢は一言にして之れを蔽へば張作霖と張勳とが計畫せる所の帝制運動なり、方に積極的に進行しつゝあり、其の事必らず發現すべし、惟ふに亦、必らず失敗するに至らん云々

平素から張作霖とは餘り親密でない黎元洪としては一寸云ひさうな言葉である。處が之れを見て憤怒したのは張作霖である。事は苟も天下國家に關する大問題である。事實を確めず輕々しく無責

任な放言をしたと云ふのでグット病院に障つた。黎元洪に對して

字林報に掲載されたるギルバート氏と執事との談話の一節に張作霖復辟の行動あり、方に積極進行の兩語あるが此の一節の談話は事實なるや否や、所謂積極進行とは何を指すや
と威丈高に突蒐つた。返答の如何では唯だは措くまじき色を示して内薄した。此處に注意せねばならぬ點は黎元洪と張作霖との關係が從來、甚だ圓滿でなかつた事である。民國六年歐戰加入問題に際し、大總統として極端に南方派の肩を持つて當時張作霖等が仰いで北洋派の盟主とした國務總理段祺瑞を免職して督軍團の激昂を買つたのは黎元洪である。爲めに大總統たる黎元洪に反抗して獨立を宣言し、政局の混亂と復辟の突發に依り黎元洪をして遂に窮地に陥れたのは張作霖、倪嗣沖等であつた。黎元洪の極端なる南方思想と北洋軍閥の巨頭たる張作霖とが主義、思想の上よりして冰炭相容れず、面白からぬ感情の蟠れるは隠れもない事實である。此の兩者の關係から見れば黎元洪としては云ひさうな言であるが絶対に之を否認した。黎元洪の張作霖に對しての回答は頗る簡単であつた。曰く、

字林報通信の該記事中、鄙人は此の如き言論なし、詳情は既に天津益世報に登載して事實無根な

るを聲明せり、別封同紙を郵送せるを以て高闕を希ぶ。

黎元洪が益世報紙上に聲明せる所に據れば謠言の點火者は黎其の人あらざること明白となつた。

今回、ギルバートが來訪せるは余が前に湖北及び北京時代に秘書たりし郭泰祺(孫文の北京代表)が前年、廣東に赴ける後、久しく消息不明なりしに突如、ギルバートを同道訪問し来る。余は舊幕僚たるの情誼上、面會を拒絶し難く會見せり。ギルバートとの對話は總て同席せる郭泰祺通譯の任に當る、ギルバートが時局意見及び各要人の評論を求めたるも余は之れに答へず、政治に關係なき種々の閑談を爲せるに過ぎず、該通信を見て事實と甚だしく相違せるに驚き、當時通譯せる郭泰祺が故意に此語をなせるにあらずやと疑ひ、郭泰祺に質すべく人を派せるも己に南に去れる後にして如何とも爲し難し、されど該記事は個人及び大局に影響する所甚大なるを以て取消されたし云々

取消は單に取消に終り、謠言の流布は禁ずるを得なかつた。

それに時恰かも外蒙古に於けるウンゲルン軍に對する張作霖の態度もまた復辟を裏書する一原因に數へられた。ウンゲルン男の軍隊(反過激派)が庫倫に殺到するに先ち、内蒙古の某地に於て準備

を整へ當時物資の供給は一に之を海拉爾に仰いだ關係上、東三省兵馬の全權を掌握する張作霖が知らざるの理なく、知つて之を傍観し何等の干渉をも加へざりしは此の軍隊との間に何等かの默契あるべしと推測された。「露蒙軍の南下を機會に張作霖は避難の名義にて宣統帝を奉天に連れ出すべし」とまで噂された。張作霖が庫倫陥落の救援軍を送らざる理由は第一に交通不便にして自ら莫大の軍費を負擔し懸軍萬里の遠征を企つることの不可能なるに想及せず、何等かの理解ある如く誤解せるために復辟の謠言は天下を風靡するに至つた。其の出處と目的は如何、之れ興味ある問題である。

(三) 前清室と張作霖

噂の如く張作霖は果して復辟論者であらうか。謠言の出處と目的を詮索する上に於て先づ順序として前清皇室と張作霖との關係を研究する必要がある。

前清皇室と張作霖、兩者の間は世人が張作霖を指し復辟派の巨頭と呼稱するほどの密接なる君臣主従の關係はない。また認めて以て濃厚と斷すべき所の宗社黨的の色彩も張作霖には極めて稀薄で

ある。

張作霖が遼西綠林の一頭目であつた時代は別として光緒の末年、歸順後、時の盛京將軍趙爾巽及び東三省總督徐世昌の兩將軍より特別の庇護推挽を受け多大の恩誼を蒙れるは事實なるも清廷に對しては之れと云ふ特殊な關係はない。

世人が傳ふる如く滔々たる一代の風潮に逆ひ一命を賭してまでも愛親覺羅の社稷を恢復せねばならぬ程に父祖累代の恩顧もなければ義理もない、折角築き上げた地盤を棒に振るほとの理由がない。

前清皇室と張作霖との關係は第一革命前後に於ける張作霖の態度が之を雄辯に物語るものである。

當時に於ける張作霖の態度は外觀上に於ては純然たる滿洲宗社黨の最强硬派であつた。熱誠なる帝政主義を把持し、勤王論の急先鋒として革命派を彈壓するに全力を賭した。然し眞實、清朝の爲めに一死猶ほ輕しとする純忠至誠の發露に依るのではなかつた。年少氣銳、羈氣滿腹の張作霖が功名榮達を趁ふに急にして一切を自己の利害關係より打算して執れる所の策略に過ぎなかつた。此の

一事を以てしても張作霖が清室に對する誠意の有無は推測するに足る。

一般の識者が張作霖と復辟とは離る可からざるものゝ如く信じてゐるが之れは全然皮相の觀察である。大體前清皇室と張作霖との關係を知悉することなく、一、二特殊の點を捉へて張作霖を呼ぶに復辟派とするは輕卒である。餘りに無責任な言にして痛くもない腹を探ぐらるゝ張作霖こそ誠に迷惑千萬の極であらう。張作霖は智者である。張勳のやうに單純な頭腦の所持者ではない。張作霖と張勳と同一に混淆する譯には行かぬ。

(四) 張作霖の辯明

秋空猫眼も嘗ならざる支那の政局だ、復辟は將來、今一度は實現さるゝ可能性を有する以上、形勢の變遷如何に依りては其の實現は困難ではあるまい。但し成功するや否やは別である。が然し張作霖が自發的に復辟の發頭人となつて張勳の二の舞を演する事は恐らくあるまい。唯だ張作霖としては自然の勢ひに押され、四圍の政情に迫られ復辟を餘儀なくするの立場に陥るやも測られるるも今日の處は全く何等の形迹もない。惟ふに張作霖としては復辟運動よりも寧ろ滿蒙の獨立を策する

やも測り難い。張作霖を復辟派の巨頭と目するは少し見當違いではあるまいか。

復辟謠言に關する黎元洪の返書を手にした張作霖は直に京師警察總監殷鴻壽、天津警察廳長楊以德、淞滬警察廳長徐國樞の三者に宛て同文電報を以て黎元洪との交渉顛末を叙述し復辟説は奸人の捏造せる一種の謠言なれば國民の誤解せざるやう各地の新報に掲載方を依嘱し「作霖は愛國を以て天職となし、凡そ我が共和政體を破壊せんとする者あらば挺身之れに當らん」と聲明した。

一方また中美通信社のマジニールを奉天に招致し復辟謠言に對する自己の態度を宣言したのである。曰く、

余は毫も復辟を主張したることはない。余は支那の今日の狀態に於て能く帝國を再興して統治し得る者は一人もないと深く信じて居る。帝制の必らず敗るゝことは智者を俟つまでもなく明瞭である。外間頻りに傳ふる所に據れば作霖、帝制の志あり、或は君主を挾みて天下に號令せんとしつゝありと云ふも謠言も亦甚しき哉だ、支那の將來は再び帝制恢復の日は非らざらん。帝制は支那を統治すること不可能である。余の愚昧なる固より自ら帝號を稱するに足らざるのみならず、亦帝王諸政の用にも足らず、支那は久しく患難に悩みあり國中の最高智識の所有者をして國事を主

持せしむるを要す、(中略)余は心中何等の陰謀的意志はない、余は専心中央の擁護に從事し政府の命する所余之れに従はざることはない、余の軍隊は唯だ政府擁護の用たるを知る。余は無識なるが民意に逆つて政柄を執るも必ず持久し能はざるを知る(下略)
之れで以て張作霖が將來はいざ知らず今遽かに復辟の意圖を抱藏し居らざる事だけは明白となつた。

(五) 謠言の出處

今次の謠言を見るに從來の謠言に比し極めて根據の薄弱なると張作霖を中心としての中傷に最も力を入れてゐる點が謠言の出處を無言の雄辯にて語つてゐる。

張作霖の勢望を嫉視し故意に捏造せる謠言にして張作霖を背後より操縦すると傳へらるゝ日本をも併せて排斥せんとする目的にて流布されてゐる以上何者が造謠の當事者なるかは問はずして明瞭である。即ち直隸派の仕組んだ排張排日の一鈞であつた。直隸派が奉天派に對する反間苦肉の策略にして直隸派が奉天派に投ぜる一種の爆弾であつた。

奉天、直隸兩派の勢力争ひは支那政局上、公然の事實である。兩派が九年夏安徽派を驅逐して北京の政權を掌握して以來、北京政府を擁護し互角の勢を以て對峙してゐる。然も張作霖と曹、とは表面平和の裡に相提携するの狀を示せるも、裏面に於て機微の間にも深き意味を有する暗闘を繼續し勢力の擴張に腐心しあるは掩ふ可からざる事實である。奉天派は直隸系を推倒し自ら北方の天下を掌握せんとの野望あり、直隸派は亦奉天系を破つて大中原主義の地盤を擴張せんとし互に必死の競争を平和の裡に續けてゐる狀態である。

直隸派中に於ても極端な張作霖反対派は云ふまでもなく吳佩孚を中心とする親米派である。張作霖を見るに現代支那に於ける恐るべき唯一の勁敵と信ぜる吳佩孚は機會あらば之を推倒せんと焦慮しあることに想及せば謎は自ら解けるものである。それに吳佩孚の背後に米國人の潜在して糸を操縦しつゝあるは最も注意すべき點である。露骨に云へば今次の謠言は單に奉、直兩派軋轢の一端たるに止まらず支那を舞臺とする日米の暗闘を暴露せるものである。

本來米國は支那に對して政治上、經濟上、軍事上、他の日本、英國、佛國等の如き特殊の勢力圏を持たない、實を云ふと支那に對して確然たる所の發言権を所有しないのだ。之がために米國は常に

太平洋を越えて支那の一角に足を立てんと焦慮してゐる。自國の勢力を支那に扶植せんとして隨分苦心してゐる。茲に於いて米國人は勢力擴張の手段として相當の人材を捉へて之れを援助し利用せんとする政策を立て物色し得た人物が即ち當時北軍の征南の第一線として湖南衡州にあつた吳佩孚である。少からぬ米國の金貨が吳佩孚の手に渡されたのは否定し難き事實である。吳佩孚はまた米國の勢力を背景として活躍せんと欲し親米に傾き、從つて直隸派が對外的色彩の米國化せる所以である。

(六) 謠言製造の黒幕

現代に於て日本人に對する米國人一般の風潮は排斥である。米本國のみならず支那に於ても彼等は日本を排斥せんとし、日本の對支侵越權は最も瘤の種である。此の日本の勢力圏たる満蒙に根據を有し一大勢力ある張作霖は直隸派唯一の政敵である。張作霖が親日派たると否とは別として日本の勢力圏に根據を有せる結果、一般に日本の傀儡と目せられあり、奉天派を滅亡せしむることは直隸派の勝利たるのみならず、米國としては日本の對支勢力を減殺することになる。之れ即ち米國と直隸

派が相互に利用せんとする上に於て目的は異なるも手段方法は期せずして相一致したのである。

日本軍閥の帝國主義は滿洲に對する領土的野心を藏せるために張作霖と特殊の密約を結び、背後より復辟計畫を贊同援助しあるかの如く國民に信ぜしめ、張作霖の復辟的色彩を益々濃厚ならしめ國內輿論の反対を高め、反張作霖熱と排日風潮を惹起せしめんとする陰謀であつた。張作霖は日本との傀儡にして第二の段祺瑞なりとの宣傳に係り復辟謠言流布の眞目的であつた。然し結果に於ては失敗であつた。要するに最初謠言の製造者は之れを内外に事實らしく信ぜしむる方法として之れが宣傳に外國人を利用する最も有効なるを信じた。近時支那論壇に賣り出した支那通のギルバートが其の掠鳥となつた譯だ。張作霖と仲の悪い黎元洪を利用せんとして伍朝樞と共に親米派の鋤々たる黎元洪の前秘書郊泰祺が此の任に當つたのである、背後の黒幕が直隸派中の親米派なる事は疑れもない事實である。

(七) 謠言流布の嚴柰

北京政府は復辟の謠言に神經過敏症に罹つた。政局は常に行詰り、南北の統一は成らず、何時如

何なる政治的變化の生ずるや豫測し難き政情に於て北京の宮城内には前清の皇帝と民國の大總統とが殆んど同居の状態にては復辟の幻影が消滅せざるは當然である。譬へ之れが近き將來に於て實現は信じ難きも之れが爲め一般の人心に影響を與へ延いて時局を動搖せしむる虞があつた。北京政府は茲に鑑みる所あり遂に命令を發して謠言を取締ることに決定し、京師衛戍總司令、步軍統領、警察總監、京兆道尹並に各省長官に訓令し以て造謠者を嚴罰に處する方針に出でた。四月三日大總統令は左の如き復辟謠言取締の命令が發布された。

國體の定義は載せて約法にあり、國憲を紊亂せば律に常刑あり、近日竟に復辟の謠言報章に牘載するありて京外に傳播し、殊に詫異に堪えん。民國肇建茲に十稔、共和正義は婦孺も周知する所、自ら喪心病狂の徒に非らずんば安んぞ犯衆專欲の舉あらんや、此の種流言は必らず破壞を蓄謀し大局を擾亂する者ありて捏造を恣にし聽聞を淆惑す、認真查禁するに非ずんば以て國典を照して而して人心を定むる無し、京師衛戍總司令、步軍統領、警察總監、京兆道尹及び各省區軍民長官として責成せしめ一體に嚴重取締らしめ苟くも謠言を爲す者を逮捕し嚴罰に處し少しも假借する勿れ。

茲に於て日本外務省も亦支那新聞又は支那政客中に復辟運動或は蒙古擾亂の背後に日本と聯絡あるかの如き中傷的宣傳の流布されあるに對し四月五日左の如き聲明を爲したのである。

近頃支那一部人士若くは支那側新聞紙中には外蒙古擾亂の背後に日本人の潛在を云爲し或は露蒙軍に對し日本軍官より武器を供給せる旨を揚言し、又は日本が竊かに某々一派を聲援して復辟の實現に參與しつゝある旨を傳へ、以て我國の態度を非難するが如き言説を聞くも右は孰れも何等か爲めにせんとする者の中傷的浮説に過ぎずして殆んど辯明の價値をも認めざるも昨今支那政局不安の報頻々として傳へらるゝ際なれば或は之れが爲めに相互の誤解を來す虞なきを保し難きに就き茲に如上各説の全然無根なるを言明し、同時に帝國政府は不偏不黨終始嚴正なる態度を維持して渝る事なきを聲明す。

問題の復辟謠言も一段落を告げた。日支兩國政府の取締令と聲明とを其の最後として愈々、一時謠言は消えた。張作霖も何等の創痍を受けずに済んだ。日本としても排日風潮の惹起する事なく済んだのは幸であつた。謠言の製造者たる直隸派は結局所期の目的を達し得なかつたのである。

第十四章 天津會議

第一節 南北政局の再混亂

(一) 南方政局の推移

直皖戰後に於ける支那の政局が李純の死と前後して南北共に再び混亂状態に陥れるは争ふ可からざる事實である。先づ之れを南方の形勢に就て觀察するに支那に於ける内政の樞軸である南北統一問題は上海和平會議の停頓以來、依然として何等の進展を見ずして廣東軍政府は黨中、黨を立てゝ輶轢するの醜態を演じた。

九年四月陸榮廷の廣西派、岑春煊の政學會等の所謂實力派が軍政府の實權を占據するや孫文、伍廷芳、唐紹儀等は上海に遁れ護法を主張した。従つて和議問題は南北ともに二派に分るゝの奇觀を呈した。即ち直隸系一派が岑春煊、陸榮廷等の實力派と提携し統一を策する一方、安徽派は孫文を中心とする民黨と握手し和平の効を收めんとし支那は横断より一轉して縱斷の形勢を示さんとした。

が安徽派の没落は孫文派の失意となり獨り直隸派を有利な立場に導いた。直隸派と軍政府との折衝は漸次接近して岑春煊が秘書文翠を代表として北京に派し兩廣の自主取消に關する交換條件に就て折衝せしめ順調に進捗してゐた。

然るに猛然として漳州に蹶起せる孫派の驍將陳炯明が「廣東人の廣東」なる新旗幟の下に廣東に跋扈せる廣西軍驅逐の新運動を開始し破竹の勢あるや流石の岑春煊も周章狼狽殆んど策の施すべき術を知らなかつた。十二月二十三日惠州陥落の翌日遂に懸退を宣言し西南の自主取消を聲明し岑春煊、陸榮廷、林葆澤の三總裁名義を以て北京政府に軍政府取消の電を發して廣東を脱出した。茲に於て北京政府は豫め文翠等と協定し南北双方同時に發表すべく起草せる南北統一成立と正式國會召集の二大總統令を公布した。之れ十月三十日である。翌三十一日孫文、伍廷芳、唐紹儀、唐繼堯の四總裁名義を以て該統一令に對し反対の宣言を發し、岑、陸の宣言無効、統一令の拒否、軍政府存續を聲明した。

北京政府が已に勢力を失墜せる黨派に與し空文に均しき獨立取消の宣言に應じて統一令を發布せらるは民黨派をして「徐世昌の冗談」と嘲罵させたのみで大局には何等の影響を及ぼさなかつた。岑

春煊一派の政學會を逐ふて廣東に入る陳炯明の勢力安固となるや民黨の最高幹部たる孫文、唐紹儀、伍廷芳は軍政府再興の目的にて十一月末上海より廣東に入り十二月一日を以て孫、伍、二唐の連名にて廣東軍政府の再組織成立を聲明し聯省自治を標榜して南方各省の自治熱を煽つた。越えて十年四月孫文は非常國會を召集して正式大總統たるべく畫策成功し、北京政府の統一令は遂に一片の空文に終つた。

南方軍閥の傾向は九年十一月貴州の劉顯世失脚し盧焱之れに代り、雲南派の勢力著しく失墜し越えて二月民國二年以來北京政府の一大敵國の觀をなせる雲南の唐繼堯も亦其の大雲南主義壞れ頗品珍に取つて代られ没落し去る。之れ南方形勢の概略である。

(二) 外蒙古の變亂

由來蒙古の地は支那の一藩屏として久しく無爲無力なる王公の統治に委せるに清朝顛覆の紛糾に際し、鴉片騒ぐなき露國が自己の領土的野心を満すべく蒙古政教の中心たる庫倫活佛を教唆激勵して外蒙古の自治獨立を宣言し以て民國の羈絆を脱せしめて以來、外蒙古は露國援護の下に獨立の状

態にあつた。歐洲戦争の勃發に伴ひ露國內政の大潰亂に依り邊疆を顧みるの遑なきに至るや支那は有名無實の宗主權を恢復すべく機乗すべしと爲し、民國八年八月當代の奇才徐樹錚を西北籌邊使に任命し委ねるに漠北の經略を以てした。辣腕を以て聞ゆる徐樹錚が兵を率ゐて遠く庫倫に赴くや活佛及び王公に迫り高壓的に自治取消を命じ之れに成功した。同年十一月二十二日大總統令は外蒙の實權が再び支那に歸せるを證明した。然も直皖戰後徐樹錚の失脚に伴ひ前の自治取消に不満なりし外蒙獨立派は再び擡頭し來り北京政府の外蒙政策の弛緩と庫倫附近に於ける支那兵一部の暴行とは其の反感の度を昂めた。斯くして蒙古人が支那軍を敵視し露人の提携を欲せる矢先ウングルン軍の庫倫進撃は蒙古人としては正に簞食壺漿して迎ふるの状態であつた。

之より前き露國過激派の軍隊に壓迫せられチタの根據地を逐はれたセメノフ將軍の直屬部下は大半沿海州に移れるにウングルン將軍は之と行動を共にせず、其の部下約三千人を率ゐ滿洲里附近に駐り外蒙古侵入の計畫を進めた。冬期庫倫に接近し屢々攻撃を繰返しつゝありしに越えて十年二月三日三面より包囲攻撃に依り遂に庫倫を占領した、當時庫倫に駐防せる支那軍隊は徐樹錚の舊部下たる褚其祥及び高在田の率ふる約一個混成旅團であつた。長日月の戰闘繼續に潰亂し張家口と恰克

圖の南北に敗退し庫倫はウンゲルン軍の天下となつた。蒙古政教の中心たる活佛を擁して首領とし活佛の名を以て外蒙の獨立を宣言した。活佛は大蒙帝國皇帝及び葉藏大教王と稱し陸軍大臣に蒙古馬賊の巨頭陶什陶、參謀長にウンゲルン男、内務大臣に車林多爾夫々就職した、そして外蒙各族に命令して軍糧、壯丁の徵發を開始した。支那としては實に容易ならざる問題となつた。

昨冬北京政府は一度、庫倫危急の報に接するや大いに狼狽し急遽庫倫救援軍の編制に着手し、察哈爾都統兼奉軍暫編第一師長たる張景惠を援庫總司令に、第十六師長鄭芬を同副司令に任命し张家口にある第十六師を堅とする救援軍を組織派遣するに決定した。處が時宛かも嚴冬雲深くして殊に大沙漠の横断は頗る困難なるを以て救援軍の大部分は依然张家口に駐り一部隊を叨林に派遣し此處より更らに小部隊を庫倫に派遣せるに戰はすして滂江に敗退しウンゲルン軍之を追撃南下し來り三月中旬叨林、烏得の要所を占領するに至つた。また曩に恰克圖方面に去れる支那軍も三月十八日再び同地を撤退しウンゲルン軍代つて之を領有せるに依り、外蒙古内には支那の一兵をも残さざるに至つた。自國領土内に彼等の跳梁を許さず、獨立計畫を破壊せんとする支那政府は、敵黨の勢力復活を最大の脅威とするチタ政府とは利害關係を同ふするに至り、兩國政府は相策應して之が剿滅を

圖る事が當然であつた。支那政府はチタ側の提議せる共同討伐を承認せず殆んど放任してゐた。チタ政府は庫倫の一隊恰克圖方面に移動しありと稱しダウリヤ方面にあつた赤衛軍一個師團に出動命令を下し三月中旬騎兵部隊は露支國境を越えたとの情報があつた。

支那政府は庫倫陥落以來、頻りに恢復策に苦心しありしも斷乎たる處置に出で得ざりしは第一に軍費の窮乏せるためであつた。軍費の決乏は大兵を動かすを得ず、例令一時數百萬の軍費を得るも永續の見込なく、支那史を按すれば古來、漠北の蠻人を防がんとして時の政府が財政的に死滅せる事實は少くない、内政整ひ國力膨脹の勢に乗せざれば成算は先づない。北方の二大勢力たる張作霖、曹錕の兩使が自重勤かざる所以は、兩者の勢力關係の複雜せるに基因せるは勿論なるも、主として軍費支出難の結果であつた。

(三) 斬 内 閣 の 動 搖

九年十月十二日多年金陵の天險に蟠踞せる江蘇督軍李純は蘇、皖、贛三省巡閱使として和議總代表を兼ね長江の重鎮として盛名ありしに、時局の紊亂に憤慨し突如悲愴なる最後を遂げて以來、北

方の政局も亦混亂の状態に陥り、靳内閣は又しても大暗礁に乗り上げた。張作霖として「時局柄寧ろ滑稽の感あり」と嘲笑せしめたる南北統一命令は果して一片の反古と化し、何等の效果もなく北方の面目玉を蹂躪され、國會の新選舉も亦浙江督軍盧永祥の延期通電に依り多大の障害を來し實行不可能となつた。陳炯明の蹶起以來南方の旗色大いに振ひ、孫文は新に大總統に就任し陣容を整ふるの秋、北外蒙の變亂は日に猖獗を極め、北京政府は之れが討伐の資に窮して拱手傍観の態に出づるの餘儀なきに至つた。剩へ、靳内閣成立の使命たる南北和平、軍隊裁撤、行政整理等は全然失敗に歸し殆んど行詰りの窮状に陥るや、舊交通系の内閣乗取陰謀は此の間に發生した。

第二次靳内閣成立の當時、將來靳内閣を禍するものは舊交通系なりと傳へられし如く、彼等が國內に於ける銀行家と地方資產家との間に牢乎たる勢力を擁し、驟然一國の財權を壊斷し居る結果は、同系の首領たる梁士詒が依然臺閣の志を捨てず、靳内閣に取つて代るべく周自齊、葉恭綽の兩總長をして内部より破壊せしむべく財政的壓迫を加へしめた。

茲に於て靳總理は辭意を表明するに至り北京の政局は動搖を來した。蒙古問題、南方對策、内閣問題等焦眉の事件に就て之れが解決は靳内閣の支持者たる張作霖と曹錕の任務であつた。是等の時

局問題に最後の決断を與へ政局の安定を保つべく張作霖と曹錕の天津出馬となつた。

第二節 天津時局會議

(一) 張作霖の出馬

四月十五日朝張作霖は急遽特別列車にて濱陽驛より天津に向け出發した。之れ彼が北京政局實際上の主人公として時局問題に就き親しく靳雲鵬、曹錕等と會見解決の要務を帶べる入關であつた。其の一行は總參謀長許蘭洲、顧問町野中佐及び幕僚並びに護衛として機關銃隊一個中隊（機關銃四門）歩兵一個大隊とを隨へた。張作霖は三月初旬以來徐總統及び靳總理より時局問題解決の爲め再々上京せん事を懇請されてゐた。が時宛かも張作霖を中心とする復辟謠言の盛んに流布されて居る關係上、其の入京が一般人心に及ぼす疑惧と誤解を受け自己に不利益なる點を顧慮し、僅に張作相、張學良等を代表として北京、保定を往復せしめ、自身は慎重の態度を執つて容易に動かなかつた。

靳總理より屢々其の苦境を訴へ辭意を洩し来るや張作霖は靳雲鵬が就任以來の功績を列舉して目

下期限滿期の外債二億内債一億あり、若し執事辭任せば何人か此の責を負ふべきぞ。忽ち外國の干渉を招くや必せり。公の進退は國家の運命に關す

と述べ懇切に之れを慰留した。又斬雲鵬より其の出京を促し来るも

京奉間は近きを以て電信にて自由に意志を疏通せしむるを得べし、且つ萬事金が根本なれば中央政府金なきに余が出京するも致方なかるべし

との旨を答へ勤く氣配も見せなかつた。それが復辟謠言禁止の大總統令發布されしを機會に時局は一日も速に解決の必要を感じ、十四日夜靳總理よりの急電に接し重要文武官を集めて會議を開き遂に入關を決定したのである。

張作霖今回入關の目的は當面の諸問題を自己に有利に解決し勢力範圍の妥協を行ふと共に斬雲鵬、曹鋗との三角同盟を益々鞏固にするためであつた。當時一般に奉天、直隸兩派の衝突説、盛んに流布さるゝため張作霖は頗る憂慮してゐた。即ち實際に於て北京政局を支配しつゝある三角同盟の破壊さるゝに至らん事を恐れた。曹鋗に對して近來、兩人の間を離間せんとする風説盛んなれば感ふ勿らん事を求めたのは之れが爲めである。

如上の事情に依り張作霖は愈々出馬するに至り、彼の一行は十六日黎明天津新停車場に到着し直に河北街の恒記德軍衣莊に入つた。北洋政局の低氣壓は今や天津に移るに至つた。

(二) 四頭會議の經過

張作霖の入津に次で豫め打合をなせる保定の曹鋗は十六日午後六時之れ亦特別列車にて天津に著し、直に曹家花園に入つた。同夜曹鋗は張作霖を訪ぶて第一回の會見を遂げ葉恭綽、王迺斌、張景惠、曹鋗、曹鋐等と晩餐を共にした。翌十七日張作霖は曹鋗を訪ひ午餐を共にし内閣問題、蒙古問題に關し意見の交換をなした。十八日夜靳總理も下津し來り（翌日歸京）三巨頭より成る天津會議の序幕は開かれた。二十五日にはまた兩湖巡閱使の王占元が武昌より北上參加した。王占元は新に故李純に代り長江の盟主として西南各省と聯絡し儼然たる新勢力を形成し聲望隆々たるを以て北方の三巨頭も看過し得ず、其の來津を求める結果、二十五日朝天津に著し前撲國租界の新邸に入つた。此處に於て三頭會議は四頭會議となり天下の耳目は悉く天津に集注した。

これまで、張作霖曹鋗の會合は本舞臺に入らず、花道での小競合で互に胸襟を披瀝することなく、

腹の探り合ひを事とし容易に其の本音を吐かず、孰れの問題も不得要領の状態にあつた。それが王占元の参加と靳總理の再下津とに依り會議は本舞臺に入つて愈々緊張して來た。曹錕の曹家花園、張作霖の恒記德軍衣莊を交互に會場として内閣、財政、征蒙、對南及び張勳起用、選舉、減政等の時局問題に關する大會議は連日開催された。

會に列せる者は四巨頭の外、北京より張志潭、葉恭紹、王迺斌、潘復の三總長一次長來し、又張景惠、曹錕、許蘭洲、曹錕等隨時之れに參畫した。

會議の順序を叙述すれば二十五日、曹家花園に於ける錕、張、曹、王四巨頭が午餐を共にせる顔合を劈頭に對南問題の討議に入つた。二十七日、張、曹、王、三巡閱使及び各省軍民長官三十三名の連署を以て孫文を偽總統とし、其の罪を鳴らせる通電を發した。二十八日より會議は更に緊張し來り、曹家花園に於ける會議の席上、靳總理と直隸省長曹錕との衝突あり、靳總理激昂して辭意を表明し會議は一時行惱の狀を呈した。張志潭、王迺斌、潘復等、各方面に意志の疏通を試み形勢を緩和し、三十日葉恭紹は靳總理を慰撫すべく徐總統の命を含み来る。

五月一日恒記德軍衣莊に於ける四頭會議に於いて閣員問題、財政問題を協議して同夜、靳總理も

辭意を翻し、二日三巡閱使及び各總長聯合にて最後の會議を開き各問題に亘る大體のことを決定した。天津會議終りを告げ、靳總理は五日午後歸京し徐總統に謁して會議の經過を報告せるが此日張、曹、王三巡閱使の連名にて靳總理擁護の通電は全國に發せられた。六日、王占元、曹錕、張作霖の順にて各前後して天津より北京に入つた。

三使の入京は既に天津に於て靳總理と一切の問題を商議せるを以て單に徐總統に謁見し、會議の經過を報告し議決事項の履行を見るに止り、再び會議を開く事なく從つて其の滯京期も長からざるべしと信ぜられた。處が種々の風説は生じ、三使は一向歸任の色も見えず、五月二十四日大總統府の居仁堂會議となり、翌二十五日の懷仁堂會議を最後として一段落を告げ曹錕は二十八日王占元は三十日張作霖は三十一日夫々歸任の途に就いた。四月十六日天津會議の開會以來、四十餘日の間、幾多の波瀾曲折を経たるも無事終了するに至つた。

今次の會議は一言を以て評せば各巡閱使の地盤擴張の協定に過ぎなかつた。張作霖は東三省を根據として蒙古討伐を擔當し、曹錕は黃河流域の維持に努め、王占元は長江一帶を扼し西南各省との意志疏通の任に當り、此の三勢力と中央政府とが精神的に一致し以て南北統一を速成し國家の基礎を

鞏固ならしむべしとの諒解が成立したのである。

(三) 北方の對南宣言

對南問題に對する一切の事宜は王占元の責任に歸した。王占元が熱心に主張せる四省北歸（雲南、四川、貴州、湖南）論は顧品珍、劉湘、盧秉、熊克武、趙恒惕等と完全たる諒解あり且つ實力上の援助を與へ居れる關係上、至難事にあらずと云ふので張作霖も曹錕も王占元の努力を尊重して一任した。王占元の計畫は先づ湖南をして北方に復歸せしめ次で雲南、貴州、四川をして同様獨立を取消さしめ廣東を孤立の地位に陥れ廣西の陸榮廷を援助して對抗策を講ぜしむるにあつた。然も孫文の大總統當選に効を煮せる北洋軍閥派は月の二十七日曹錕、張作霖、王占元を筆頭に三十三名の連名にて次の如き對南宣言を通電公表した。

天、民國に禍し變故紛糾既に三年を逾えたり、中央が息事寧人の主意に基き講和の局を爲せる大義は久しく世人の認むる所なり、曩きに軍政府は政を中央に還し廣西は自主を取消してより我大總統は統一を希望し誠を披きて之を宣布せり、我同人數年來心慮を竭せるは國事危殆に瀕し國本動

搖すべからざるを以てなり、但だ能く急に起ち直に追へば庶幾くは亂を鎮むるを得べく、我國事も漸を追ふて解決し民生も此より蘇生すべしと思惟し居たり、料らざりき、孫文は却つて野心を逞うし上海より廣東に歸れり、其の舉動の乖戾なるは何人も憤慨する所なり、近頃また少數の黨徒を號召し別に政府組織大綱を擬定し二百十八票を以て偽總統に當選せり、竊に思ふに共和國家、國會及び選舉組織法は極めて尊嚴慎重にすべきに拘はらず曾つて取消されたる舊國會を以て而も解散せられたる少數の舊議員を以て私に選舉を開けり、是れ名は公選なるも實は自封にして又總統と稱するも少數私黨の總統にして全數公民の公認せる總統に非らず、それ舊法に依る新選舉の令下りてよりは法律問題は最早論議すべきなし、獨り孫文は敢然此に出て名義を假借して其の惡を掩ひ又人の視聽を惑はさんとす、且つ陽に獨立の旗を樹て陰に内亂の罪を成せり、今日の民生は疲弊し財源は涸渇し外交は困難に陥り國人は日に危亡を恐れ切に紛糾事を息めんことを希望せるに彼は隱に慾念を蓄へ天和を犯し民意に違ふを憚らす、外にして隣邦の譏笑、内にしては國人の指弾を顧みず、疾は喪心より大なるはなく罪は叛國より重きはなし、我同人志、息事寧人に切にして緘默し難し、茲に奸謀を摘發し正義を申明す、彼れ既に自ら國人に絶てり、當に國人と共に之

を棄つべし。

特に茲に宣言す。

曹錕、張作霖、王占元 外三十名の連署

然も廣東討伐問題は政府より先づ討伐令を下し復各省より出兵する事に決定せりと云ふも識者の間に實現は容易ならずと信ぜられた。

(四) 内閣問題の解決

新内閣の擁護は張作霖と曹錕とが最初よりの目的にして天津會議の主題も無論内閣問題にあつた。三角同盟を更に鞏固ならしむる目的の下に四月十八日新總理が第一次の下津當時彼の三國志の卷頭に見る劉備、關羽、張飛三雄が桃園の盟の故智に倣ひ義兄弟の誓約を結び曹錕が長、張作霖は是れに次ぎ新雲鵬は末弟と決せる事が已に三者の結合の如何に堅きかを推測するに足る。次で入津せる王占元も新内閣の擁護に何等異存なく唯だ難關は内部の改造にあつた。連日の天津會議に於て略

ば決定するに至り、五月五日張作霖、曹錕、王占元等の連名にて各省に發せる新内閣擁護電は北方の重鎮悉く一致せるを示し新内閣は鞏固の度を加へた。

昨年安福派倒潰の後を承けて新總理の重ねて内閣を組織するや身、難局に當り、國務に執掌し裁兵、減政の爲め積極的に進行を謀り功績甚だ大なり。近頃は財政問題に起因し内政紛糾し退志を萌せり、錕等大勢を黙察するに此の國家危急の秋に際し内政外交、新總理にあらざれば囁するなし、會議の結果は新内閣を擁護して大局を維持する事に決定せり、各省に於ても一致して新内閣を擁護し以て國本を定めん事を請ふ云々

内閣問題の主眼は新總理の舊交通系に屬する閣員の排斥にあつた。本來内閣の動搖が舊交通系の陰謀に胚胎せる以上、新總理として此の事あるは當然であつた。それに周自齊、葉恭綽の兩總長は新總理派の張志潭、潘復等と不斷の軋轢ありて新總理は融和の望み難きを信じ舊交通系を排除して内閣の統一を圖らんとの意志を表明した。周自齊は夙に病氣を理由に辭意を洩せるを以て問題でなかつたが困難なのは葉恭綽であつた。

葉恭綽は入閣の當時、張作霖の推薦あり相當の默契と諒解とあるらしく殊に張作霖は之れに依り

京奉鐵道の實權を握り毎月京奉鐵道收入の中より巨額の軍費を提供され居るとの説すらあり、葉恭綽の放逐は先づ張作霖の意嚮を顧慮するの必要あり、且つまた葉の背後に於ける交通系の勢力をも無視する能はずして交通總長問題が其の焦點となつたのである。天津に於て葉恭綽が張作霖に留任を懇請し政費五百萬元の調達を交換條件として國庫支付券の發行に成功したので張作霖も葉恭綽が從來の態度を改め内閣維持に努力すべきを誓へる以上、必らずしも無理に更迭するに及ばざるべしと主張して靳總理を抑へ、一時留任に決したりとの説ありしに形勢俄かに一變し靳總理の辭意を洩せるため各方面の調停慰留となり葉恭綽を辭職せしめ張志潭を後任に推すに決定し張作霖も之を承認せるが之れ靳總理の勝利にして張志潭、潘復等が葉恭綽を驅逐せざる限り内閣の改造は無意味なりと云ふ見地より極力運動せる結果なりと傳へられた。

されど葉恭綽は容易に辭職を承諾せず、天津に下りて張作霖、曹錕等に愁訴するに至り三巡閱使の上京に依り徐總統、靳總理との間に又もや内閣問題に就き協議を重ねるに至り靳總理は飽まで、葉恭綽の辭職を固執するに對し葉は頑然として其の地位を去るを肯んせず、爾來週日に亘り紛糾を極め内閣の改造は一時全く行詰の状態を呈した。

茲に於て靳總理は遂に最後の手段を執つた。即ち現内閣の總辭職を行ひ然る後、徐總統より新閣員を任命する形式を取り葉を驅逐せんと決し豫め張作霖等三巡閱使の承諾を得て五月十四日の閣議に於て總辭職案を提出し多數決を以て之を可決し辭表を徐總統に呈するや、徐總統より折返し左の如く新任命があつた。

國務總理	靳雲鵬
外交總長	顏惠慶
內務總長	齊耀珊(新任)
財政總長	李士偉(新任)
陸軍總長	劉成勳(新任)
海軍總長	李源濂
司法總長	范康
教育總長	新(新任)

農商總長

王迺斌

潭(轉任)

交通總長

張志

潭(轉任)

右の改造に依り舊交通系は放逐され葉恭綽必死の留任運動も策の施しやうなく水泡に歸し新總理の勝利となつた。即ち新總理系の張志潭、交通總長に轉じ奉天系の齊耀珊、內務總長に据り從來新總理の兼任なりし陸軍總長には甘肅督軍たる直隸系の蔡成勳を任命し財政總長に中日實業會社の總裁たる李士偉を任命せるも、日本の財的援助云々を曲筆せる新聞の攻撃と李其の人の就任を欲せず、次長潘復の部務代理となつた。海軍總長は薩鎮冰の後任として李兼新が任命されて第三次新内閣の顔面は揃つたのである。

(五) 未解決の三問題

天津會議に於て内閣問題と對南政策は兎も角、表面は一時解決を見たるも財政、裁兵、選舉の三問題は結局未解決のまゝ有耶無耶の裡に葬らるゝに至つた。

先づ財政問題に就て見るに彌縫に彌縫を重ね疲弊困憊の極に達し日々の政費にすら支障を生じ外

債(總額貳億元にして内一億五千萬元は日本に屬す)の如き元金は固より利子の支拂さへなす能はず地方疆吏の軍費要求に應じ得ず將に破産の状態にありて他に適當の財源なく外債に依らんとするも最早有利なる擔保を缺き特に四國財團との協定上單に一國が多大なる借款に應する望なく内債は亦舊交通系との關係上頗る困難であつた。従つて中央と地方との收支の協定は要領を得ず終つた。財政問題と離す可からざる關係ある裁兵問題即ち支那陸軍の縮少も亦同様であつた。多年の懸案たる裁兵の實行は支那財政を根本的に救ふと共に一面に於いて各地に割據せる督軍の勢力を殺ぎ中央集權の實を擧げ内政紊亂の禍根を除去するを得るも其の實行は到底容易ではない。張作霖、曹錕、王占元等が自己の勢力を殺ぐ事を自ら協定するなどはあり得べからざる事である。本來裁兵實行難の重なる原因は次の三項である。

- 一、各督軍並に有力家が自己勢力の失墜を恐れ容易に之れを肯んぜざる事
- 二、裁兵實行に當りては軍隊解散並に新軍建設に多額の費用(約二億元)を要する事
- 三、解散せる兵卒の多數は職を失ひ無賴の徒となり各地に擾亂を醸す虞あるを以て裁兵は支那各地工業の發達に伴ひ直に兵卒に職業を與ふるの必要ある事

此等は今日依然として裁兵行惱みを來せる諸原因にして新内閣は成立當初の聲明に基き屢々各省に通電して裁兵を主張し「今や財政の困難其の極に達す速に裁兵せざれば萬事休す依て各省に於て裁撤し得べき兵額を報告すべし」と督促し或は又各省代表を北京に召集して裁兵委員會を開催せんとの計畫ありしも要するに毫も效果舉がらなかつた。今回の天津會議に於て新總理は「支那各省を通じ悉く二割宛の裁兵を行ふべし」との具體案を提出せるも張作霖、曹錕、王占元の三使が承諾するの理なく各々自己の任地の重要なるを説いて部下軍隊の裁撤に反対せるため立消となつた。

第三に國會議員の改選問題も不徹底に終つた。其の期日を経過するも其の實行の運びに至らず初選を行ひしは東三省及び直隸、山西等の五省に過ぎずして再選を行ひしは又、張作霖管下の奉天、吉林の二省のみにして議會開催の如きは殆んど其の前途の見込立たざる狀態であつた。

新總理より之れが實施を希望せるを以て張、曹、王三使の連名を以て未實施の各省に速に選舉を行ふべき旨通電を發し六月一日までに覆選舉を行ふべき旨督促するに決定せるも之れ亦失敗に歸した。

裁兵、財政、選舉の三問題は未解決のまゝである。

第十五章 蒙古の實權掌握

第一節 蒙疆經略使の新設

(一) 張作霖と蒙古事變

突如として塞北の風雲を捲き起した外蒙古の獨立運動は支那に取りては憂ふべき邊疆の大禍と爲れるも張作霖には其の反対であつた。國家の災禍が個人の幸運を招くとは一見如何にも矛盾の甚しきものなるも勢力擴張に没頭せる混亂の支那に於ては當然であつた。外蒙の變亂は張作霖が多年、夢寐猶ほ忘れる大滿蒙主義即ち地盤の擴張を遂行する上に於て實に又ない絶好の機會を與へられたのである。張作霖の眞意は前に述べたやうに夙に東三省を完全に統一せる餘威に乘じ滿蒙經略の實權を把握するにあつた。其の第一步として察哈爾に手を染めた以上、此次の蒙古問題を利用し更に熱河、綏遠の二特別區域を自家の地盤に加へ名實俱に滿蒙の實權を掌握し以て北京政府を背後より牽制せんとするにあつた。遂に其の機運は到來した。内外蒙古の實權が早晚張作霖に掌握さる

べき運命の下に進みつゝある事は何人も否認せざりしも餘りに速かに其の機運の到来せるには一驚を吃した。其の事實が宛かも劇の筋書でも演するやうにシックリと張作霖の注文通りになつた事は一般に張作霖の幸運を羨むよりも寧ろ張作霖が仕組んだ芝居ではないかと疑ふに至つた。ウンゲルン軍との聯絡説は此の間に生じ延ひてまた清朝復辟説に結びつけらるゝの現象を呈した。然し張作霖は何等關知せざる事であつた。唯だ此の急報に接して密かに「吾が事成る」と會心の笑を洩して腹中早くも之れが對案を決せるは事實である。前年徐樹鈞が西北籌邊使としての經綸に大なる脅威を感じるに顧み此の機會に乘じ蒙古に對する自家の優越權を確立せんとするにあつた。

外蒙の征討問題は一國の重大事件である。何人をして征蒙の事に當らしむるも先づ張作霖の諒解を得ずには實行不可能である。謂んや征蒙の全權が結局、自己の掌中に落ち來ることを洞察せる張作霖としては別に之れに就て焦慮する必要がなかつた。外蒙の進撃は軍事上（長距離の沙漠行軍と軍隊給養）決して容易ならざるも張作霖は始めから僅か五千内外のウングルン軍を蹴散らす事は問題としてゐなかつた。唯だ自己の大軍を蒙古方面に動かすに於ては直隸派との兵力均衡を失ひ彼に乘ぜらるゝを恐れたる點あるも主として大満蒙主義を實現する爲めに常に機會ある毎に巧みに之を

利用して軍備の擴張に汲々たる張作霖の眞意は即ち政府をして自己に有利な條件を附けしめ多額の軍費と軍器彈薬を供給せしめ増援の名の下に軍隊を増募し自家の壘を高めて後、出兵を斷行するにあつた。それで張作霖は滿腹の野心は色にだに出さず北京政府より再々、外蒙救援軍の出動を促し来るも先づ軍費、軍器の供給を主張し一方又東支鐵道の警備、地方土匪の蜂起等に藉口し出兵を承諾せず表面蒙古問題に無關心の態度を裝ふた。張景惠、鄒芬等に命じて防備を行はしむる半面には亦彼等に密命して極力聲を大にして、ウンゲルン軍の優勢を宣傳せしめたのも一種の策略であつた。敵を有力なものとする事は自己の威力を示す上に必要な手段であつた。之れがために積極的に斷乎たる處置を執らず、張家口危殆の報傳はるも容易に動かす機運の熟するを待つた。之れ張作霖が老猾なる所以である。然も疾風迅雷の勢で天津に飛び出したのは無論蒙古問題を自己に有利に解決する爲めであつた。

(二) 張、曹の地盤協定

天津會議に於ける蒙古問題は最初容易に纏らなかつた。誰も彼も口に征蒙を高唱しても自ら大兵

を出して萬里の遠征を敢行する事は容易でない。それに肝腎の軍費支出難には利害の觀念に鋭敏な

る張作霖、曹錕等が苦しい自腹を切つてまで無條件で動く理由がなかつた。政府が漸くにして征蒙費調達の責任を負ふ事になつたので今度はまた曹錕も王占元も征蒙を主張し出した。「蒙古は自分の繩張」と決めてゐる張作霖としては曹錕は勿論、甚しきは王占元までが征蒙費の分配に與らんと欲する考から征蒙援助を唱ふるに至つた事に大いに不快を感じた。他事は兎に角、蒙古問題だけは断じて他人から彼はと容喙して貰ふたくなかつた。自分の一手で之を引受くる事が最も希望であつた。そこで張作霖は蒙古の地盤を獨占するために一寸張勳を傀儡として芝居を打つた。即ち新總理や曹錕、王占元等が大反対である所の張勳起用を主張し熱河、察哈爾、綏遠の三特別區巡閱使に任命せんことを要求した。復辟色彩の濃厚なる張勳を擧げ上げても内心には起用不起用は問題としてゐなかつた。況んや到底成功は覺束ないと承知してゐながら之を主張する所が一種の策略であつた。

如何に張勳起用に就て朝野の反対あるにせよ。自己が要求せる以上政府及び曹錕等が極端に拒斥し得ず交換條件を出して妥協を申込む事を充分察してゐた。そこで正面攻撃を避けて搦手の突撃を試みた。之れ張作霖の老猾なる所以である。此の結果は張作霖が張勳起用を一時放棄する交換として

蒙古問題を張作霖に一任するに決した。張作霖の芝居は立派に當てたのである。そして征蒙の關係上、張作霖が多年望んで已まなかつた熱河、察哈爾、綏遠の三特別區域も亦其の節制下に置くに決定した。

張作霖の勢力擴張に就て靳總理は止むなく自然の成行として張作霖の要求に應じたに過ぎない。唯だ曹錕のみは反対も反対、大反対であつた。奉、直兩派より各一師を選抜して遠征軍を組織し庫倫を恢復するの議も出でた。然し曹自身は征蒙に使ふ兵がない、名は直隸、河南、山東の三省巡閱使であるも幕下の吳佩孚に油斷はならぬ、虎を養ふと同様で何時自己の地盤を覆がへされんものでない、それに周圍の形勢は一兵にても動かすことが出來ない。張作霖獨舞臺の征蒙は其の將來の威力を恐れつゝも背に腹はかへられず悲しい哉、張作霖の要求に異議を唱ふるの餘地すらなかつた。假令反対した所で油の乗つてゐる奉天派の勢力を抑制し難きを覺つて同意するの外はなかつた。曹錕として自己の周囲を顧みるに先づ第一に準直隸派の王占元からが張作霖と攻守密約説の傳へられた間柄で奉天派に好意を持つてゐる。山東の田中玉は準段派にして陝西の陳樹藩と共に張作霖とは比較的聯絡容易である。殊に陝西は前に奉天派の許蘭洲が督軍運動に相當潛勢力を養へる地であ

る。江南の趙倜でも實際は安心は出來ぬ。山東と同様で巡閱使の權力は及ばない。安徽は張勳の本陣で乾分の張文生が据つてゐる。其の四圍を見れば頗る不安である。封疆に割據して超然たる奉天派の比でないことを知つてゐる。支那一流の妥協政策を用ひて張作霖の南下を防ぐために蒙古方面を譲つて自己地盤の安全を謀つた。然し曹錕も曲者である。人の獲物を見て自分は指を擧へて引込む男ではない。張作霖に對し直隸派の勢力を侵さぬ約束の下に陝西、甘肅の二省を自己の新地盤とする事を承諾させた。斯くて五月二十五日先づ陝西督軍の更迭は發表せられ陳樹藩を祥威將軍に祭上げ曹錕部下の第二十師長閻相文を督軍に特任された。此處に於て徐總統も新總理、曹錕、王占元等は張作霖の大滿蒙主義を尊重する理由の下に征蒙の一切全權を張作霖に委ねるに至つた。

(三) 大滿蒙主義の成就

五月二十五日午後總統府懷仁堂に於ける徐總統主催の蒙古善後會議には張作霖、曹錕、王占元の三巡閱使始め新總理以下の各閣員、其の他在京の蒙古王公等四十餘名列席した。內蒙防亂、外蒙半亂、蒙民生計、蒙王優遇等の各問題を協議し當面の急務たる征蒙に關しては全責任を張作霖に委ねること

正式に決定し張、曹、王三巡閱使の任務は左の如く決定した。

- 一、征蒙全局の用兵及び統率者の指定は全然張作霖に於て責任を負ふこと。
- 二、後援軍の支配及び聯絡計畫は曹錕の擔任たること。
- 三、軍費の援助及び後方援助の一部は王占元の擔任たること。

席上徐總統は「政府が蒙古討伐を決定せるは土匪を討伐して一般蒙人を安んじ五族共和の實をあげ以て領土を保持する目的にして今次張作霖に命じ師を出し速に戡定せしむる旨縷々陳述する所あつた。

新總理もまた各王公の歸蒙後、各族に説きて共に挽回を策せんことを希望した。

張作霖も亦起つて征蒙方策に關し慷慨激越の口調を以て一場の演説に征蒙を高唱した。曰く
外蒙古は支那の領土なるに今遂に外人の爲めに占領せらるゝ所となり、支那國民は大恥辱を受くるに至る。領土保全は軍人の責任なり。征蒙問題は再び討議するの必要なし、作霖既に討伐の命を元首より受けたる以上、近く親ら關東の健兒を率ゐて漠北の野に恢復のことに馳驅する所あらん。若し能く外蒙を外人の手より奪回するを得ば作霖萬里の塞外に死するとも區々たる一身は惜

しむに足らず、不幸にして戰利なきときは曹錕、王占元兩使の在るあり、諸君それ意を安じて可なり云々。

越えて三十日夜大總統令を以て張作霖を蒙疆經略使に特任の旨正式に發表された。令に曰く
今次庫倫事變は少數の外蒙莠徒と舊露國軍官とが勾結し活佛を劫持し、蒙境に進擾し肆に都市を掠奪し商民を殺戮せるものなり。在庫各商が迭次詳狀を呈述せる所に據るに、凡そ我が邦人は同心共痛する所なり。在庫王公喇嘛人民等は彼等の劫制を受けて逃るゝに由なく、躬ら災害に罹り救濟哀求最も殷んなり。前日在京の各蒙古王公及び呼圖克圖喇嘛等を召集して群策を徵集せるに蒙民害を受くる事最も甚しきを以て切に速に國軍の指す所、邊境を平定し以て群生を救はん事を懇望せり。本大總統、國土荆棘に淪し蒙民水火に陥るを顧念し斷じて人民の病苦を異族の馴凌に一任するを坐視し難し。是に於て即ち請ふ所を准して大計を決定し師旅を整肅し速に戡定を圖らんとする。茲に東三省巡閱使張作霖を特派して蒙疆經略使を兼充せしめ、凡有一切の剿撫計畫に對し附與するに全權を以てし便宜事を行はしむ。其の熱河、綏遠、察哈爾、各特別區の防務是最も緊要にし

て均しく外蒙軍事と聲息相通す必らず須らく呼應靈敏にして始めて指臂の效を收む可し。各該特別區域の都統は應に一致して該經略使の指揮節制に歸し以て事權を一にするを要す。後方の策應に至りては總て諸れが援濟を直、魯、豫巡閱使曹錕、兩湖巡閱使王占元と隨時會商して妥籌辦理に俟つべし。該使等、誠忠體國、必らず能く艱難宏濟、速に蒙疆を定めて蒙民をして共に袴席に登らしめよ。厚く望む所あり、此に令す。

之れに依りて張作霖の權力は更に强大となつた。東三省巡閱使として吉林、黒龍江の二督軍を操縱するに加へ、蒙疆經略使として熱河、察哈爾、綏遠の三特別區都統に向つても亦、號令するの權を握り事實上の滿蒙王と爲つた。熱河都統も適當の機會に姜桂題を免じ第二十八師長の汲金純を昇任せしむるに決定し、征蒙の軍費として政府より三百萬元を受領し張作霖は得意の絶頂に達した。一武人にして斯くの如き廣大なる區域を領有せる者は支那に於て前代未聞の事に屬し、多年の宿望たる大滿蒙主義は遂に成就したのである。そして張作霖は時局問題一段落を告げしを以て三十一日、北京を出で天津に三泊の上、六月四日正午、帝王の行幸とても斯くまではあるまじと思はるゝ位の

いと嚴重なる警備の裡に意氣揚々として歸奉した。之れ四月十五日朝、晋京以來五十日振りであつた。

第二節 征蒙善後問題

(一) 蒙疆經略使就任

張作霖は征蒙の全責任を一手に引受けて奉天に歸るや直に吉林の孫烈臣、黒龍江の吳俊陞兩督軍第二十七師長張作相中將を始め各旅團長、聯隊長等の重なる武官二十餘名を召集して征蒙問題に関する東三省軍事大會議を開いた。

會議は六月十三日より二十日まで一週間に亘り慎重討議を凝らした。蒙疆經略使としての使命を全ふするに努めた、然も一方政略上、六月十六日熱河、綏遠、察哈爾の三都統及び吉林、黒龍江の兩督軍宛て「未だ蒙疆經略使に就職する旨宣布し居らざるを以て蒙邊の軍事に關しては直接北京政府と協議されたし」との意味の通電を發しつゝも内に於ては依然征蒙の作戦方略を進めた。

會議の具體的內容は不明であつたが衆議、遂に征蒙に決し大體に於て左の五項を議決したのである。

- 一、征蒙軍の編成
- 二、留守軍の防備配置
- 三、糧食、軍器、彈藥輸送方法
- 四、軍隊出動の方面及び三省の各出兵數
- 五、征蒙軍出發の期日

大體の方針は決定した。張作霖は愈々、征蒙を實行すべく、六月の二十五日蒙疆經略使に正式に就職した。越えて七月五日蒙疆經略使の印綬は北京より送附し來り、翌六日豫て制定中であつた經略使署官制を發表し、各役員を任命した。

(二) 征蒙の作戦

征蒙の作戦は總勢三萬の大兵を動かし、東、南、北の三路より庫倫を包圍進撃すると共に外蒙の境

界を警備し、蒙匪の侵入と糧道を絶つて漸次、彼等を綏撫歸順せしむるの方針であつた。即ち武裝的和議を講じて雙方の面目を立てんとするにあつた。然も征蒙軍の編成と攻撃の部署及び軍器軍糧の供給方法は左の如くに決定した。

(イ) 征蒙軍の部署

○東路 热河方面より進軍し、兵力は第二十八師の全部と騎兵旅を合し第二十八師長汲金純、之れを統率する事

○南路 張家口方面より北進し、兵力は暫編奉天軍第一師同第六混成旅、同第七混成旅にして察哈爾都統兼援庫軍總司令張景惠、之れを統率する事

○北路 海拉爾方面より西進し、兵力は第二十九師の全部と巴英額部下の黒龍江騎兵第一旅にして黒龍江督軍吳俊陞之れを統率する事

(ロ) 軍器・彈薬の補給

奉天兵工廠に於て晝夜兼業、軍器を製造せるも製造能力不足のため前に張作霖が王占元と商議し漢陽兵工廠より彈丸數百萬發を購入した。其の代價は政府より支出した

小銃五千挺買入のために軍械廠員を上海に派遣した

(ハ) 軍糧輸送

蒙古及び直隸北部は地曠く人稀にして極めて物資に乏しいので兵糧の購入困難なるに加へ交通不便にして輸送又困難なるを以て穀物集散の地區に委員を特派し購入せしむるに決した。第一兵站部を東蒙古の某所、第二兵站部を張家口に設立して輸送隊數個大隊を募集し東蒙古と張家口の兩方面より前線各軍に輸送供給するに決定した。

(ニ) 飛行隊の編成

庫倫進攻に際し敵軍威嚇及び敵情偵察のため飛行機を使用するに決し六臺又は四臺を携行すべく連日奉天に於て飛行練習を行はしめた。

六月二十七日出動命令を先づ十八師長の汲金純に下し、二十八師を率ゐて熱河方面に向はしめた。満鐵線を以てまた奉天軍の出動を開始した。北京政府よりは征蒙費として血の滴りさうな五百萬元を前後二回に受取つたので具體的の行動を起したのである。

(三) 内蒙王公會議

武装的和議を征蒙の眞諦とせる張作霖は外蒙出兵を實行すると共に内蒙古の王公を奉天に召集して蒙古善後會議を開いた。達爾罕親王、賓圖王、郭爾羅斯王等十七名の各王公及び蒙藏院副總裁達壽、蒙古宣撫使熙鉉、庫烏科唐鎮撫使李垣並に農商總長王迺斌、孫烈臣、吳俊陞、張景惠の督軍都統等參列した。

之より先、張作霖は蒙疆經略使の資格を以て蒙古活佛に對して次の通告を發したと云ふ。

民國共和成立以來、支那政府は蒙古民族に對し一視同仁の態度を持し來れるに拘はらず、汝等露人と土匪に誘惑され、猥りに蒙民を牛馬の如く殘虐し、宗教を水火、干戈の域に墮つ。單に盛爵尊榮の自ら保たれざるのみならず、今後の治安提携も永く恢復されざるに至らん。本使は蒙古の安寧を期し其の禍根を除かんためと膺懲の大任を受く。唯だ恐る所は軍隊の通過する所、玉石俱に焼け國家懷柔の大計に悖らん事を。故に汝等若し能く良心を發揮し過を悔いて歸順するあらば本使は汝等に永久の福利を與ふる事を約すべし、若し然らざれば汝等少數者のために遂に全蒙の大

局を破壊せしめ悔を後日に貽さん云々

之れ活佛の一派に對する張作霖の一種勸降の示威運動であつた。成るべくは武力を以てせずニ蒙古問題を解決せんと期せる張作霖としては當然の事であつた。

奉天に於ける蒙王會議は次の五項に就て審議した。

- 一、征蒙に關する件
- 二、蒙民を優遇し露匪の戰禍を受けざらしむる事
- 三、東蒙古を行省に改むる準備の件
- 四、移民開墾を獎勵して蒙古を開發するの件
- 五、外蒙王公を優待し宗教及び私交の關係上より歸順勸誘の件

討議の結果は先づ内蒙王公より共同して外蒙の歸順を勧告し一方軍隊を進めて威力を示し歸順を速かならしめ庫倫の獨立を取消さしめ若し應ぜざれば討伐を斷行するに衆議一決した。

(四) 張作霖親征準備

元來張作霖は外蒙に對しては最初より出兵の意志はなかつた。直隸派との對峙上、一兵を動かす事をも欲しなかつた。天津會議の決議に依つて征蒙を一手に引受くるや始めて征蒙の意を決した。然も五百萬の軍費と三特別區と四個旅團の増兵を行ふの條件を獲得した結果であつた。それでも蒙古方面の地理に詳んぜる張作霖は懸軍萬里、大部隊の兵を漠北に動かす事の困難なるは夙に熟知してゐた。然し行懸上、征蒙は實行せねばならなくなつた。本來武裝的和議を目的とするだけに出来るだけ聲を大にして征蒙を高唱した。之れ蒙古方面に對する一種示威的の宣傳であつた。

然も張作霖は自ら蒙古親征を聲明した。北京に於ける蒙古會議の席上に豪語せる言を實現するにあつた。が此の裏に蒙古經略に對する大芝居が仕組まれてあつた。

蒙疆經略使として親ら第二十七師の一旅を中心とする遼東の健兒を率ゐて征蒙の途に上るに決定した。幕僚等の諫止にも耳を傾けず「曾つて前後二回も庫倫に赴ける事あれば道路水澤の地理に熟せるを以て想像する程の事はなかるべし」と傲語した。其の外蒙親征の行程は滿鐵線にて長春に向

ひ東支鐵道にて哈爾賓に赴き二日間滯在の上、滿洲里に西行し約二週間滯在し庫倫方面の形勢を觀るにあつた。然る後ち道を水量の豊富なるケルレン河の流域は沿ひ二千七百支里（一支里は日本の六町）を突破し各軍と相策應して庫倫に進撃するの計畫であつた。庫倫を平定後、治安維持に必要な數の軍隊を駐屯せしめ、張作霖は庫倫より自働車にて沙漠を縱断南下し張家口に出で北京に入るの計畫にて往復三ヶ月の豫定であつた。奉天を起點に哈爾賓、滿洲里、庫倫、張家口、北京と云ふ順に萬里の大圓形を一周する一大遠征計畫であつた。奉天出發の日時は七月二十六日午前と決定し、軍事顧問木庄（繁）大佐も同行に内定し、文武隨員四十名、護衛兵三百五十名を引率するに決し滿鐵會社は特に貴賓車及び一、二、三等車を連結せる特別列車を準備するに至つた。

(五) 外蒙の形勢變化

張作霖が親征準備に汲々たる際、外蒙の形勢は亦一變した。

チタ方面より入境した赤衛軍は恰克圖南方に於てウンゲルン軍と戰ひ之れを擊破した。之れ七月初めである。また六月上旬滂江を占領した蒙匪の一隊は支那軍より擊退せられ、同月二十六七日兩

日に於て蒙匪二千、再び襲来せるも再び敗走し、經棚、林西方面に殺到せる蒙匪も熱河方面の支那軍より撃退され、呼倫貝爾に於て曾つて勢威を振つた勝福の殘黨は已に吳俊陞に服従し、庫倫に於ける主戰派は蒙古馬賊の大頭目陶什陶一派とウングルン一隊であつた。それで張作霖の征蒙は戦闘らしき戦闘を見ずして宣撫次第平定し討伐の必要はあるまいと觀測された。況んや大仕掛の征蒙は無用の事とされた。

處が問題は再び面倒となつた、ウンゲルン將軍が露蒙人より成る二萬の大軍を率ゐチタを進攻するため北進中、トロペツコサフスク附近にて赤衛軍の南下と衝突し敗退するに至り、二千三百餘名の死傷者を遺棄し庫倫近くのシャゴル地方迄退却し、同地に於て赤衛軍を防止せんとするも防備意の如くならず、再び敗戦し數百の死傷者と多量の軍器軍糧を棄てゝ四方に敗走した。勢に乗せる赤衛軍は追撃を續行し七月六日庫倫に入城するに至つた。爲めにウンゲルン軍は敵軍の機敏なる戦略に後圖の計を爲すの遅なく軍需品、糧食等一切を其の儘遺棄して庫倫を脱出した。赤衛軍はウンゲルン派反対の蒙古人より歓迎を受け多數の武器、軍需品を獲得せるのみか庫倫の實權を握つた。そして蒙古革命黨を使つて舊政府(ウンゲルン及び活佛一派)より政権の授受を行はしめ七月十日付を以て

蒙古人民政府を組織させた。之れ單に形式のみで庫倫を中心とする蒙古の形勢がチタ軍の支配する所となつた。外蒙古は反過激派より過激派の手に移り蒙古赤化の前提となり、支那としては更に危険に瀕した。

(六) 征蒙中止の裏面

張作霖の外蒙親征は將に實行されんとした。其の師の向ふ處敵なく恰かも無人の境を行くが如くにして庫倫は立ち所に平定すべしと觀測された。然も中原の政局再び亂れ、之れを中止するの餘儀なきに至らしめた。廣西に於ける陸榮廷の没落は其の主因にして次で兩湖の風雲急を告ぐるに至り、張作霖の征蒙は一時延期するの外はなかつた。

之より前、半歳に亘る兩廣の爭霸戦は遂に輪贏を軍事的に解決するに至り、六月末廣東軍が破竹の勢をして梧州を占領するや陸榮廷派の結束緩み一致を缺いた。從來廣西軍の中堅であつた劉震寰、沈鴻英等は廣東軍に降つて各獨立を宣し陸榮廷は孤立無援の窮境に陥つた。由來北張南陸と併稱され、廣西軍閥の本尊として南方に霸を唱へた陸榮廷も亦、雲南に於ける唐繼堯の輿を履んだ。十年

來の地盤も一朝にして失ひ七月二十一日纔に身を以て安南に遁れた。此の結果北方は再び廣西を失ひ、新内閣の統一計畫は畫餅となつた。然も陸榮廷の没落に依つて其の影響は兩湖問題として現はれた。湖北人の王占元排斥運動の擡頭であつた。事の起りは平素王占元排斥の念に燃えてゐた湖南在住の湖北人即ち夏斗寅、宋鶴庚、魯濂平等の武將が所謂「湖北人の湖北」を主張し宜昌、武昌の兵變以來著しく威信を失墜せる王占元を驅逐すべく民黨系と握手し新運動を開始し優柔不斷なる趙恒惕を説破して遂に湖南軍の湖北進攻を決行せしめた事である。然も此の混亂の裏に潜在して巧みに漁夫の利を占めた者に吳佩孚がある。

元來、吳佩孚は張作霖の征蒙に不賛成であつた。征蒙其の物に對する不同意でなくして張作霖が征蒙後の威勢今日に數倍する點を恐れた。然し今更ら表面反対し得ない行懸上、間接射擊を以て奉天派を牽制する手段を執つた。之れ即ち兩湖問題を利用し征蒙を中止せしむると共に湖北を直隸派の勢力範囲とする謀略であつた。張作霖と聲息相通する王占元排斥を暗に左袒し先づ湖南軍をして湖北に侵入せしめ、一方湖北人である自己の舊部下たる第二十五師長蕭耀南に命じ援鄂の名の下に湖北に進軍せしめた。従つて王占元は絶體絶命の境に陥り其の地位は危殆に瀕した。

廣西に次で湖北の動搖は北方派に取りて非常なる恐慌を來した。北京政府は勿論、直隸の曹錦、湖北の王占元等より張作霖に對し征蒙を中止せん事を求め來り、頻々として警電は發せられた。兩湖の形勢重大なるに於て張作霖も之れを餘所に見て悠々、蒙古三界に飛び出す譯に行かなくなつた。それに東三省の狀態を顧みれば耿玉田一派の陰謀事件は別として馬賊の蜂起南方派の潛入等兎に角、兵變の勃發せざるまでも不穏の形勢あるために征蒙を躊躇した。七月二十四日夜軍事會議を開いて討議せる結果、張作霖は斷然、征蒙を中止する旨を聲明した。未出動の軍隊は其の儘とし既に出動せる軍隊は暫く駐屯すべく電命し、形勢觀望の態度を執つた。之れで征蒙は完全に中止された。蒙古問題は未解決のまゝ残さるゝ事となつた。

~~~~~  
吳佩孚の計畫は悉く成效した。八月九日政府は王占元の辭職を聽許し吳佩孚を兩湖巡閱使に。蕭耀南を湖北督軍に任命した。

### 第三節 热河都統の更迭

#### (一) 張作霖の狂言

張作霖が热河に地盤を得んと欲せるは一朝一夕の事ではない。然も热河には多年、北洋派の大長老姜桂題が蟠踞して動かないで容易に目的は達せられぬ。蒙疆經略使となつて三特別區都統を節制指揮するの全權を握つても姜桂題が引退せねば意味をなさぬ。處が姜桂題は一向位置を退くやうな模様も見えぬ。そこで張作霖は表面冷靜の態度を執りて悠々たるも、裏面に於て少しく焦り出した。それで仕組んだ芝居が經略使辭表の一幕であつた。張作霖は折角得た經略使の重職を棒に振る程思ひ切りのよい男ではない。内心には秋毫も辭意はなく唯だ之れを口實に热河問題を解決せんとする駆引からの辭意表示であつた。本來征蒙の意志はなくして征蒙を受けたのが即ち三特別區を自己の勢力下に收めんとする最初からの目的であつた。従つて經略使辭任の一芝居も當然であらう。實を云ふと張作霖の眼中には漠北の事變はさまで大事件と映ぜぬ。或る時期まで放任すれば自然と平定するものと見てゐる。外蒙は宗主權さへ支那が握つて居れば大丈夫だと考へてゐる。唯

だ張作霖として焦眉の急は直隸派との對峙であつた。勢力の均衡を失ふまいとする苦心であつた。中原に蟠居せる直隸派は吳佩孚を中心によ々勢力を張らんとするの勢あるに鑑み之れを抑壓する爲めには兵略上、是非とも先づ三特別區の實權を確實に掌握せねばならなかつた。名は蒙疆經略使でも三特別區は察哈爾を除いて熱河、綏遠の二區は未だ張作霖の自由にならぬ。綏遠都統の馬福祥は張作霖の同意に依つて都統となり、都統代理の周登泉は資望共に淺くして問題ではない、難題は熱河の姜桂題であつた。姜桂題は北洋毅軍の老武者である。民國二年七月、時の都統熊希齡が國務總理に榮轉の後を襲ひ直隸提督より轉任して以來、九年熱河毅軍の統領を兼ね相當の勢力を扶植した。然し姜桂題は齡已に八旬を越えたる老將軍である。夙に隱栖の志はあつたが其の麾下の將卒が姜桂題の轉任に依りて窮境に陥るを見るに忍びず、依然留任してゐた。部下は又最も其の轉任を恐れてゐた。

張作霖としては姜桂題さへ除けば東三省と熱河、察哈爾と接續するを得て、スワと云はゞ一舉して北京の死命を制する事が出来る。奉天派に取りて熱河は最も重要な地であつた。張作霖が多年垂涎してゐるのも無理のない話である。天津會議で第二十八師長の汲金純を熱河都統に据ゆるに協定

成立せるに靳總理は姜桂題の反対を恐れた。斷乎たる處置を執り得ず、其の約束を履行せぬので張作霖は憤慨した。其の面當が經略使就任の拒絶であつた。北京政府も實は姜桂題の位置に困つてゐたのだ。姜桂題にしても今更ら經略使たる張作霖の節度に服するのは厭やだ。で引退するか轉任するかの外はなかつた。然し熱河には猶ほ未練があつた。動きさうで勤かぬ。姜桂題が勤かぬとすれば折角畫いた罷は生きぬ事になる。張作霖は怜悧だ。擗手より姜桂題を壓迫するために殊更に征蒙の聲を大にし汲金純に命じて第二十八師を錦州より熱河に向け進駐させた。之れ姜桂題狩出の一方法であつた。姜桂題より二十八師の入境阻止を電報しても征蒙のためと云ふには抗辯の餘地はなかつた。斯くして姜桂題の運命は刻々に迫つて行つた。勢の趣く所、流石の老將軍も如何とも詮術はなかつた。

## (二) 汲 金 純 の 特 任

靳總理の優柔不斷の態度に切を煮した張作霖は愈々奥の手を出した。參謀長の喬漢章に命じて蒙疆經略使の辭表と印璽とを携帶入京せしめ之れを靳總理に叩付けて即日歸奉せしめた。之れ九月

十日である。此處で靳總理は甚しく狼狽した。急速閣議を開いて汲金純の熱河都統を可決し姜桂題を陸軍檢閱使に轉任せしむるに決定した。そして十日付の大總統令にて左の如く發表された。

陸軍河上都統 姜桂題  
特任陸軍檢閱使 第二十八師長 汲金純  
特任熱河都統 陸軍中將

汲金純は遂に豫定の如く熱河都統に昇任した。張作霖の宿志は遂げられた。張作霖が湖北問題に關し直隸派の獨占に委し何條容喙する所なかつたのも熱河を自派に收むるための用意に外ならなかつた。大總統令は發表されたが問題は姜桂題が從順に熱河を明渡すや否やであつた。中央政府より北洋毅軍に支拂ふべき軍費は二百六十餘萬元も滯つてゐた。未拂軍費問題と毅軍移駐の善後策さへ話がつけば案外容易に解決さるものであつた。然し中央政府の財政狀態は此の巨額の軍費を支拂ふこと困難なために姜桂題が果して無事熱河を引渡すべきかと憂慮された。第二の陝西事件を演

出するにあらずやとまで疑はれた。が然し姜桂題は内心已に時の非なるを熟知してゐた。ドウセ張作霖の節制に甘んじ得ない限り熱河を引上ぐるの外ないことを覺悟してゐた。容易に轉任承諾の意を明示せなかつた理由は別にもあつた。年收百五十萬元と稱せらるゝ熱河唯一の財源である熱河北部の罂粟栽培の收穫に多額の利益を得るまで動かぬ決心であつた。それが愈々收穫を終つたので姜桂題のみならず部下の營長、連長始め一兵卒に至るまで相當の利益を得た。今は熱河を引上ぐるにしても困難でなかつた。未拂軍費は緩々督促するとして足元の明るい中に熱河を引上ぐるに決して姜桂題は檢閱使就任を承諾した結果、大總統令の發布となつたのである。

姜桂題は遂に熱河引上に着手した、北洋毅軍は十七日より北京方面に移駐すべく南下を開始し金純は發表以來、奉天に於て張作霖と種々善後策を協議しつゝありしが一度、北京に赴き徐總統、靳總理に任命の禮を述べ二十九日熱河に着任した。十月一日、正式に都統事務を熱河道尹より引繼ぎを了し就任するに至つた。之れで熱河問題は平和の裡に解決した。張作霖が蒙疆經略使としての職權を行使する上に唯一の障礙であつた姜桂題は遂に中央の空位に祭上げられて了つた。張作霖は

事實上、滿蒙を統一するを得て其の得意は甚しかつた。蒙疆經略使としての實權は確實となると共に北京は全く奉天派のために死命を制せらるゝに至つた。

## 第十六章 日本と張作霖

### 第一節 張作霖親日の表裏

#### (一) 滿洲に於ける日本

支那の現勢を論じ、張作霖の出處進退を叙述して略ば張作霖の何者たるかを語れるを以て最後に日本と張作霖の關係を説明し、張作霖の親日眞意を解剖し、併せて日本の張作霖に對する外交私見を述べて本稿を終らん。

元來、滿洲に於ける日本の地位と云ふものは既に周知の事實である。今更ら之れを喋々するに及ばない。が然し滿洲を背景として支那の政局に支配權力を振つてゐる張作霖と滿洲に特殊の地位を有せる日本との關係を語る上に於て勢ひ之れを簡単に叙述せねばならぬ。筆は先づ張作霖が頭を擡

げ出して來た日露戰役前の滿洲に溯る。

極東侵略の大野心を藏せる露國が光緒二十六年團匪事件に乗じて大兵を南下せしめ、事實上滿洲を占領し、支那の宗主權を蹂躪して頗みざるや支那は猛虎の前の弱羊の如く其の暴力に威壓せられて易々諾々、命維れ從ふの外はなかつた。従つて日露戰爭に於ける日本の戰勝は支那に取りては正に救世主の再臨であつた。日本は支那の國權恢復上に恩人となつた。危くも有名無實に瀕せる滿洲の宗主權を再び恢復するを得た支那は當時深く日本を徳とし、感謝の辭を惜まなかつた。若し日本が慨然として義戰を敢へてしなかつたとすれば、滿洲はトウの昔に露國に併呑されてゐたであらう。思ふだに寒心の極みである。然も戰後滿洲は日露兩國の緩衝地帶となつて國際的威力の下に統治せられ、支那は坐ながらにして滿洲の治安を維持するの幸運をも併せ得た。戰禍後の滿洲整理は最も有效に、最も迅速に行はれた。それのみか南北滿洲に於ける鐵道が専ら平和的、經濟的に施設經營された結果、滿洲開發の上に貢獻する所は蓋し渺少でなかつた。日本の南滿洲鐵道會社の如き巨資を投下して鐵道沿線に各種產業の發達を圖つたので勃然として興起した。貿易も又盛んとなつて滿洲の經濟狀態は逐年良好となつた。支那官民が有形無形に蒙る所の利益はまた甚大なるものがあつた。

た。全然其の面目を一新し平和的に發展の道程に就いた。北京の中央政府は勿論、滿洲の地方官憲に於ける歲入が戰前に比し倍加するに至れるは事實である。之れ即ち日本の賜物であつた。今や滿洲に於ける日本の地位は公然列國が之れを認めてゐるだけに確固不拔のものである。南滿洲鐵道を中心二十萬の在留邦人の築ける根柢は牢乎たるものがある。滿洲及び蒙古に關する一切の問題は日本を除外しては如何なる國も手は出せないので。然し日本は今日滿蒙に對して侵略主義の領土的野心はない。假にあつたとしてもそれは不可能の事である。唯だ經濟的に發展することが最善の策である。

## (二) 日本と張作霖の關係

滿蒙王として一世に榮耀く張作霖が今日の大を成すに至れるは張其の人の智謀才幹が他の群雄に卓越せるに基因せるは勿論なるも滿洲を地盤とする關係上、天然自然に日本より有形、無形の恩恵を受けた事も亦争ひ難き事實である。

第一に日露戰爭が起らすして滿洲を依然強露の蹂躪に任せたならば張作霖などは或は今日存在し

てゐなかつたかも知れぬ。假に存在したとしても今日の勢威は望まれない。旅團長位が關の山であつたらう。今日の榮達は革命の風雲に乗せるに依るも露國の滿洲占領が當時更に進展せるものとせば張作霖などは綠林の一頭目としても身に入るゝ所なきに至つたであらう。換言すれば日本の間接の恩惠は張作霖を今日あらしむるべく育んだとも云へる。

第二に根據地を奉天に有することが非常なる強味である。地の利を得たる事は單に奉天省の地勢に留らず、奉天省と日本との關係があるので山海關外は殆んど治外法權にも均しい安全地帶である。中央の政爭に參加し兵を出せる際、萬一敗北して兵を經めて山海關を一步東に入れば安全だ。反對派が長驅張作霖を追撃せんとしても不可能である。萬一斯る場合には日本が兵禍の災害を黙視する道理がない。張作霖のために好意的の解決を與へて呉るものと信ぜられてゐる。で北京政府でも張作霖には遠慮しなくてはならぬ。張作霖の地位が背後に日本の後援ありと思惟さるゝは此點である。

第三に歐戰以來、日本が北京の外交界を左右してゐた頃に張作霖は段祺瑞との默契に依り巧みに機會を利用して膨脹の素地を造つた。そして今日の勢力を張るに至つた事である。

第四に日本の満洲に於ける經濟的の施設に依つて奉天省の如き多年紊亂せる財政を整理するを得た。民國五年六月省財政整理のため朝鮮銀行奉天支店より借款せる三百萬圓の如きは期に及んで之を償還し、中央政府の財政が正に破綻の窮境に瀕せるに反し奉天省財政廳には二千萬元の剩餘金を蓄積せるの成金振にても知る事が出来る。

観じ來れば過去及び現在に亘つて直接、間接、張作霖が日本の恩恵に浴せる事は決して尠少ではない。本來他力を利用して自力化するに巧妙な張作霖である。其の位地權勢と膨大なる軍隊、富裕なる財産は總てが自力を勞する事少くして他力を利用して得たるものであると云へる。日本と張作霖の關係が色眼鏡を以て觀らるゝのは斯くの如き事情に基因してゐる。

### (三) 親日論の正體

張作霖は聰明な男である。日本の東三省に於ける地位を充分に諒解してゐる。張作霖自身が亦、日本の恩恵に浴せる事も知悉してゐる。張作霖が親日論者なる所以である。然し張作霖の腹中を赤裸々に解剖すれば其の親日論が純一無雜のものでなく勘定高い張作霖が利害の打算より來れる綿

入の親日論である事は無論だ。一體支那人は利己主義の最も強烈な民族だけに米國に親しみ利益あれば親米派となり、日本と提携して利益あれば亦、親日派と變する事は尋常茶飯事である。**打算的**の親米、親日である。支那人の國民性としては寧ろ當然の事で怪しむに足らぬ。

張作霖とても支那人である。傳統的の國民性は其の血管の中に流れてゐる。其の根據地を日本の本を除外し、日本を無視しては何事も出来ない事を承知してゐる。單に滿蒙のみならず、支那問題に就ては事の大小に拘はらず、日本の諒解がなくては思はしく行かぬ事も亦熟知してゐる。何と云つても日本は支那を抑へてゐる以上、終始日本と相提携して親善の關係を持続して行く事が最も必要と信じてゐる。即ち張作霖が頻りに日支親善を唱へて親日政策を執る所以のものは日本と相互に利益を交換せんとする目的に外ならぬ。日本の求むる所は之れを容れ、已れまた日本より代償として或物を得んとするの希望である。張作霖が東三省に於ける交渉事件に就て事苟も日本との國交に關するものは公平に處理し、日本側の好感を毀損せないやうに努める所以は職として此の意思に基く。假りに二三の例を舉ぐれば民國八年五月山東問題に關して支那各地に排日運動の勃發するや張

作霖は東三省の總商會始め農工各團體及び學生等が相呼應して妄動せんことを慮り、嚴重なる取締命令を下し東三省に於ける排日運動の實現を防壓せる如き。九年夏所謂直皖戰爭に際して徐樹錚一派の安福派禍首が刀折れ矢盡きて日本公使館に避難せるため、小幡公使が國際の通義に依り政治犯として保護を聲明するや排日派の一昧は又しても各地に排日の氣勢を擧げんとするや時に張作霖は北京より東三省の各督軍に對して排日運動の勃興抑壓を電命し未然に防止し得たる如き、九年十月奉天事件勃發して日本が問島に於ける不逞鮮人の鎮壓に就て日本軍と支那軍との共同討伐を提議せんに拘はらず、張作霖は自ら責任を負ふて同意を與へたる如き。また同事件に對して奉天の學生等が吉林學生團の飛檄に呼應して排日的示威運動を起さんとするや嚴重なる取締を命じて中止せしめたる如き。如何に張作霖が日本の好感を買ふに汲々たるかを想察するに足る。

日本より好意的の援助を求め、自己の地位を擁護し、且つまた自己將來の政治的活躍に資せんとする目的なるは説くまでもない。張作霖が日本に親み、厚く日本に倚頼する所以は其の存在上、必要缺く可からざる結果である。日本に反抗しては身の破滅である事を知つてゐる。従つて張作霖としては自己の地位擁護上、常に其の地盤が滿洲でなくてはならぬ以上、排日政策を執ることは絶

對にあるまい。此の點は張作霖の親日が根底深い譯である。之れ一面張作霖が日本の傀儡と目せらるゝ所以である。然し張作霖は決して日本より傀儡に使はるゝやうな男ではない。上述の如く眞意は打算的の親日論者たるに過ぎない。

#### (四) 至難な對日外交

張作霖の對日外交は立場が立場だけに非常に骨が折れる。日本に對する義理と自國民に對する體面保持のために同情すべき點が多くある。張作霖が日本に對する誠意の有無は問題でない。日本と自國民との間に板挟みの苦境にある事を注意せねばならぬ。日本の勢力を背景として或る重大な目的を達成せんと欲せる張作霖は常に日本の御機嫌を損ぜぬ事に顧慮してゐる。東三省に於ける日本の各種企業に就ても能ふ限り其の要求を容れん事を希望して居る。處が悲しい哉。張作霖は支那人として自己の體面を保つの必要がある。假令、日本の要求が少しも無理のない正當のものであつても、一から十まで無條件で容認する譯には行かぬ。日本の傀儡と罵られ、賣國奴と攻撃さるゝを恐らねばなるまい。

張作霖は滿洲に於ける日本の經濟的發展を阻止する意嚮はない。日本の投資に依つて共同の事業を營む事の有利なるは百も承知してゐる。其の一例は大倉男や太興會社との合辦事業がある。が東三省は獨立國ではない。張作霖の思ふやうになるものゝ半面にはまた思ふやうにならぬ。

國民は鷦の目、鷯の目で張作霖の一舉一動を監視してゐる。大志ある張作霖の恐るゝ所は國民の怨府となる事だ。日本の傀儡と罵られ、賣國奴と攻撃さるゝに於ては其の立場がない。従つて對日外交の如きは最も慎重に慎重を重ねてゐるのだ。日本から忘恩漢と攻撃され、自國民から賣國奴と罵られては立つ瀬がない。其の境遇は誠に同情すべきものがある。一概に攻撃するのは酷であら

う。張作霖との折衝は此の邊の呼吸を飲み込んでかゝる必要がある。支那人は凡て體面に拘泥する國民である。或點までは充分張作霖の面目を立てゝやらないで駄目だ。

### 東三省の軍事顧問

張作霖は親日外交の一として東三省に日本の武官を軍事顧問として招聘し日本との各種交渉聯絡の任に當らしめてゐる。

東三省總閱使顧問として陸軍歩兵大佐本庄繁、同中佐町野武馬の兩武官がある。吉林督軍顧問に同中佐鈴木美通、黒龍江督軍顧問に同砲兵大佐齊藤稔の兩武官がある。

各顧問は多年支那南北に駐在して支那上下の事情に精通し日本陸軍部内に於ける鉢々たる支那通商である。

### (五) 親日特使于沖漢

從來支那は政變の度毎に特使を日本に派遣するの慣例がある。一度政權を握つた者は日本の諒解

を得ることを最も必要とした。日本の好意を持つにあらざれば政局の維持が困難とされた。九年十月直皖戰後、張作霖は北京に於て親日外交の必要なる所以を力説し、政府當局を動かし特使派遣の議を決定した。靳總理は中央より陸軍中將唐在禮を、張作霖は奉天より國務院參議于沖漢を各代表として派遣するに選定した。

于沖漢は遼陽の出身、前清の秀才である。多年官界に累進し中途東京に遊學し、東京外國語學校教授に任じた。日露の役、我が特別任務に服し勳六等に叙せられ、日本語に巧みである。

張作霖との關係は清末、張作霖が洮南時代、非法の行爲ありしに對し于沖漢は時の東三省總督鶴良の命に依り之れが調査に赴き歸來、張作霖のために有利に報告したので張作霖は甚しく之れを徳とし感謝した。以來交際を續け張作霖が累進するに伴ひ重用した。靳雲鵬の第二次内閣の成立に際し奉天派を代表し國務院參議に任せられた。張作霖の親日特使としては適材適所であつた。十月北京より唐在禮と同道渡日の筈であつた。所が暉春事件の勃發のために出發を延期するの餘儀なきに至り、次で唐在禮の渡日は中止となつたので于沖漢は十一月軍事顧問町野中佐、奉天滿鐵公所長鎌田彌助等の東道の下に日本に赴いた。東京に於ては原首相、上原參謀總長、田中陸相、内田外相等日

本政府の高官と數次會見折衝する所があつた。そして十二月奉天に歸つた。

于沖漢赴日の使命なるものは單に親日使節たる外一切秘密である。之れに就ては九年九月三十日

張作霖が奉天に於ける新聞通信記者團と會見せる際、言明せる一節を引用するに留めて置かう。左に之れを抄錄する。

東三省巡閱使として日本と密接の關係を有する余は平素より、日支親善の必要を痛切に感じて居た。今回愈々之れを具體化して日本政府の諒解を得るために親ら日本に赴くべく決心せるは事實である。其の期日は明年御舉行あるべき日本 皇太子殿下の御成婚式に參列するため支那の代表として特使の資格を以て渡日し、日支親善に就て充分の諒解と提携を求むる考へである。近く日本に赴く管の國務院參議于沖漢の要務は日支親善の實を擧ぐるため、腹藏なき相互の意見を交換し日本政府の諒解を得る爲めに外ならぬ。于沖漢の赴日は表面、北京政府の代表として派遣されるゝも實際は余の代表として赴日せしむるものである。使命の大部分は東三省に關係し日本政府と折衝せしむるにあり、其の内容は言明し難い云々

#### (六) 日本の對支使命

日本は張作霖に對して如何なる態度、政策を執れば可なるか。之れ大問題である。公平に觀察して張作霖に果して支那統一大業を成就し得るの可能性ありとせば多年内亂に苦める隣邦の國民を救ふために之れを援助する事は日本として當然執るべき使命であらう。徒らに内政不干涉の聲明に自縛自縛の窮境に陥り、且つまた列國に氣兼して依然傍観するが如きは外交政策の拙の拙なるものである。日本自ら率先し列國に提唱して支那統一の機運を促進すべく運動すべきである。されど事は苟も一國の高等政策の範圍に屬してゐる以上、這間の消息を精細に論評、是非するを得ない。が然し吾人をして大膽に、率直に對支意見を述べしむれば現代支那の大勢より觀察して日本は張作霖を援助する事が至當の政策と信じてゐる。今日の場合日本の立場として之れ以外に對支外交の方法はない。一體人氣の悪い軍閥の頭目を相手に對人外交を積極的ならしめる事には反対者が多いに極つてゐる。今に軍閥が悉く倒れてから眞の國民外交を行ふべしと云ふのが反対者の議論である。之れも道理のある事だ。然し之れには張作霖と段祺瑞を同一視せる謬見の結果、義に懲りて臉を吹くの

頼であらう。意見の相違は各自の立場と觀察に依りて異なるは已むを得ぬ事である。何も好んで日本が張作霖を援助する必要もなければ、また是非共援助せなければならぬ義理もない。唯だ日本の立場として張作霖と結ぶ事の最も有利なためである。一部の人士は支那に於ける日本の對人外交を難じて前年寺内内閣時代の援段政策に手を焼きたるにも性懲りなく、安徽派の没落に依り、段祺瑞の牛より張作霖の馬に乗り換へんと企畫してゐると云ふのが非難の中心らしい。現在果して斯くの如き事實ありや否やは別として兎に角、對支外交の根本に就て一考する必要がある。一般に對人外交の不利なる所以を唱へて國民外交の有利を説いてゐる。國民外交は理想としては誠に結構であるが支那の如き國民に政治思想の幼稚な國家に於ては先づ國民外交は不可能であらう。共和立憲の政體では議會が認めて是なりとする鞏固なる中央政府が存在すればそれを對手の外交が最も民意に近きものとするも今日の如く議會は解散されて其の實なく、中央政府其の物が何等の權威をも有せない狀態では時の權勢家を相手に外交するの外道はない。従つて其の政策が或る場合に好意的に援助化するは免れぬ事だ。

支那國民が眞に覺醒して軍閥の跋扈を驅逐して眞の民衆政治、共和政治を實現し得れば之れ程結

構な事はない。が之れは一寸現代の支那國民には出來ぬ相談である。殆んど不可能に近い難問題である。假に軍閥の勢力を驅逐せりとするも必らず之れに代る何物かが出て來るに相違ない。支那は依然として二、三權勢家の天下である。黎明の警鐘を亂打する者は僅かに識者階級に局限されてゐる。國家觀念に乏しい大多數の國民は長夜の惰眠を貪つて醒めぬ。民衆の自覺は前途遼遠である。然して日暮れて道遠きの感がある。如何に聯省自治を叫び、軍閥の跋扈を呪咀しても國民が皆其の氣にならなくては駄目である。それが出來ぬ間は二、三權勢家の手に引きずられて行くより外に方法はない。忍び難い事であつても誠に已むを得ない事である。

此の國情に鑑み日本として對人外交の政策を執る事は當然であらう。日本として列國と共に認めて以て支那の中央政府とせる北京政府の大立物であり、且つ滿蒙に於ける關係上、黃綠淺からざる張作霖と折衝し、之れに對して好意的の援助を與ふる位は當然だ。英米が吳佩孚を援助しつゝあるは公然の秘密なる以上、日本も亦遠慮するに及ばぬ。一部の戰者間には張作霖を能く諒解せず、日本が張作霖を援助するは再び援段政策の二の舞を演出すべしとの見解を抱いてゐるやうだ。然し張作霖は段祺瑞ではない。兩者の地位、手腕、勢力等を比較すれば自ら明瞭である。本來自己に何等據

るべき地盤、兵力を有するなく、大親分袁世凱の衣鉢を受け其の情力に依り北洋派の武人を統率せる段祺瑞の勢力は當時素破らしいものであつた。が其の勢力は段の直系と云ふに非らずして綜合的のものであつた。段祺瑞の同輩若くは先輩と云ふ連中で馮國璋や張勳等の異分子も含まれてゐた。南征の師が意の如く成らざりしも此の結果である。従つて現に滿蒙の地盤を擁し獨得の實力ある張作霖とは其の實質に於て全然比較にならぬ。段祺瑞と張作霖を同一視することの謬見なるは明白である。唯張作霖だからと云つて必らずしも段祺瑞の失敗を再演せぬとは断言されぬ。一切は天運である。唯だ少くとも今日の形勢は最も統一の可能性に富めるものが張作霖である以上、張作霖が噂の如く、眞に廣東の孫文一派と提携し南北相呼應して吳佩孚一派を倒し、民衆的の文化的施設を試みるに於ては支那統一の業は至難事ではあるまい。

上述の如く、今や日本と張作霖とは離れんとしても離ることの出来ない鎖に繋がれてゐる。日本の對支外交が今日の處、張作霖を除外し得ない理由も明白であらう。換言すれば或る意味に於て北京公使よりも奉天總領事の位地がヨリ重大であると云ふことが出来る。兎に角張作霖は日本としても充分研究すべき人物であらう。援助するとか、援助せぬとか云ふ事は枝葉の問題に過ぎない。

## 第二節 大倉男と張作霖

### (一) 爾汝相許す仲

公人としての張作霖と日本との關係は上述の通りである。然も張作霖個人として最も親密なる交誼を結び、「爾汝相許す」の人物を日本朝野の政治家、軍人、實業家中に物色すれば確かに男爵大倉喜八郎あるのみである。公人としての知己友人は少くない。が個人としての交誼の親密なるは男大倉を除いて殆んど皆無である。然も其の密接の度が極めて厚く親族的なるは一種の驚異である。如何に兩者が肝膽相照すの仲なるかを知るに足る。男大倉は人も知る如く支那に於ける日支合辦事業の先覺者である。

夙に支那富源の開發を志し、幾多の日支合辦事業を經營し、支那南北の各地に各方面に羽翼を伸ばして活躍しつゝあるは天下周知の事實である。然も大倉男は八旬を越ゆる六の老齡なるにも拘はらず、疊々として壯者を凌ぐの意氣がある。自ら總指揮官として麾下の俊傑に向ひ、采配を振ふて日支兩國の經濟的提携に貢献し、且つ又貢献しつゝある功績の多大なるは特筆大書するの價値があ

る。

此の國際的事業に顯著なる功績を有する男大倉と滿蒙の主人公として支那政界の花形として羽振のよい張作霖との關係は近年の事に屬してゐる。民國五年張作霖が奉天督軍に昇任以來である。男大倉が支那政府と合辦經營の下にある本溪湖煤鐵公司總會、視察及び其の他の要件にて再三の渡満に際し、支那側株主の代表として會見折衝せる者は即ち奉天督軍たる張作霖であつた。兩者再三の會見は流石に其の道の苦勞人同志だけに話の解りも早い上に意氣がシツクリと合つた。期せずして兩者の間が十年の舊知も及ばぬ仲となつた。

猩々能く猩々を知り、英雄亦英雄を知ると云ふのが、爾來兩者の間には靈犀一點の相通するものあり、一脈の暖き友情は交流してゐる、不言の裡に常に善意的の諒解があるのは事實だ。

幕末の北越が産んだ最大の麒麟兒として一代にして巨萬の富を積み、日本財界に於て三井、三菱と相對峙して一方に羈を唱ふる男大倉と遼西の一角より崛起して滿蒙の王者となり、今や支那の政界に第一人者として活躍する張作霖とは共に時代の幸運兒である。共に立志傳中の人物にして機會利用家としての共通性がある。總て立身榮達の機會は政治、軍事、實業其の他の各界に於て何人に對

しても一切平等である。凡人と非凡人との分岐點は唯だ此の機會に乗ずると否との差に過ぎない。何人にも平等である機會を捉へ得たる者が即ち非凡人である。男大倉と張作霖とは所謂風雲兒である。天性機を見るに敏にして臨機應變、今日の大を爲せるものである。此の點に於て兩者の性格は共通してゐる。兩者の交誼が最も親密なるも半ば此の性格の共通に因るものと信ぜらる。相互に私信の往復を絶たざるのみか殆んど親族的交際である。其の一例としては大正十年秋十一月武相平野に行はれたる陸軍の特別大演習に際し觀戰武官として奉天より張作相、張學良等が東京に赴くに當り、張作霖は特に張學良に命するに男大倉に對する種々の個人的要務を申含め訪問せしめた。男大倉はまた張作霖の長子である學良を迎ふるに極く打解けたる家族的態度を以て接し厚遇する所あつた。之れを以て見るも兩者の關係は推して知るべきであらう。

## (二) 興發公司の成立

東蒙古の開拓を目的とする日支合辦の興發公司は大倉男と張作霖との個人的事業である。興發公司の主眼とする所は日支新條約に準據し東蒙古に於ける農業及び牧畜業の經營である。同公司組織

の内容は遼河の上流にあたる東蒙古通遼縣(白音太來)附近にある張作霖私有の土地約四百萬町歩を基礎として之れを四百萬圓の出資と定め大倉側より四百萬圓の現金を出資し總資本金八百萬圓の日支合辦會社である。相互の交渉圓滿に進捗し正式に契約の成立せるは九年秋であつた。

満洲に於ける土地商租問題の未解は日支合辦事業の發達に大障礙をなせる際、東三省の主腦者たる張作霖が親ら率先して最も至難なる日支合辦の事業に手を染め範を垂れし事は日支の經濟的提携上、無上の福音として迎へられた。之より日支合辦事業は大いに振興するに至るべしと期待された。處が此の合辦事業も中途土地問題の行懸上、某邦人との間に紛糾を惹起し九年十二月末外務省は大倉男に對し突然合辦事業の差止命令を下した。之れに就ては某邦人が外務省方面に極力、妨害運動を試みた結果だと噂もあつた。それで折角の合辦事業も可惜、一頓挫を來し一時破約するの已むなかつた。滿洲に於ける日本の地位上より見るも當然復活せしむべき性質のものではなきに至つた。然し斯の如き國際的事業を些少の障礙に顧慮して破棄するは策の得たるものではなかつた。滿洲に於ける日本と大倉男との間に該契約の復活に就て再々交渉を繰り返されてゐた。其の結果外務省も大倉男の意のある所を諒とし某邦人の土地問題は一切除外し支那側と再契約するも差闇へないとの保證を與ふるに至つた。爾來興發公司は復活の機運に向ひ奉天に於て大倉男の代表として大倉組奉天出張所長たる川本靜夫數次張作霖と會見し情を陳じて其の諒解と再契約を求めた。張作霖も同事業の破約を中心頗る遺憾とせる際とて大倉側の提議に異議なく之れを快諾した。前契約を其の儘復活するに話は續つた。十年七月十八日を以て張作霖と川本代表との間に調印を見るに至つた。一時前途を悲觀された同事業も漸く復活するを得た。之れを範として堅實なる日支合辦事業が著々實現せんとするの傾向あるは兩國のために洵に慶賀すべき現象である。之れが先驅をなせる大倉男の功績は蓋し大なるものがある。

### (三) 大倉男の合辦事業

男大倉を首腦とせる合名會社大倉組が支那に於ける各種企業の數は十指を屈するも猶ほ足らぬ。其の事業は日に月に伸展し隆盛に向ひつゝあるは説くまでもない。聊か蛇足の感あるも茲に其の業績の重なるものを摘記せん。満洲に於ける大倉男の合辦事業としては張作霖との興發公司の外に、本溪湖の煤鐵公司、奉天の馬車鐵道公司、長春の豐材公司、吉林の興林造紙公司、安東縣の鴨綠江

製材公司、鴨綠江製紙會社等がある。

本溪湖煤鐵公司は面積一千百六十萬坪の大炭田と豊富な大鐵礦區を有し資本金七百萬元を擁せる大會社である。大倉男が始めて同鑛山に手を染めしは日露の戰雪收れる明治三十八年十一月にして爾來著々發展し今日に至る。當時微々として振はざりし一小站は今や安奉線中、第一の繁華の地となつた。之れ男大倉の功績であらう。瀋陽馬車鐵道公司は明治四十年九月の創立にして奉天に於ける唯一の交通機關である。現に資本金十七萬元の會社なるも近き將來に於て市街電車たるべき、大倉男と張作霖との間に該交渉の行はれあるは事實だ。

長春の豐材公司。吉林の興林造紙公司は何れも資本金五百萬圓の會社にして前者は大正七年の創立に係り、吉林省森林の採伐に從事して既に相當の成績を挙げ、後者は大正九年の創立に係り、吉林省城を根據として製紙事業に從事すべく著々其の準備を整へつゝある。

安東縣に於ける鴨綠江製材公司及び鴨綠江製紙會社の經營あり、奉天、吉林兩省に於ける森林の開發に從事しつゝあるもの、前掲の諸事業と併せて之を通觀すれば男大倉が如何に遠大的眼光を以て滿蒙地方に於ける各般の經濟的施設に當りつゝあるかを窺ふに足る。獨り滿蒙に止らず、男大倉の

事業關係は支那全土に瀰漫してゐる。即ち天津に於ける裕元紡織公司、裕津皮革公司とは同地に於ける斯業の義祖として同業者間の牛耳を執つてゐる。また男大倉の間接事業たる東亞興業會社が支那南北に活躍せるは中外の熟知する所である。其の他江西省炭田の開發に從事せる順濟公司、江蘇省鳳凰山鐵礦の開掘を企圖せる華寧公司、湖南省鑛山の經營に從事せる五金公司の如きは繩々大倉男直接の事業にして其の成敗一ならざるも支那礦業條例の頒布と共に日支合辦事業の陳、吳を爲せるものである。更に既往に溯れば上海閘北水電公司の如き、漢治萍公司の如き、何れも其の創草時代に於ては大倉男の援助に俟ちたるもの、數へ来れば大倉男が支那に於ける投資は實に幾千萬に達すべし。其の齡既に八十有六、然も其の雄心は老來益々盛んにして、日支經濟提携の實現に對する努力は年と共に熱烈の度を加へ、現在計畫中に屬するもの農、工、礦の諸業に亘り其の數十指を以て數ふべしと聞く。男大倉の如きは實に我が對支經營の先覺者として我が同胞の意を強うするに足るもの、特に此の百鍊千磨の吾が老實業家と雄心勃々、一世に覇たらんとする英雄兒との間に於ける骨肉も嘗ならざる提携は現在東亞の局面に於て最も刮目する活現象の一であらう。

## 最近の政局

舞臺は愈々廻轉した。張作霖と吳佩孚の對峙時代に入つた。兩者共に北洋派の二大軍閥として對立せる以上其の衝突は免かれない。況んや兩者は犬猿も啻ならざる間柄なるに於てをや。

張作霖と吳佩孚は現代支那の政局を左右し得るの實力あり果して何れが最後の勝利を占めて支那統一の業を達成し得べきか猶ほ疑問である。本書は民國十年度下半期に於ける北京政變の梗概を略叙して筆を止める。

### ◆張作霖と舊交通系

張作霖は元來舊交通系を好まなかつた。去る五月の天津會議に於て靳內閣の邪魔物であつた、同系の周自齊、葉恭綽等を壓迫して閣外に驅逐したのも其の一例である。

異分子を一掃した靳內閣は依然政治上何等の効をも出來ず財政は益々苦境に陥り、大總統府と國務院との意見の衝突は徐々反目となり、中國、交通兩銀行の取付騒ぎに愈々其の無能を暴露した。そこで舊交通系の策士として機を見るに敏なる葉恭綽が大いに暗中飛躍を試みて復活策を

講じ再三北京、天津、奉天間を飛び廻つて張作霖を口説き落した。

張作霖としては中央財界の實權を握るに絶好の機會なので舊交通系との提携に賛成した。此の結果内閣改造の政變は起つた。

### ◆梁内閣の成立

舊交通系と握手した張作霖が十一月十四日奉天より北京に向つたので政變は序幕に入つた。表面の名義は中國、交通兩銀行の整理と云ふ觸込であつたが、實は内閣改造と財權掌握の二大目的であつた。靳總理が天津に下つて張作霖と會見し、張作霖單獨にて上京し時局の善後處置に就て徐總統と會見意見を交換し、曹錕は病氣を名とし保定より動かなかつた、然も政局は急轉直下十八日靳總理の辭職聽許と顧外交總長の總理代理を命ぜられた。

十九日曹錕も漸く保定より入京し張作霖と會見し遂に梁士詒をして新内閣を組織せしむるに決定した。

二十五日梁士詒の新内閣は次の顔觸にて正式に成立した。

怪傑張作霖畢

である。吳佩孚は梁内閣の成立前に於ても反對論を唱へたるが最近に至りて山東問題の交渉に就て梁士詒を賣國奴と罵り梁内閣の推倒を策してゐる。梁士詒は請暇して天津に赴き形勢を観望してゐる。

卷之二

### ◆奥側牛の梁閣反對

隸派の喜ばざる知るべきであらう。

內務總長 財政總長  
外務總長 海軍總長  
陸軍總長 司法總長  
總長 教育總長 交通總長  
農商總長

張高 頤顏 李鮑 王黃 葉齊

凌惠 殿貴 寧寵 炎恭 耀

張弧 慶新 卿惠 培綽 珊

399  
202  
117

PA  
15  
213

附錄 其の一  
張 作 霖 年 表

| 光緒年次 | 張 作 霖 本 傳              | の 張 作 霖 年 齡 | 支 那 大 事 年 表 |
|------|------------------------|-------------|-------------|
| 三十一年 | 張 作 霖 遼河畔の一寒村に呱々の聲を擧ぐ。 | 三十一年        |             |
| 三十二年 |                        | 三十二年        |             |
| 三十三年 |                        | 三十三年        |             |
| 三四年  |                        | 三四年         |             |
| 三五年  |                        | 三五年         |             |
| 三六年  |                        | 三六年         |             |
| 三七年  |                        | 三七年         |             |
| 三八年  |                        | 三八年         |             |
| 三九年  |                        | 三九年         |             |
| 四十一年 |                        | 四十一年        |             |
| 四十二年 |                        | 四十二年        |             |
| 四十三年 |                        | 四十三年        |             |
| 四四年  |                        | 四四年         |             |
| 四五年  |                        | 四五年         |             |
| 四六年  |                        | 四六年         |             |
| 四七年  |                        | 四七年         |             |
| 四八年  |                        | 四八年         |             |
| 四九年  |                        | 四九年         |             |
| 三十一年 | ▲張作霖遼河畔の一寒村に呱々の聲を擧ぐ。   | 三十一年        |             |
| 三十一年 | ▲光緒帝即位                 | 三十一年        |             |
| 三十一年 | ▲日清間の天津條約成る            | 三十一年        |             |

|           |                        |            |                        |                      |                        |           |                     |         |         |
|-----------|------------------------|------------|------------------------|----------------------|------------------------|-----------|---------------------|---------|---------|
| 二<br>年    | 廿<br>四年                | 廿<br>三年    | 廿<br>二年                | 廿<br>一年              | 廿<br>三十年               | 廿<br>九年   | 廿<br>八年             | 廿<br>七年 | 廿<br>四年 |
| 四十三年      | 四十二年                   | 四十<br>年    | 卅九<br>年                | 卅八<br>年              | 卅七<br>年                | 卅六<br>年   | 卅五<br>年             | 卅四<br>年 | 宣統元年    |
| ▲陶夫人三男を生む | ▲奉天前路巡防隊統領に昇進し洮南に移駐す   | ▲陶夫人三女を生む  | ▲五路統帶官に榮進し新民府より鄭家屯に移駐す | ▲趙夫人二女を生む            | ▲官透の撫綏に應じ歸順し新民府の一營長となる | ▲趙夫人二男を生む | ▲趙夫人長子學良を生む。        | ▲李鴻章長逝  |         |
| 三十六       | 三十四                    | 三十五        | 三十三                    | 三十二                  | 三十<br>一                | 三十<br>十   | 二十九                 | 二十八     | 二十七     |
| ▲第一回賄政院召集 | ▲徐世昌東三省總督に任命され徐世昌北京に去る | ▲光緒帝、西太后崩御 | ▲宣統帝即位                 | ▲徐世昌東三省總督となり趙爾巽後任となる | ▲日露戰爭起る                | ▲日露戰爭終る   | ▲盛京將軍增祺免職され趙爾巽後任となる | ▲李鴻章長逝  |         |

|                  |             |             |             |             |             |             |             |             |          |
|------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|----------|
| 二<br>十<br>九<br>年 | 廿<br>七<br>年 | 廿<br>六年     | 廿<br>五年     | 廿<br>四年     | 廿<br>三年     | 廿<br>二年     | 廿<br>一年     | 廿<br>六年     | 廿<br>五年  |
| 廿<br>三<br>年      | 廿<br>一<br>年 | 廿<br>二<br>年 | 廿<br>三<br>年 | 廿<br>四<br>年 | 廿<br>五<br>年 | 廿<br>六<br>年 | 廿<br>七<br>年 | 廿<br>八<br>年 | 廿<br>九年  |
| 廿<br>四<br>年      | 廿<br>二<br>年 | 廿<br>三<br>年 | 廿<br>四<br>年 | 廿<br>五<br>年 | 廿<br>六<br>年 | 廿<br>七<br>年 | 廿<br>八<br>年 | 廿<br>九<br>年 | 二十<br>九年 |
| 廿<br>五<br>年      | 廿<br>三<br>年 | 廿<br>四<br>年 | 廿<br>五<br>年 | 廿<br>六<br>年 | 廿<br>七<br>年 | 廿<br>八<br>年 | 廿<br>九<br>年 | 廿<br>十<br>年 | 二十<br>八年 |
| 廿<br>六<br>年      | 廿<br>四<br>年 | 廿<br>五<br>年 | 廿<br>六<br>年 | 廿<br>七<br>年 | 廿<br>八<br>年 | 廿<br>九<br>年 | 廿<br>十<br>年 | 廿<br>一<br>年 | 二十<br>七年 |

|                            |                              |            |                 |            |          |           |          |          |            |          |
|----------------------------|------------------------------|------------|-----------------|------------|----------|-----------|----------|----------|------------|----------|
| ▲日清戰役に際し北洋毅軍馬隊の一兵卒として従軍した。 | ▲遼西八角臺に據りて湯玉麟張景惠等と共に威を附近に振ふ。 | ▲趙夫人長女を生む。 | ▲遼西の綠林に投じて馬賊となる | ▲日清兩國の戦争開始 | ▲日清の講和成立 | ▲獨逸の膠州灣占領 | ▲西太后再び攝政 | ▲義和團事變起る | ▲日清兩國の戦争開始 | ▲光緒帝の親政  |
| 二<br>十<br>九<br>年           | 二十<br>八年                     | 廿<br>九年    | 廿<br>八年         | 二十<br>七年   | 二十<br>六年 | 二十<br>五年  | 二十<br>四年 | 二十<br>三年 | 二十<br>二年   | 二十<br>一年 |
| 二十<br>八年                   | 二十<br>七年                     | 二十<br>六年   | 二十<br>五年        | 二十<br>四年   | 二十<br>三年 | 二十<br>二年  | 二十<br>一年 | 二十<br>年  | 二十<br>九年   | 二十<br>八年 |
| 二十<br>七年                   | 二十<br>六年                     | 二十<br>五年   | 二十<br>四年        | 二十<br>三年   | 二十<br>二年 | 二十<br>一年  | 二十<br>年  | 二十<br>九年 | 二十<br>八年   | 二十<br>七年 |
| 二十<br>六年                   | 二十<br>五年                     | 二十<br>四年   | 二十<br>三年        | 二十<br>二年   | 二十<br>一年 | 二十<br>年   | 二十<br>九年 | 二十<br>八年 | 二十<br>七年   | 二十<br>六年 |

|                              |                      |            |                 |                   |                            |                            |                       |              |            |                  |                |                   |
|------------------------------|----------------------|------------|-----------------|-------------------|----------------------------|----------------------------|-----------------------|--------------|------------|------------------|----------------|-------------------|
| 五年                           | 六年                   | 七年         | 八年              | 八年                | 七年                         | 六年                         | 六年                    | 六年           | 四年         | 四年               | 四年             | 四年                |
|                              |                      |            |                 |                   |                            |                            |                       |              |            |                  |                |                   |
| ▲段芝貴を逐ふて自ら奉天將軍となる            | ▲奉天盛武將軍に任せられ奉省の實權を握る | ▲勳三位に叙せらる  | ▲宗社黨の爆弾事件に危難を免る | ▲奉天督軍兼省長と改任       | ▲馮德麟、湯玉麟等反抗せるも結局馮、湯失脚するに至る | ▲黒龍江に鮑貴卿を督軍たらしめ東三省統一の前提となす | ▲安徽派の徐樹鈞と提携し奉天軍を南征せしむ | ▲東三省巡閱使に任命さる | ▲徐樹鈞との關係斷絶 | ▲吉林督軍孟恩遠を驅逐し鮑貴卿を | ▲蒙匪巴布札布の一軍南下する | ▲鄭家屯に日支兵衝突の不祥事件起る |
| ▲貢世凱長逝し黎元洪大總統となり國會復活し南北の統一なる | ▲蒙匪巴布札布の一軍南下する       | ▲馮國璋副總統となる | ▲天津の對南主戰會議      | ▲新國會成立し徐世昌大總統に當選す | ▲南北和議問題起る上海會議成立す           | ▲上海會議の決裂                   |                       |              |            |                  |                |                   |
| 四十二                          | 四十三                  | 四十四        | 四十五             | 四十五               | 四十五                        | 四十五                        |                       |              |            |                  |                |                   |

|     |      |                                                    |
|-----|------|----------------------------------------------------|
| 三十七 | 民國元年 | ▲革命の風雲急なるに依り奉天に移<br>駐し省城警備の任に當り他日雄飛<br>の基礎となる      |
| 三十八 | 大正元年 | ▲張作霖滿洲宗社黨の驍將として革<br>命運動に反対せるも後袁世凱と握<br>手し民主共和に賛成した |
| 三十九 | 年    | ▲陸軍中將に任官し陸軍第二十七師<br>長となる                           |
| 四十  | 年    | ▲王夫人四女を生む                                          |
| 四十一 | 年    | ▲奉天將軍たらんとして果さず失敗<br>に終る                            |
| 四十二 | 年    | ▲七月勳四位に叙せらる                                        |
| 四十三 | 年    | ▲袁世凱の帝政賛成の功に依り洪憲<br>朝の一等子爵に封ぜらる                    |
| 四十四 | 年    | ▲京城に赴き寺内朝鮮總督と會見す                                   |
| 四十五 | 年    | ▲王夫人四男を生む                                          |
| 四十六 | 年    | ▲趙爾巽再び東三省總督として奉天<br>に來る                            |
| 四十七 | 年    | ▲第一革命の烽火武昌にあがる                                     |
| 四十八 | 年    | ▲清帝退位し 中華民國成る                                      |
| 四十九 | 年    | ▲袁世凱臨時大總統となる                                       |
| 五十  | 年    | ▲趙爾巽隠栖し張錫鑾奉天將軍とな<br>る                              |
| 五十一 | 年    | ▲日獨開戦日本軍の青島占領                                      |
| 五十二 | 年    | ▲日支交渉起る                                            |
| 五十三 | 年    | ▲袁世凱の帝政運動                                          |
| 五十四 | 年    | ▲段芝貴奉天將軍として來任す                                     |
| 五十五 | 年    | ▲袁世凱の帝政宣言                                          |



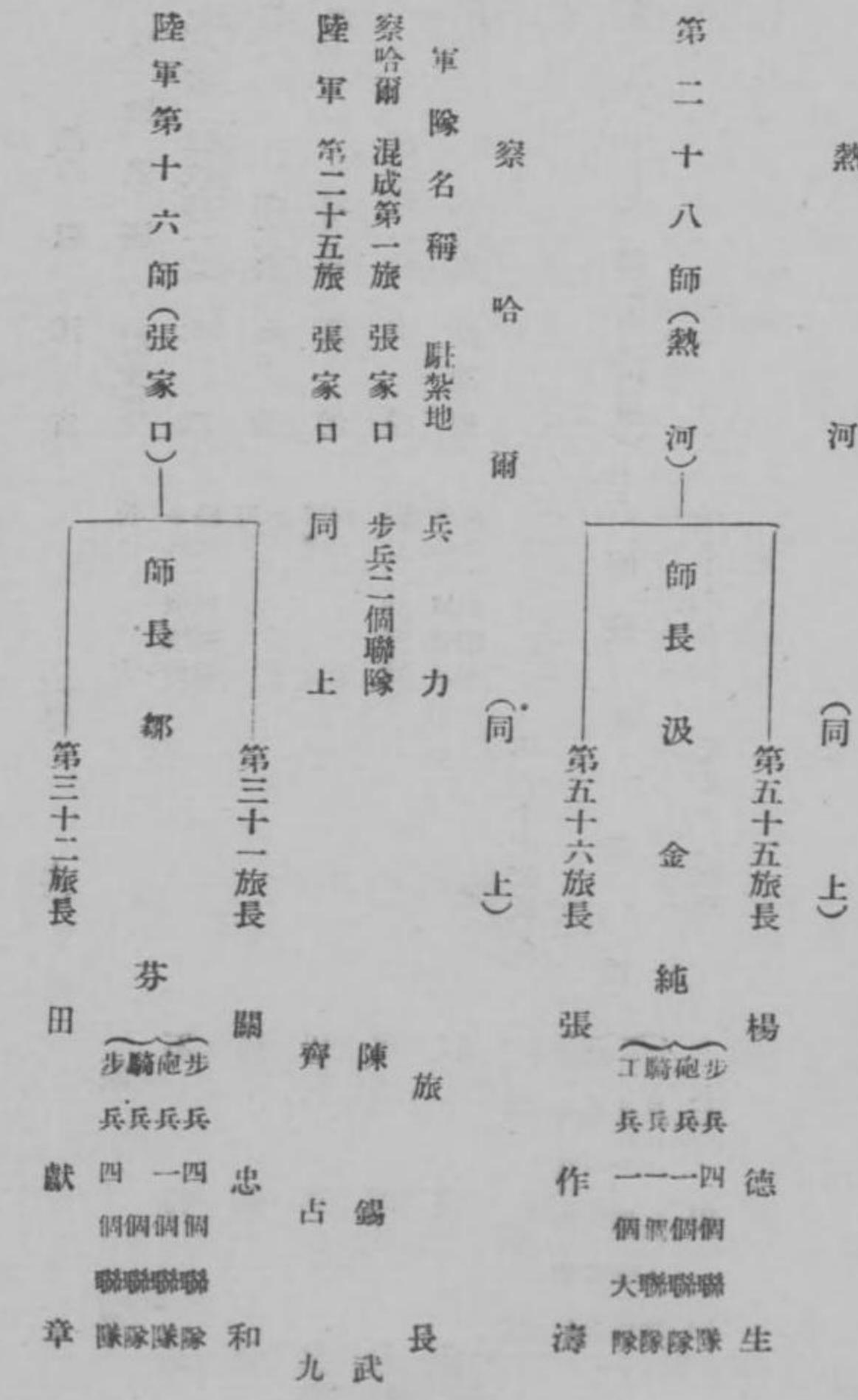
## 附錄 其の二

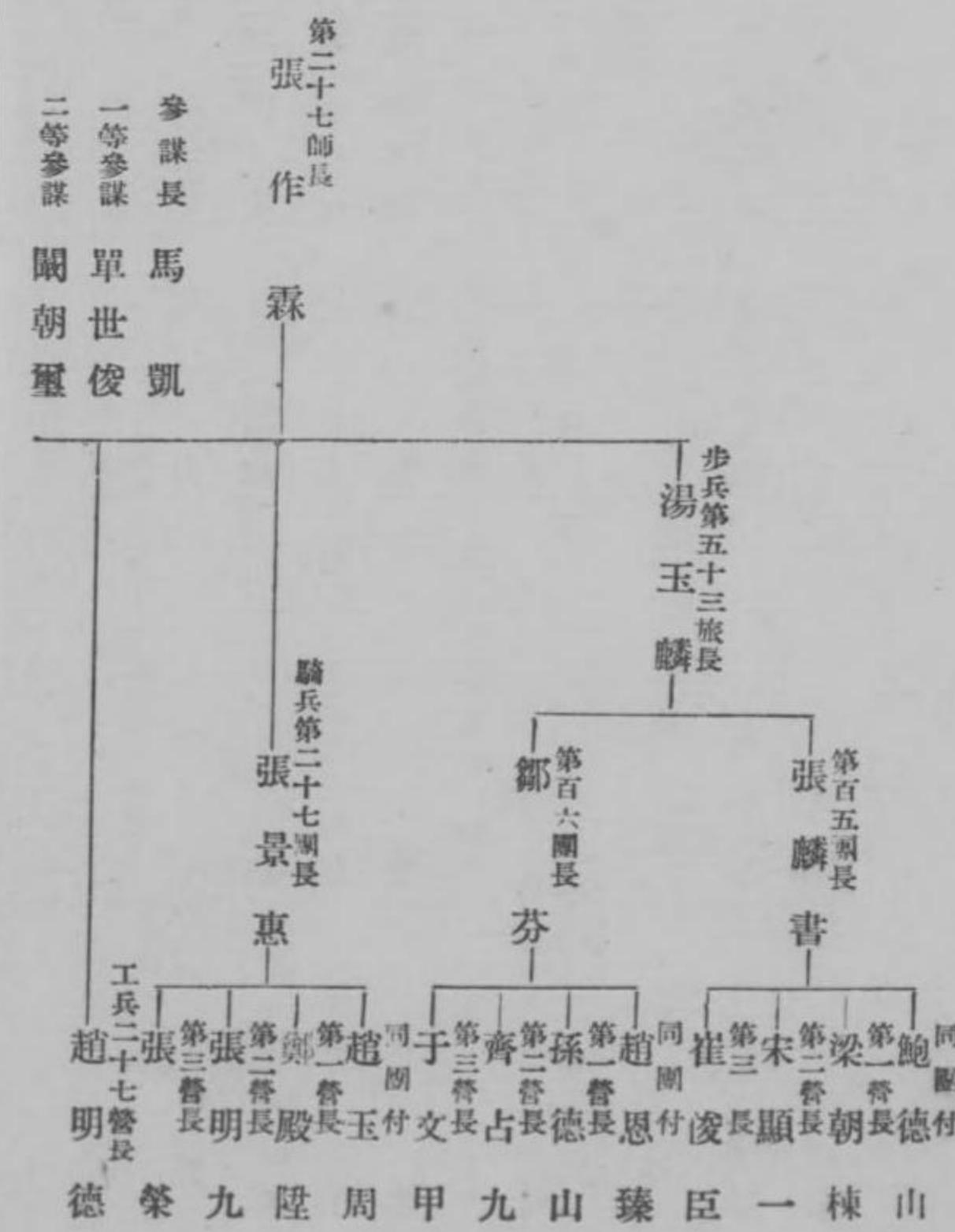
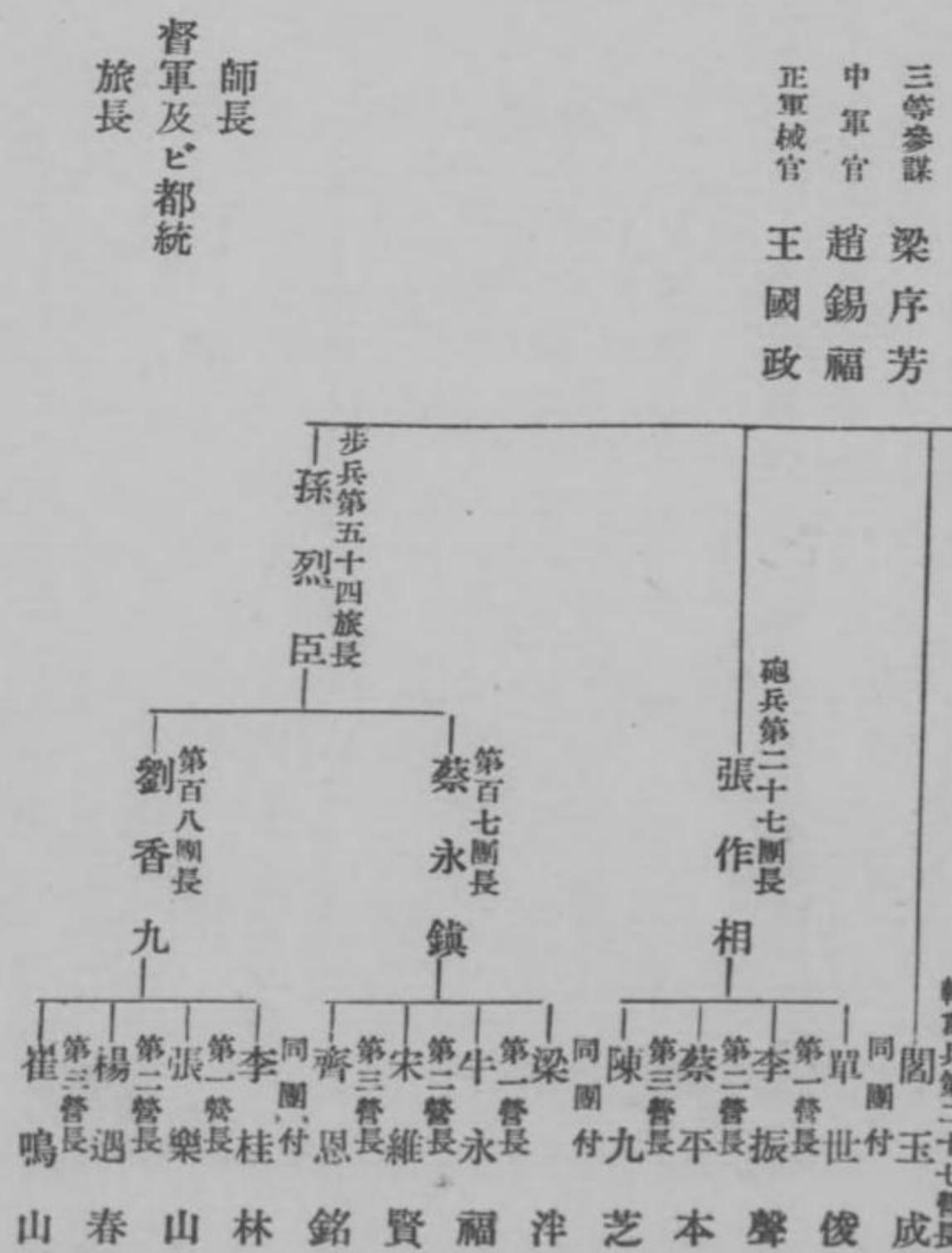
### 奉天軍の現勢

張作霖を中心とする奉天軍閥の搖籃は云ふまでもなく陸軍第二十七師である。第二十七師は即ち張作霖が遼西綠林以來の私黨である。張作霖が師長として第二十七師の兵力を背景として省城に牢乎たる潜勢力を養ひ、一躍奉天督軍となるや逐年軍隊を増募して第二十七師の各軍官を漸次重職に任用した。此の結果當年の旅長、團長は督軍、都統、師長等に榮達し、營長、連長は旅長、團長に上進し、奉天軍閥の中堅となつてゐる。試みに民國四年秋張作霖が漸く奉省政界に擡頭して來た頃の第二十七師の軍官と現勢奉天軍の實勢力を對照せば最も明瞭である。

| 奉天省       |          | (民國十年十二月一日現在) |         |
|-----------|----------|---------------|---------|
| 軍隊名稱      | 駐紮地      | 兵             | 力       |
| 暫編奉軍混成第一旅 | 鄭家屯      | 步兵二個聯隊        |         |
| 第三旅       | 奉天       | 同             | 上       |
| 第四旅       | 錦州       | 同             | 土       |
| 第五旅       | 西豐       | 同             | 土       |
| 第六旅       | 新民屯      | 同             | 上       |
| 第七旅       | 鳳凰城      | 同             | 上       |
| 第八旅       | 洮南       | 騎兵二個聯隊        |         |
| 第九旅       |          |               |         |
| 第十旅       |          |               |         |
| 第十一旅      |          |               |         |
| 騎兵第一旅     |          |               |         |
| 陸軍第二十七師   | 奉天       | ——            | ——      |
| 第五十四旅長    | 李振聲      | 張作相           | 趙明      |
|           | 工騎砲步兵兵兵  | 步兵兵兵          | 步兵兵兵    |
|           | 個個個個大聯聯聯 | 個個個個          | 個個個個    |
|           | 聲隊隊隊隊德   | 菜麟瑞齡銘本良璽      | 朝學平恩松恩玉 |







發行所

中華堂

東京市小石川區大塚窪町一一番地  
電話 小石川 四八九五番  
振替 東京二四七貳貳番

複不許  
製

大正十一年四月十日印刷

大正十一年四月十五日發行

怪傑張作霖與付

正價金貳圓五拾錢

著作者

園田一龜

發行者

東京市小石川區大塚窪町一一番地  
久保民生

印刷者

東京市神田區三崎町三ノ一  
加藤保

(文明社印刷所)

394  
187

終

